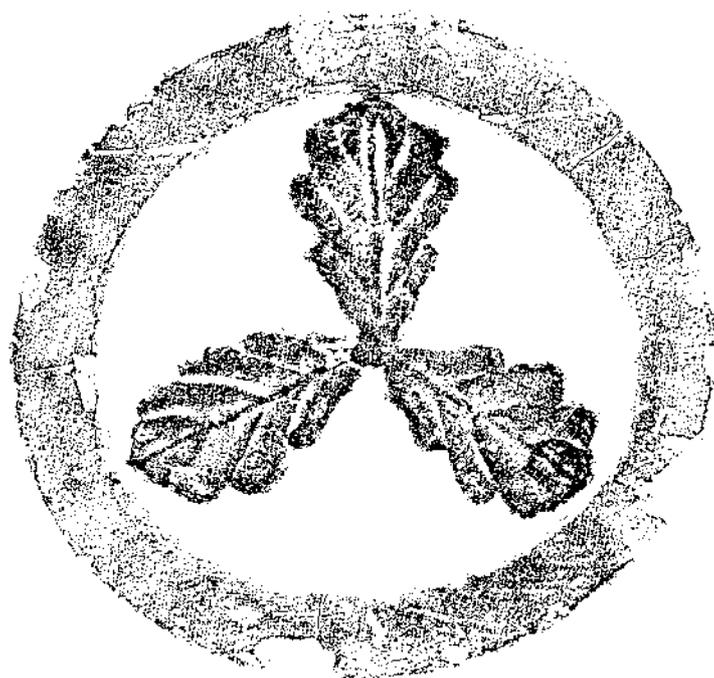


高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第75集

こう ち じょう でん しも や しき あと
高 知 城 伝 下 屋 敷 跡

高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書



2002. 8

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知城伝下屋敷跡

2002.8

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



西より（手前：堀1完掘状態）



瓦溜8（東より）

序

土佐藩主が居城とした高知城は、観光県高知のシンボルとして知られると同時に、学校遠足や写生会、散策、花見など、県民の憩いの場ともなっています。

さて、高知城内堀の外側に接する高知地家簡裁庁舎敷地には、「下屋敷」がおかれていたことを示唆する史料がありますが、実態はよく分かっていませんでした。このたび裁判所庁舎の建て替えに伴う発掘調査を行ったところ、多量の土器・陶磁器類と共に、木簡や漆器など当時の社会や生活の復元に有効な豊富な遺物と遺構が検出されました。また、中世、古代、さらには弥生時代にまで遡る遺物も出土し、これまで不明な点が多かった高知市街部の歴史を深める上で、貴重な資料になるものと期待されます。加えて明治期の裁判所の遺構も確認され、当該期の建築技術や地方裁判所の歩みに関する資料を得ることもできました。今次調査の成果が、地域の文化財の理解と歴史学の発展に寄与することを祈念いたします。

末筆となりましたが、このように大きな成果をあげられましたことも、最高裁判所・高知地方裁判所をはじめとする関係者の方々の多大なご協力の賜物であり、ここに深く御礼申し上げます。

平成14年8月15日

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター
所長 島内 靖

例 言

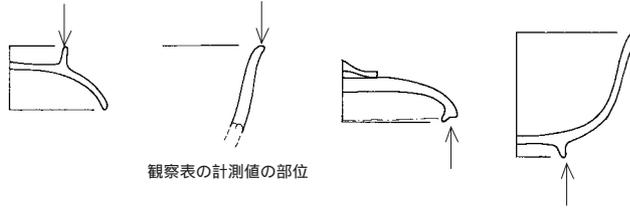
1. 本書は庁舎建替えに伴う高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査業務の報告書である。
2. 本調査は高知県教育委員会が最高裁判所から受託し、(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センターが実施した。
3. 高知地家簡裁庁舎は高知市丸の内1-3-5に所在する。
4. 発掘調査は2001年4月2日から2001年7月20日まで実施し、引き続き2002年3月31日まで整理作業及び報告書作成を行った。調査区の面積は1,007㎡である。
5. 調査体制は以下のとおりである。

総括：(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター 所長 門田伍朗
総務：同次長 島内信雄
調査総括：同調査課長 重森勝彦
調査担当：同調査第5班長 松田直則、同専門調査員 大野佳代子、同主任調査員 池澤俊幸、
今田 充、同調査員 久家隆芳、測量補助員 大賀幸子
6. 本書の執筆は松田の指導のもと、第1章の4を大野、第2章の6と第3章第1節を佐々木志穂、第4章の3を森田尚宏、それらの他を池澤が担当した。第4章の1、2の執筆者は各文章の冒頭に記した。現場写真は担当者、遺物は池澤が撮影した。編集は池澤が行った。
7. 調査にあたっては、最高裁判所事務総局経理局営繕課および高知地方裁判所事務局会計課をはじめとする関係諸機関の協力を得た。
8. 次の諸氏には発掘調査や報告書作成に関して多大な御指導、御教示を賜った。

飯島哲也、市村高男、稲垣正宏、日下正剛、佐藤竜馬、嶋谷和彦、乗岡 実、広瀬岳志、藤田有紀、行藤たけし、吉田 寛、渡部 淳、四国徳島城下町研究会の諸氏（敬称略）。

くらしき作陽大学の北野信彦氏には玉稿を頂戴した。佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏には出土陶磁器に関して御教示を賜り、本書における年代観の根拠とさせて頂いた。土佐史談会の高橋史朗氏には、文字資料について御教示頂いた。墨書遺物の赤外線撮影については、高知県立歴史民俗資料館をお願いした。記して感謝申し上げます。
9. 整理作業は飯田 縁、大谷亜紀子、黒岩佳子、橋田美紀、秦 芳子、松井恵子、宮地佐枝、森栄美の各氏の手を煩わせた。また、調査及び整理作業において埋蔵文化財センターの筒井三菜、浜田恵子、吉成承三をはじめとする諸氏から助力を得た。
10. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知県文化財団埋蔵文化財センターで保管しており、注記の略号は01-10 K Sである。
11. 方位は原則として国土座標を基準としている。
12. 遺物実測図の縮尺は、木簡は1/2、碗・皿その他の小型品は1/3、鉢・大皿・火具・甕・桶等の大型品は1/4を原則に、適宜設定した。遺物の計測部位や、図中のトーンは次頁のとおりである。また、文字を記した札状の木製品の呼称を、「木簡」に統一した。

凡 例



観察表の計測値の部位



砂層又は
砂を多含する土層



木質などの有機物層
又はそれを多含する土層

本文目次

第1章 序章

1. 調査の経過	1
2. 調査の方法	1
3. 調査の概要	1
(1) 調査区の概要	1
(2) 基本層序	3
4. 遺跡の地理的・歴史的環境	7
(1) 地理的歴史的変遷	7
(2) 歴史的環境	8
5. 高知地家簡裁旧庁舎関係資料	12

第2章 遺構と遺物

1. 中世以前の遺構及び流路と遺物	16
2. 近世前期頃の遺構と遺物	16
(1) 堀	16
(2) 溝	21
(3) 石列	21
(4) 土坑状遺構	22
(5) 土坑	23
(6) 瓦溜	23
(7) ピット他	23
3. 近世後期から近代初期の遺構と遺物	33
(1) 溝跡	33
(2) 土坑状遺構	33
(3) 落込み	37
(4) 瓦溜	38
(5) 井戸	38
(6) 埋桶	39
(7) ピット	39
(8) 遺物集中	40
(9) 杭群	40
4. 近代以降の遺構と遺物	96
(1) 明治時代の庁舎	96
(2) 瓦溜	96

5 . 包含層等出土遺物	98
6 . 瓦	139
第3章 まとめ	
第1節 高知城伝下屋敷跡出土の瓦	176
第2節 高知城伝下屋敷跡の調査成果と文献史料	190
第3節 高知城伝下屋敷跡出土の古代の土器	197
第4章 付編	200
1 . 高知城伝下屋敷跡出土漆器資料の材質と製作技法	200
2 . 高知城伝下屋敷跡出土木製品の樹種同定調査結果	215
3 . 平成14年度 立会調査	220

挿図目次

Fig. 1 調査区及び調査小区配置図	Fig.18 瓦溜 8 セクション・出土遺物実測図
Fig. 2 土層断面図(1)	Fig.19 瓦溜 8 出土遺物実測図
Fig. 3 土層断面図(2)	Fig.20 調査区北部ピット・石平面・エレベーション及び出土遺物実測図
Fig. 4 高知城伝下屋敷跡と郭中位置図	Fig.21 近世後期～近代初期遺構位置図
Fig. 5 高知城伝下屋敷跡周辺遺跡分布図	Fig.22 SD 3 セクション・出土遺物実測図
Fig. 6 高知地方裁判所資料図(1)	Fig.23 SX 7、8、6 平面・セクション・エレベーション図
Fig. 7 高知地方裁判所資料図(2)	Fig.24 SX 6、7、8 出土遺物実測図
Fig. 8 高知地方裁判所資料図(3)	Fig.25 SX 9 平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図
Fig. 9 近世前期以前の遺構位置図	Fig.26 SX 9 出土木製品実測図
Fig.10 中世以前の遺構・流路及び出土遺物実測図	Fig.27 調査区北東部平面図(近世後期)
Fig.11 堀 1 セクション・出土遺物実測図	Fig.28 調査区北東部セクション・エレベーション図
Fig.12 SD 2 セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	Fig.29 SX10出土遺物実測図(1)
Fig.13 石列 1、ピット平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	Fig.30 SX10出土遺物実測図(2)
Fig.14 SX 2 平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図	Fig.31 SX10出土遺物実測図(3)
Fig.15 SX 2 出土木製品実測図(1)	Fig.32 SX11出土遺物実測図
Fig.16 SX 2 出土木製品実測図(2)	Fig.33 SX13出土遺物実測図(1)
Fig.17 SX 4、SK 1 平面・エレベーション及び出土遺物・SK 2 出土遺物実測図	Fig.34 SX13出土遺物実測図(2)
	Fig.35 SX13出土遺物実測図(3)

- Fig.36 SX13出土遺物実測図(4)
- Fig.37 SX13出土遺物実測図(5)
- Fig.38 SX13出土遺物実測図(6)
- Fig.39 SX13出土遺物実測図(7)
- Fig.40 SX13出土遺物実測図(8)
- Fig.41 SX13出土遺物実測図(9)
- Fig.42 SX13出土遺物実測図(10)
- Fig.43 SX13・調査区北東部 東トレンチ出土遺物実測図
- Fig.44 SX15出土遺物実測図(1)
- Fig.45 SX15出土遺物実測図(2)
- Fig.46 SX15出土遺物実測図(3)
- Fig.47 SX15出土遺物実測図(4)
- Fig.48 SX15出土遺物実測図(5)
- Fig.49 SX15出土遺物実測図(6)
- Fig.50 SX15出土遺物実測図(7)
- Fig.51 SX15出土遺物実測図(8)
- Fig.52 SX15出土遺物実測図(9)
- Fig.53 SX15出土遺物実測図(10)
- Fig.54 SX15出土遺物実測図(11)
- Fig.55 SX15出土遺物実測図(12)
- Fig.56 調査区東部平面・セクション・エレベーション図(近世後期)
- Fig.57 SX16出土遺物実測図
- Fig.58 SX17平面・セクション・側面・出土遺物実測図
- Fig.59 落込み1出土遺物実測図
- Fig.60 落込み2出土遺物実測図
- Fig.61 落込み2・3出土遺物実測図
- Fig.62 瓦溜10平面・エレベーション及び出土遺物実測図
- Fig.63 井戸1平面・セクション図
- Fig.64 井戸1セクション・側面・出土遺物実測図
- Fig.65 井戸1側板実測図(1)
- Fig.66 井戸1側板実測図(2)
- Fig.67 井戸1側板実測図(3)
- Fig.68 井戸1側板実測図(4)
- Fig.69 井戸1側板実測図(5)
- Fig.70 井戸1側板及び墨書実測図
- Fig.71 埋桶1平面・セクション及び出土遺物実測図
- Fig.72 埋桶2平面・セクション・断面及び出土遺物実測図
- Fig.73 北部ピット群平面・エレベーション及び出土遺物実測図(近世後期)
- Fig.74 集中2出土遺物実測図
- Fig.75 集中3出土遺物実測図
- Fig.76 集中4平面・エレベーション及び出土遺物実測図
- Fig.77 近代以降の遺構全体図
- Fig.78 包含層出土遺物実測図
- Fig.79 包含層等出土遺物実測図
- Fig.80 包含層及び古代～中世に属する遺物
- Fig.81 軒平瓦文様細部・部位の名称
- Fig.82 軒平瓦(1)
- Fig.83 軒平瓦(2)
- Fig.84 軒平瓦(3)
- Fig.85 軒平瓦(4)
- Fig.86 軒平瓦(5)
- Fig.87 軒平瓦(6)
- Fig.88 軒平瓦(7)
- Fig.89 軒丸瓦(1)
- Fig.90 軒丸瓦(2)
- Fig.91 軒丸瓦(3)
- Fig.92 軒丸瓦(4)
- Fig.93 軒丸瓦(5)
- Fig.94 丸瓦
- Fig.95 刻銘瓦(1)
- Fig.96 刻銘瓦(2)
- Fig.97 刻銘瓦(3)
- Fig.98 刻銘瓦(4)

Fig.99 刻銘瓦(5)

Fig.100 刻銘瓦(6)

Fig.101 刻銘瓦(7)

Fig.102 刻銘瓦(8)

Fig.103 刻銘瓦(9)

Fig.104 堺瓦屋敷敷地推定と銘

Fig.105 堺瓦屋活動期推定表

Fig.106 伝下屋敷出土瓦編年試案

表 目 次

Tab.1	周辺遺跡一覧表	7
Tab.2	古代の遺物点数	98
Tab.3-1~3-24	遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)	104
Tab.4-1~4-11	遺物観察表(木製品)	128
Tab.5-1~5-7	遺物観察表(瓦)	169
Tab.6	伝下屋敷跡関連事項と検出遺構の年代観	195
Tab.7	器種と編年観	198

写真図版目次

PL1	調査前全景(南西より)/北壁セクション	PL10	SX2 漆器椀出土状況/SX2 底面遺物出土状況
PL2	SX18(東より)/SD1, SX1 東壁セクション	PL11	SX4 検出状況(南より)/SX4 完掘状態
PL3	堀1 セクション(G-G ライン)/堀1 セクション(西より)	PL12	SK1 検出状況(南より)/SX10, SK1 付近セクション(C-C ライン, 東より)
PL4	堀1(南北堀・北壁セクション)/堀1 完掘状態(北東より)	PL13	瓦溜8(南より)/F-F ライン瓦溜8 セクション(西より)
PL5	堀1(西より)/SD2 完掘状態(北より)	PL14	瓦溜8/同上
PL6	SD2 北壁セクション/SD2 南壁セクション	PL15	瓦溜8 東部 三葉柏紋軒丸瓦出土状況/SX6 完掘状態
PL7	石列1/石列1 東端部	PL16	SX7 遺物出土状況/SX7 完掘状態(北西より)
PL8	石列1(A-A セクション)/SX2 木屑・遺物出土状況(南より)	PL17	SX8 遺物出土状況/SX9 木屑検出状況
PL9	SX2 遺物出土状況/同上	PL18	SX9 完掘状態(北より)/SX9 南壁セクション

PL19	SX5・SX10セクション(C-C ライン) / SX10完掘状態(東より)	PL37	SD2 / SX9 184 / SX13 386 / SX15 525 / 集中4 / 2-5区杭貫通状況
PL20	SX11遺物出土状況 / SX13遺物出土状況及び東壁セクション	PL38	SD1完掘状況 / SD2底遺物出土状況 / SR1馬歯 / SX2完掘状態(南より) / 4区下層ピット, 配石 / SX15完掘状態(北より) / 集中4東部(東より) / 基礎遺構1杭
PL21	SX13遺物出土状況 / 434出土状況	PL39	明治29年竣工工庁舎基礎遺構全景
PL22	-2~3区東壁セクション(A-A ライン・SX13付近) / -2~3区東壁セクション	PL40	SX18
PL23	SX15遺物出土状況(北より) / 同上(西より)	PL41	堀1 / 石列1
PL24	SX15木簡出土状況 / 520, 521出土状況	PL42	石列1
PL25	SX15遺物出土状況 / 481, 589出土状況	PL43	SD2
PL26	SX16, 落込み3(手前)セクション(南西より) / 1~2-5区南壁セクション	PL44	SX2
PL27	SX17杭(南東より) / 落込み1検出状態(北東より)	PL45	SX2
PL28	1-4区完掘状態(北より) / 瓦溜10検出状態(北より)	PL46	瓦溜8
PL29	瓦溜10セクション(東より) / 井戸1掘形掘削状況(南より)	PL47	瓦溜8
PL30	井戸1完掘状態(南より) / 埋桶1検出状況(南より)	PL48	瓦溜8
PL31	埋桶1埋土除去状態(北西より) / 埋桶2(南より)	PL49	SX7 / SX8
PL32	埋桶2底紅皿出土状況 / 1-4~5区ピット群(北より)	PL50	SX4・6・9・13 / SD3
PL33	集中4, SX17(南より) / 集中4西部(南より)	PL51	SX11 / SK2 / SX2
PL34	集中4 769, 瓦961, 977出土状況 / 基礎遺構1断面及び杭検出状況(2~3-1区・西より)	PL52	SX11 / SX17
PL35	基礎遺構1側面(2~3-1区・北より) / 基礎遺構1セクション(C-C ライン)	PL53	SX9
PL36	2-4区近世面完掘状況(南より) / 調査区南部完掘状況(北より)	PL54	SX9
		PL55	SX10
		PL56	SX10
		PL57	SX13
		PL58	SX13
		PL59	SX13
		PL60	SX13
		PL61	SX13
		PL62	SX15
		PL63	SX15
		PL64	SX15
		PL65	東トレンチ
		PL66	SX16
		PL67	SX16

PL68	SX16 / 落込み 2 / 瓦溜10	PL88	SX15
PL69	瓦溜10	PL89	SX 2 ・ 15 / 井戸 1
PL70	瓦溜10 / 井戸 1 / 埋桶 1 / Pit13	PL90	井戸 1
PL71	Pit 3 / 集中 3 / 表採 / 包含層	PL91	井戸 1
PL72	落込み 1	PL92	井戸 1
PL73	落込み 2	PL93	井戸 1
PL74	集中 2	PL94	SX 2 ・ 4 ・ 9 ・ 10 ・ 11 / SD 3
PL75	集中 3	PL95	SX 2 ・ 13
PL76	包含層	PL96	SX15
PL77	包含層	PL97	SX15
PL78	包含層	PL98	SX15
PL79	包含層 / 表採	PL99	軒丸瓦 (1)
PL80	包含層 / 表採 / トレンチ	PL100	軒丸瓦 (2)
PL81	古代 ~ 中世に属する遺物	PL101	軒丸瓦 (3)
PL82	金属製品	PL102	軒平瓦 (1)
PL83	堀 1 / SX 2 ・ 10 ・ 13 / SD 3	PL103	軒平瓦 (2)
PL84	SX 2 ・ 9 ・ 10 ・ 11 ・ 12	PL104	軒平瓦 (3)
PL85	SX 13 ・ 15	PL105	軒平瓦 (4)
PL86	SX13	PL106	丸瓦 ・ 平瓦
PL87	SX15	PL107	立会調査

第1章 序 章

1．調査の経過

高知地家簡裁庁舎の建設計画地(以下当地)は次章のような環境にあり、遺構や遺物が遺存している可能性があることから、最高裁判所、高知地方裁判所、高知県教育委員会は平成12年度に協議し、試掘調査を行なうこととした。試掘調査は平成13年2月1日から2月14日まで行ない、19箇所のトレンチによる調査の結果、9箇所で基礎遺構や礎石様の石、瓦溜、杭列といった遺構が検出され、染付、青磁をはじめとする陶磁器や、須恵器、土錘等の遺物も出土した。この結果を受けて、最高裁判所、高知地方裁判所、高知県教育委員会、高知県文化財団埋蔵文化財センターは協議を行い、委託を受けた埋蔵文化財センターが平成13年4月2日から発掘調査を実施することとした。当初は6月末日を以て調査を終了する予定であったが、遺構面が複数存在したことや、木簡を含む遺物が多量に出土した事等により、再度協議の結果、期間を7月20日まで延長した。

2．調査の方法

測量に関しては、平成6年度に高知県教育委員会が(株)アジア航測に委託して高知城内に設置した、GPS測量による3級基準点のうち*、KP-1 (X=61811.654, Y=3079.645, H=30.352) KP-2 (X=61853.172, Y=3106.659, H=39.500) を使用したトラバース測量により、調査区脇に設置した金属鋏の基準点を用いた。水準については、高知市丸ノ内1-2-20に設置されている一等水準点(基準点コード10000005002、標高3.0107m)より導いた。基準点の設置は(有)新日本設計に委託した。調査区には前庁舎の廃棄物や構造物が残っていたので、それら及び攪乱や客土の排除には重機を使用した。包含層の掘削や遺構の検出は主に人力で行なった。除去を要する前庁舎の基礎については、アイオンやガス溶接機も使用した。調査区内はこれら地中梁によって分断されることが避けられなかったので、Fig. 1のごとくそれに従って調査区名を付し、遺物の取上げ等に利用した。現場での実測は人力で行なった。〔*「高知城跡」高知県埋蔵文化財センター1995年〕

3．調査の概要

(1) 調査区の概要

調査区は後掲の高知地家簡裁庁舎の沿革にある鉄筋3階建の前庁舎跡地であり、試掘前には地下も攪乱を受けているものと予測されたが、図のごとく分断されながらも遺構が残存していた。前庁舎基礎の掘り形が、場所によってコンクリート製の本体から10～数十cmの範囲にとどまっていたことなどが、その原因である。調査区北東部と、西半南壁から西壁にかけては地中梁が深く、近世以前の遺構(以下遺構)の最下位以下にまで達していた。西部ではその他にも、遺構面への影響が考えられる攪乱が多かった(Fig.21、77、PL39)。中央部北には、庁舎建築に伴うとみられる方形のコンクリート溜もあり、遺構を破壊している。資料1と合致する明治29年竣工の庁舎(以下、明治29年庁舎と呼称)の基礎杭は基盤層以下にまで達するが、SK1や瓦溜8にみるごとく遺構の完全な破壊に至っていない部分が多い。さて、近世以前の堆積層や生活面は、後述のごとく概ね南へと

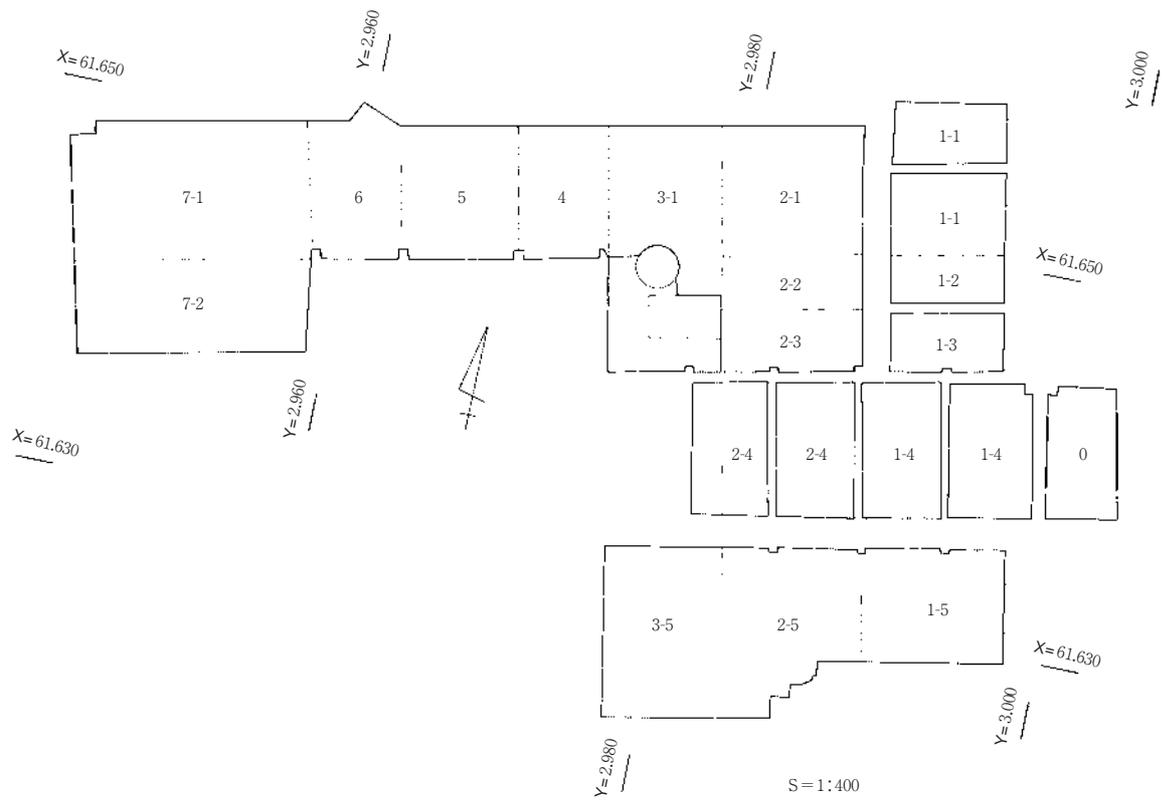
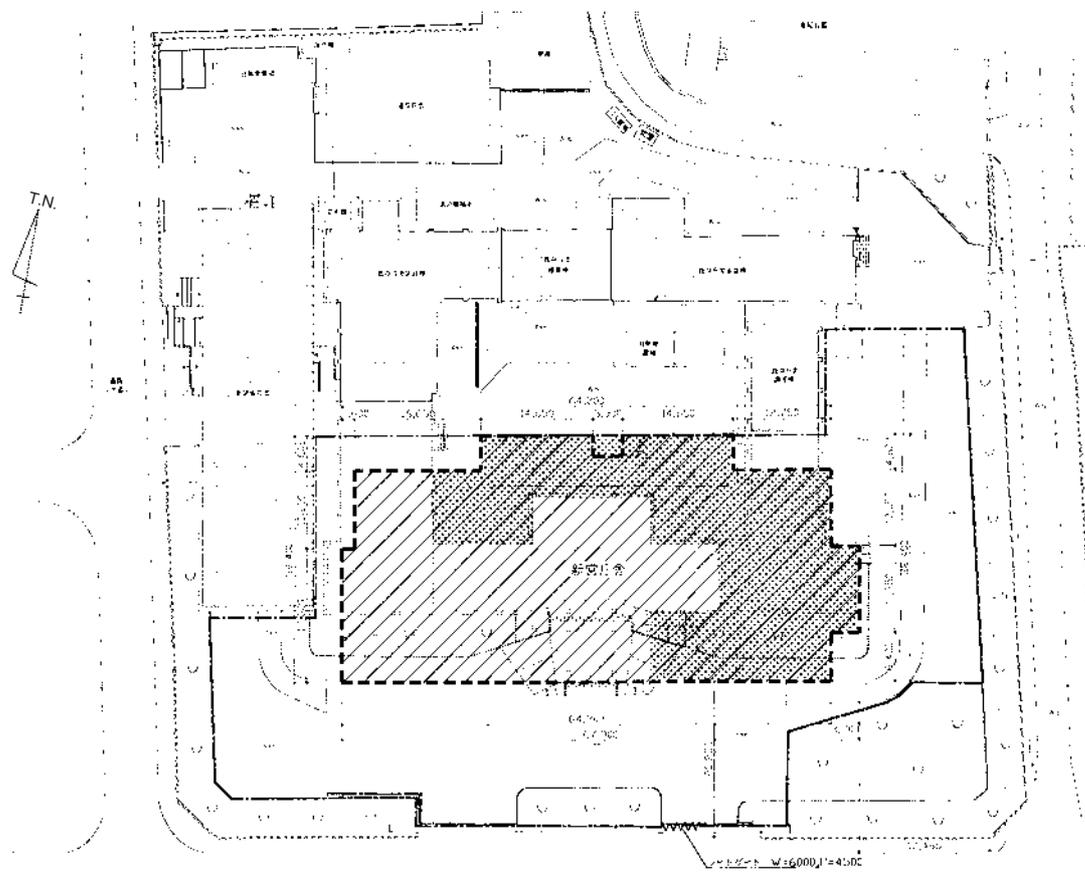


Fig. 1 調査区及び調査小区配置図

緩やかに落ちている。それを反映して、土色も概して北部は褐色系、南部は灰色系を示す。近世の建物等に関わる可能性のある石列やピットは北半でのみ検出し、有機物を多含する落込みや包含層は中・南部や東部でみられた。木屑等を含む土坑状遺構は、近世後期では中・南部及び東部でのみ検出した。各セクションでも南への傾斜傾向が読み取れる。当地では、堆積や整地が繰り返されながらも、上記のような地勢が中世以前から近代初期まで概ね継続したことが、調査成果から看取できる。

(2) 基本層序 (Fig. 2、3、9)

断面の測図位置は、後掲の遺構位置図に示した。図からは、概ね北から南へ徐々に低くなる傾向が看取できる。まず、調査区東部を南北に縦断するC-C'ラインで層序を把握した。同ラインの断面図は近現代整地層を除去したもので、明治29年竣工の遺構検出面以下が示されている。層は砂利を含み、瓦などが目立つ部分もある。明治29年庁舎に切られ、調査区北壁では確認できなかった。

層は砂利層で、広い範囲に比較的安定した厚さで存在し、整地に関わるものとみられる。しばしば近世後期以降の陶磁器が出土した。-1層は砂とシルトが均質に混ざり、塊状の部分がなく、遺物や砂利も他層と比べて明らかに少ない。非人為的な堆積の可能性もある。後述するように、北部でも層に比定した層序があるが、別層である可能性がある。層は幕末頃の遺物を含み、近世後期の遺構を被覆している場合があった。小礫、炭粒、赤土、漆喰、陶磁器、瓦、木片を多含する部分があり、遺物密度が最も高い層序であるが、近代に比定される遺物は出土していない。北部を除いて広く分布することと遺物の時期から、調査中の指標の一つになった層であった。層に切られることもあって、北壁では比定できなかった。層は南部に堆積する。厚さ60cmに及び、後述のごとく落込み3との関連が考えられる。集中4や板材群は本層に属するが、遺物密度は層に比して激減し、以下の層も同様である。層も南部に偏在し、層に似るが、砂利を含まない。層は北部に存在し、焼土を含む点に特徴がある。瓦と炭粒も比較的多いが、これら含有物には疎密がある。石列1や堀1といった近世前期に属する遺構を被覆する。石列1の東端付近では瓦や焼土の密度が高く、瓦溜8と関連しているものとみられる。以上の土層は、主として砂やシルトで構成されるが大振りの礫やブロック状土塊を含み、整地層とみられるものが多い。また、全て炭粒と近世以降の遺物を含み、有機物や焼土を含む場合も多い。次に、₁層以下はシルトや粘土で構成された比較的均質な土層で、砂層も存在する。上位の土層と対照的で、近世の遺構の基盤となっている。出土遺物として土師質土器片や、層から出土した828があるが、その数は僅少で、且つ近世に比定できるものはない。北東部で層下にSD1、北部のF-F'ラインで層下に落込みが検出されている。

第層：現代整地層。上層は碎石、下層は赤土からなる。

第層：近現代整地層。下層は赤土、上層はコンクリート片含む。

第層：灰黄褐色粘土質シルトに礫、30cm大までの石を含む。

第層：暗褐色シルト質粘土に砂利含む。

第層：砂利整地層。

- 第 層 : 黄灰褐色粘土質シルトに礫、炭粒。焼土粒を若干含む。
- 第 -1層 : 暗灰黄砂とシルトが混ざる。自然堆積。
- 第 -2層 : 暗灰黄色シルト質粘土に20cmまでの礫多含。土質や堆積標高により西部で比定した層は、別層の可能性はある。
- 第 -3層 : 西部に存在する。灰褐色粘土質シルトで、特に西部では礫を多含する。本来 層の一部とすることが不適であった可能性がある。
- 第 -1層 : 灰黄褐色、灰色、オリーブ黒色等を呈するシルト質粘土で、落ち込み部では木片、遺物、礫等を多含する。南部の2-4区では土がブロック状に混ざり、砂利、赤土、漆喰、炭化物等も含む。
- 第 -2層 : 灰黄褐色や灰色を呈するシルト質粘土で、砂や小礫を含む部分もある。
- 第 -3層 : 地点が異なるので分離したが、 -1層に相当する可能性がある。
- 第 -4層 : -2層に相当する可能性がある。
- 第 層 : 灰色にオリーブ黒色塊を含むシルト質粘土に木片、炭粒を含む。底に集中4。南部に偏在する。
- 第 層 : オリーブ黒色粘土に木片、炭を含む。南部に偏在し、近世後期の遺構を被覆する。
- 第 層 : 灰黄褐色粘土質シルトに礫、炭粒、瓦、焼土粒を含む。瓦、焼土には疎密あり。北部に偏在する。西端部では20cm大の石を含む。
- 第 層 : 比較的均質な粘土質シルト。土色は褐色を基本に灰色まで様々。若干の炭粒、土師質土器細片を含む。近世遺構の基盤となっており、以下では近世の遺物は未出土。
- 第 層 : 灰～にぶい黄褐色粘土質シルトで、比較的均質。若干の炭粒含む。
- 第 層 : シルト質粘土で調査区中央部では灰オリーブ、北部では灰黄色に鈹物斑紋を含む。比較的均質。
- 第 層 : 粘土やシルト、或いはそれらが混じり合う。土色は灰～灰オリーブ黒色。少数の土師質土器片以外は、東部で白磁皿828が出土したのみ。
- 第 層 : 以下は東壁でのみ認める。本層は灰色砂で構成され、上層は締りがあり、粒度の違いによる微細層が観察できる。木片や土器細片を少量含む。下層は木片や5cm大の円礫を僅かに含み、最下層は砂層である。
- 第 層 : よく締った暗灰色シルトに灰色粘土をブロック状に含む。

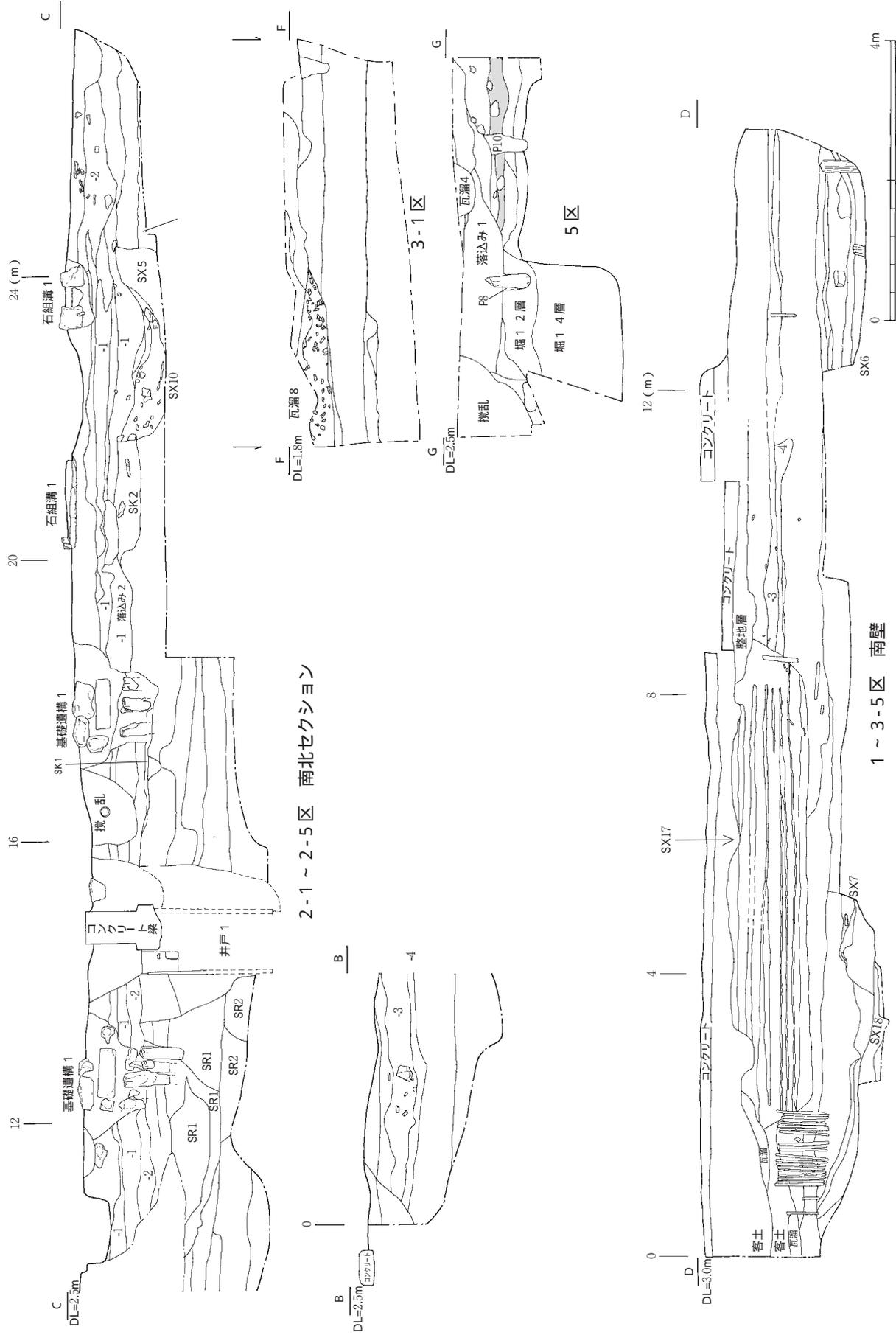


Fig. 2 土層断面図(1)

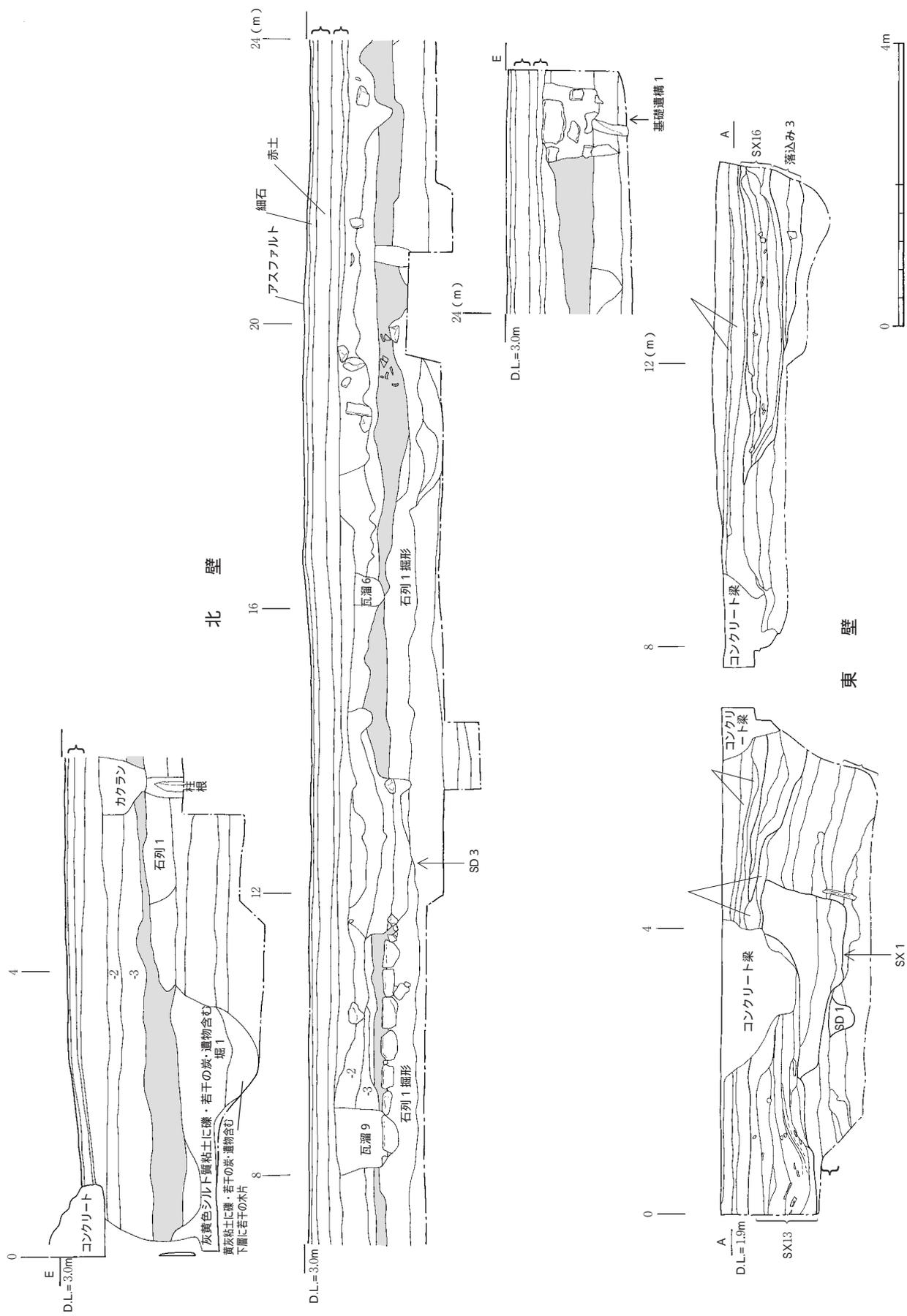


Fig. 3 土層断面図(2)

4. 遺跡の地理的・歴史的環境

(1) 地理的歴史的変遷

高知城伝下屋敷跡の所在する高知市は、高知県の中央部に位置し、東を南国市、北を土佐山村と鏡村、西を伊野町と春野町に接する。面積144.68₁、人口約33万人を有する高知県の政治、経済、文化の中心地である。市街の南部は土佐湾に面し、鏡川、久万川、国分川、舟入川、江ノ口川、下田川が注ぐ浦戸湾が内湾深く入り込み、古代より交通上の要衝であった。北部から西部にかけて標高400～600mの山地が連なり、西部から東部にかけて扇状に高知平野が広がっている。現在の平野部は中世頃までそのほとんどが内海であったが、鏡川などの河川堆積や隆起、近世になってからの干拓などにより、ほぼ現在の状態になっている。また、高知市の中央低地にはいくつかの古生層よりなる小分離丘陵があり、高知城の所在する大高坂山もその一つである。大高坂山は、城郭としては、南北朝時代の高坂松王丸による大高坂城に始まり、天正年間末には長宗我部元親が居城を構えて城下町の建設を手がけている。

慶長5年の関ヶ原合戦に敗れた長宗我部氏に代わって、新しい国主に封ぜられた山内一豊が造営した平山城が高智城、のち高知城（本丸地点の標高44.4m）である。慶長年間の築城当時、地名を

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
	高知城伝下屋敷跡	弥生末～近代	21	福井元尾城跡	弥生	42	淋谷古墳	古墳
1	高座古墳	古墳	22	福井中城跡	弥生～古代	43	秦泉寺城跡	中世
2	神田遺跡	弥生～中世	23	福井西城跡	中世	44	北秦泉寺遺跡	弥生
3	高神遺跡	古墳・古代	24	高知学園裏遺跡	中世	45	松葉谷遺跡	古代～中世
4	ゲシカ端遺跡	弥生	25	かるーと口遺跡	中世	46	前里城跡	中世
5	神田南城跡	中世	26	福井古墳	中世	47	土井の前古墳	古墳
6	シルタニ遺跡	弥生～中世	27	鹿持雅澄邸跡	近世	48	秦泉寺麿寺跡	古代
7	船岡山古墳	古墳	28	嘉式保宇城跡	中世	49	秦泉寺別城跡	中世
8	船岡山遺跡	弥生	29	福井遺跡	縄文～中世	50	秦小学校校庭古墳	古墳
9	鷺泊橋付近遺跡	弥生～中世	30	万々城跡	中世	51	愛宕神社裏古墳	古墳
10	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	31	初月遺跡	弥生	52	愛宕不動堂前古墳	古墳
11	柳田遺跡	縄文～古墳	32	安楽寺山城跡	中世	53	尾戸窯跡	近世
12	鴨部遺跡	縄文～近世	33	東久万池田遺跡	古代～中世	54	尾戸遺跡	弥生
13	神田旧城跡	中世	34	西秦泉寺遺跡	古代	55	高知城跡(大高坂城跡)	弥生
14	能茶山窯跡	近世	35	宇津野2号古墳	古墳	56	弘人屋敷跡	近世
15	石立城跡	中世	36	宇津野1号古墳	古墳	57	帯屋町遺跡	古墳
16	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	37	宇津野遺跡	縄文	58	国沢城跡	中世
17	小石木山古墳	古墳	38	秦泉寺新屋敷古墳	古墳	59	中島町遺跡	古墳
18	小石木町遺跡	弥生	39	吉弘遺跡	古代	60	南御屋敷跡	近世
19	潮江城跡	中世	40	吉弘古墳	古墳			
20	井口城跡	中世	41	日の岡古墳	古墳			

Tab.1 周辺遺跡一覧表

「河中山」と命名されたように、南北を鏡川と江ノ口川に挟まれたデルタ地帯に位置するため、城下町建設を進める過程でもたびたび水害に悩まされている。このため、高知城下町は惣構えのかたちをとっており、堀（内堀・外堀）や堤防は治政とともに治水の一環をも担っている。さらに、郭中に向けて堰や水路を設けるなど水利面でも工夫がなされている。また、町は御城を中心とする郭中、西の上町、東の下町によって構成される。郭中は上士の居住専用区域であり、郭中外とは外堀と土堤で区分されていて、郭中を中心に元禄・享保の大火や宝永の大地震などの後にも整備されて、東西・南北の道が整然と通る町割となっている。これらの道はその後の高知市中心部の近代道路の骨格となった。このように、大高坂山を中心とした沖積地には、17世紀の中頃には約2万人の人口を抱える高知城下町が形成される。

この度調査を行った高知城伝下屋敷跡は、高知城の裾回りに掘られた内堀の南西部分西外に存在し、明治8年に旧裁判所が設置されて以来、現在も裁判所となっている地点である。御城の搦手門から西は延享年間以降「西弘小路」と呼ばれ、郭中でも江戸期を通して御馬廻など上級武士の屋敷が並ぶ区域である。寛文年間の廓中図には「御下屋敷」としてその配置が描かれている。文献等の資料によると、西弘小路より東の内堀沿いは元禄11年の大火後に杉林となるが、当地点の詳細は明確ではない。享和元年郭中図では御厩となり、明治維新後は、御留杉に山内豊資君新邸宅を築き后年裁判所となる此邸に住吉神社ありと『皆山集』に記されているが、幕末以降明治にかけての絵図には住吉神社や薬園、番所などの名のみが記載されている。この住吉神社は、明治維新後最終的に山内神社境内に移っている。住吉神社移転後、明治8年に旧裁判所が設置され、同28年には新庁舎の建設に着手している。その後昭和37年に大規模な新築が行われ、現在の裁判所となっている。

（2）歴史的環境

高知城伝下屋敷跡の立地する沖積平野上には、周辺地域から周りの山麓にかけて多くの遺跡が存在する。高知市に所在する遺跡は、高知市教育委員会発行の『高知市遺跡地図』（2001年）によると、確認された遺跡の総数は166遺跡に及ぶ。しかし、先に述べたように江戸中期頃までは内海が広がり、鏡川の氾濫の影響もあって近世以前の遺跡の分布は山地・丘陵地に多く集中してみられる。

縄文時代の遺跡は、「高知城伝下屋敷跡周辺遺跡分布図」（Fig.5）では少ないが、南の浦戸湾に面した段丘上に縄文前期初頭のチドノ遺跡、後期・晩期では北の山麓に正蓮寺遺跡などがある。鏡川と神田川に挟まれた自然堤防上に立地する柳田遺跡（地図中11）からも縄文時代後期の遺物が多く出土しているが、現在のところ住居跡の確認例はない。

弥生時代では遺跡数が増加する。柳田遺跡は、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけての複合遺跡であり、土坑や流路などの遺構や多量の遺物が出土し、集落の存在とともに周辺で祭祀が行われていたものと考えられている。中期から後期にかけては、かろーと口遺跡（地図中25）、西方に城山遺跡、東方に高間原弥生遺跡などがある。これらは山地・丘陵部に立地した遺跡であり、城山遺跡では竪穴住居跡が検出されている。能茶山南の平地に立地する鴨部遺跡（地図中12）は、縄文時代晩期から近世にかけての複合遺跡であり、平成13年度の調査で、市内初の平野部低地における竪

穴住居跡が検出された。遺物は前期末から中期初めの土器や多数の石製品を中心に、弥生時代各時期のものが出土している。

古墳時代では、吉弘古墳（地図中40）を中心にした泰泉寺古墳群など高知城を取り囲む山麓部に古墳が多く造営されている。また、高知市西部から南部にかけての丘陵部に存在する古墳は、7世紀中葉の横穴式石室をもつ朝倉古墳群、塚ノ原古墳群などほとんどが後期のものとみられる。大高坂山周辺にも古墳の存在が確認されているが現在は消滅している。

古代の寺院遺跡は、白鳳期の瓦が出土する泰泉寺廃寺跡（地図中48）、古代から中世の蓮台寺跡のほか、五台山山頂にある竹林寺は古代からの寺院である。吉弘遺跡（地図中39）、松葉谷遺跡（地図中45）では土器片や柱穴が確認されており、集落跡の可能性はある。

大高坂山周囲の沖積地は南北朝時代頃から開発されはじめ、高知城の前身である大高坂城ほか多くの中世城館が造られている。大高坂城（地図中55）は南北朝期、大高坂山にあった大高坂氏の居城である。戦国時代の高知市周辺には長岡郡本山に拠点を持つ本山氏の勢力下の城跡が多く、朝倉城跡、神森城跡、万々城跡（地図中30）、浦戸城跡がある。その後、永禄年間頃に岡豊城の長宗我部氏に敗れ、大高坂城をはじめ長宗我部氏の支配下の城となる。平成12年度高知城三ノ丸跡の調査で、現存東石垣の背面より天正期の石垣や桐紋軒丸瓦が出土しており、長宗我部期の城郭構築物の存在が推考されている。

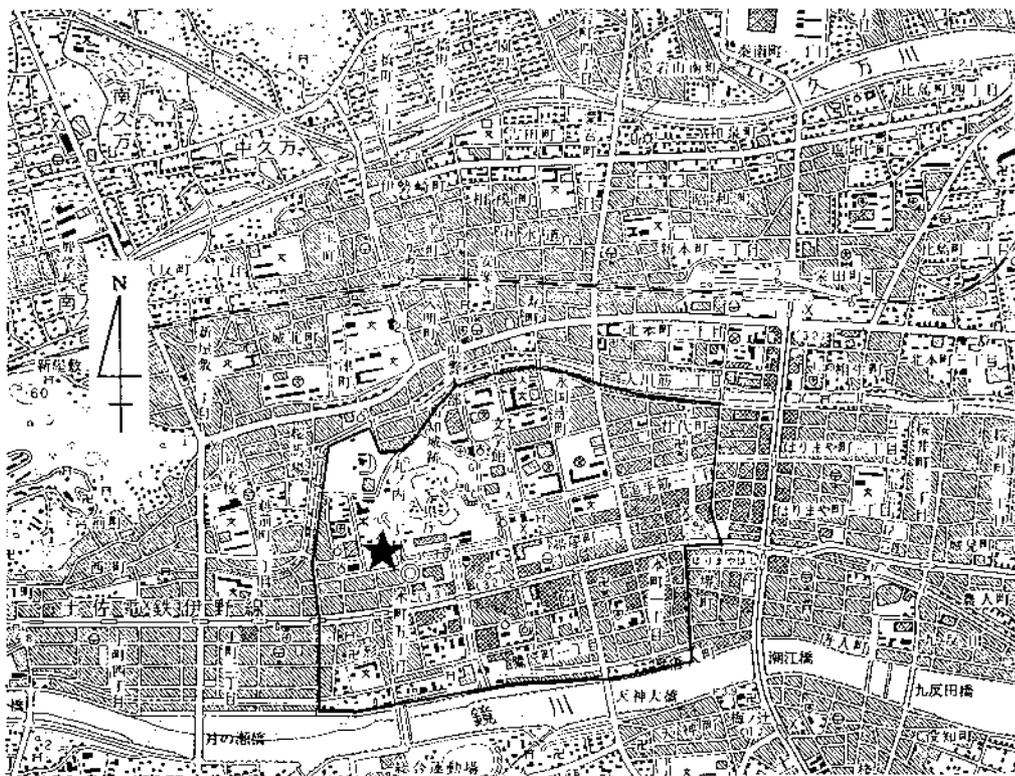


Fig. 4 高知城伝下屋敷跡と郭中位置図（□内）S = 1/25000
伝下屋敷跡

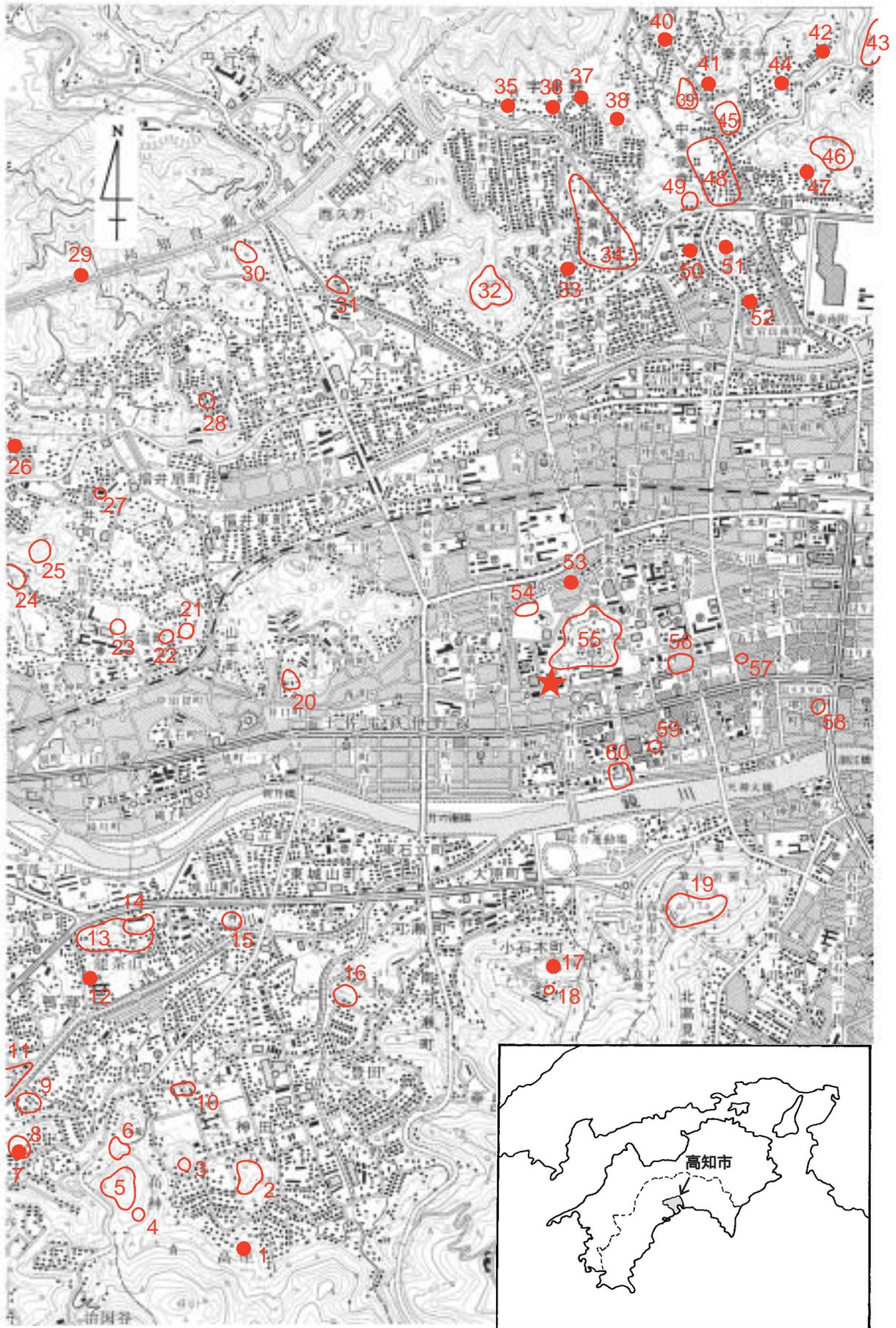


Fig. 5 高知城伝下屋敷跡周辺遺跡分布図

近世の遺跡は、高知市内に10遺跡ほど確認されている。山内一豊が築城した高知城の建物は享保12年に火災に遭うが再建され、現在は国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡調査では、ピット・礎石・溝跡・石垣などの遺構が検出され、多量の瓦・陶磁器類が出土している。窯跡では、高知城北西に土佐藩の陶器を焼いた尾戸窯跡（地図中53）がある。現在、宅地等になっており遺構などは不明である。文政3年、能茶山磁器窯（地図中14）が開かれたのに伴い、陶製地は能茶山に移された。邸跡としては、今次調査地である高知城伝下屋敷跡の他、南御屋敷跡（地図中60）、弘人家敷跡（地図中56）などがある。万葉集の研究で知られる鹿持雅澄邸跡（地図中27）は調査が行われ、土坑、掘立柱建物跡や近世陶磁器などが出土し、県史跡に指定されている。寺社跡としては、五台山の西山腹にある吸江庵跡も県史跡になっている。この地は夢窓疎石が鎌倉時代、臨済宗の道場として開いた寺であり、土佐国中世禅宗文化の中心となった。近世に入ると山内一豊の義子湘南により吸江寺として再興されるが、明治初年廃寺となる。昭和60年に発掘調査が行われ、溝状遺構、基壇状遺構が確認されると共に、近世陶磁器・土師質土器・焼塩壺・瓦などが出土している。以上、高知城周辺の遺跡について概観したが、後世の造成等によって消滅したり、未だ詳細不明のものも多く、今後の調査成果が期待される。

参考文献

- 近森泰子『史跡 高知城跡1』高知県教育委員会 1994年
- 宮地早苗・曾我貴行『高知城跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年
- 『高知城下町読本』土佐史談会・高知市教育委員会社会教育課 2001年
- 高松 恵『江戸時代における高知城下町の町人地の町並み復原』高知県立歴史民俗資料館研究紀要第9号 1999年
- 『皆山集』第三巻/第四巻 高知県立図書館
- 『鴨部遺跡発掘調査成果説明会資料』高知市教育委員会 2001年
- 『埋文こうち 第15号』高知県教育委員会 2001年
- 松田直則・大野佳代子・佐々木志穂『高知城三ノ丸跡』石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年

5 . 高知地家簡裁旧庁舎関係資料

最高裁判所より掲載許可を得た以下の資料を掲載する。

一、庁舎の沿革及び現況説明書

(1) 庁舎の沿革 明治 8 年12月 ~ 昭和37年 2 月28

- 一、裁判所構成法實施五十年記念 司法省及裁判所廳舎寫真帖
昭和14年 9 月 1 日現在 (発行11月 1 日)
編集兼発行者 司法省会計課

高知地方區裁判所 配置図 複写

高知地方區裁判所 写真 複写

- 一、裁判所構成法實施五十年記念 司法省及裁判所廳舎平面圖集
昭和16年 2 月現在
編集兼発行者 司法大臣官房会計課

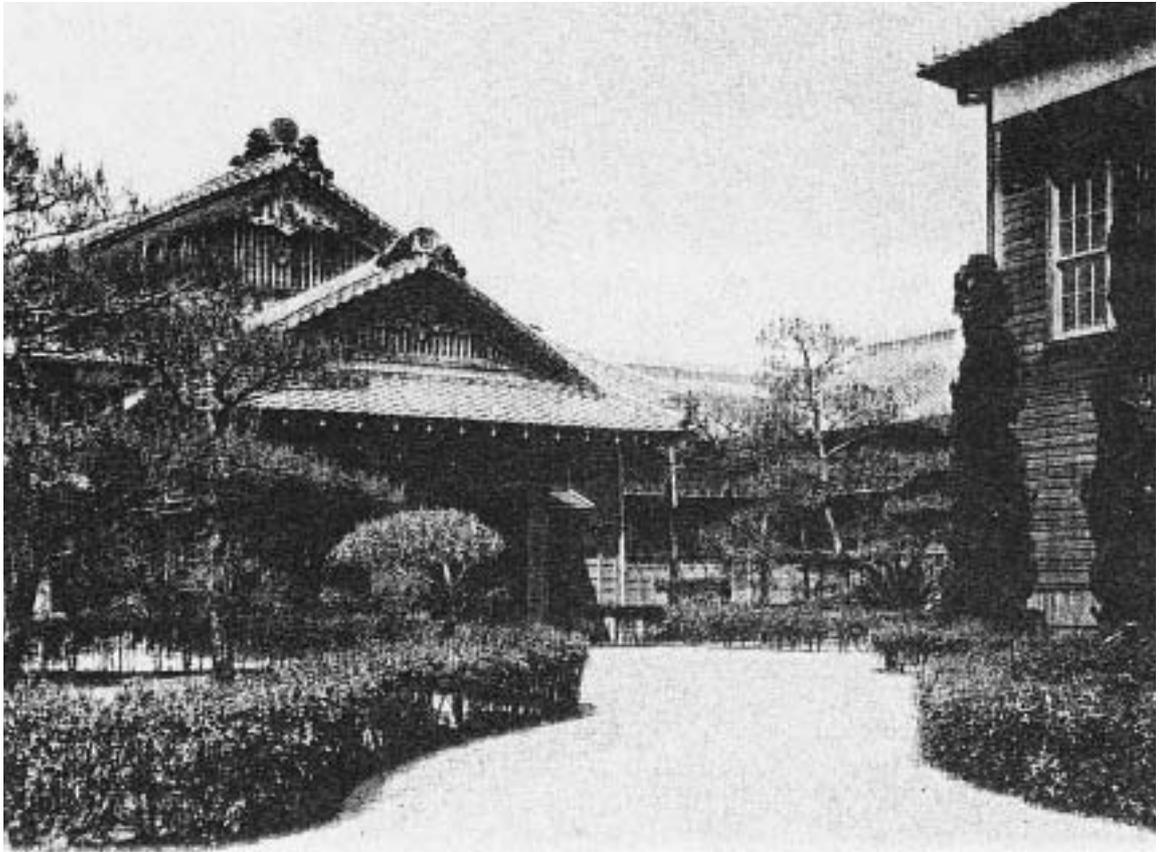
高知地方區裁判所 平面図 複写

5 庁舎沿革及び現況説明書

高知地方・簡易裁判所

(1) 庁舎の沿革

明治 8 年12月	高知裁判所設置
明治23年11月	高知地方裁判所と改称
明治24年 3 月26日	敷地8,571㎡購入
明治29年 7 月 9 日	新築、木造平屋建延べ2,238㎡ (着工 明治28年 4 月23日、竣工 明治29年 7 月 9 日) 昭和11年10月火災により陪審庁舎消失
昭和12年 3 月28日	増築 (陪審庁舎) 木造 2 階建延べ689㎡ (着工昭和11年12月29日、 竣工 昭和12年 3 月28日)
昭和23年 4 月 2 日	敷地1,489㎡内務省より所管換
昭和25年 3 月	改築、木造 2 階建延べ1,544㎡ (着工 昭和24年 9 月26日、竣工 昭和12年 3 月15日)
昭和34年 2 月27日	新築 (家裁棟 , 高知県と建築交換) 鉄筋 3 階建延べ902㎡ (着工 昭和33年 4 月、竣工 昭和34年 2 月27日)
昭和37年 2 月28日	新築 (調停棟) 鉄筋 3 階建延べ1,337㎡ (着工 昭和35年 2 月16日、 竣工 昭和37年 2 月28日)



高知地方區裁判所

位置	高知市丸ノ内七番地
敷地	二、五九三坪
廳舎	木造瓦葺二階建及平家建
建坪	六六八坪
延坪	七七〇坪
附属建物	建坪 二四七坪
延坪	三四五坪
起工	明治二十八年四月二十三日
竣工	明治二十九年七月九日
工事費	六萬六百拾八圓也

Fig. 6 高知地方裁判所資料図(1)

(文字は再写植)

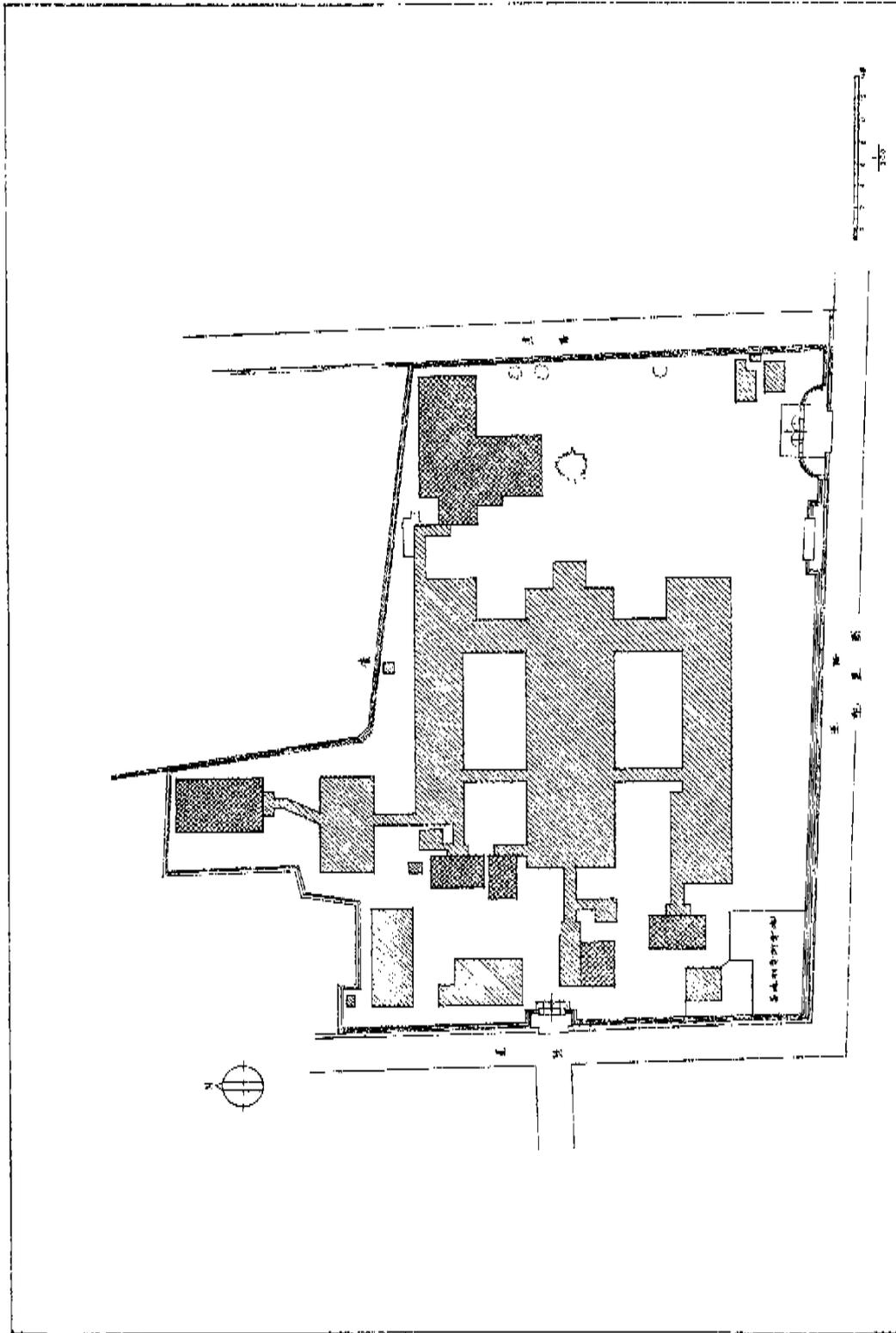


Fig. 7 高知地方裁判所資料図(2)

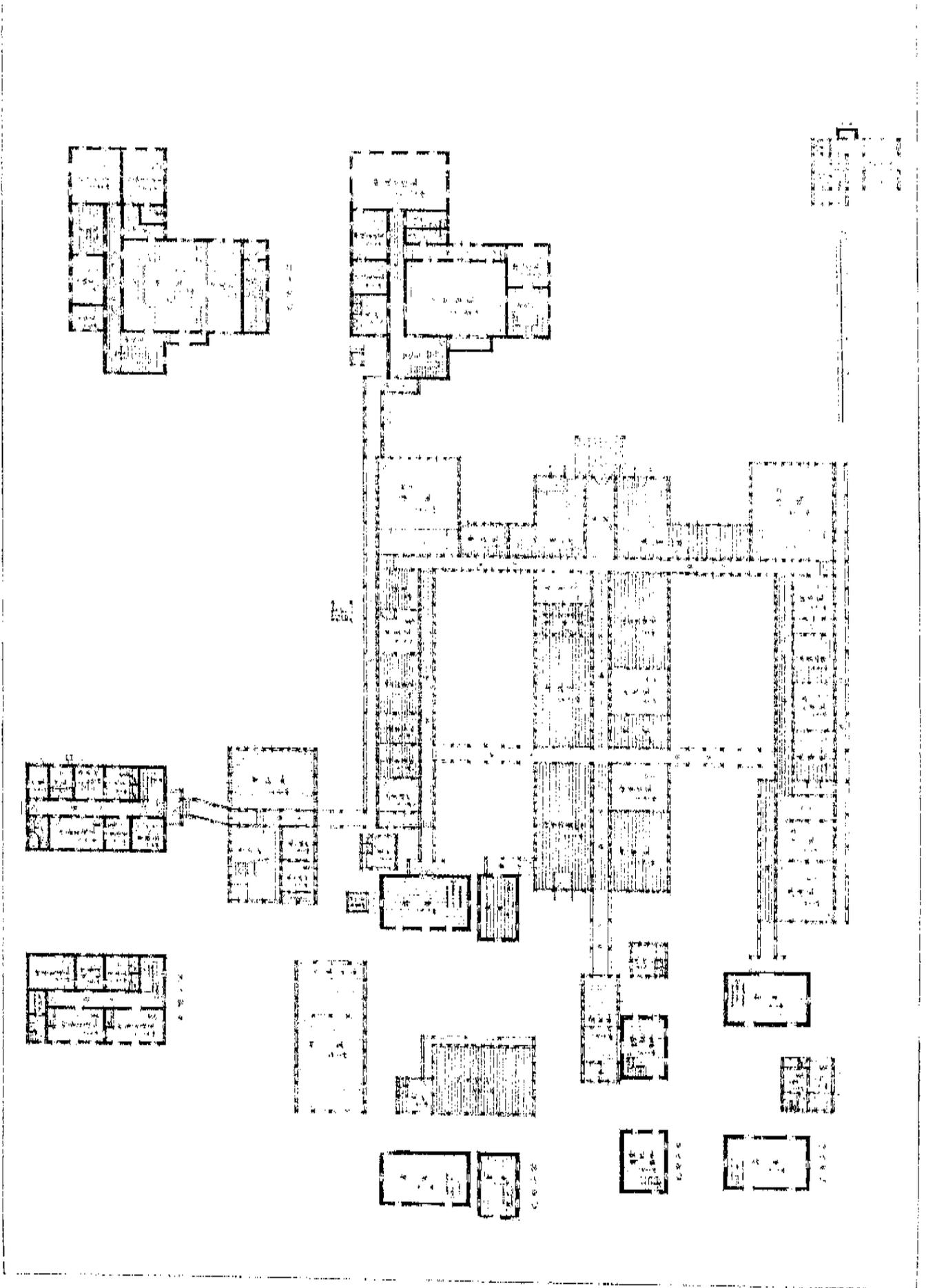


Fig. 8 高知地方裁判所資料図(3)

第2章 遺構と遺物

1. 中世以前の遺構及び流路と遺物

SX18 (Fig.10)

調査区南端壁際の最下面で検出し、幅0.44m、深さ0.22mを測る。調査区南外へと続いており、溝状の遺構である可能性もある。最初に土器群が検出され、精査した結果遺構を検出した。埋土は灰色粘土に小礫を含む。灰色砂を基本とする基盤層土に比べて緑がかって見え、含まれる泥岩小礫も内部は黄褐色を呈することから、本来黄褐色であった土が、周囲の土層と同様に還元色を呈するに至ったとみられる。遺物は図示したものを含め鉢口縁部6点、甕底部6点、甕頸部2点が出土している。甕にはススケが認められる。1は、口径が復元できる鉢のうち最小である。胎土は3種以上のバリエーションが認められる。いずれにも摩耗がみられる。

SD 1 (Fig.10)

調査区東部の下層で検出した東西溝で、幅0.56m、深さ0.20mを測る。国土座標系からみた方位は、西へ20°の振れを示す。出土遺物は皆無であるが、本遺構はFig.3のごとく砂やシルトを含む土層や、土師質土器片と白磁皿828のみが出土した層の下位に位置しており、これらの土層が2-4区で確認した土層と関連している場合、SX18を除く今次検出遺構のうち最古段階の遺構となる可能性がある。

SR 1 SR 2 (Fig.10)

トレンチのセクションでのみ確認した。いずれも砂層や砂を多く含む層を有し、南肩を確認した。北側はFig.2の基本層序層以下等が関連している可能性もあるが、不明である。近世の遺構や包含層より下位にあり、近世に比定される遺物は確認していない。遺物は7の他、土師質土器数点が出土したのみである。8は、2-4区西端で出土した馬の下顎部とみられるものの一部である(PL38)。

2. 近世前期頃の遺構と遺物

近世後半以降に位置付けられる遺構と層位的上下関係を持つ遺構のなかに、出土遺物等からも観察表のごとく時期差を認められる遺構群が存在する。また、層位的上下関係は確認できないが、出土遺物等から江戸時代前期頃に比定される遺構群も存在する。本項ではこれらの遺構群について報告する。なお、瓦に関しては後にまとめて述べる。

(1) 堀

堀 1 (Fig.11)

調査区北西部で検出した。東西方向の堀と南北方向の堀がT字形に接しているが、切合いは確認できなかった。東西堀の底面は平坦であるのに対して、南北堀は断面U字形を呈し、深さも交差点部

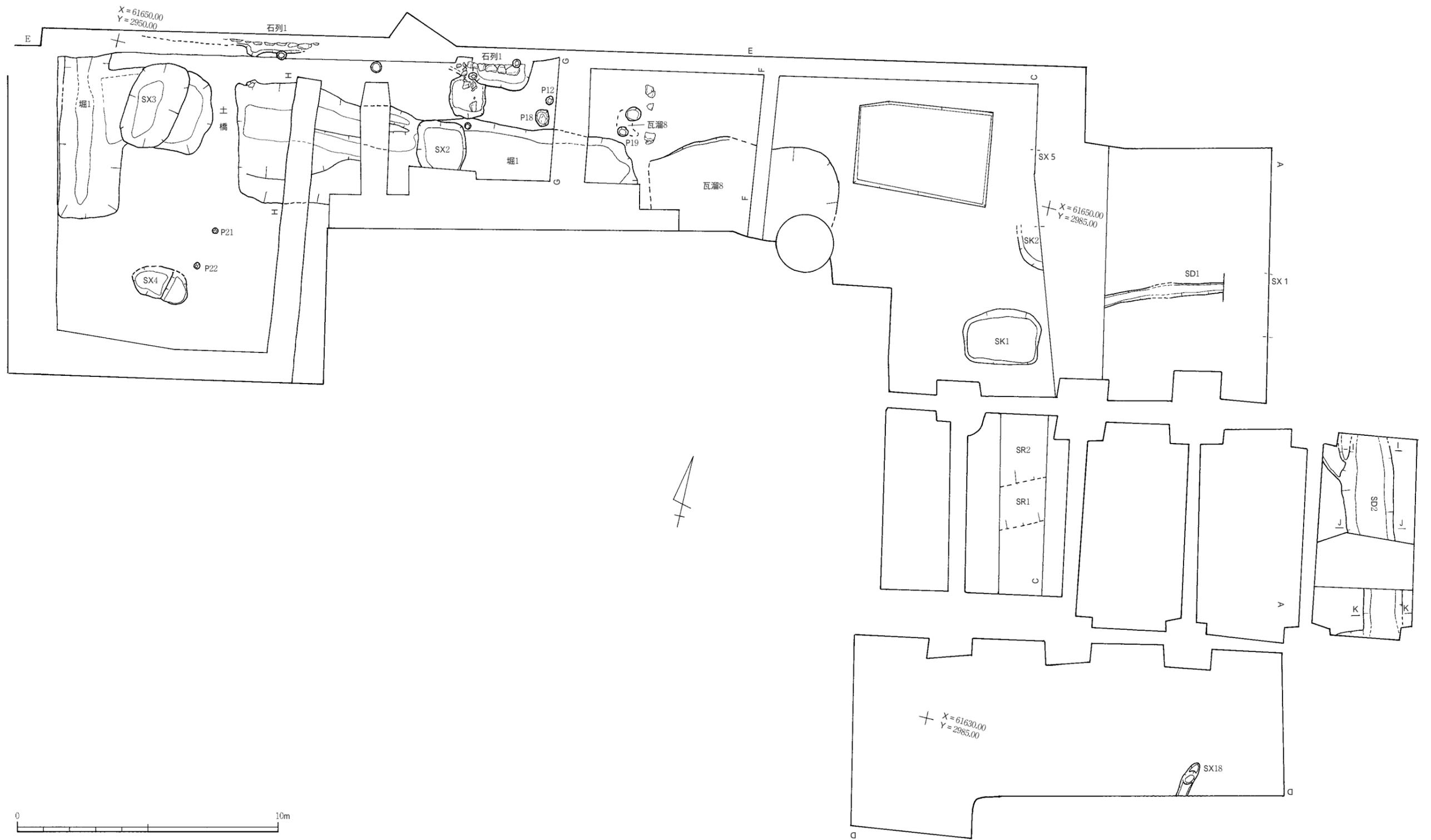


Fig. 9 近世前期以前の遺構位置図

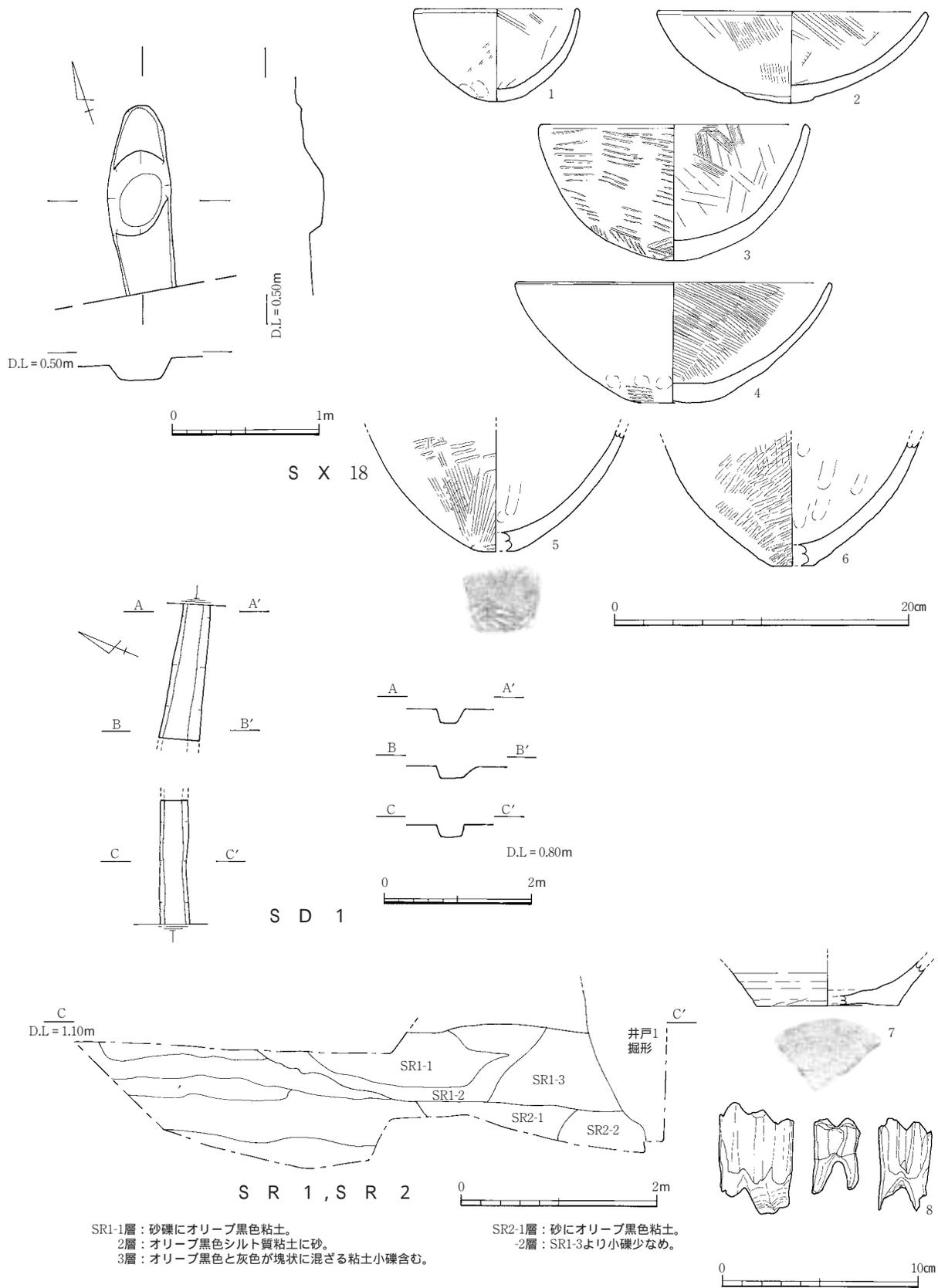
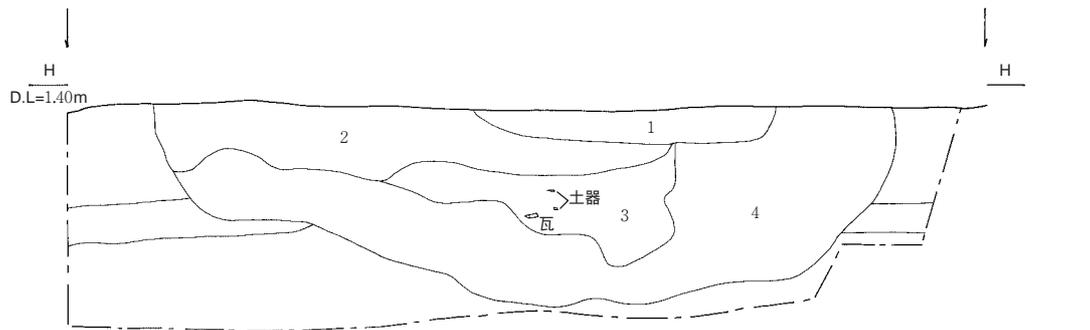


Fig.10 中世以前の遺構・流路及び出土遺物実測図



- 1層：灰色粘土に砂、礫含む。
 2層：1層と同じ。砂多め。
 3層：1層と同じ。上層が砂少なめ。
 4層：1層と同じ。黄灰色含。下層は粘土。
- 瓦含む。

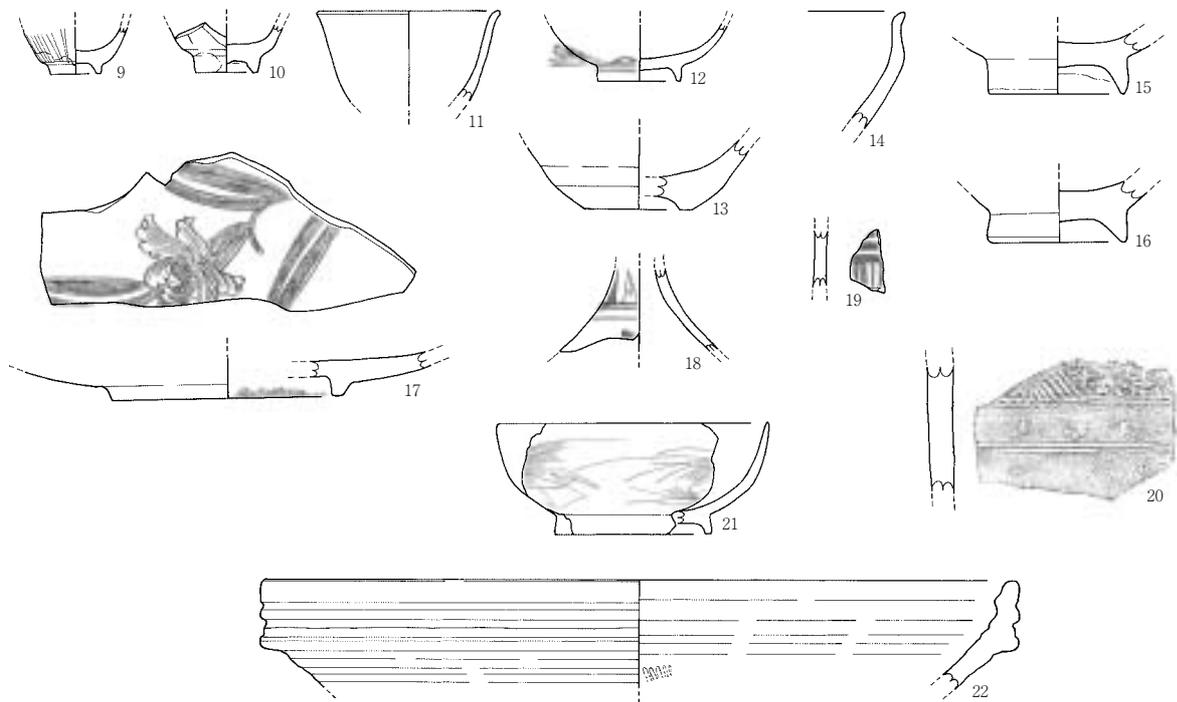
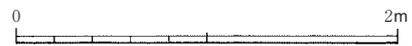


Fig.11 堀1セクション・出土遺物実測図

で22cm深い。東西堀は長さ20.7mを測り、西寄りには掘り残しによる土橋が存在する。土橋の上面幅は1.2mを測る。土橋を挟んで堀幅がくい違えられていることにより、南側に方形の空間が想定できる。堀は、土橋東側で幅4.7m、深さ0.62m～1.04mを測る。Fig. 3や11からわかるように、東西堀の北側立上り断面は垂直に近い。東西堀の企画方位はN-5° 8'-Wを示す。東端の中層で出土した数十cmの石材1個を除いて石材は検出されず、本遺構に関して石材を用いた形跡は認められない。本遺構は図のごとく近代の庁舎や前庁舎により破壊されているため、その南部や東部の状態が不明であり、遺構が東端で完結している可能性や屈曲して調査区外へ続く可能性が考えられる。南北堀は幅2.4mを測り、長さ6.25m分を調査したが、調査区北側外へ延びる。西肩は、図のごとく標高0.85mの低い位置で確認した。東西堀では南肩が破壊されている部分が多く、このような堀の内外の段差の有無については不明な点が多いが、少なくともH-H'ラインでは標高1.3mまで南側の立上がり確認できる。また、堀1の東側の遺構基盤面も標高約1.2～1.7mの標高であり、上記の南北堀西側のような状態はみられない。あるいは南北堀が段を持っている可能性なども考えられるが、調査区外で不明である。本遺構の埋土は概して基層土との類似性が強く、後述の後期の遺構群とは異なる。若干の炭粒、植物遺体、礫を含む。遺物は陶磁器、土師質土器、瓦、漆器が出土しているが、後期の遺構群に比べて遺物密度が明らかに低く、しかも小片が多い。出土位置は東西堀の特に土橋付近に偏っており、主として埋土3層に属する。

(2) 溝

SD 2 (Fig.12)

東部に突出した0区に所在する南北方向の大溝で、長さ8.1mを調査した。幅は1.8m～2m強、深さは0.6～0.7mを測り、底の標高差は南北両端で2cmを測るのみである。方位はN-18° 9'-Wを示す。北部の下層には砂を含み、南部上層には鉄滓や羽口を多含する層が堆積する。これら鍛冶関連遺物を除いた遺物量は少なく、中層以下では確実に江戸時代に比定できる遺物が出土していない。このような状況は、後述する後期の様相とは大きく異なる。底面からは24、下層からは25や図示した折敷、箸の他、図示していないがPL38の編み物等が出土した。瓦896は、次章のごとく今次特異な古相を呈している。その他、古代以降の土師質土器8点、白磁1点、古代の土師器・土師質土器2点のいずれも細片が、中・下層より出土している。以上の状況からみて、本遺構が例えば後期に開口していたとは考え難く、開削時期は近世初頭前後まで遡る可能性も考えておくべきである。その場合、後期の遺物の存在については、後期の包含層や集中2および遺構が本遺構の直上や近辺に濃密に存在することや、本遺構の東西の肩部の高さに明らかに差があることで理解することもできる。

(3) 石列

石列1 (Fig.13)

調査区西部の北壁際で検出した。SD 3や攪乱によって一部破壊されている。伴う掘形からみて、東端は完結あるいは北へ屈曲している可能性がある。西側については不明であるが、Fig. 9にあらわれている掘形の西端部分までの長さは14.8mを測る。企画方位はN-6° 8'-Wを示す。東端部の下位

には落込みがあり、39、42、43、46、48、50及び土師質土器をはじめとする遺物が出土した。この部分は一応石列1掘形としたが、その性格については明言できない。石材は南面と上面で加工面を揃え、材質は西半部でチャート6個、花崗岩1個、砂岩1個であった。掘形からは、図示した遺物の他、見込みから粗い掘り目を持つ播鉢等が出土しているが、近世後期に比定し得る遺物は認められない。本遺構を覆う層は、特に東部では焼土粒と瓦片を多く含み、瓦溜8と関連している可能性がある。なお、P14の部分で交わる掘込みとの切合い関係などは明確でなかった。また、石列に近い高さで検出した柱穴群があるが、出土遺物は僅少で、時期や性格は明確でない。P13より出土した143は、今次出土の類品のなかでは器高が低い特徴を持つ。P16からは磁器口縁部と土師質土器の細片が出土している。

(4) 土坑状遺構

SX1 (Fig.28)

調査区東壁でのみ確認し、幅2.8m、深さ1.2mを測る。東壁際には土層確認のためのトレンチを設定したこともあって、遺構の拡がり不明確であるが、トレンチ西側で精査したにもかかわらず検出できなかったことから、西へは長く延びていないものと思われる。埋土には遺物や有機物、焼土等を含まず、堀1などの近世前期に比定される遺構群との類似性があるが、所属時期は不明である。

SX2 (Fig.14)

堀1内で検出し、幅1.83m、深さ0.93mを測る。検出時のプランは、西半部は上面から確認できたが、東肩は堀1の埋土と区別できず、下層の状態と断面から判断した。下層は、ほとんど木っ端や植物遺体、木製品で占められており、土製品も多くは同層に含まれていた。木っ端は、木材加工時に生じたとみられる三角形その他の形状の端材や、削り屑等が目立つ。木製品では、漆器椀4点、下駄3点他が出土した。木簡92は、下層上位からPL9のごとく他の遺物とも近い位置で出土した。その他、径2.8cmを測る骨が出土している。本遺構は北肩が堀1と一致するなど、関係を示唆する。

SX3

堀1内で検出し、長さ3.4m、深さ1.25mを測る。堀との位置関係や埋土にはSX2との共通性が看取できるが、本遺構では遺物や有機物の顕著な集中はみられず、細片などが僅かに出土したのみであった。底面は堀1の底より34cm低い。図示できる出土遺物はない。

SX4 (Fig.17)

調査区西端部の瓦溜10の下で検出した。長軸2.16m、深さ0.36mを測る。埋土は褐灰色シルト質粘土に木片や炭粒を含み、瓦溜10とは全く異なる。仕切り状の盛り上がりがあるが、それを境にした埋土の区別はできなかった。底面から99や100、101が出土している。

SX 5

調査区北部で検出した。Fig.28のごとく断面で確認したが、SX10に覆われているため全容が不明である。南肩をSX10のそれとした場合、幅2.66mを測る。埋土は灰色粘土に若干の小礫と炭粒を含むのみで、上層の後期遺構群とは大きく異なる。出土遺物は磁器2点、陶器1点、土師質土器1点のいずれも小片を認めるのみで、図示していない。

(5) 土坑

SK 1 (Fig.17)

3.0m×2.16mの隅丸長方形を呈す。深さ0.12mで、床面は平坦である。明治期庁舎の基礎杭が貫通していた。埋土は礫を含む黄褐色シルト質粘土が還元過程にある色調で、床面や平面形ともあわせてSK 2に類似する。102も含め、出土遺物は僅かな細片のみである。

SK 2

Fig. 9、28のごとく一部が残存するのみである。セクションにみる肩部の切合いの不明瞭さは、SX10や落込み2に本遺構の埋土が若干流れ込んでいるためとみられる。深さは0.4mを測り、埋土は褐色シルト質粘土に黄橙色塊を多含、20cm大までの礫を含むもので、遺構の形状ともあわせてSK 1に類似する。17世紀後半に比定される103の他、瓦片数点が出土している。

(6) 瓦溜

瓦溜 8 (Fig.18)

堀1東端の東で検出した、緩やかな落込みに伴う瓦溜で、東部では北肩が比較的明瞭であった。西部での肩は不明瞭だが、図示した範囲より西方へは拡がらない状況であった。堀1より上位に堆積し、埋桶1に切られる。土質や包含物からみても調査区北部の基本層序 層に関連する可能性が高い。層出土陶磁器の一部はFig.80に示した。本遺構では瓦や土器・陶磁器、建物の壁の一部とみられる破片等が出土し、被熱しているものが目立つ。中央部から東部にかけて備前大甕の破片が多数出土しているが、口縁部でみると133と138を除いては同一個体と認められず、8個体以上の大甕の口縁部が廃棄されていることになる。南部は近代の基礎遺構1底面の杭が貫通していた。さらに南側で前庁舎の基礎によって完全に破壊されており、本瓦溜はさらに南側へ拡がっていたことは確実である。また、上層も相当に攪乱されていることが、土層図から推測できる。なお、726は本来本遺構に属したものとみられる。本瓦溜出土の瓦898と、層出土の897が同范である。

(7) ピット他

ピット他 (Fig.20)

北部で層とみられる土層の除去後、礎盤様の石を伴うピットや石群、P19を検出した。検出標高は堀1のそれに近い。P18は長径64cm、深さ9cmで長さ37cmの石を伴い、土師質土器細片11点が出土している。P19は長径35cm、深さ10cm、P23は長径60cm、深さ19cmで長さ45cmのチャートを伴

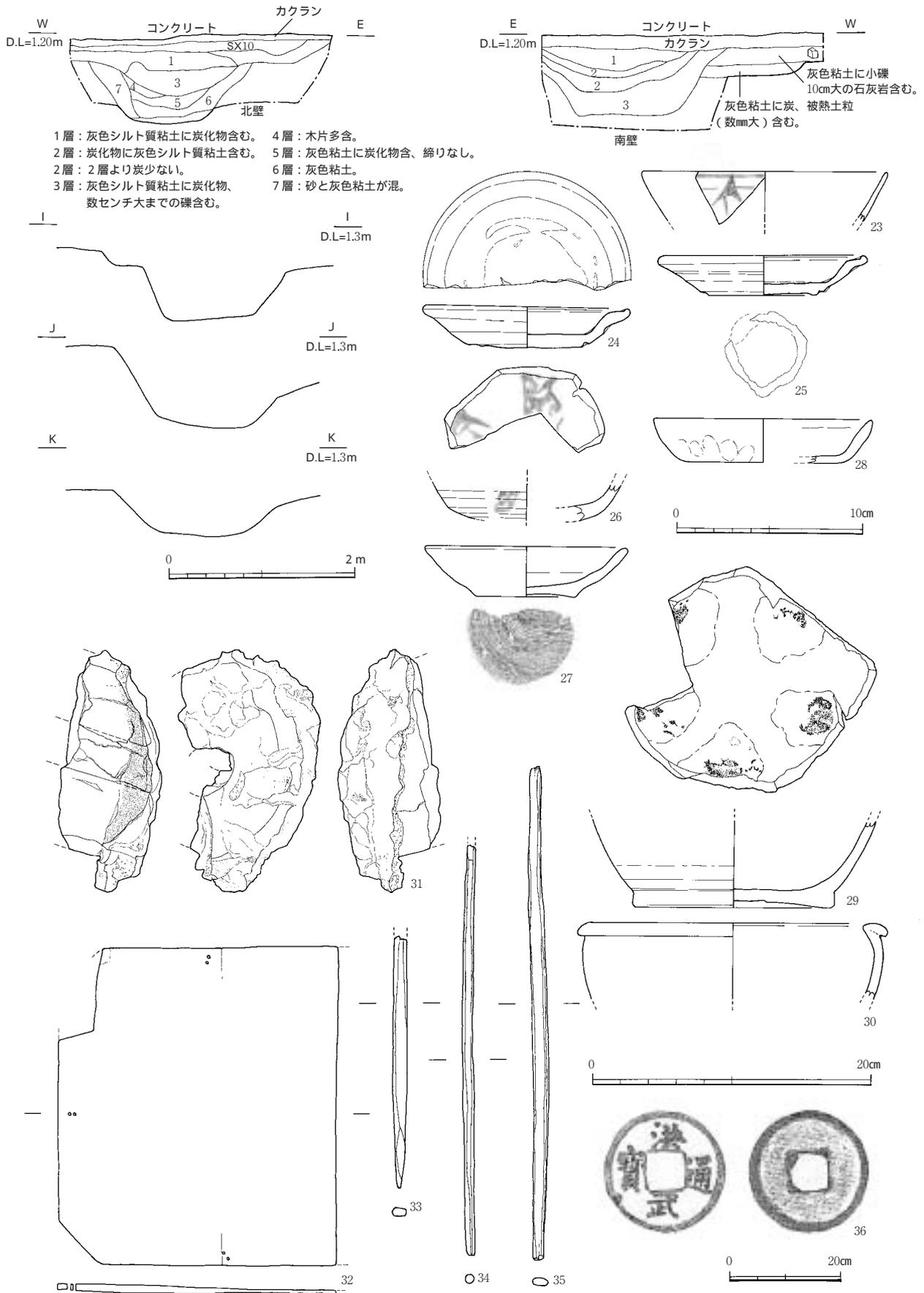


Fig.12 S D 2 セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

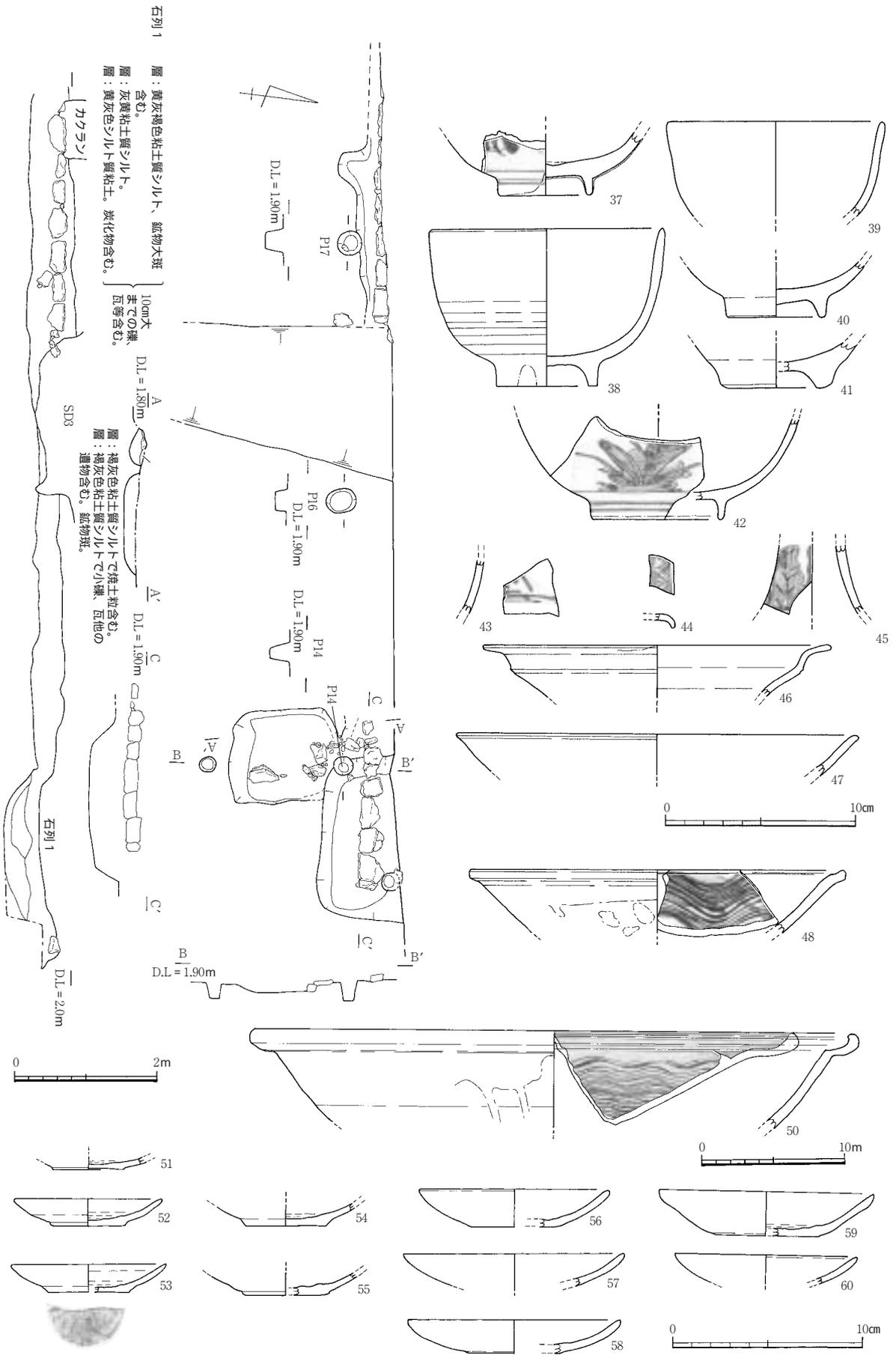


Fig.13 石列 1、ピット平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

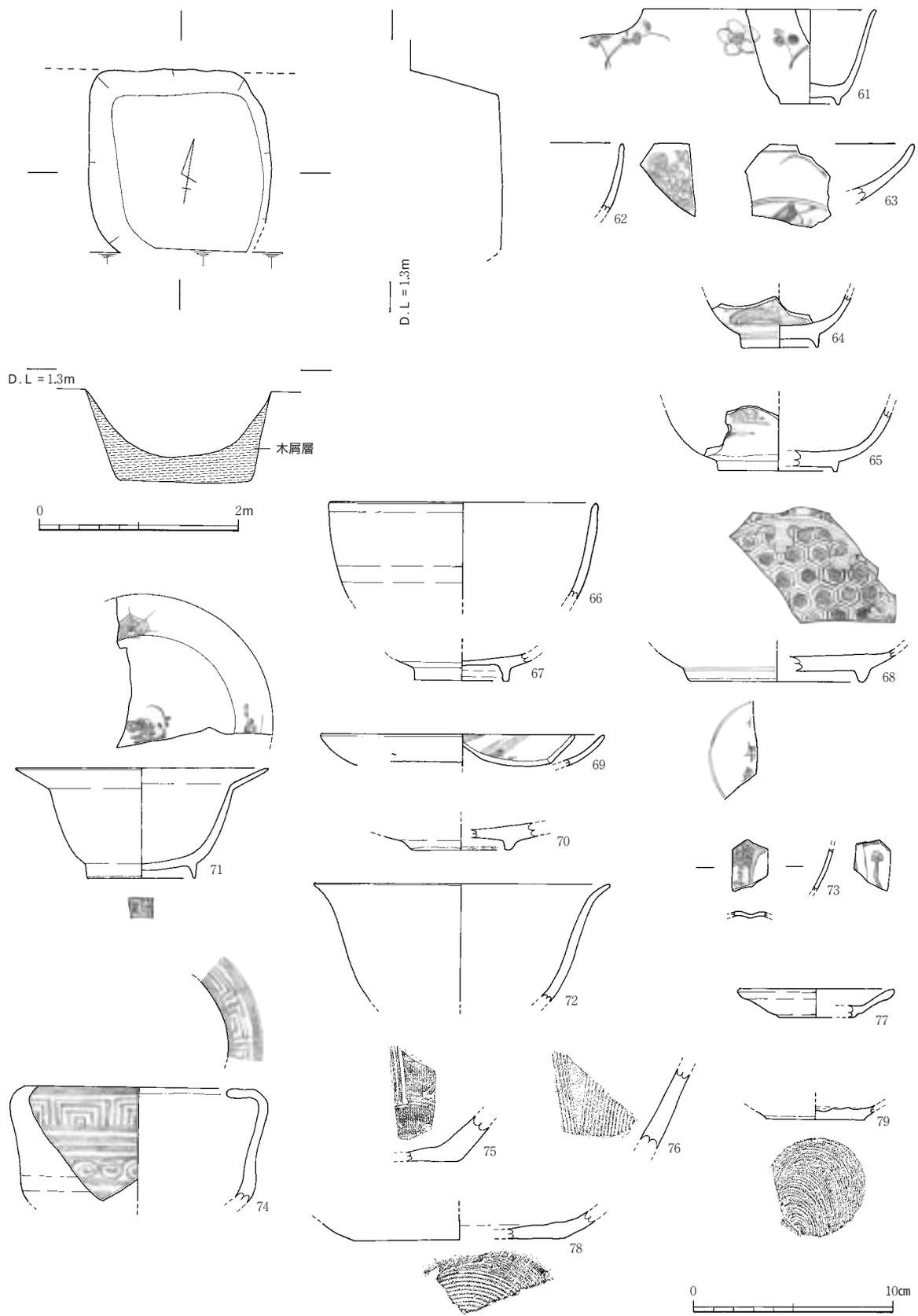


Fig.14 SX2 平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

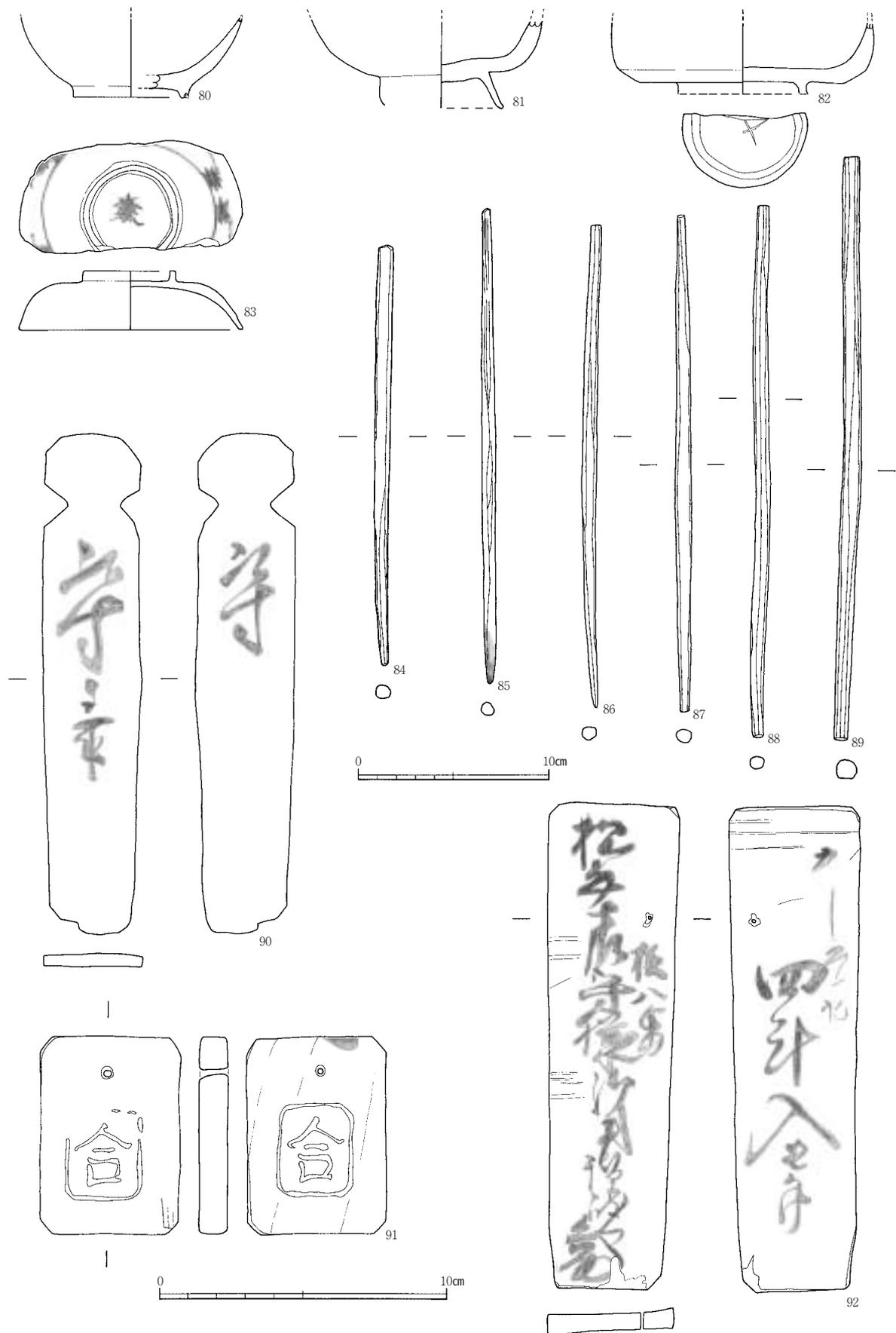


Fig.15 SX2 出土木製品実測図(1)

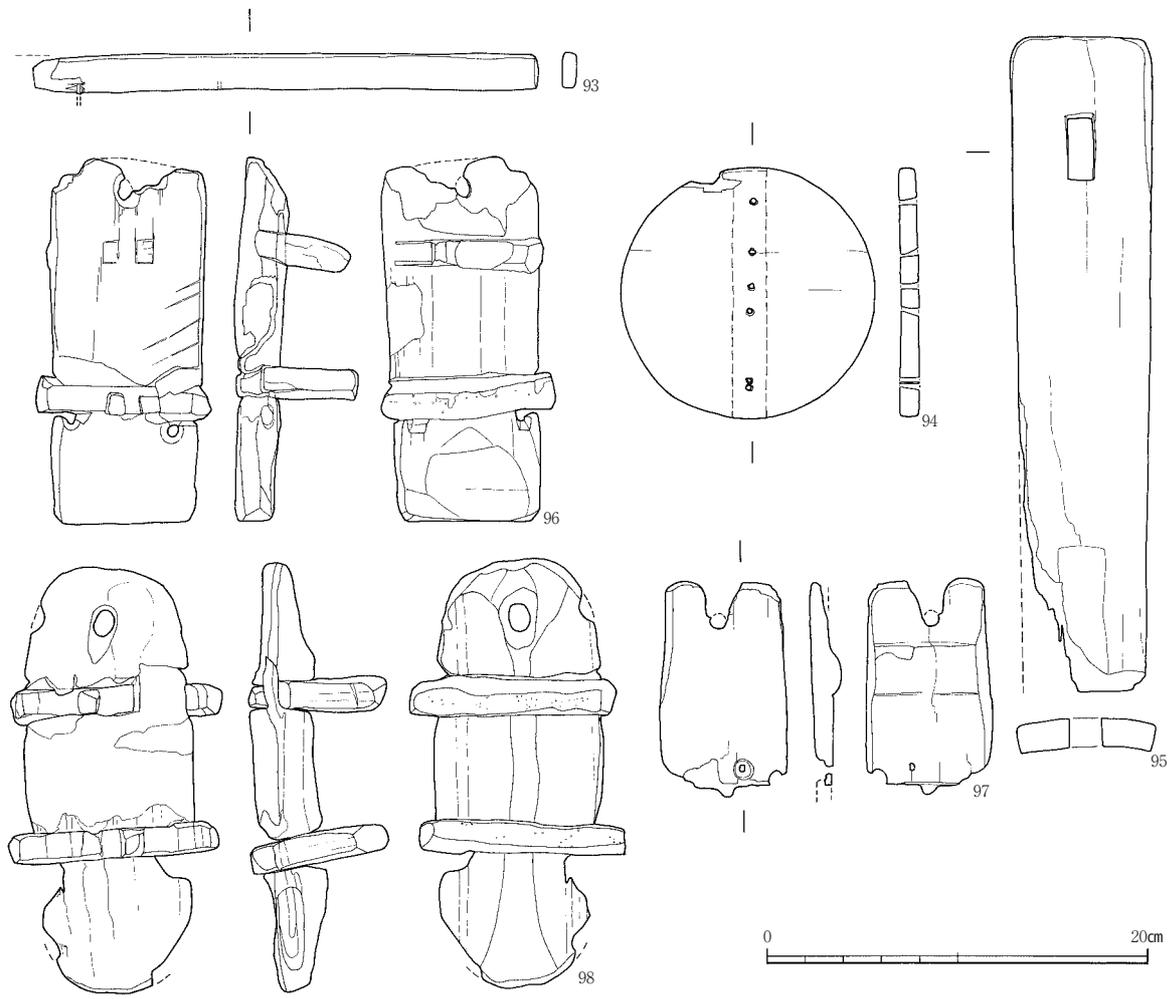


Fig.16 SX2 出土木製品実測図(2)

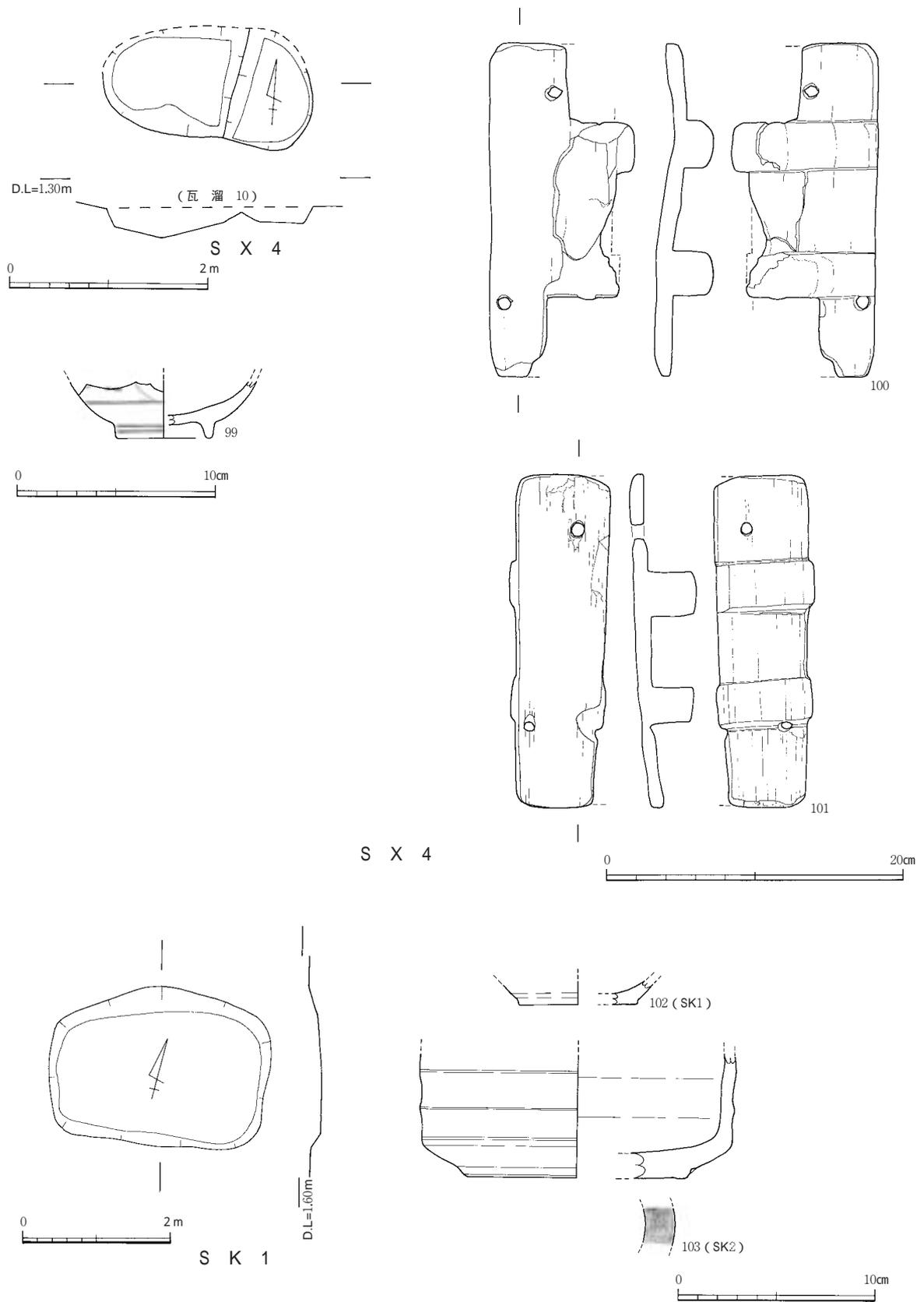
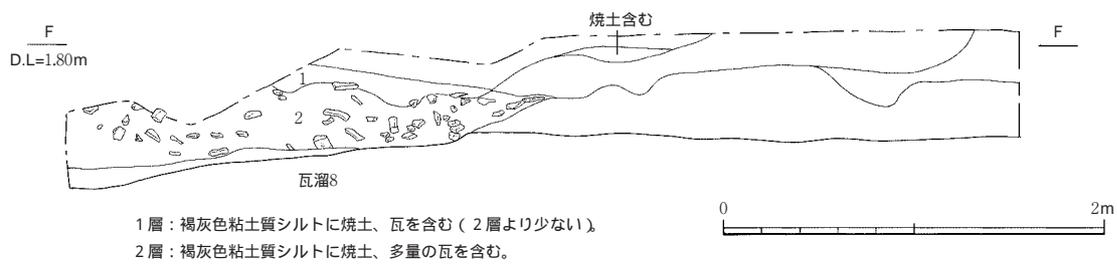


Fig.17 SX4、SK1平面・エレベーション及び出土遺物・SK2出土遺物実測図



1層：褐灰色粘土質シルトに焼土、瓦を含む（2層より少ない）、
2層：褐灰色粘土質シルトに焼土、多量の瓦を含む。

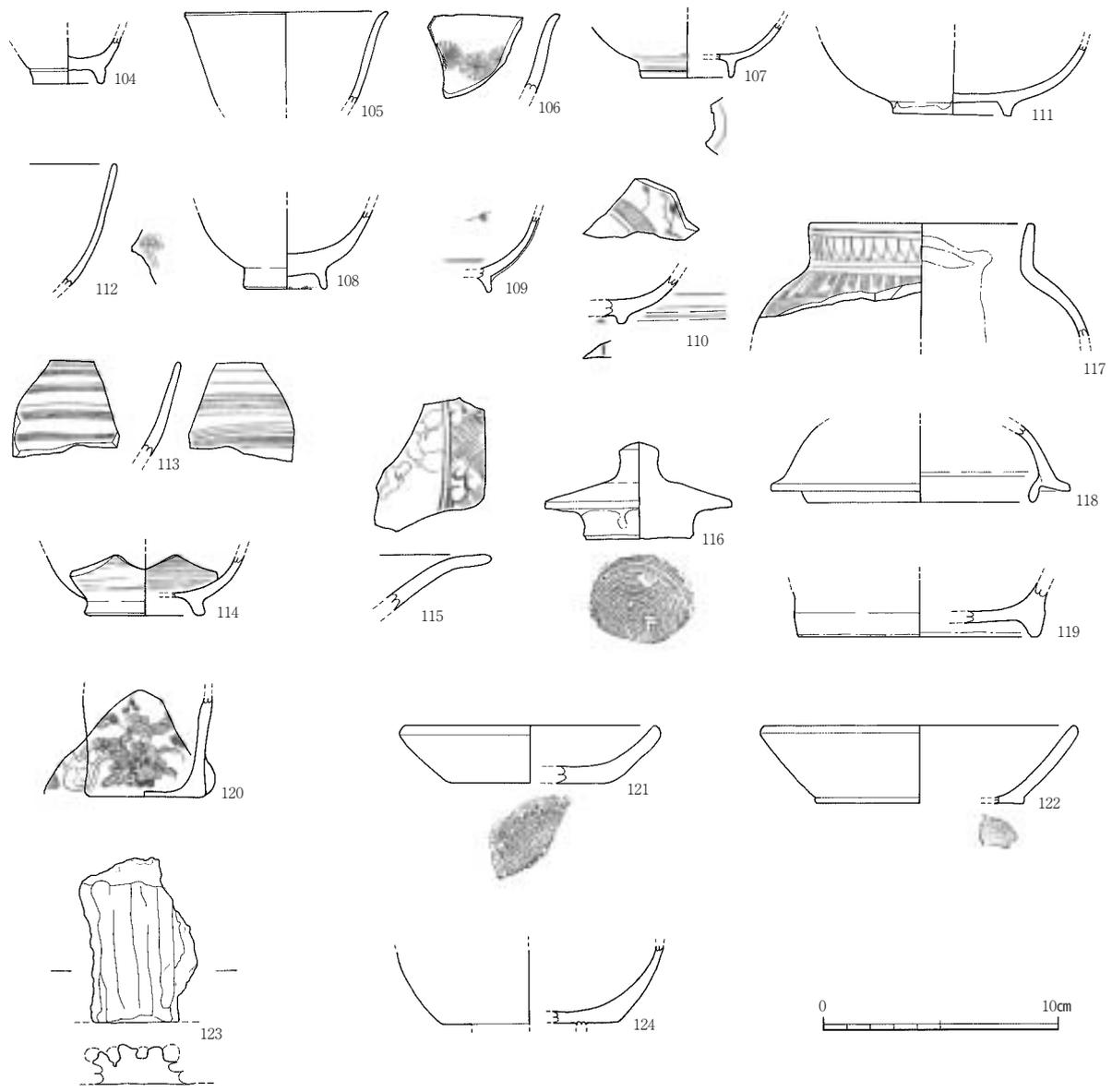


Fig.18 瓦溜8 セクション・出土遺物実測図

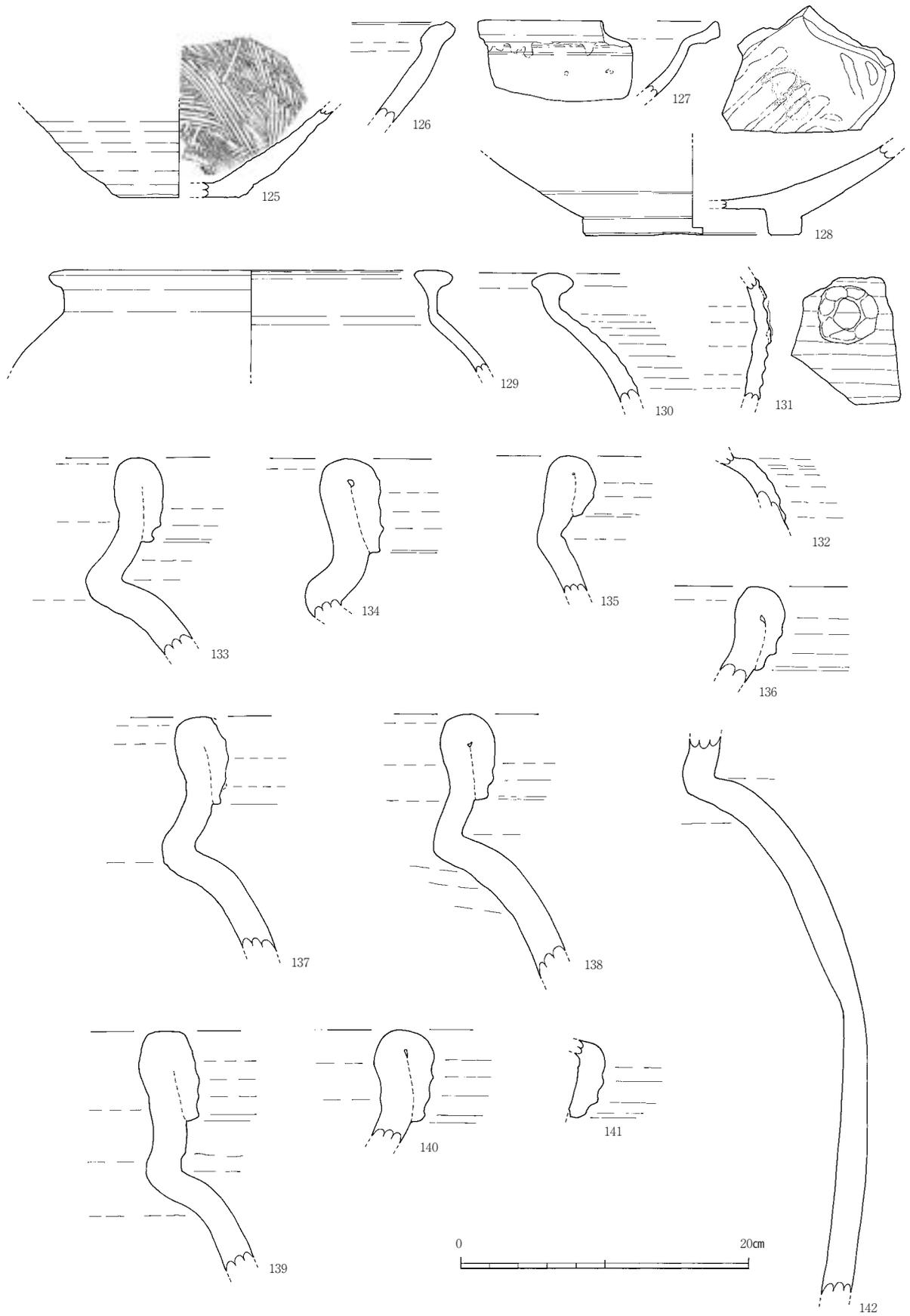


Fig.19 瓦溜 8 出土遺物実測図

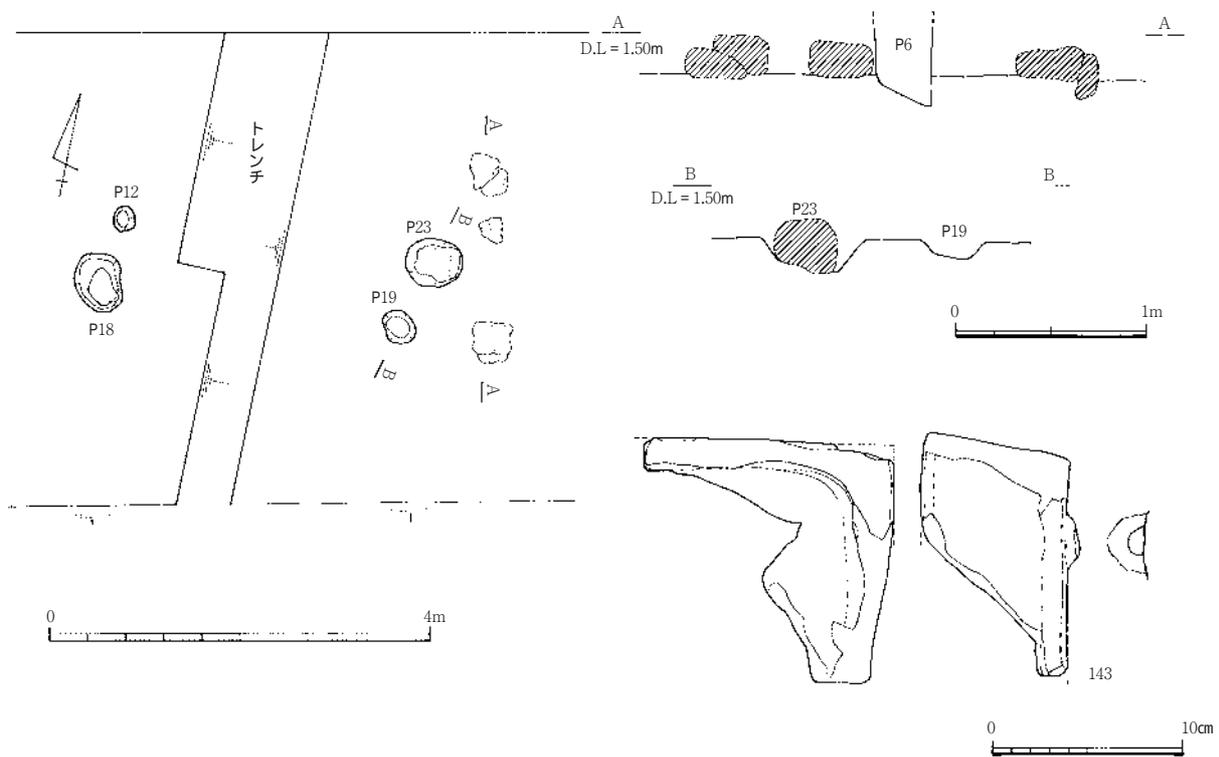


Fig.20 調査区北部ピット・石平面・エレベーション及び出土遺物実測図

う。石群は長さ28～40cmを測り、材質は砂岩2個、蛇紋岩1個である。出土遺物は皆無で、後期に位置付けられるピット群と平面的には交錯するが、検出面や石を伴う特徴により、それらと分離した。なおP18の検出レベルは石列1に近いが、トレンチを挟んで東側のP19や石群より底面で33cm高い。

3．近世後期から近代初期の遺構と遺物

(1) 溝跡

SD3 (Fig.21、22)

西部で検出した南北溝で、幅1.32m～1.98m、深さ0.88mを測る。基本層序 層や 層をも切っており、本期の遺構群の中でも後出する遺構である。出土遺物の年代観も、これに合致するものがある。埋土の中位には砂利層や砂層があり、最下層には遺物や有機物が比較的多い。セクションからは、掘り直しも想定できる。

(2) 土坑状遺構

SX6 (Fig.23)

調査区南端壁際で検出した。灰色粘土の基盤層に掘り込まれ、深さは0.58mを測る。平面規模は不明だが、東西幅を約4mと推定することもできる。埋土は、木片層と砂層が間層を挟んで各々上下にみられ、複次の廃棄或いは堆積が認められる。 層の包含物等は、東側にあるSX7やSX8にも類似する点がある。出土遺物は比較的少ない。

SX7 (Fig.23)

調査区南端壁際で検出した。灰色シルトないし砂の基盤層に掘り込まれ、南壁での幅4.53m、深さ0.58mを測る。壁は西側が急激に、東側は緩やかに立上がる。遺物や有機物の集中層は比較的薄く、遺物量も多くはないが、断面図からは掘り直しも想定可能である。遺存度の比較的良好な瓦や陶磁器は、西部に偏在する 、 、 層から主に出土した。

SX8 (Fig.23)

調査区南東隅で検出した。埋土は灰色系の粘土質シルトに有機物や石灰岩他の礫を含むもので、西側のSX6やSX7と共通する点がある。深さ0.48mで平面規模は不明だが、長さ約5.5mに推定することも可能である。167は下層より原形に近い状態で出土した。

SX9 (Fig.25)

東部で検出した。床面の形状が複雑で、遺構配置図からみても埋土がSX16と関連する可能性があるが、切合い等は確認できなかった。落ち込み部分とその周辺に同様の埋土が広がっていることが、セクション図や写真からもわかる。木屑の厚い堆積層があり、遺物も同層に集中している。中央の楕円状の落ち込みの長軸が3.4m、深さ1.2m、南壁での幅が2.2mを測る。セクションは、断続的

な埋没状況を示す。このような状況から、出土遺物としたものは複数次のものが混在している可能性が高く、近世前期に比定できるものも目立つ。176は瓦溜10出土のものと接合している。箸は、図示した以外に4本が下層より出土している。

SX10 (Fig.27)

北部で検出した。破壊により長軸の規模は不明だが、幅は3.5m、深さ0.72mを測る。木片、植物遺体を多含する層や、遺物等を多く含む層を有し、上層は基本層序 層によって覆われる。セクションは、断続的な埋没状況を示す。下位に存するSX5との関係からみて、一部で両者の肩部が一致している可能性もあるが、既述のように遺構埋土は大きく異なる。出土遺物には、254のようなやや大型の木材もある。焼塩壺は身5点、蓋1点が出土しており、身には蓋受けの消滅したものが1点ある。

SX11 (Fig.27)

SX10の一部とも考えられるが、分離して報告する。前庁舎の基礎によって大部分は破壊されている。深さは2.63mを測る。埋土には木屑層があり、遺物も主にそこから出土した。

SX13 (Fig.27)

調査区東壁際で検出した。Fig.28のごとく深さ1.0mを測り、上層は他遺構または掘り直しによって切られているものとみられる。トレンチや前庁舎の基礎によって破壊され、平面形は不明だが、幅約3.7mに推定することもできる。埋土は砂を含む灰色粘土と木片、植物遺体、各種遺物の集中層が不連続に堆積し、断続的な埋没や掘り直しを示す。今次検出した遺構中、陶磁器や土器の量及び遺存良好な遺物の密度は最多級で、墨書を伴う遺物も多い。漆器には、第4章でサビ下地が認められたものもある。焼塩壺は身12点、蓋5点を数え、身には全て蓋受けがある。なお、トレンチ掘削中に出土した遺物は東トレンチ出土遺物として図示するが、その殆ど或は全てが本遺構に属するとみられる。

SX14

調査区東端で検出したが、前庁舎やトレンチによって破壊され、平面形は不明である。Fig.28のごとく下層には有機物層が堆積する。上記東トレンチ出土遺物中に、本遺構に属するものが含まれている可能性があるが、分離できない。

SX15 (Fig.56)

東端に突出した0区で検出した。深さ0.26mを測り、埋土はオリーブ黒色土や砂利を含むが、遺物や木片、小枝などの植物遺体の密度が極めて高かった。また、分層はできず、一括的な廃棄が想定できる。Fig.12のごとく、江戸後期の包含層の上位に位置する。平面規模は不明だが、長軸4mを超えるものとみられる。出土遺物は量、種類共に豊富で、墨書を伴うものも多い。漆器では、第

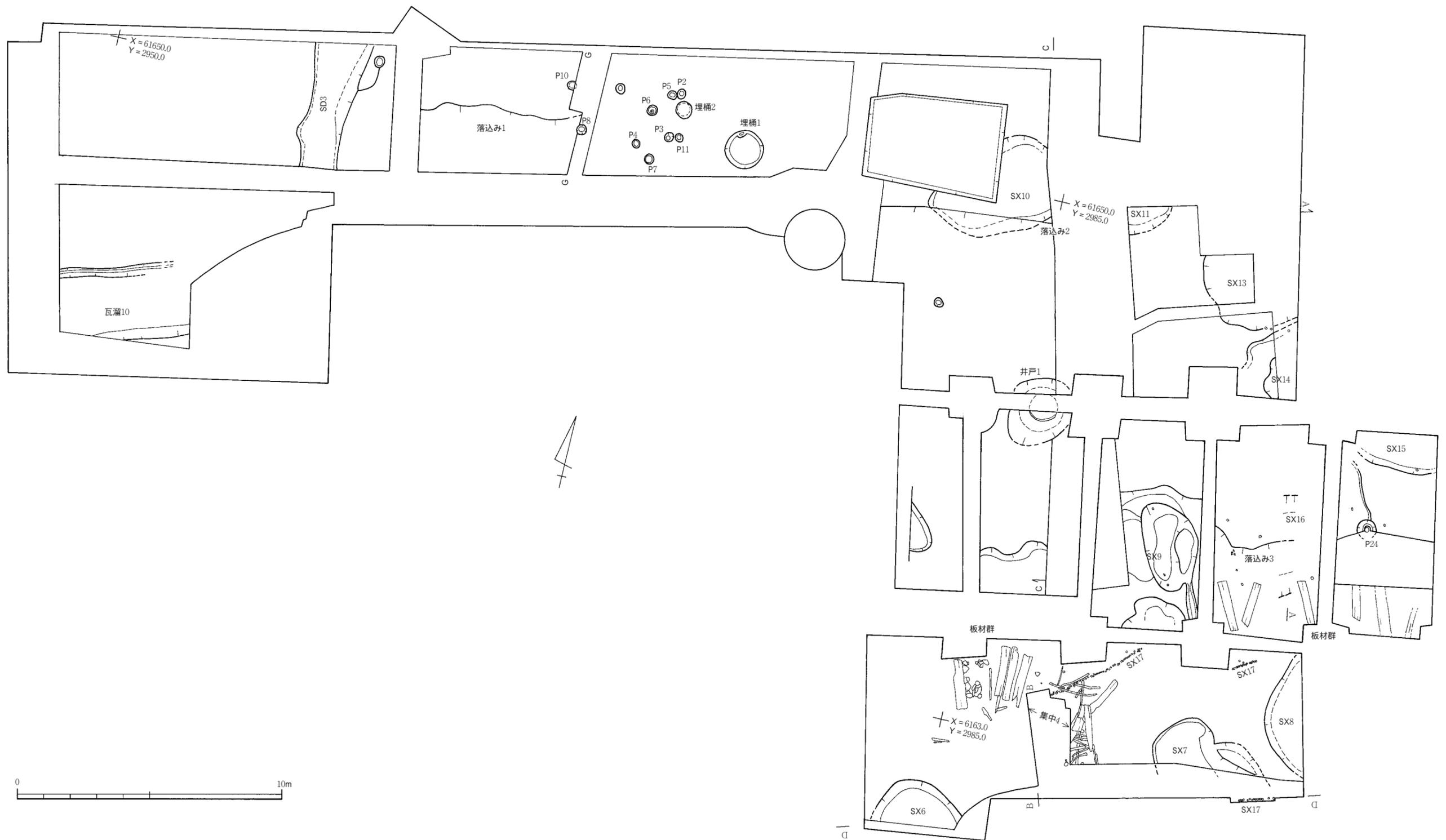


Fig.21 近世後期～近代初期遺構位置図

4章のごとく朱や金粉の使用、サビ下地が認められものがある。箸は、図示した以外に36本が出土している。焼塩壺は、蓋受けが消滅した身の口縁部片1点が出土したのみである。

SX16 (Fig. 56)

東部で検出したが、平面プランを確定できなかった。南肩は不明瞭であるが、断面図にあらわれている立上りをそれとすれば、幅4.5m、深さ0.6mを測る。落込み3を切り、褐色砂層に被覆される。埋土下層の厚い木屑層は、西側のSX9付近と類似する。焼塩壺は蓋2点が出土しており、図示した1点は、口縁が退化している。

SX17 (Fig.58)

調査区南端壁際で検出した大型の遺構で、幅5.2m、長さは不明だが9m以上とみられる。西端は、試掘トレンチで確認された南北杭列がそれに相当すると考えられる。深さは1.2mを測り、黄灰～オリブ黒色粘土質シルト、漆喰を含む赤土、小礫層が薄く帯状に互層をなす埋土が、客土直下より認められた。東端の最下層には35cmまでの石を多く含む。縁辺には先端に加工した直径5～6cm、長さ45～100cmの棒杭が打設されている。本遺構はFig.58のごとく、瓦層一層を除く各土層を切っており、出土遺物からも廃絶は近代に下るものとみられる。焼塩壺は、蓋受けのない身の口縁部1片が出土した。

(3) 落込み

いずれも北側の落ち際を検出したが、平面プランが捉えられなかったものである。

落込み1 (Fig.21)

北部西寄りで検出した。深さ0.56mを測り、南部は各期の庁舎、西部は攪乱やSD3に破壊されているとみられる。焼土や瓦を含む層序層、及び後述のピットの少なくとも一部を切るか、或いは被覆しており、上面ではピットなどは検出されなかった。平面、断面共に、堀1に伴ってその上方を覆うように存在した。図示した部分より東側などへも拡がりはみられたが、平面、断面共に不明瞭でプランを確定できなかった。

落込み2 (Fig.21)

中央部東寄りの2-2区を中心に所在する。Fig.21、28のごとく南への落込みを検出し、東側の1区にも類似する土層が存在したが、攪乱が多く、平面プランを確定し得なかった。深さは0.2～0.4mを測る。下層より木片や植物遺体も出土した。焼塩壺は身10点、蓋3点が出土している。

落込み3 (Fig.56)

1-4、2-4区で北肩を検出した。SX16に切られる。埋土は灰色系の粘土ないしシルト質粘土が比較的厚く堆積し、瓦他の遺物を一定量含むがそれらの密度は低く、基本層序層や後期に属する遺構の埋土とは相違点が多い。図のごとく板材群を検出した。杭群は本落込み埋土の上から打ち込まれ

ているものとみられる。以上からみて、本落込みの埋土は南側に堆積する基本層序 層に該当し、集中4もこれに属するものと考えられる。本遺構の床面即ち2-5区 層下面の標高は、0.9m±数cm以内に収まるところが多い。焼塩壺は蓋1点のみである。

(4) 瓦溜

瓦溜10 (Fig.62)

西部で検出した遺構で、幅2.76m、深さ0.42mを測る。内部は橙色粘土(赤土)と瓦で充填され、漆喰も含まれていた(PL28)。下面でSX4を検出した。出土陶磁器は比較的少ない中で、図示したごとく近世前期に属するものが目立つ一方、後期に下るものが1点出土している。瓦については後述のごとくである。このような状況についてはいくつかの仮説が想定可能であり、例えば床面が東西で33.5cmの段差を持つことや、本遺構がSX4を被覆していたことが留意されるが、瓦溜10内では埋土の相違が認められず、SX4は遺物点数が少ない。176はSX9から出土したものと接合した。

(5) 井戸

井戸1 (Fig.63、64)

東部中央で検出し、現状で内径0.81~0.83m、深さ1.9mを測る。井戸側板の上端は腐蝕と磨耗がみられ、前庁舎の地中梁構築時に切断されている部分もあるが、実測図からもわかるように板材厚が漸減していることから、失われた部分はあまり大きくはないものとみられる。井戸側は22枚の縦板を各々片側4点の木釘によって接合し、3条の竹製のタガで締めていた。本来、上端にもう1条のタガが存在した可能性は高い。側板は、上からみて逆時計回りに番号を付し、図示した。1枚を除いて外面下端に墨書があり、20枚は「下より五」と判読される。1枚のみ墨書が長い。各縦板には井戸の径に沿った曲面がつくり出され、下端外側は小さく面取りするものが多い。全体に加工は丁寧かつ正確で、上端を除いて腐蝕はみられず、各端部はシャープである。外面は特に丁寧な仕上げで、加工痕を認める。内面は外面に比べて表面がやや粗く、加工単位は観察できない。材質は未鑑定だが、堅緻で柾目の部分が多く、変形等もみられない。このように、第4章の3の井戸跡などとは、大きな格差がある。掘形は直径2.45m程度を測る。埋土最下層は砂利層で、他の層も砂利を含む。層以上に属する大型の石のうち、石1~3は角が丸く加工痕は認められないが直方体を呈し、岩質は花崗岩である。石4と5は砂岩が変成を受けたものである。本遺構の下位付近の基盤層は砂層で、調査区の中でも特に著しい湧水が認められたが、これは本遺構がSR1・2の部分に構築されている事とも関係している可能性がある。湧水は視覚上清冽で、低温であった。遺物は700、699が掘形南側より、瓦979が井戸枠東側の掘形中層より出土した他(PL29)、11点の近世陶磁器片が出土している。その他、遺物の出土状況も含めて、祭祀行為等を示唆する様相はみられなかった。

(6) 埋桶

埋桶 1 (Fig.71)

瓦溜 8 の埋土を切っている。桶の側板上部は破壊されており、内底径0.99m、残存深さ0.21mを測る。竹製とみられるタガが3条遺存していた。掘形は直径1.39m、深さ0.60mを測り、桶の外側は黒褐色土塊を含む土で充填されている。付近には打設された杭があるが、関係は不明である。埋土は砂・シルト層や砂利を含む層で、植物遺体や種子など特筆すべき含有物は視認できなかった。また破壊された側板上部の他、瓦や大甕等瓦溜 8 と共通する遺物が多く含まれており、埋没時に付近から流入したことが窺える。側板は荒れや春材部の収縮があり、加工痕は観察できない。また、例えば井戸 1 の縦板のような良材ではない。近代に比定された725は、検出時に上面より出土した。

埋桶 2 (Fig.72)

北部のピット群と同時に検出した。桶は内底径42cm、深さ20cmを測り、上端は破損している。タガは3条を認めた。掘形は直径70cm、深さ30cmを測る。側板は下端内角を面取りし、底板のあたる部分に溝を彫っている。桶内には木材片や植物遺体が遺存したが、その中に幅7.5cmの板とそれを固定するように直立した四角錐の材があった。板の下の床面近くで、完成の728を正立した状態で検出した。その他、桶内埋土より磁器細片2点、掘形より備前甕片、スサ痕のある壁片各1点が出土している。

(7) ピット

出土遺物は僅少で、図示し得たものはP 2 と P 3 に属す。P 11からは瓦片が2点出土している。以下抽出して報告する。

P 4 P 5 P 6 P 8 (Fig.73)

北部のピットや埋桶集中区にあって、柱根が残る柱穴群である。Fig. 2 では P 8 が落込み 1 に覆われることや、P 10が 層を切ることなどが観察された。直径30~36cm、深さ23~46cmを測る。P 6 の柱根は尖端で、直径12cmを測る。P 8 の柱根は直径16cmで下端は断ち落とされた平面をなし、上方は荒れている。

P 21 P 22

西部の 層上面で検出し、直径は各々22.5cm、20.0cm、深さは11.0cm、4.2cmを測る。遺物は出土しておらず、所属時期は明確でない。

P 24 (Fig.56)

0 区の試掘トレンチ際で検出した。遺物は出土していないが、SD 2 の上位から掘り込まれ、近世後期に属する可能性が高い。遺存した柱根は、面取りにより断面 8 角形を呈し、下方が太く、下端は面をなす。掘形は直径35cm、深さ70cmの播鉢状である。

(8) 遺物集中

集中 2

0区東部で、近世後期に属するとみられる包含層を掘削中に検出した。SD 2より上位に存する。焼塩壺は身 3点、蓋 1点で、蓋受けのない身が 1点含まれている。

集中 3

2-5区で検出し、基本層序 層に属する。出土した焼塩壺は蓋 1点のみである。

集中 4 (Fig.76)

1-5から2-5区の基盤層直上で検出した木・竹製品や瓦の集中で、基本層序 層に属する。板材群の西部を含む。直径38cmで尖端加工した柱状の木材や、直径数cmで尖端加工した丸杭、竹材、竹製の編み物 2点(PL37)が含まれる。小径の丸杭には、SX17の杭に切られたものがあった。769と瓦を抽出、図示した。

板材群 (Fig.21、56、76)

0区南部から2-5区にかけて、長さ17.2m~20.2m、幅0.28m~0.42m、厚さ2~3cmの板材が並んで検出された。範囲は東西18mに及び、さらに調査区外東方へ広がっている可能性がある。設置された状態ではないが、規則性は明らかである。2-5区では集中 4に重複し、基盤層直上で検出したが、0区から1-4区では落込み 3の中位付近にあった。各区における基盤面(層下面)は標高0.9m±数cm程度に収まり、落込み 3内の板材の標高は0.92から1.12mに分布する。1-4区では落込み 3埋土、2-5区では基本層序 層に属しているが、両土層は既述のごとく類似している。0区と2-5区では杭に貫かれ(PL37)、0区では竹を伴っていた。

(9) 杭群

0区から1-4区で、打設された15本の杭を検出した。丸材が10本、角材が5本で、直径は6~10cmを測る。設置時期は確定困難だが、下端が落込み 3の底以下に到達しないものや、上記のごとく板材を貫通するものがある。

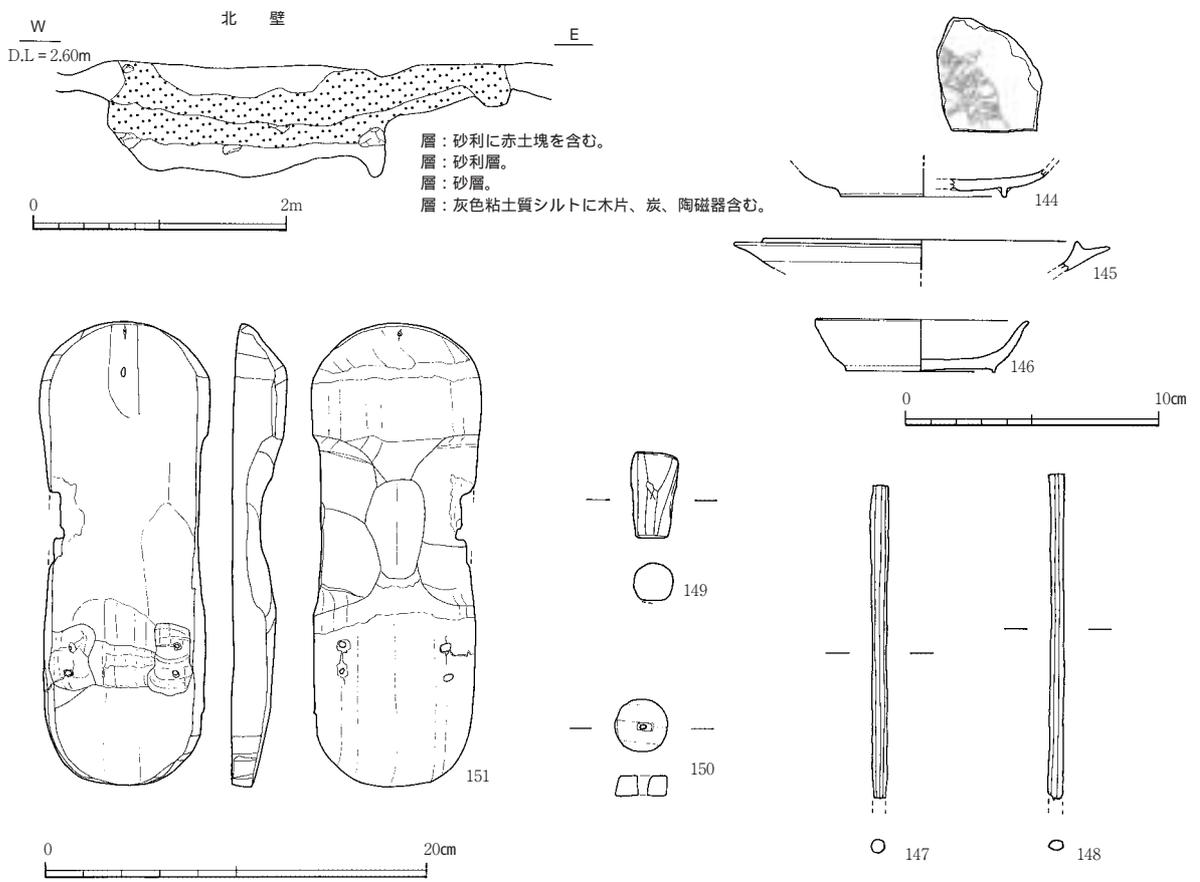


Fig.22 SD3 セクション・出土遺物実測図

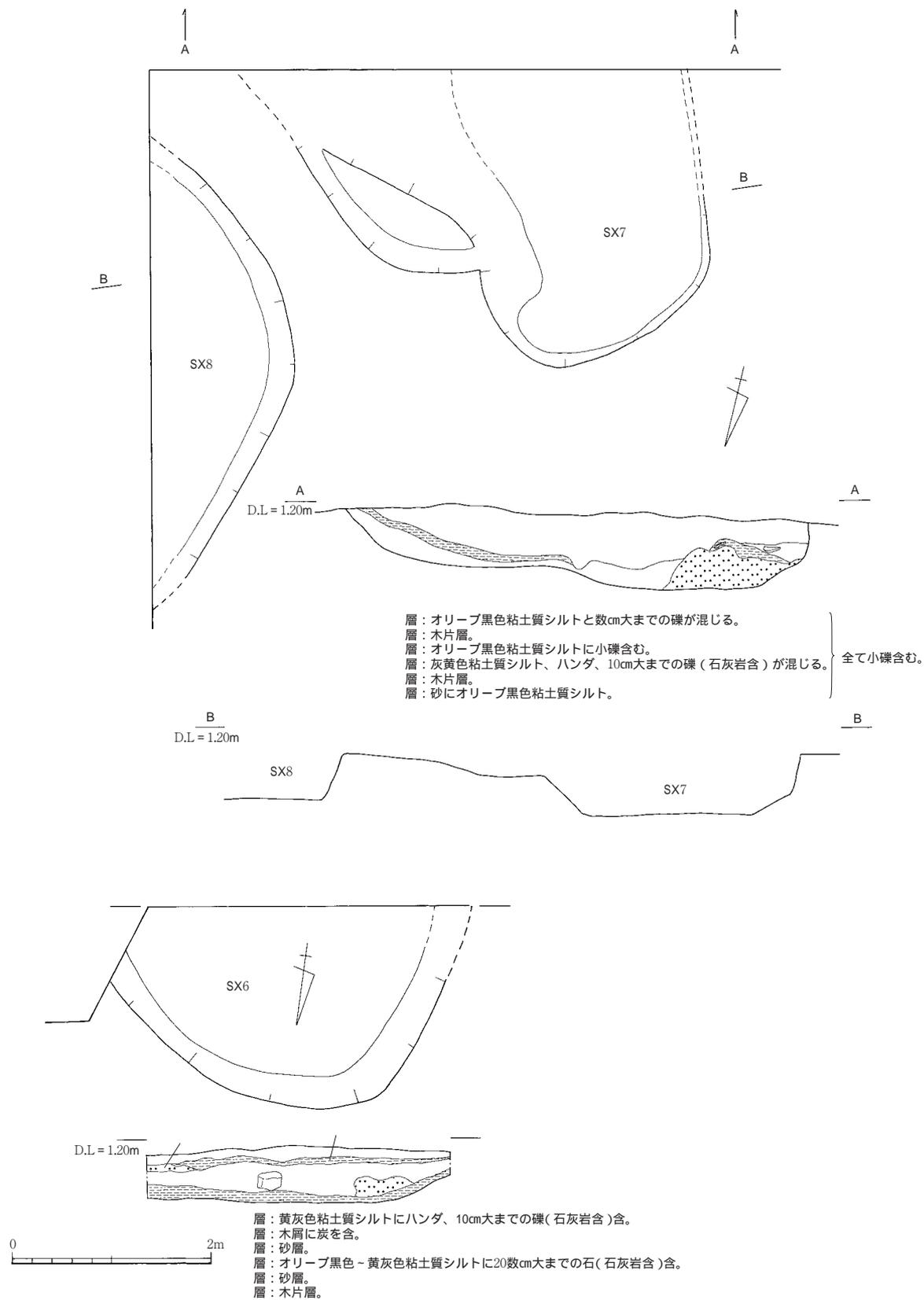


Fig.23 SX7、8、6平面・セクション・エレベーション図

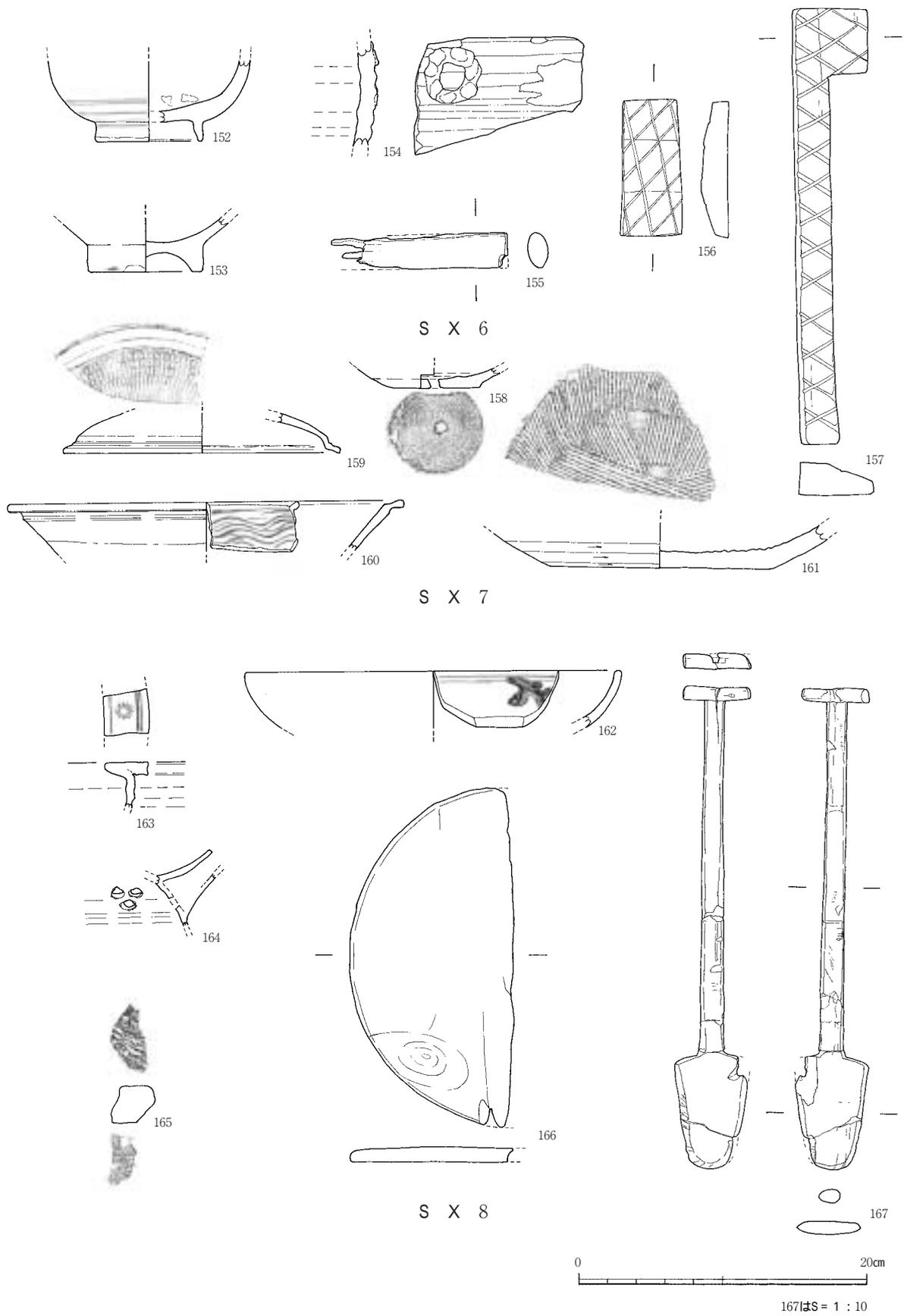


Fig.24 SX6、7、8 出土遺物実測図

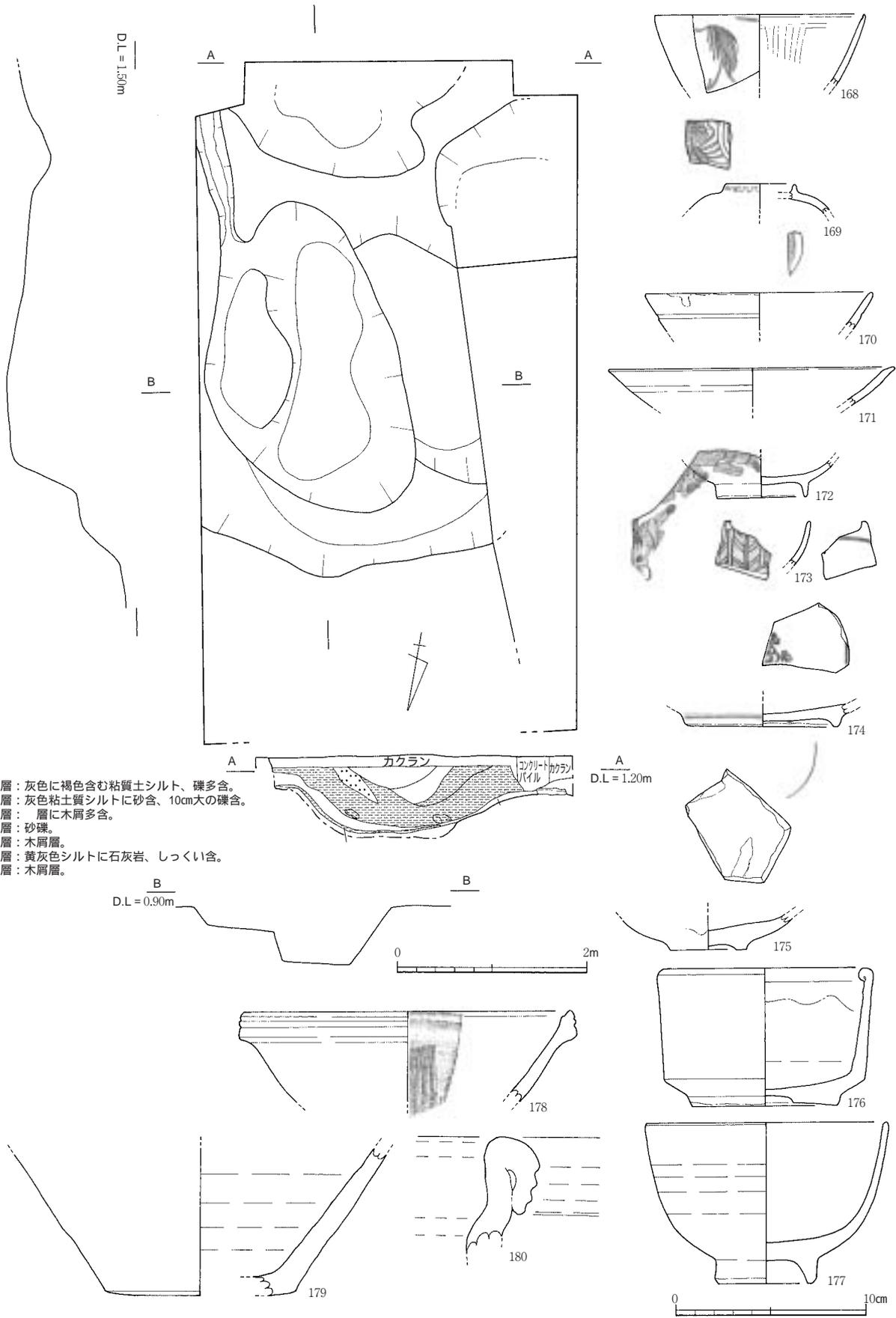


Fig.25 SX9平面・セクション・エレベーション及び出土遺物実測図

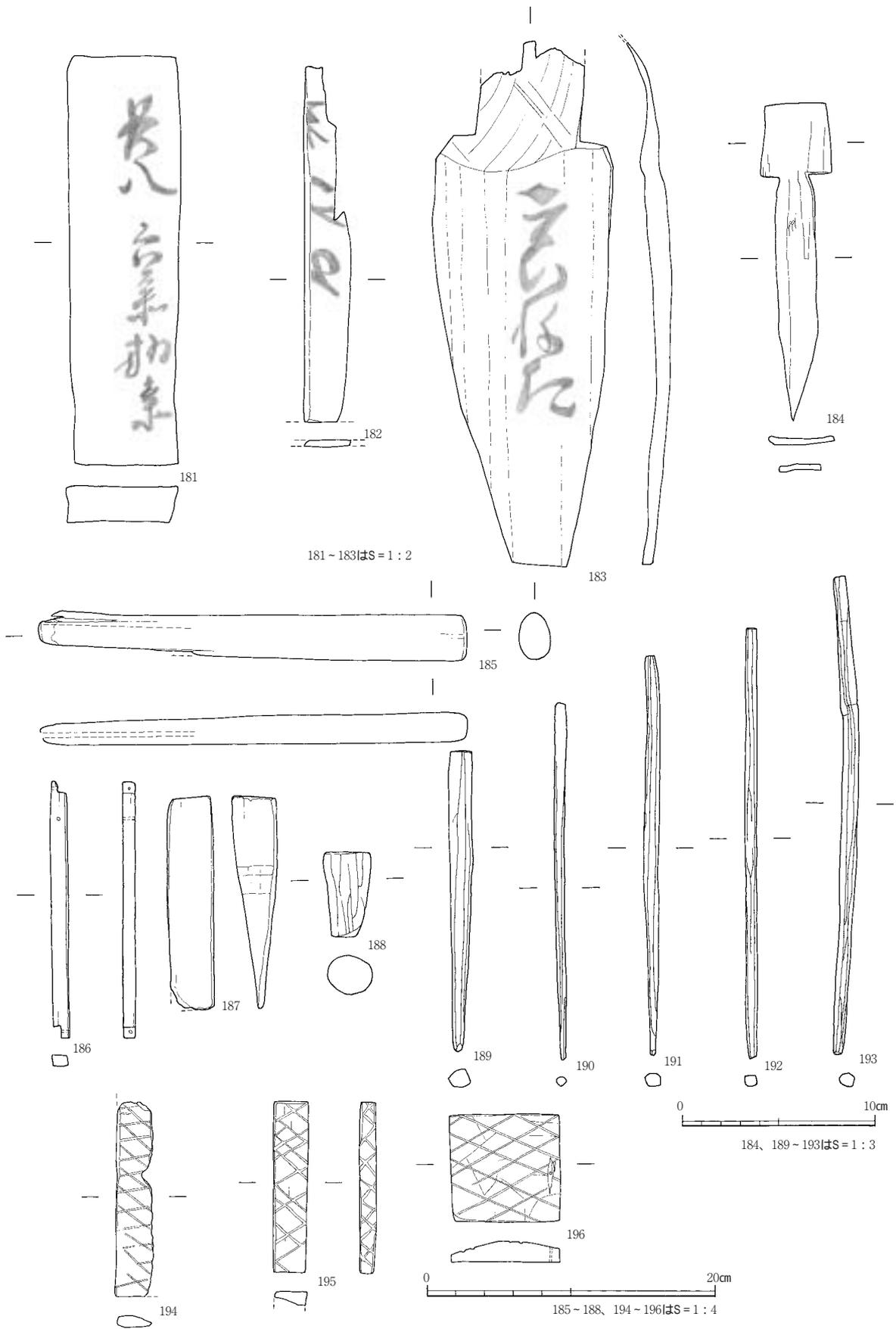


Fig.26 SX9 出土木製品実測図

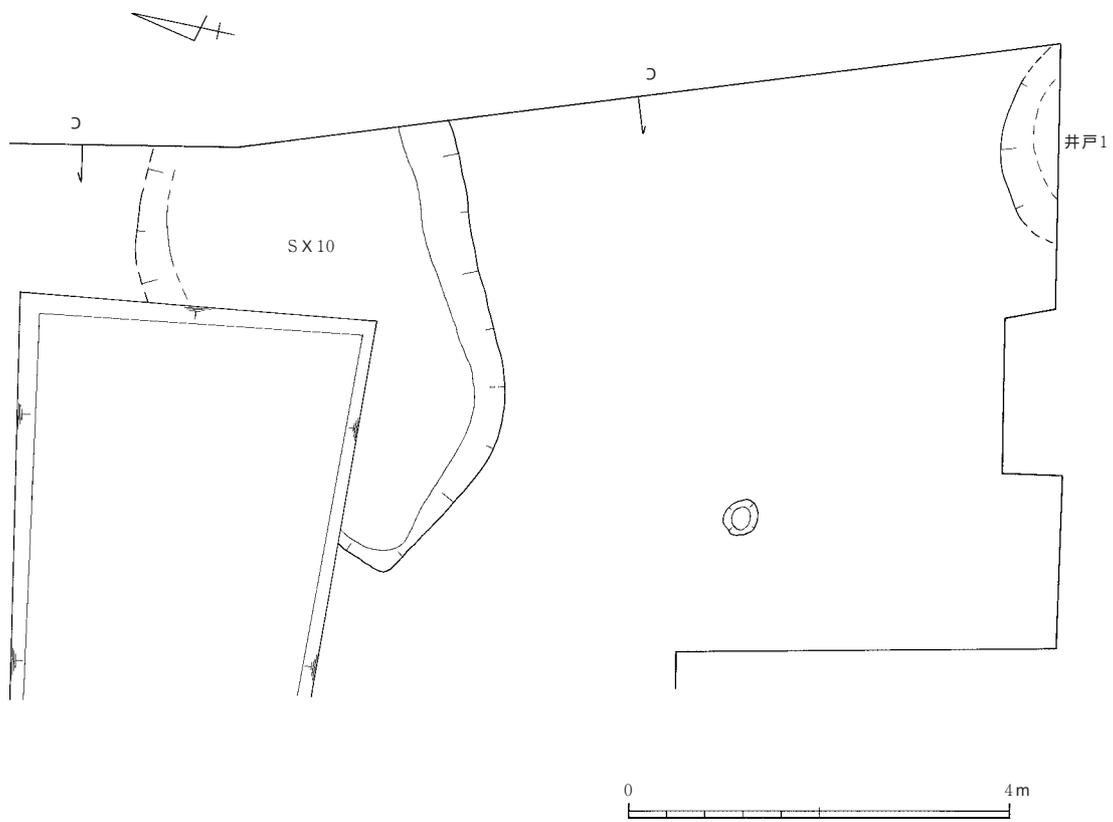
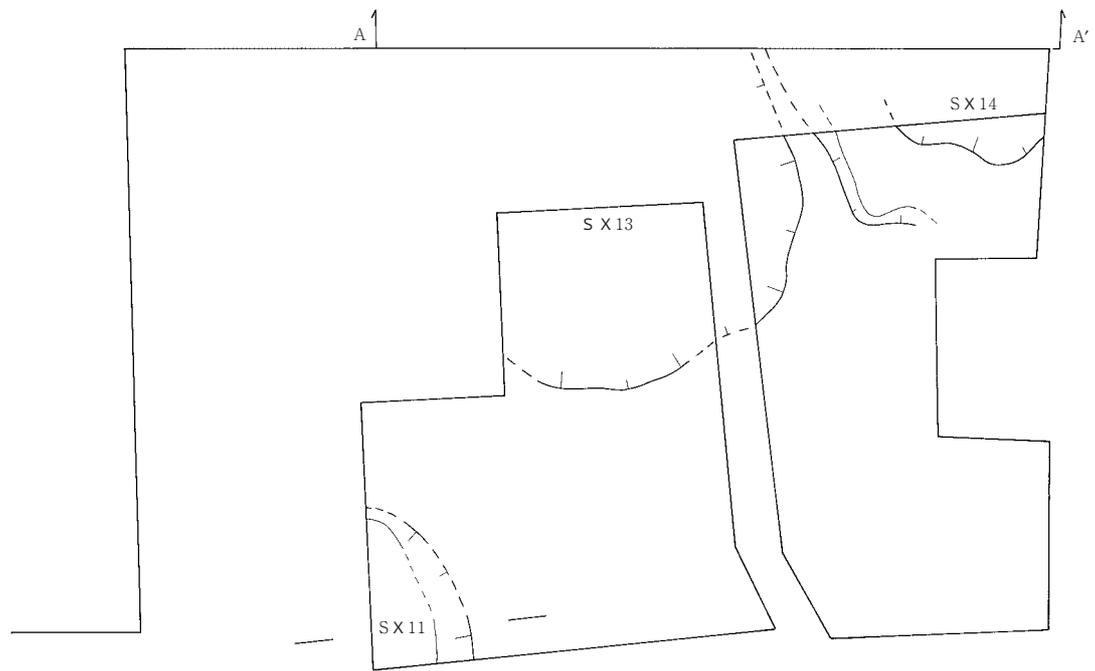


Fig.27 調査区北東部平面図（近世後期）

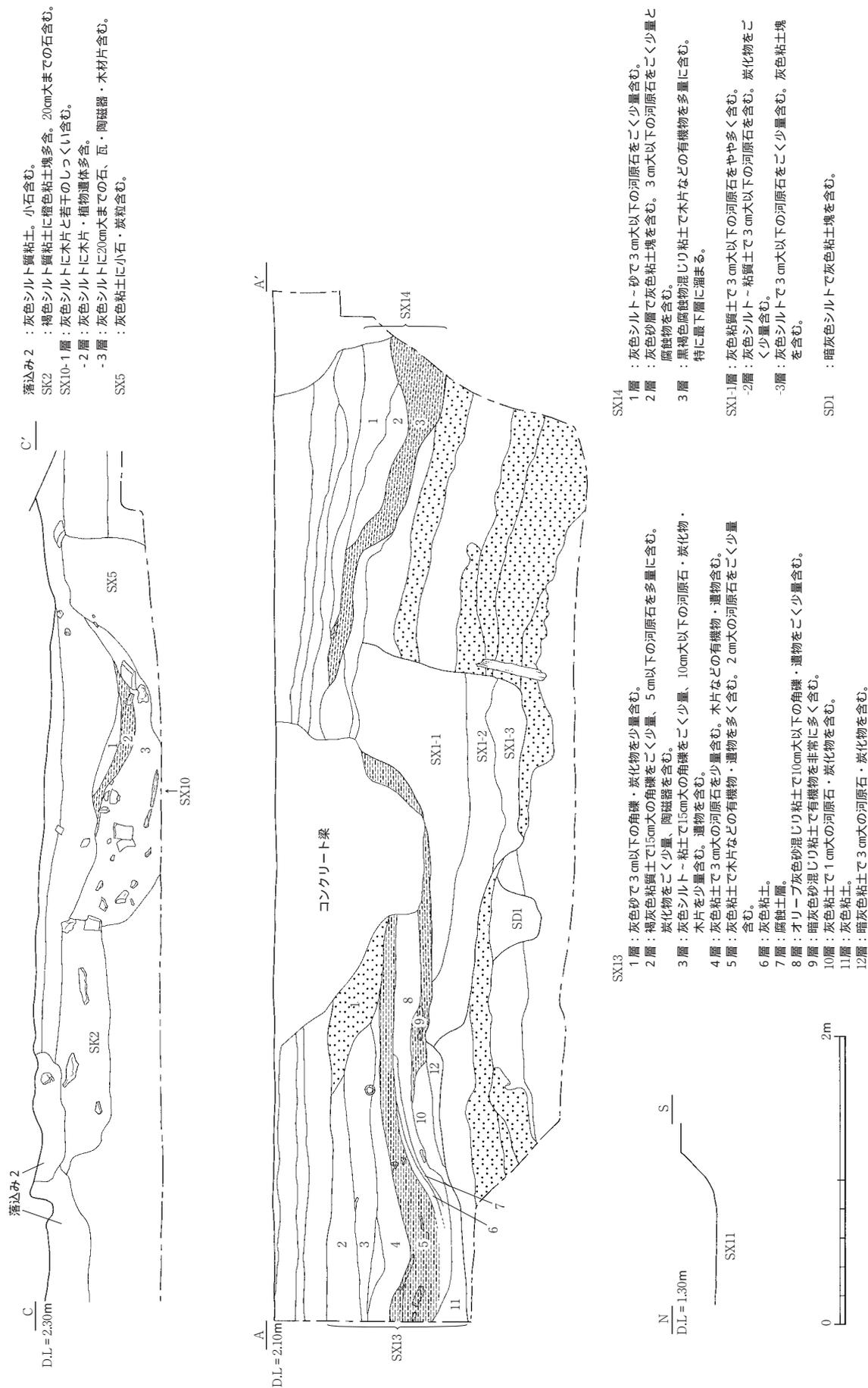


Fig.28 調査区北東部セクション・エレベーション図

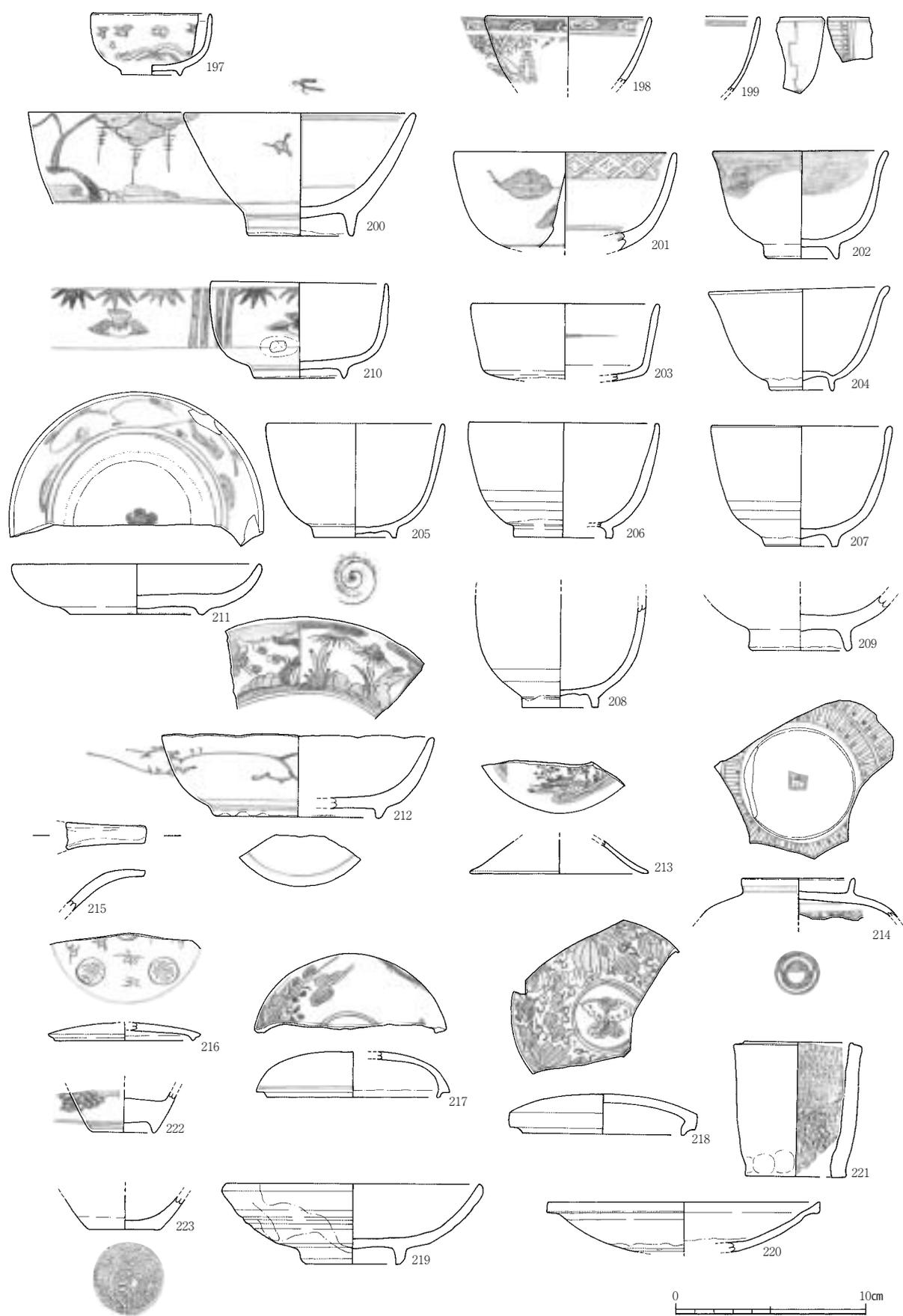


Fig.29 SX10出土遺物実測図(1)

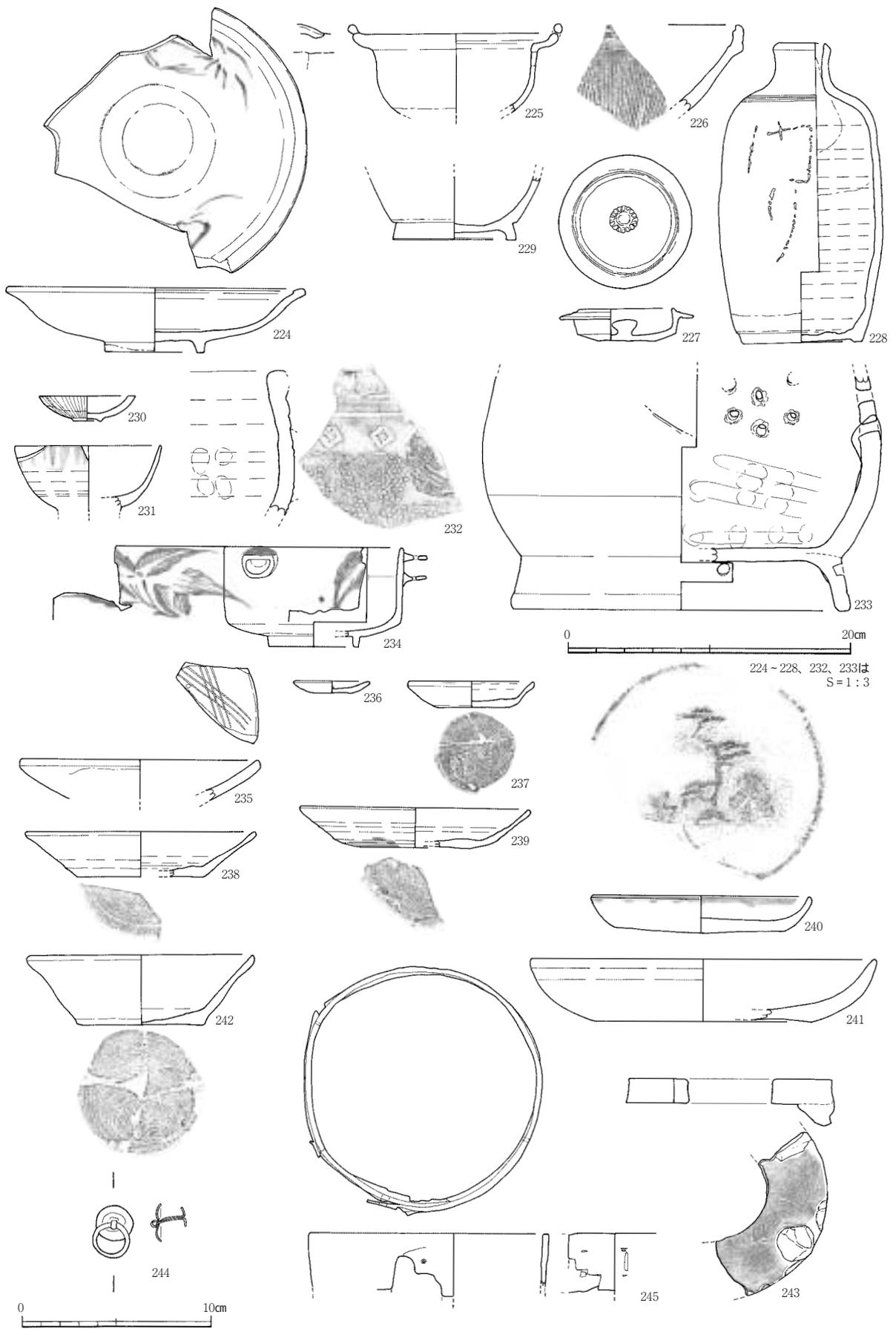


Fig.30 SX10出土遺物実測図(2)

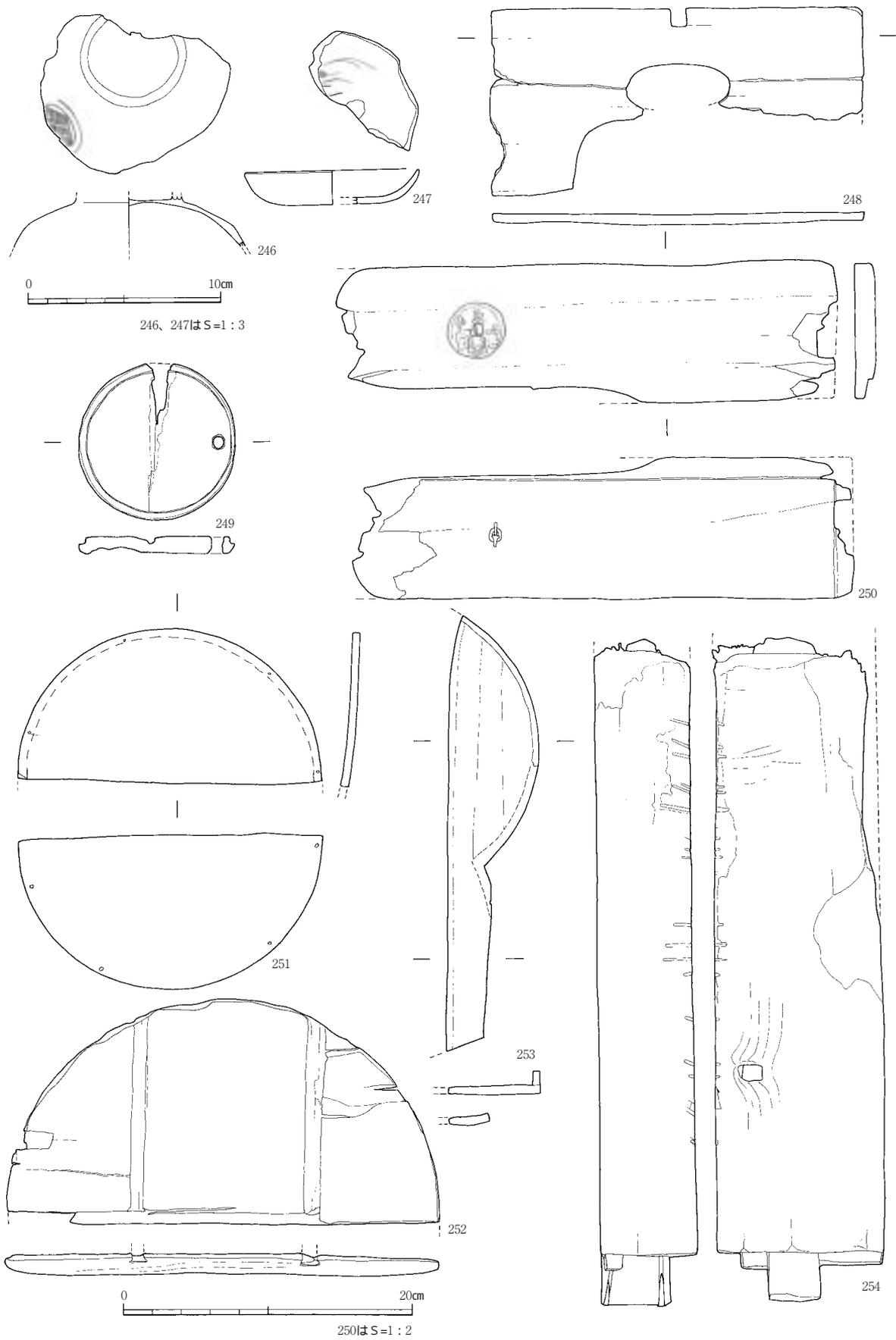


Fig.31 SX10出土遺物実測図(3)

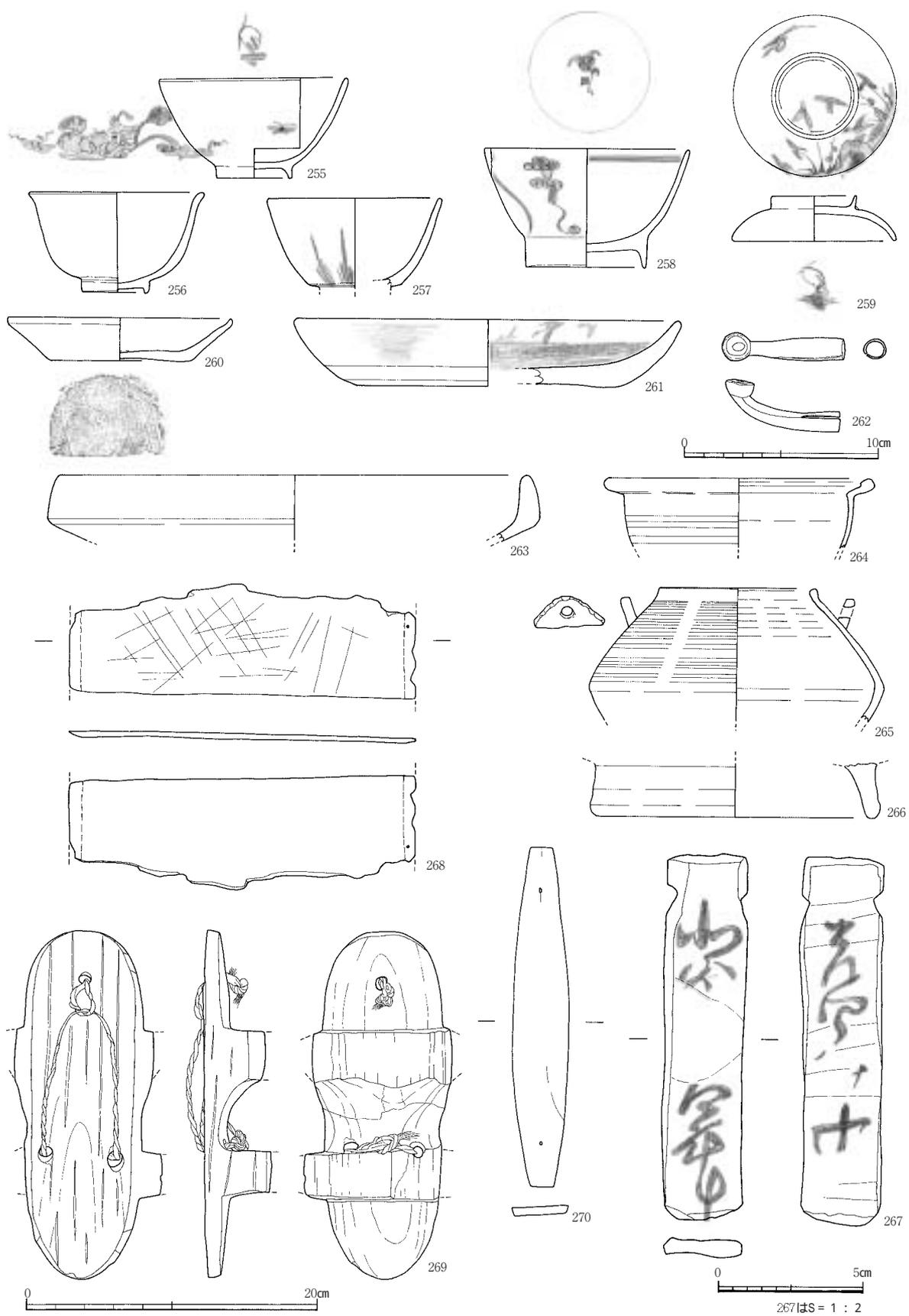


Fig.32 SX11出土遺物実測図

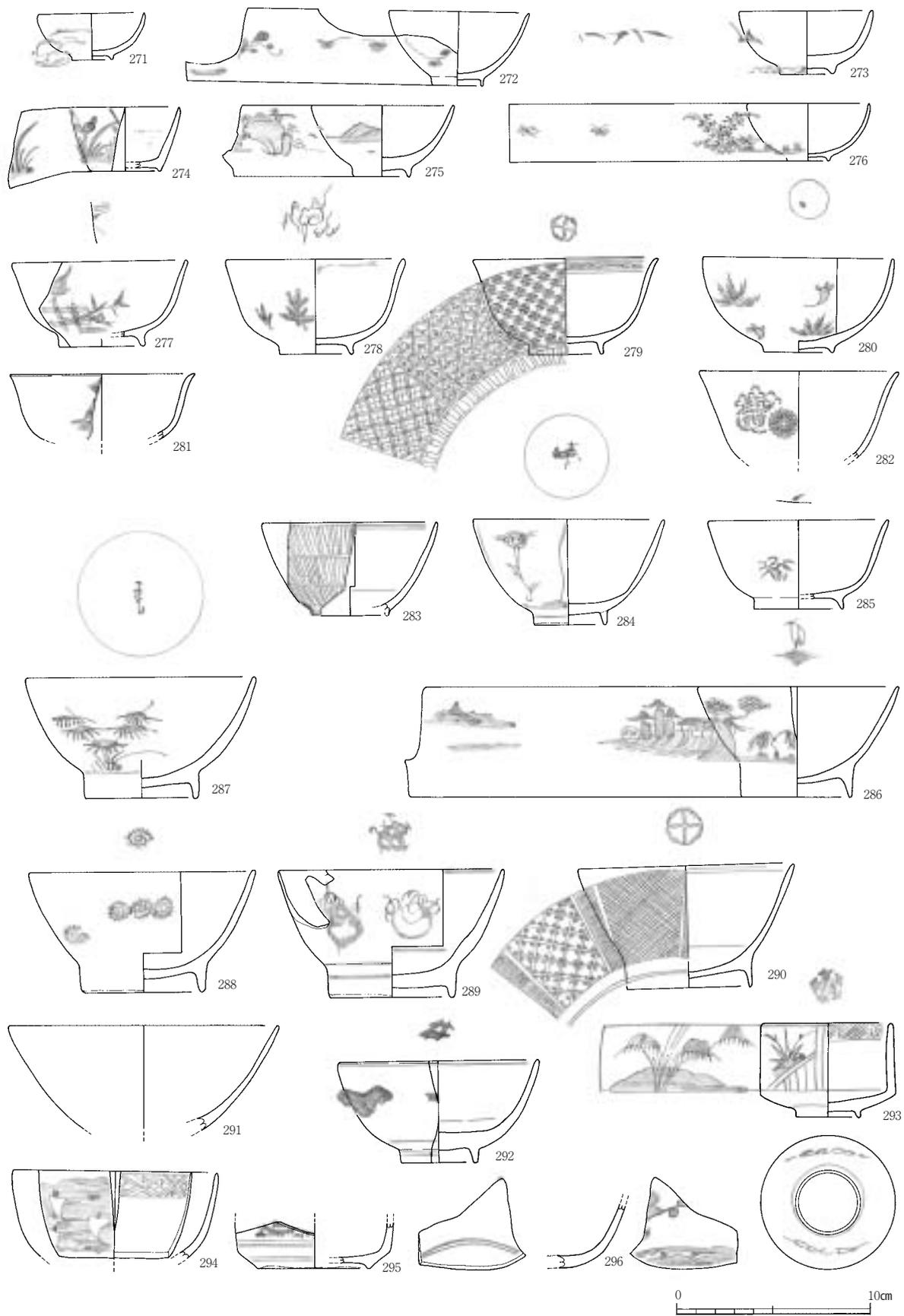


Fig.33 SX13出土遺物実測図(1)

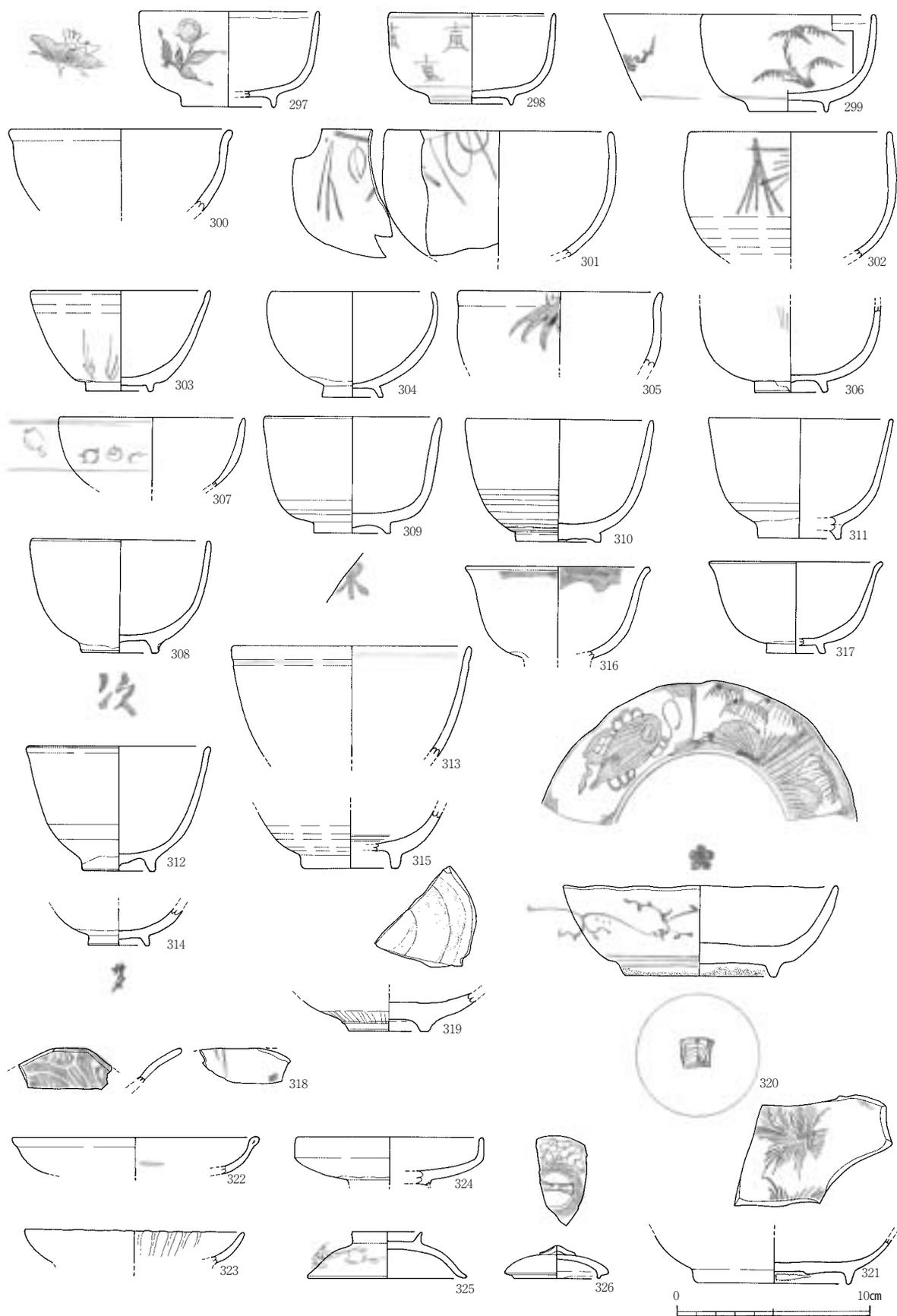


Fig.34 SX13出土遺物実測図(2)

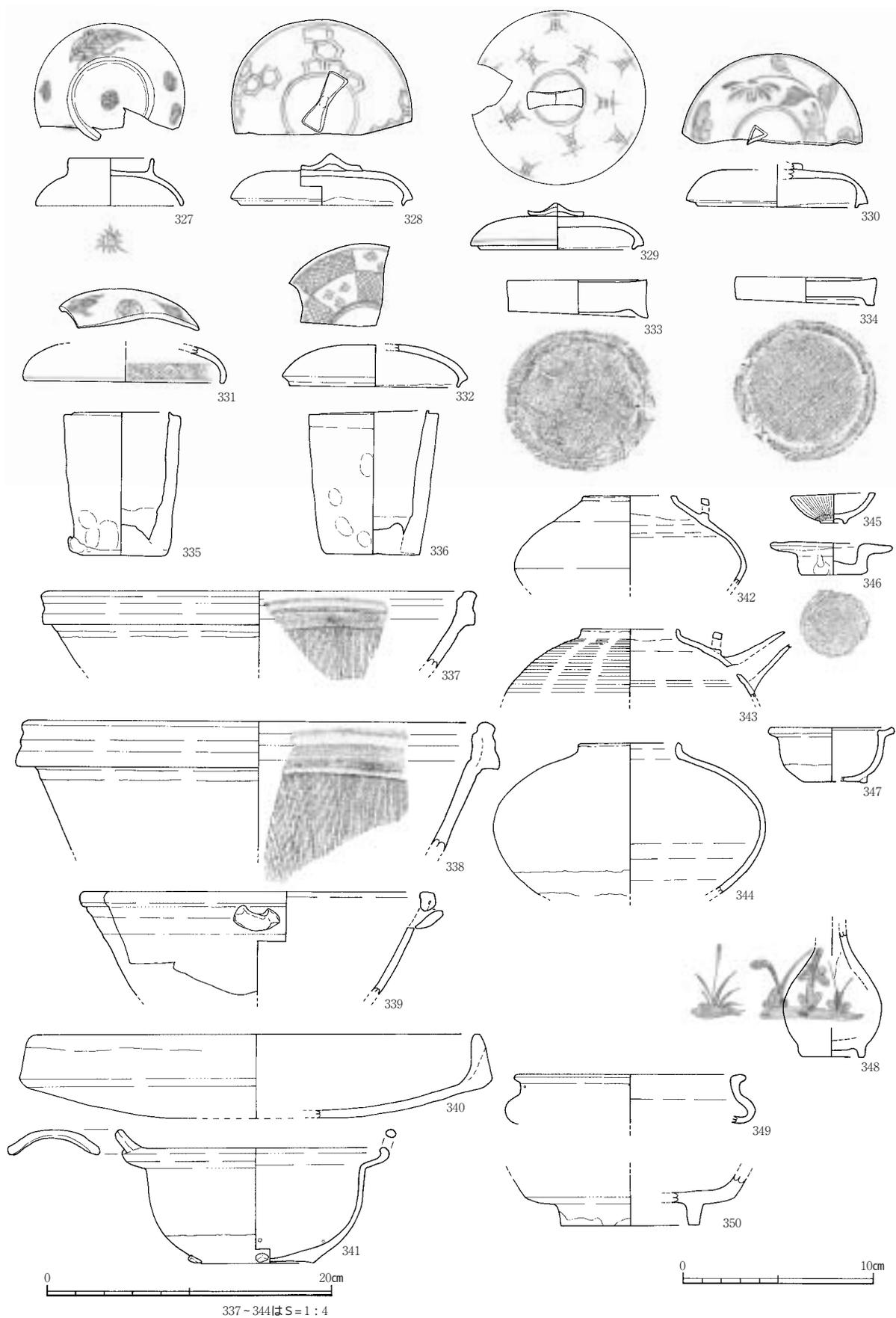


Fig.35 SX13出土遺物実測図(3)

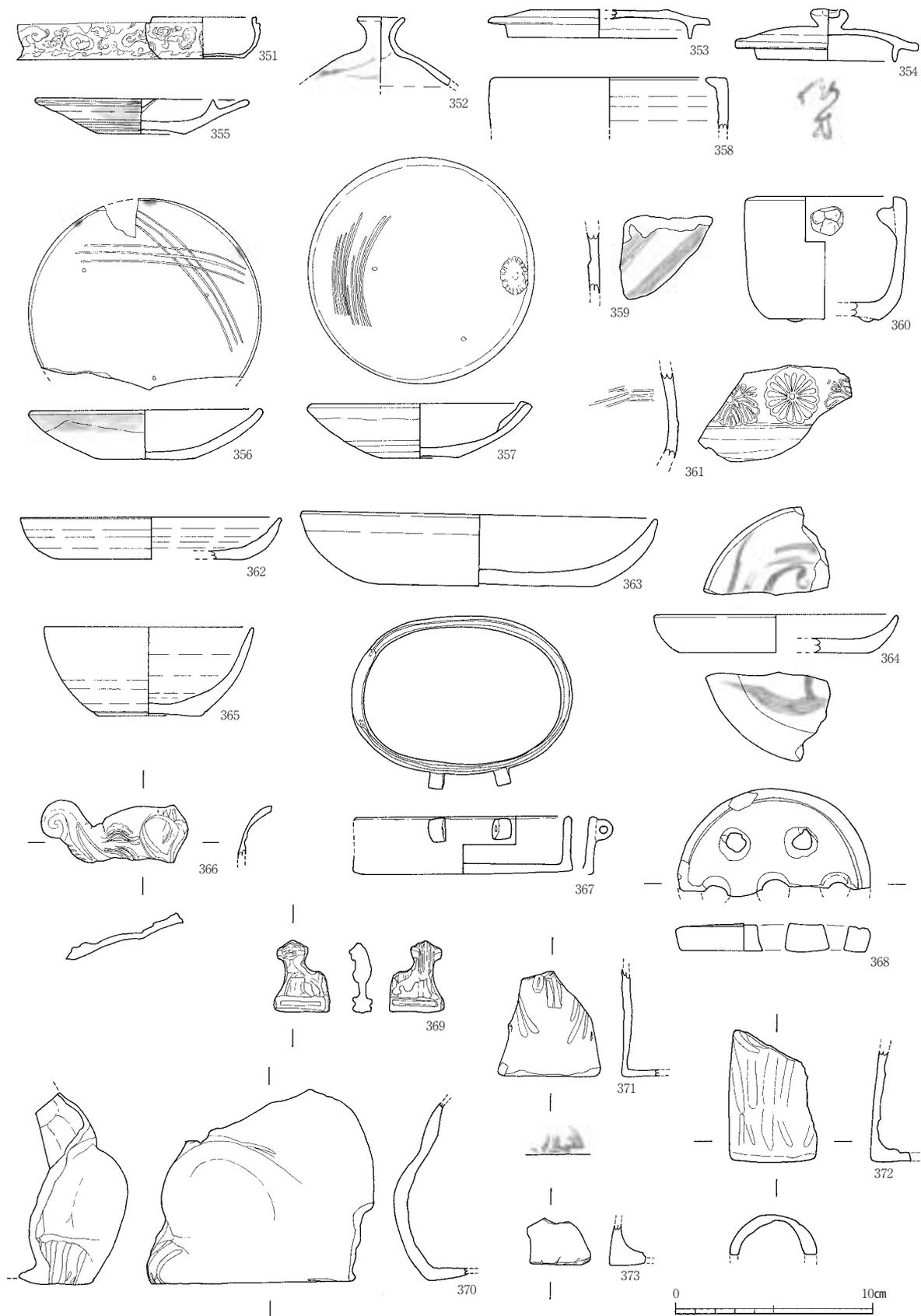


Fig.36 SX13出土遺物実測図(4)

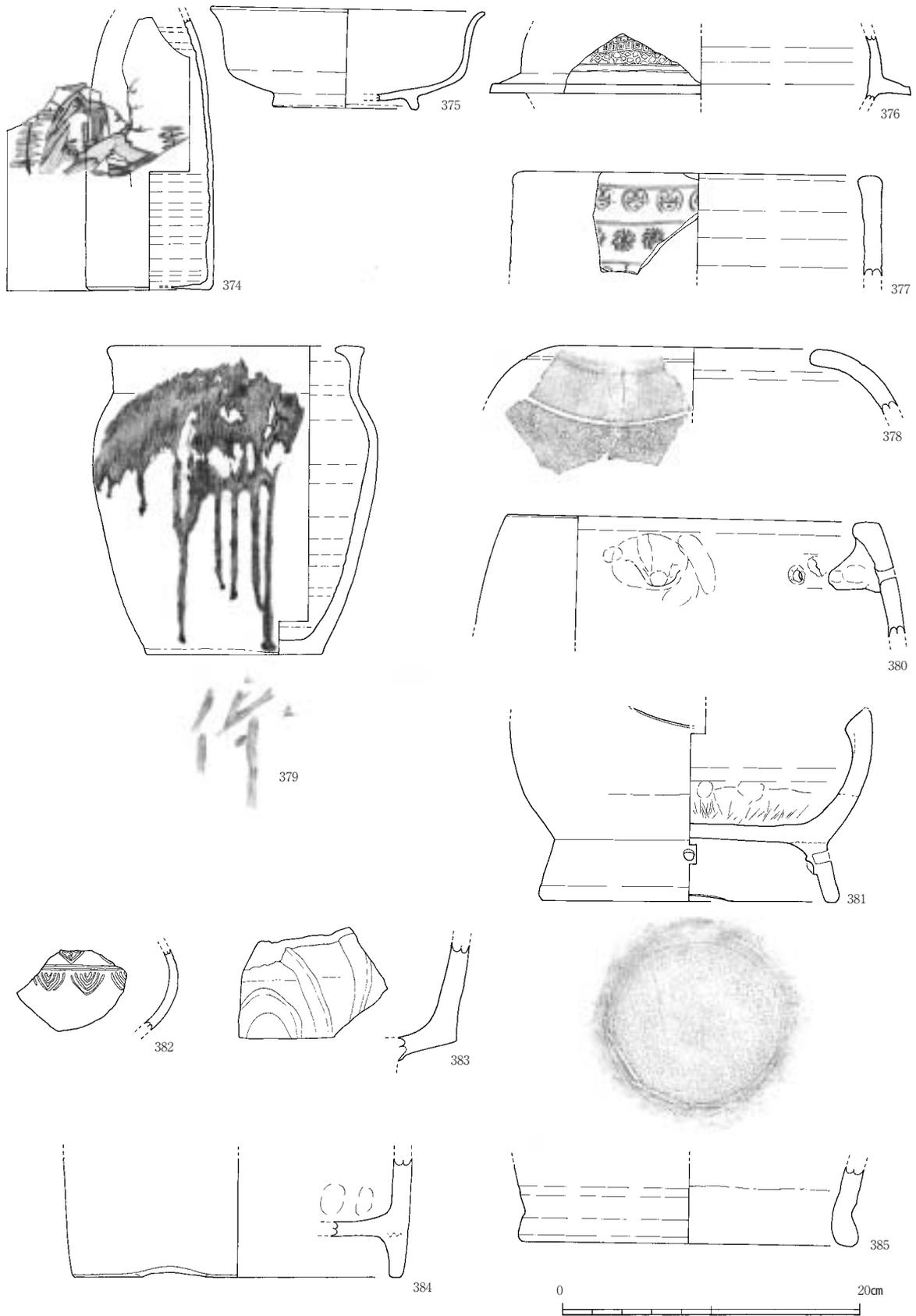


Fig.37 SX13出土遺物実測図(5)

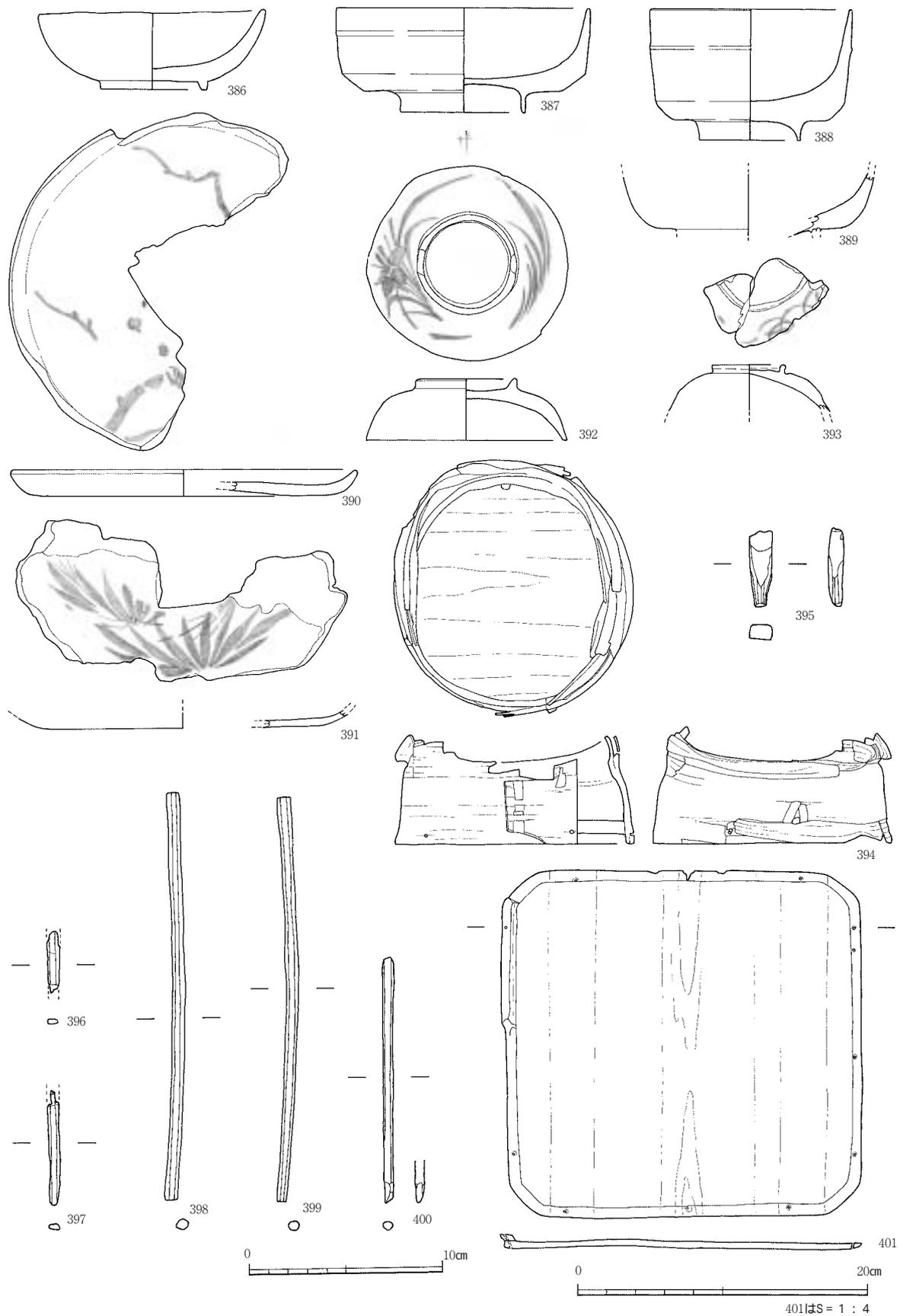


Fig.38 SX13出土遺物実測図(6)

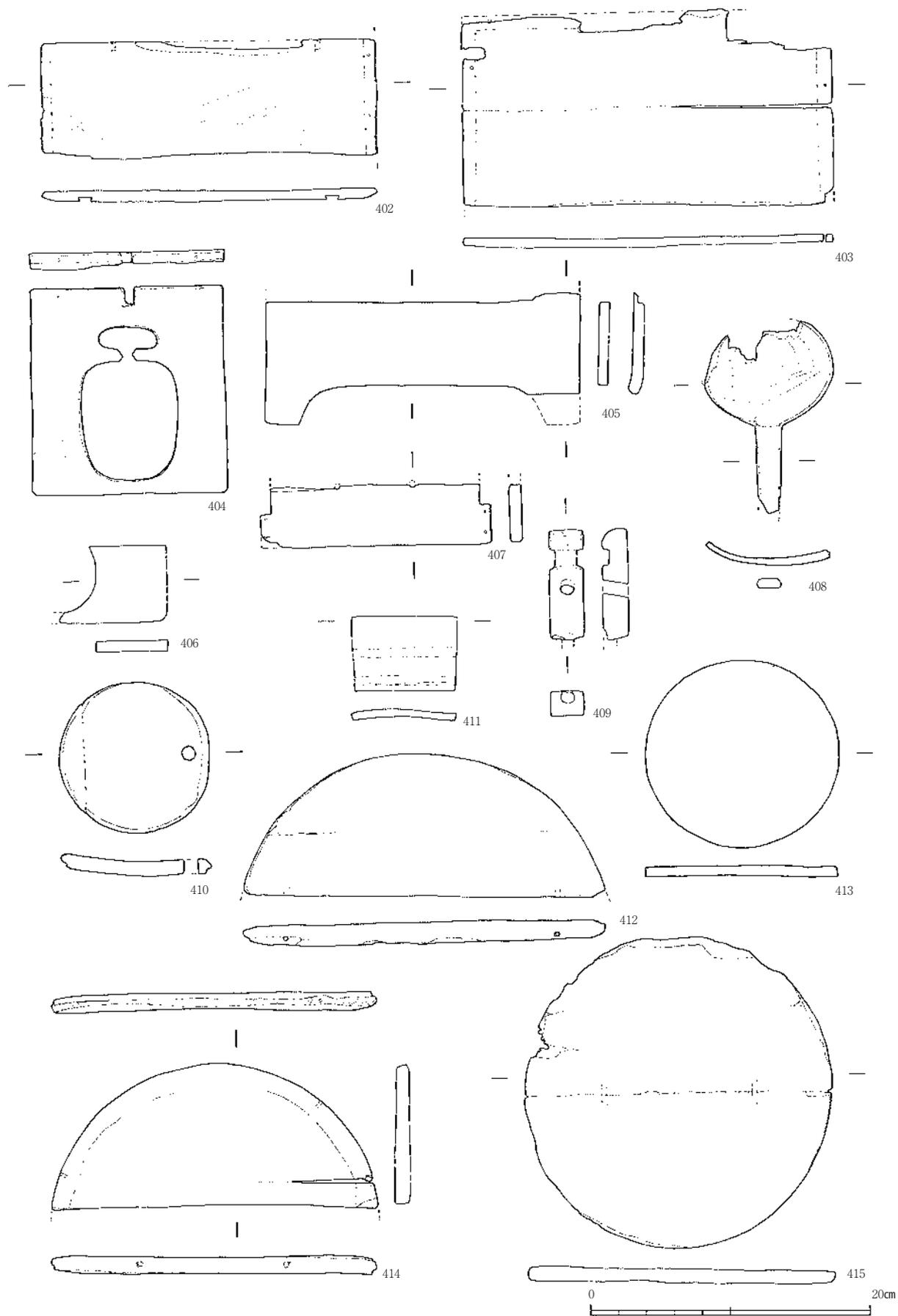


Fig.39 SX13出土遺物実測図(7)

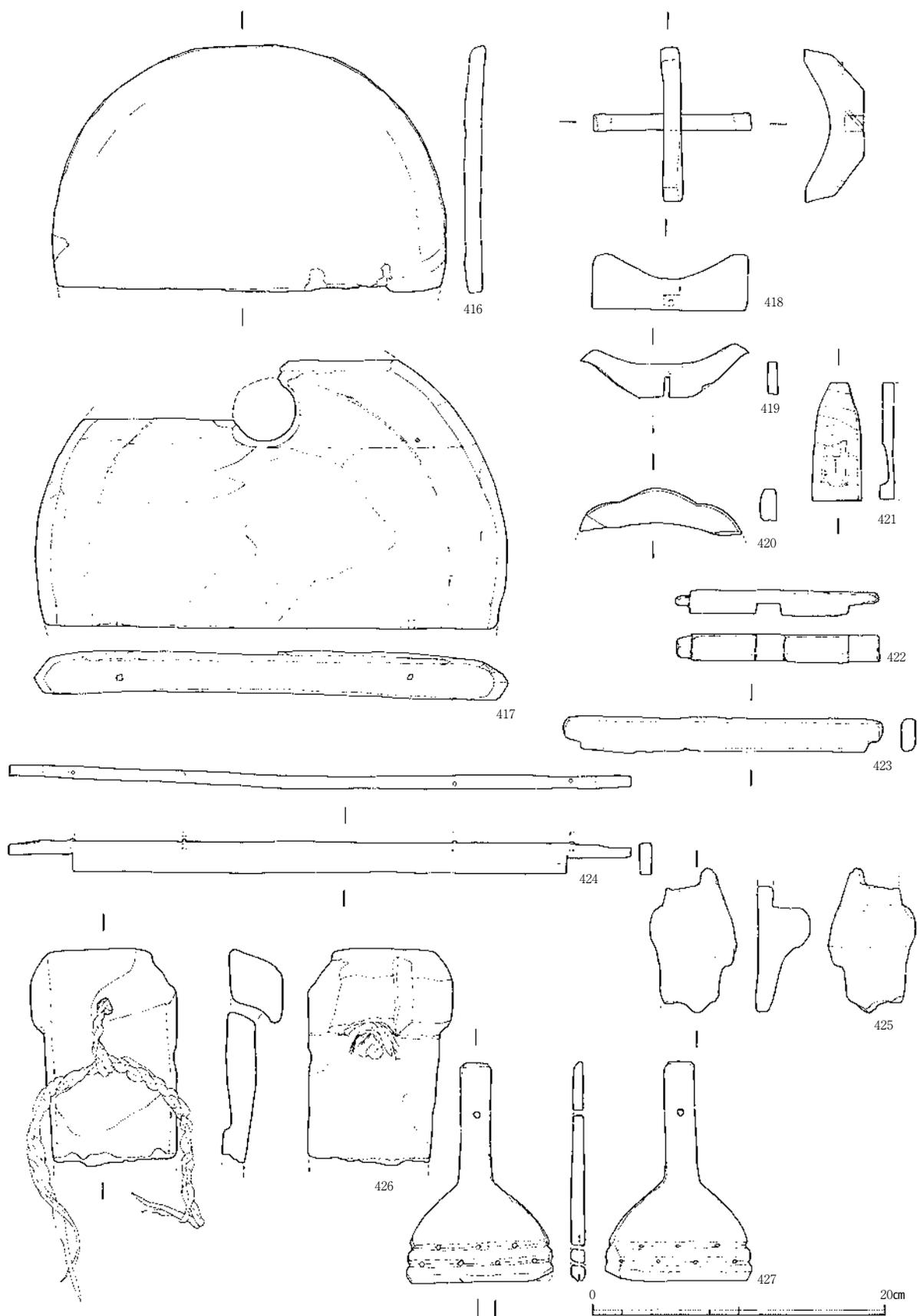


Fig.40 SX13出土遺物実測図(8)

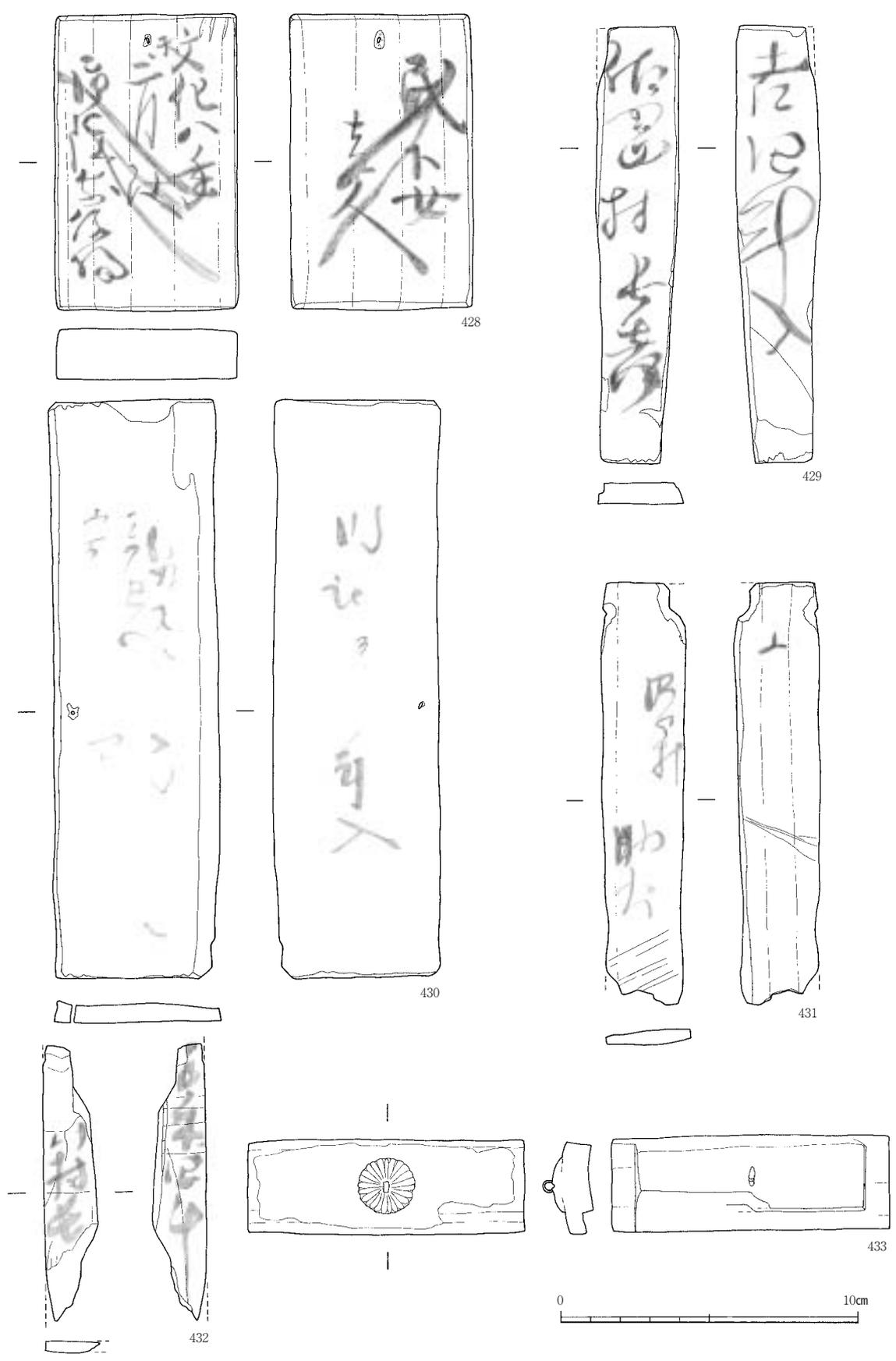


Fig.41 SX13出土遺物実測図(9)

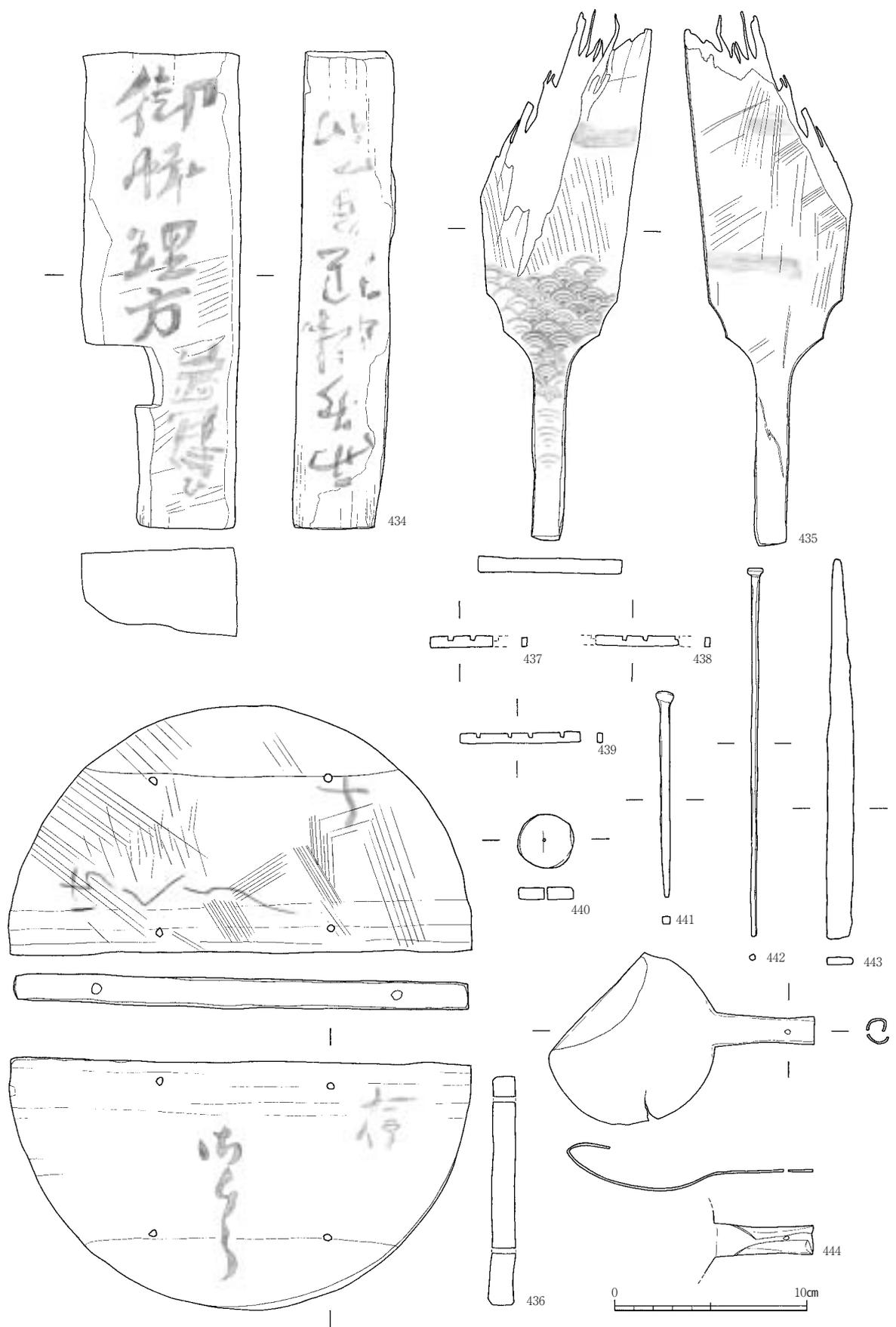


Fig.42 SX13出土遺物実測図(10)



S X 13 出土遺物 (11)

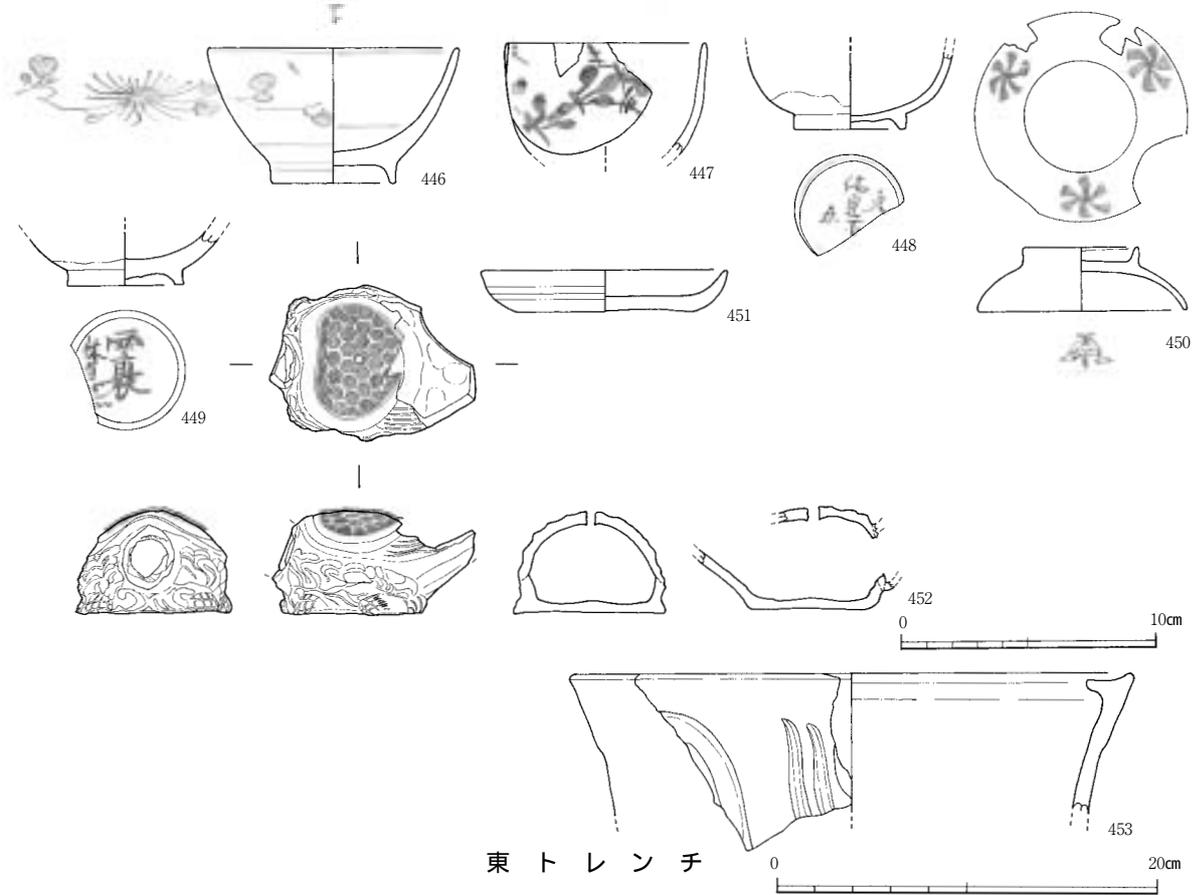


Fig.43 SX13・調査区北東部東トレンチ出土遺物実測図

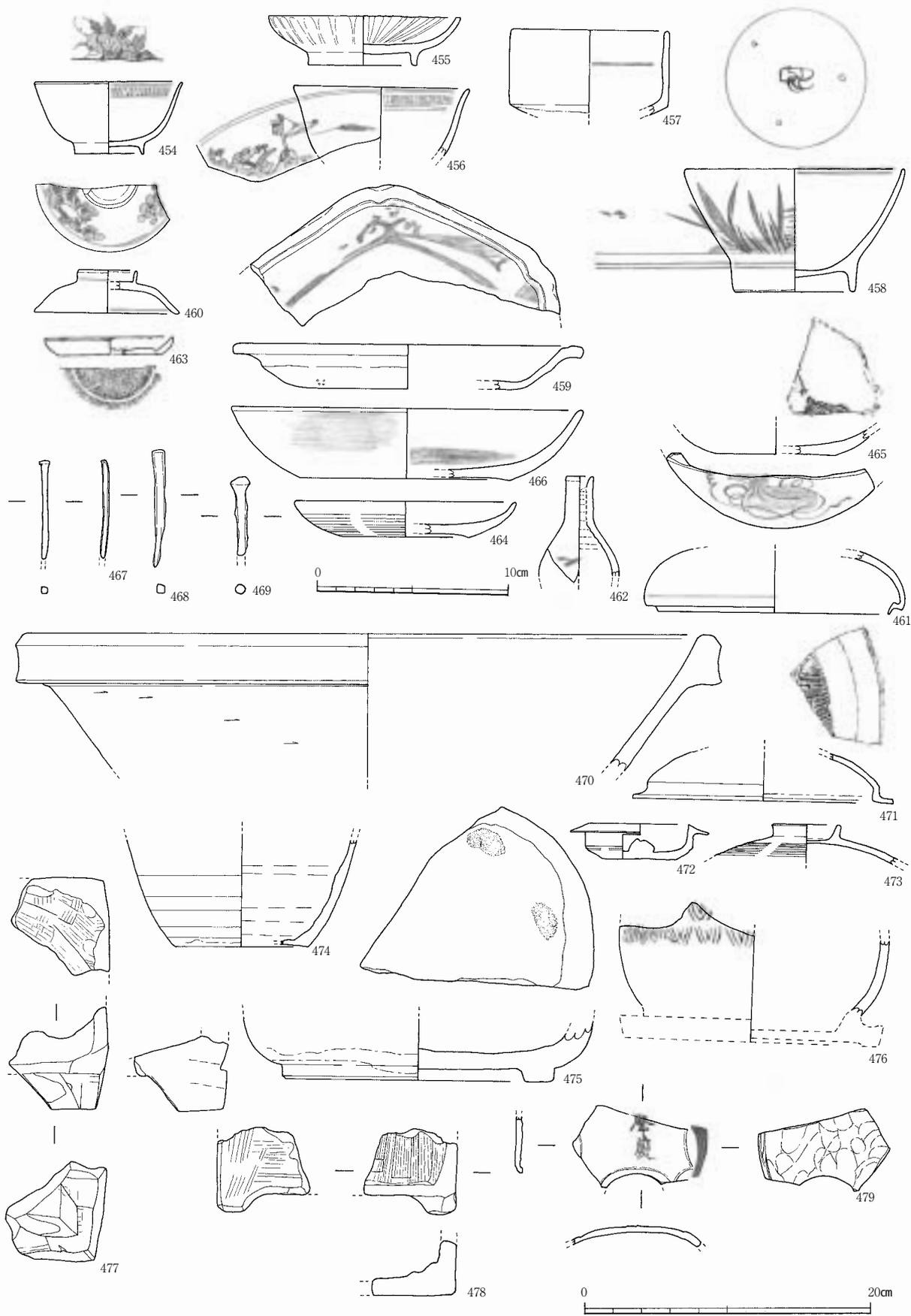


Fig.44 SX15出土遺物実測図(1)

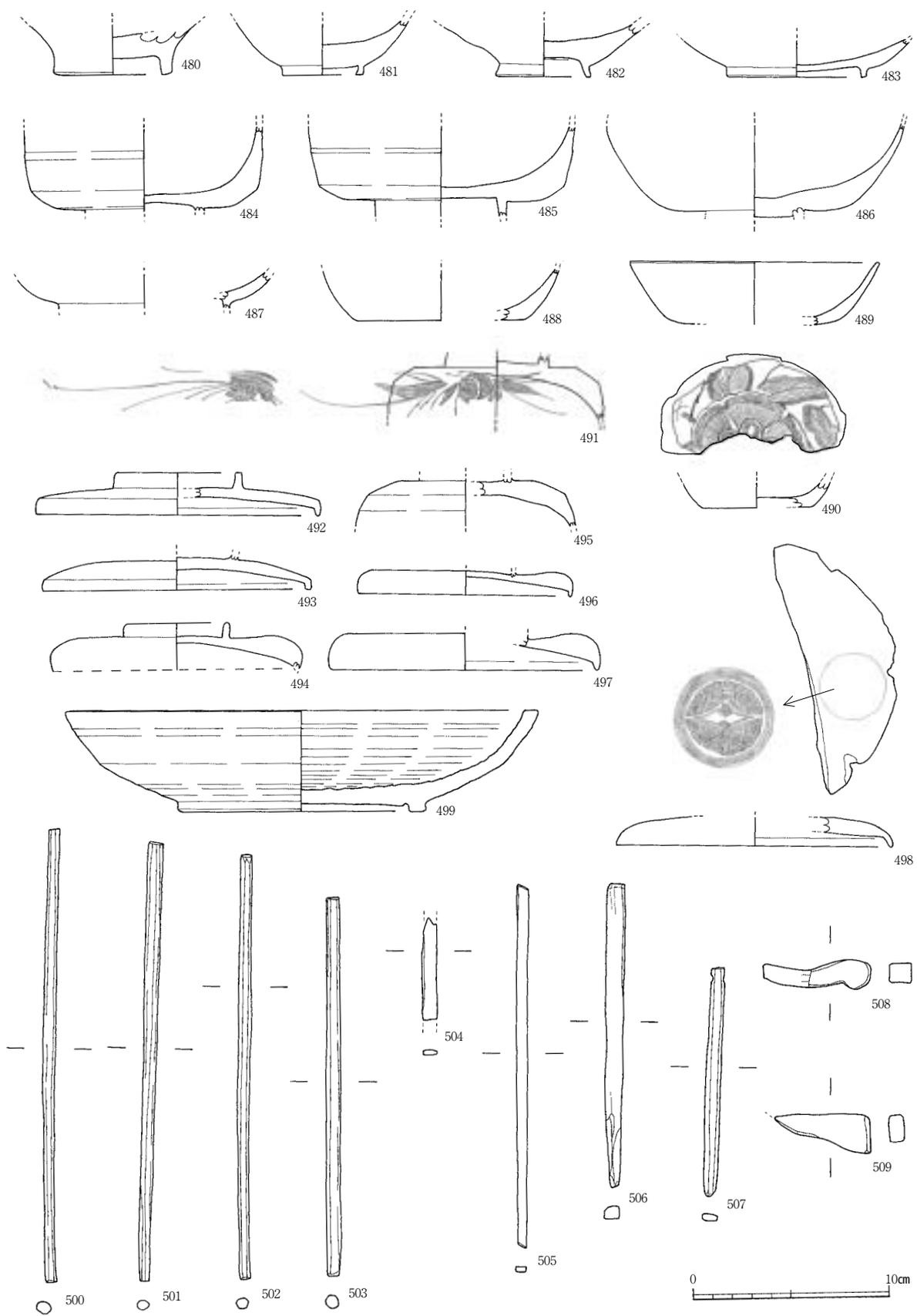


Fig.45 SX15出土遺物実測図(2)

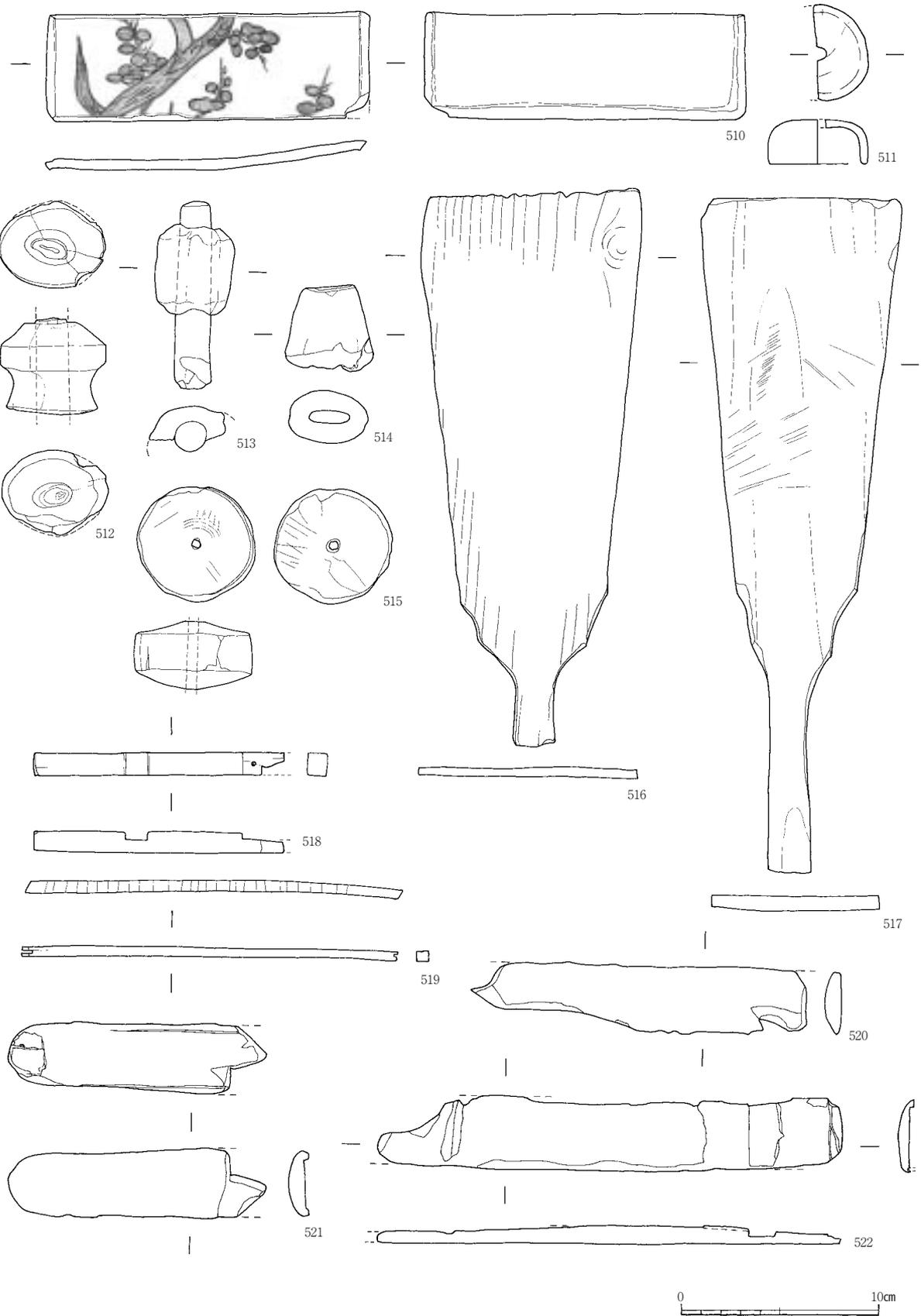


Fig.46 SX15出土遺物実測図(3)

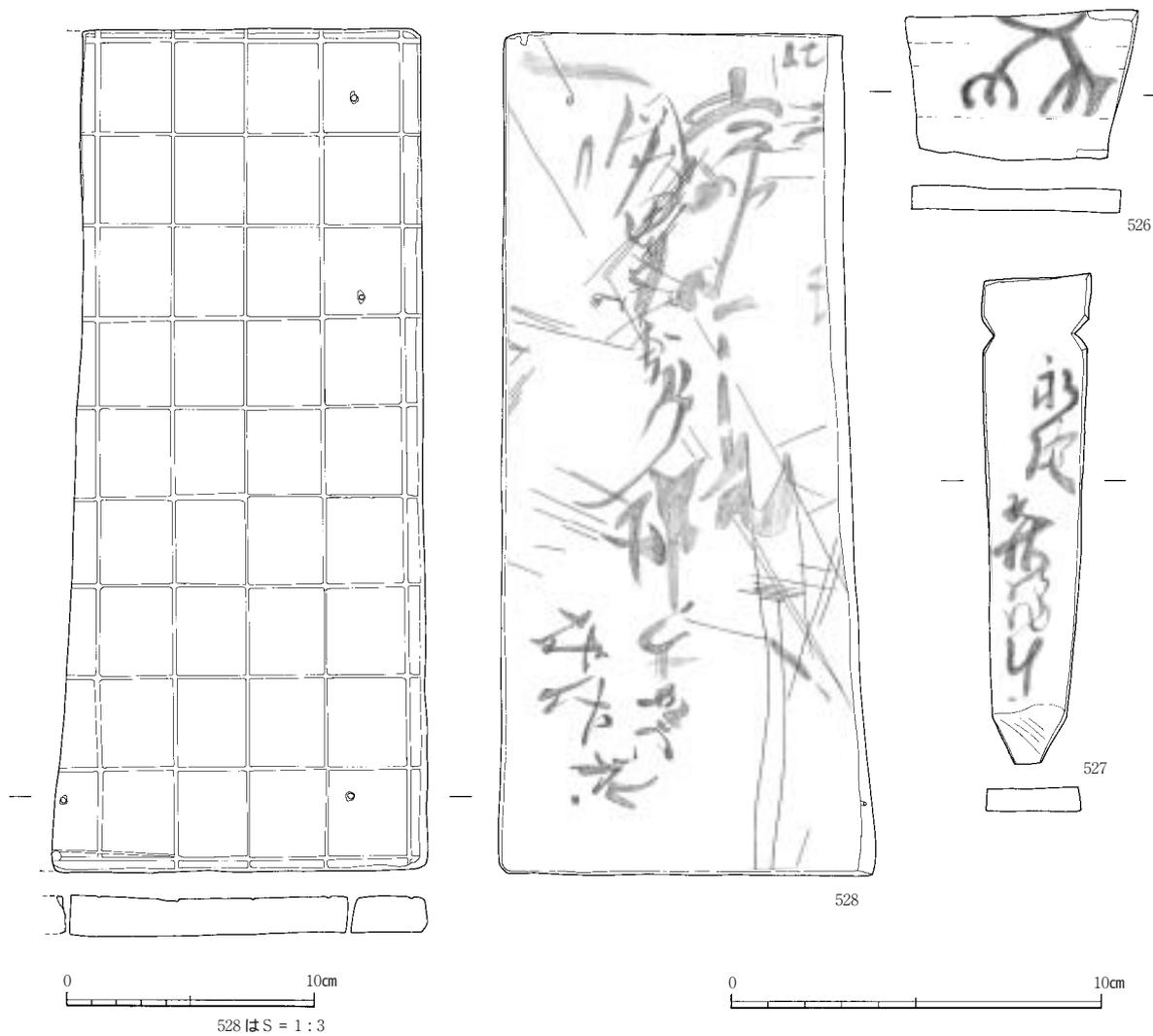
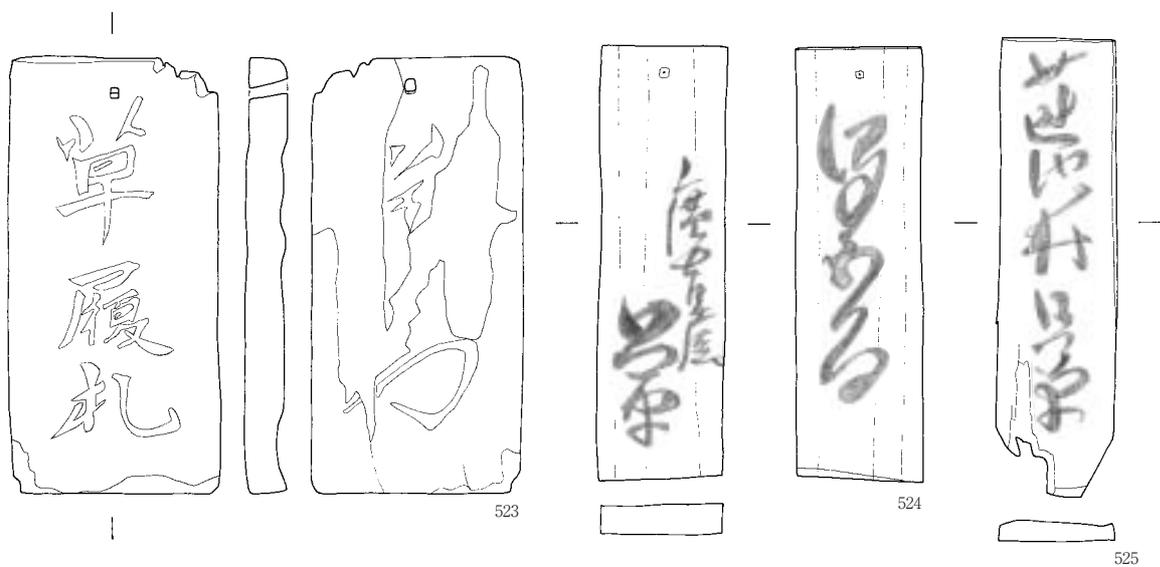


Fig.47 SX15出土遺物実測図(4)

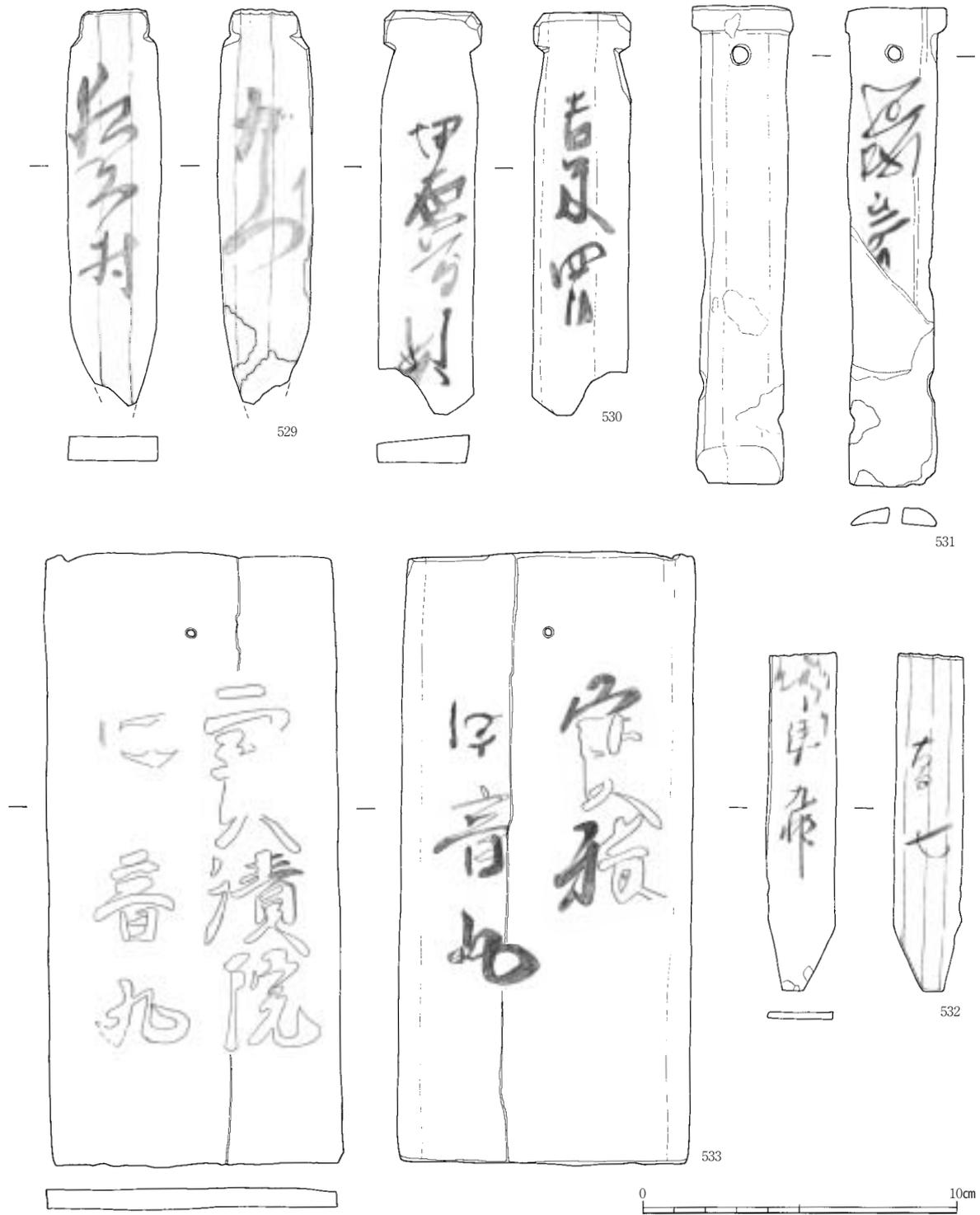


Fig.48 SX15出土遺物実測図(5)

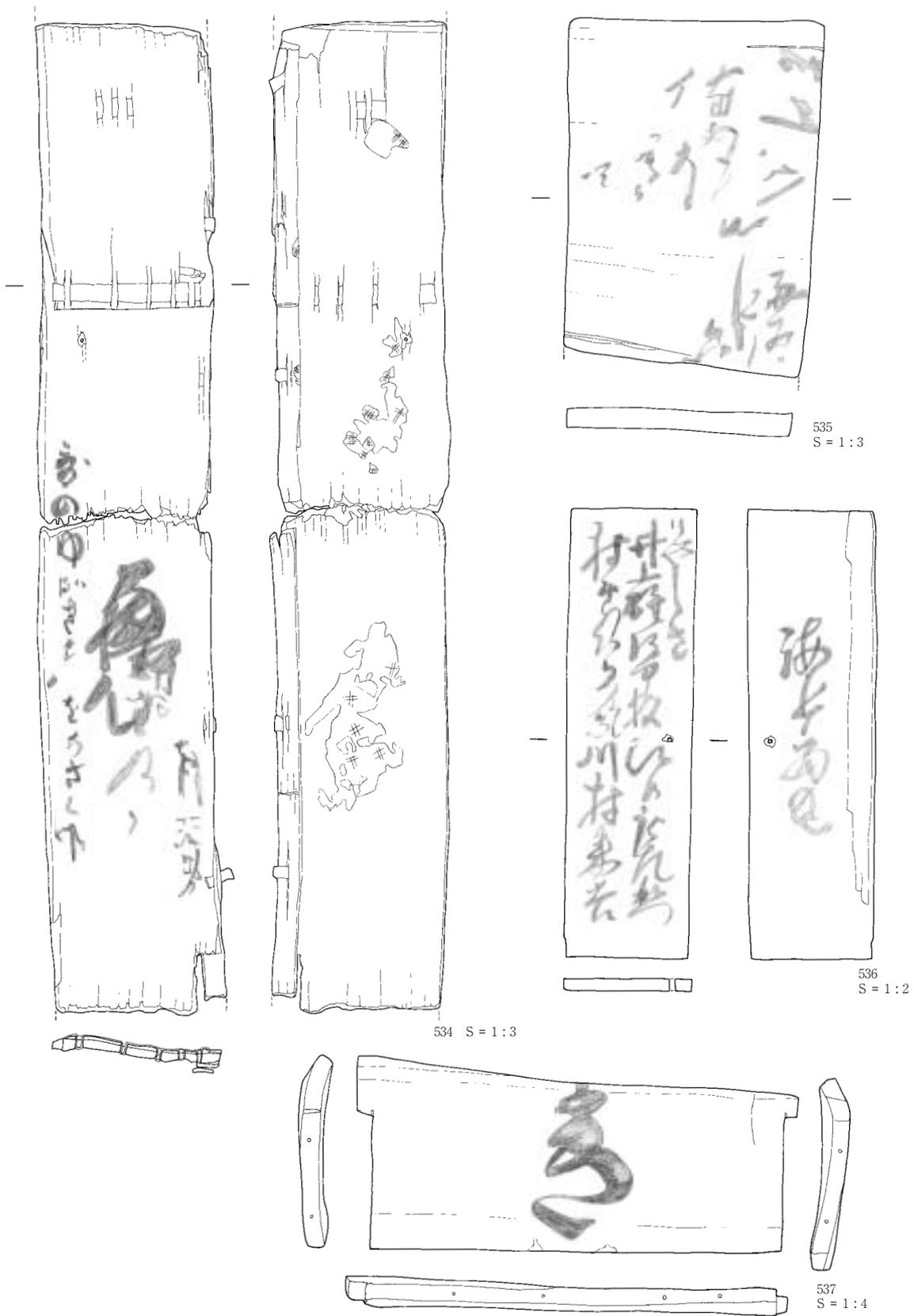


Fig.49 SX15出土遺物実測図(6)

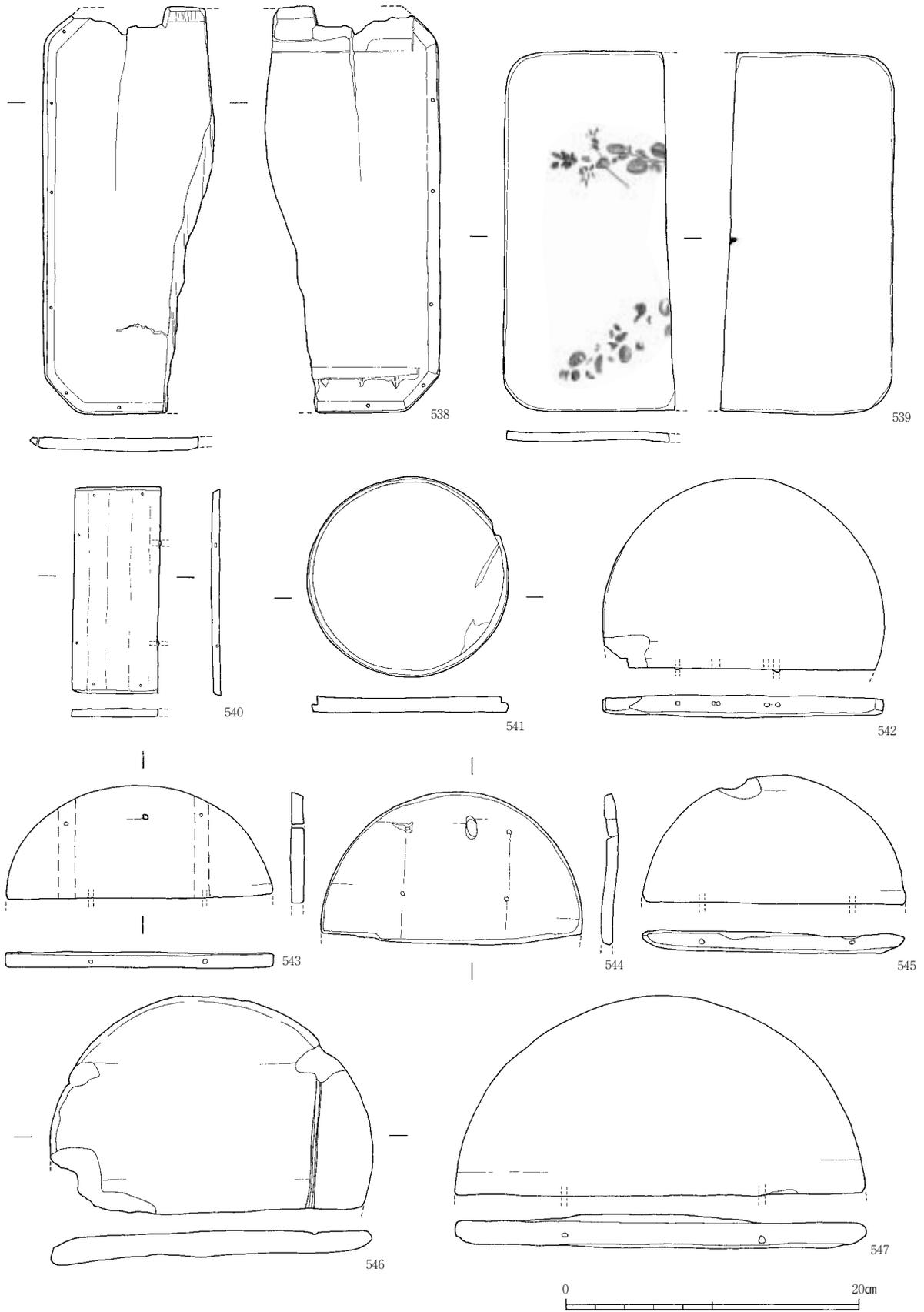


Fig.50 SX15出土遺物実測図(7)

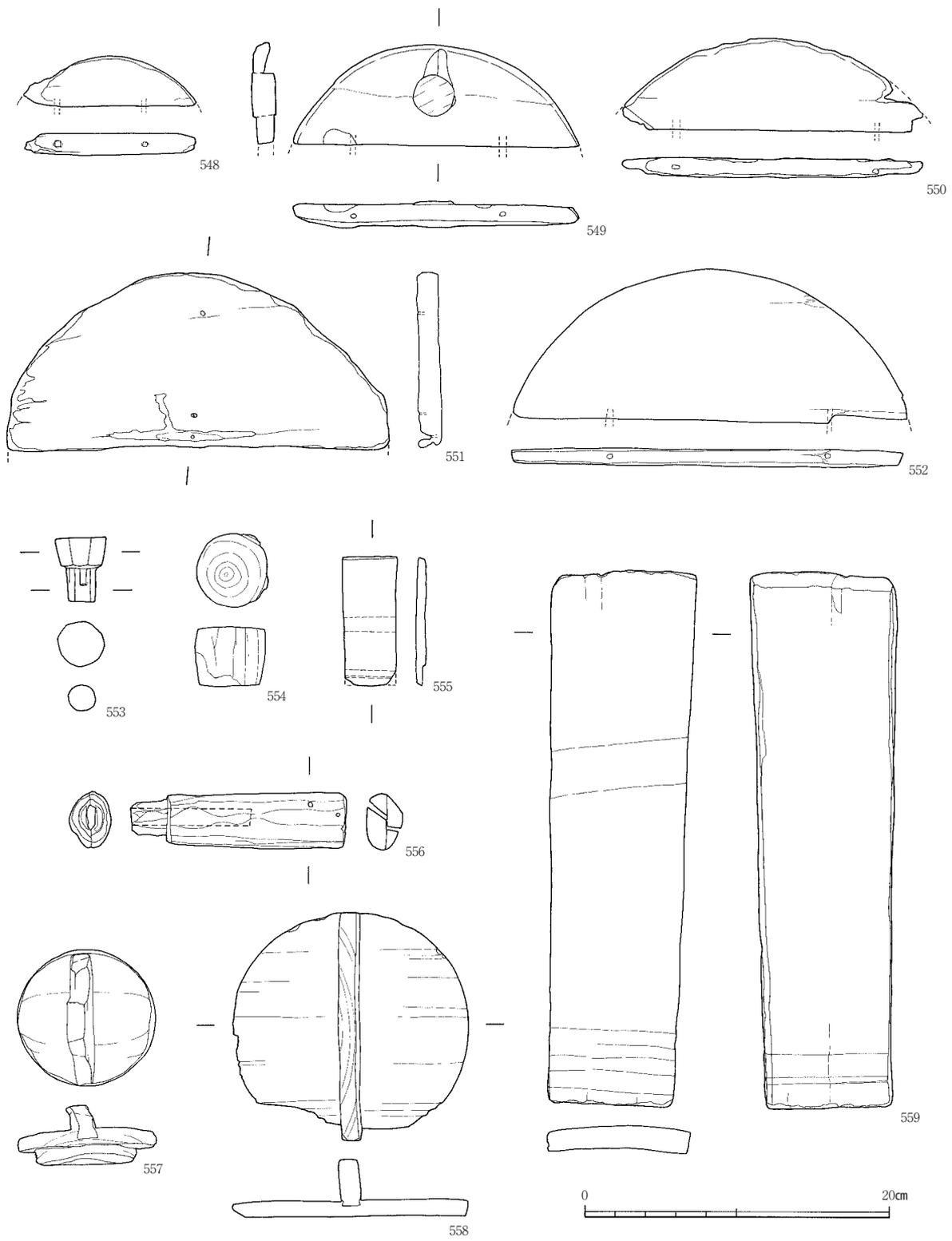


Fig.51 SX15出土遺物実測図(8)

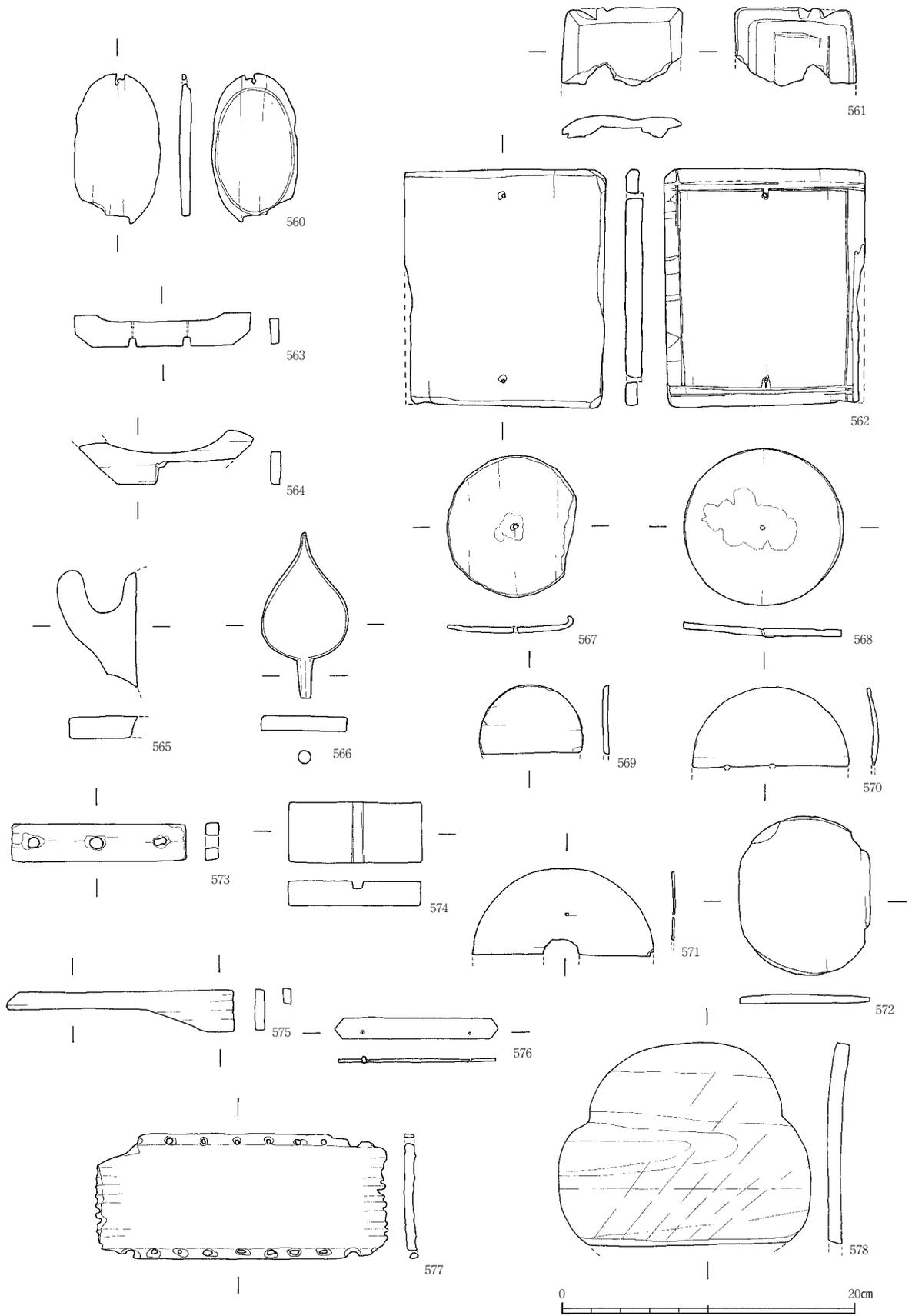


Fig.52 SX15出土遺物実測図(9)



Fig.53 SX15出土遺物実測図(10)

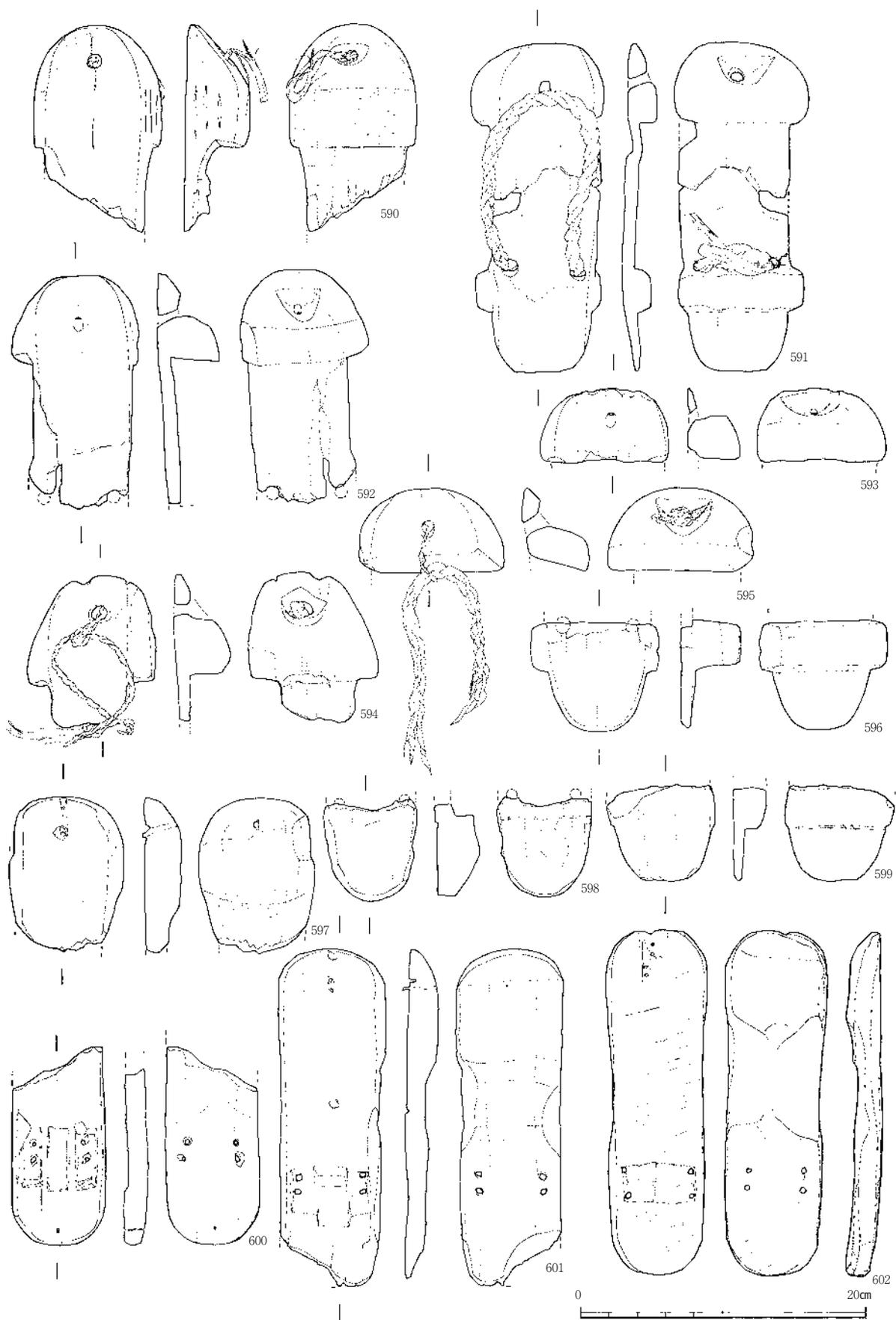


Fig.54 SX15出土遺物実測図(11)

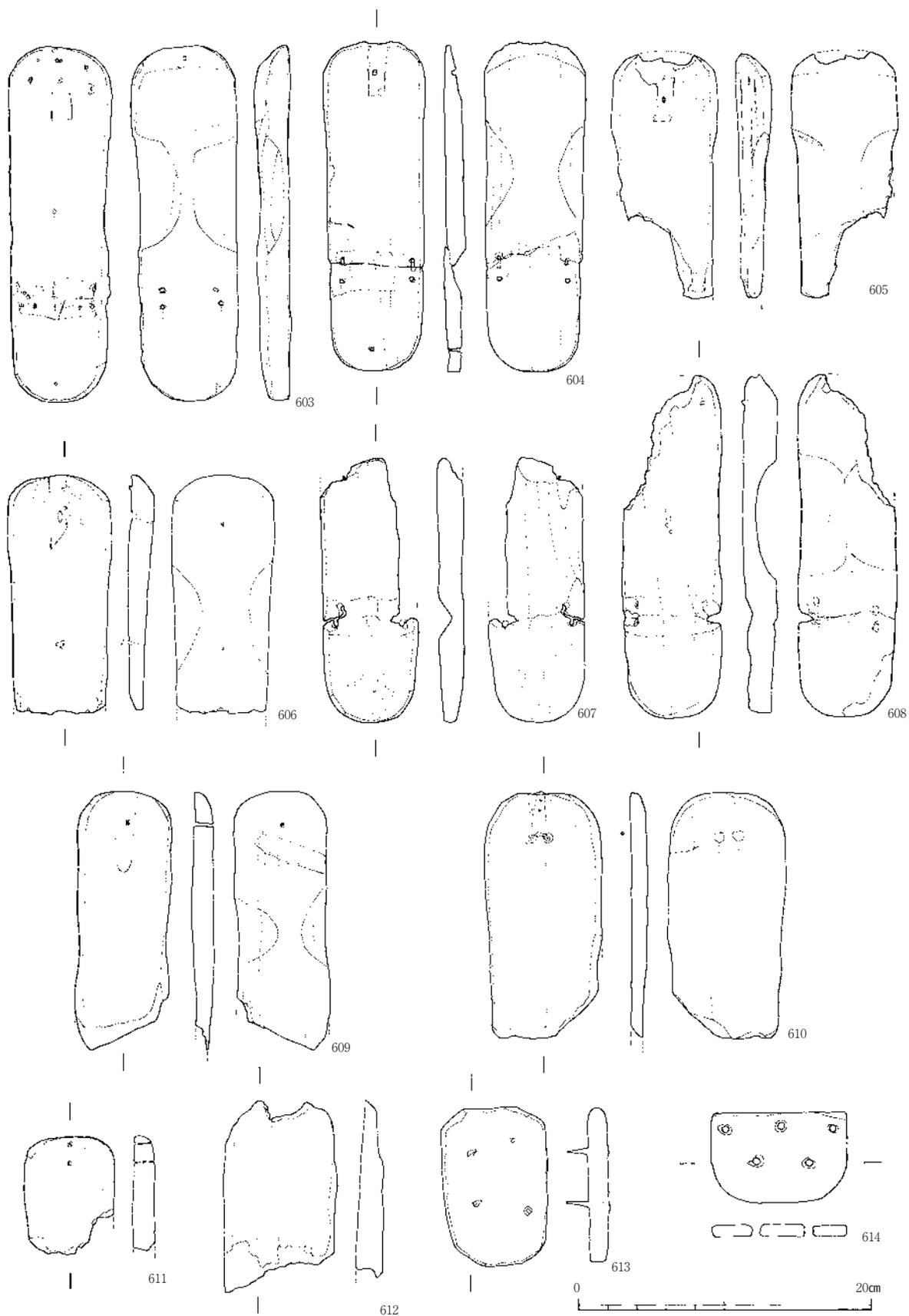


Fig.55 SX15出土遺物実測図(12)

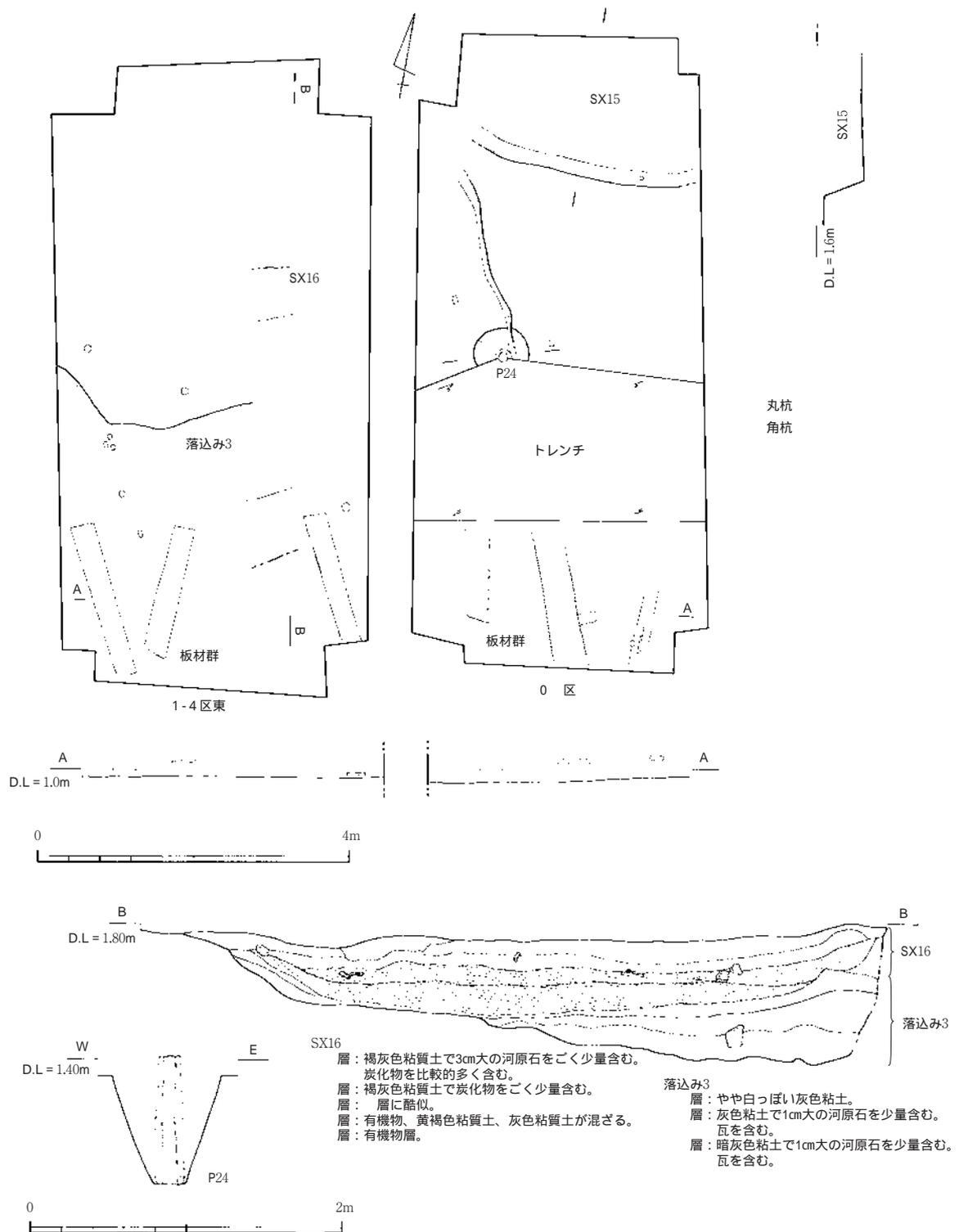


Fig.56 調査区東部平面・セクション・エレベーション図（近世後期）

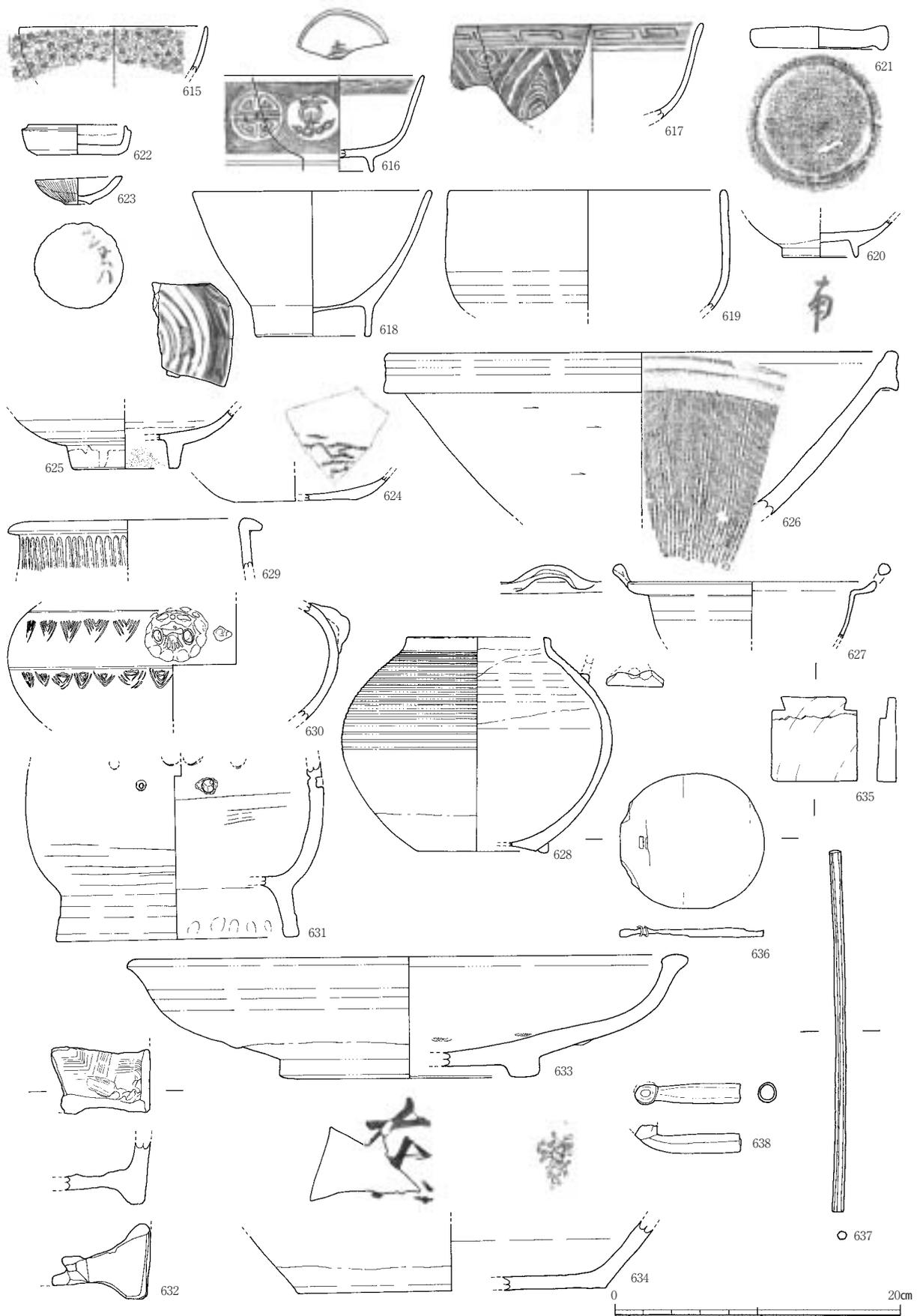


Fig.57 SX16出土遺物実測図

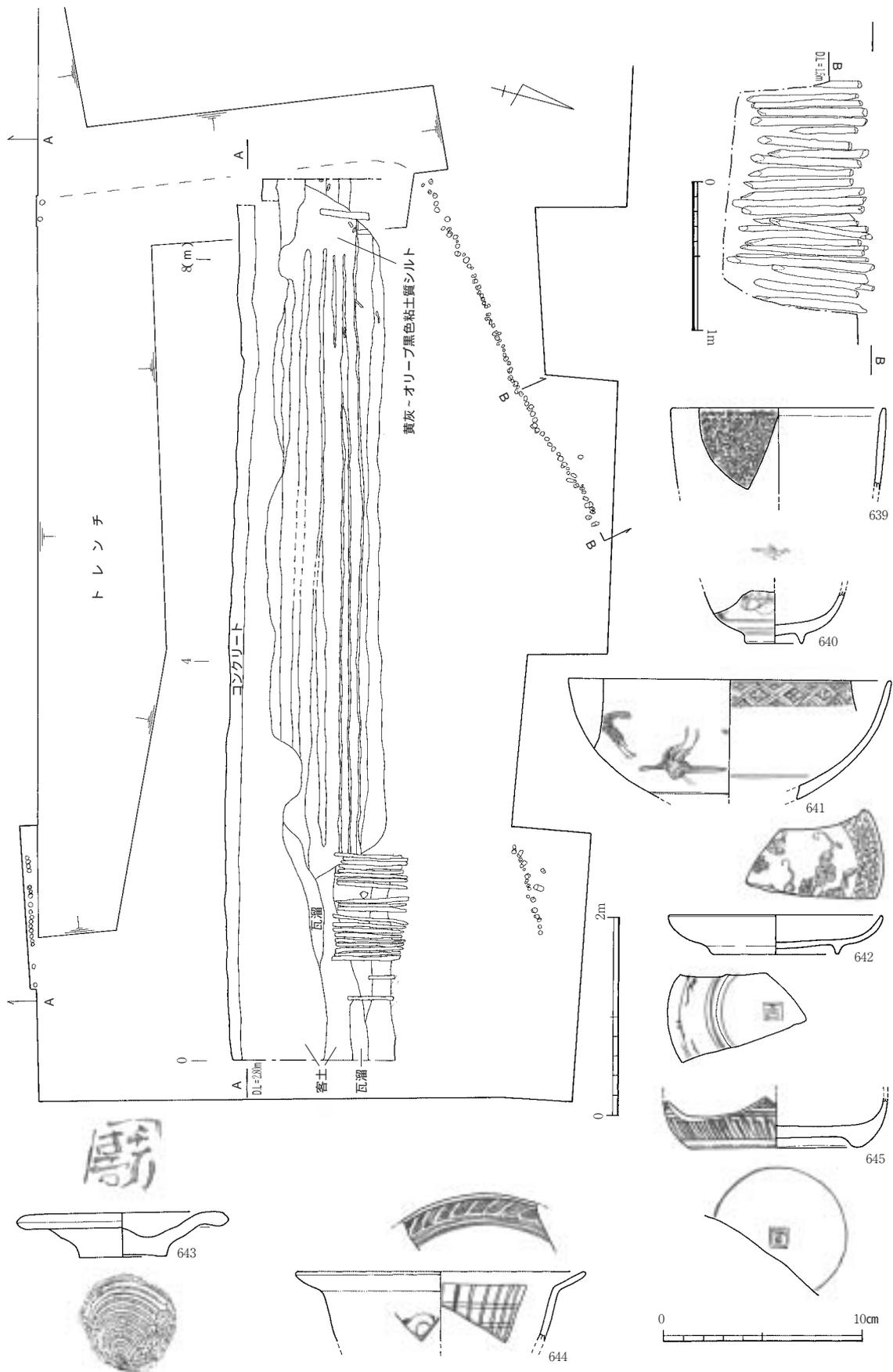


Fig.58 SX17平面・セクション・側面・出土遺物実測図

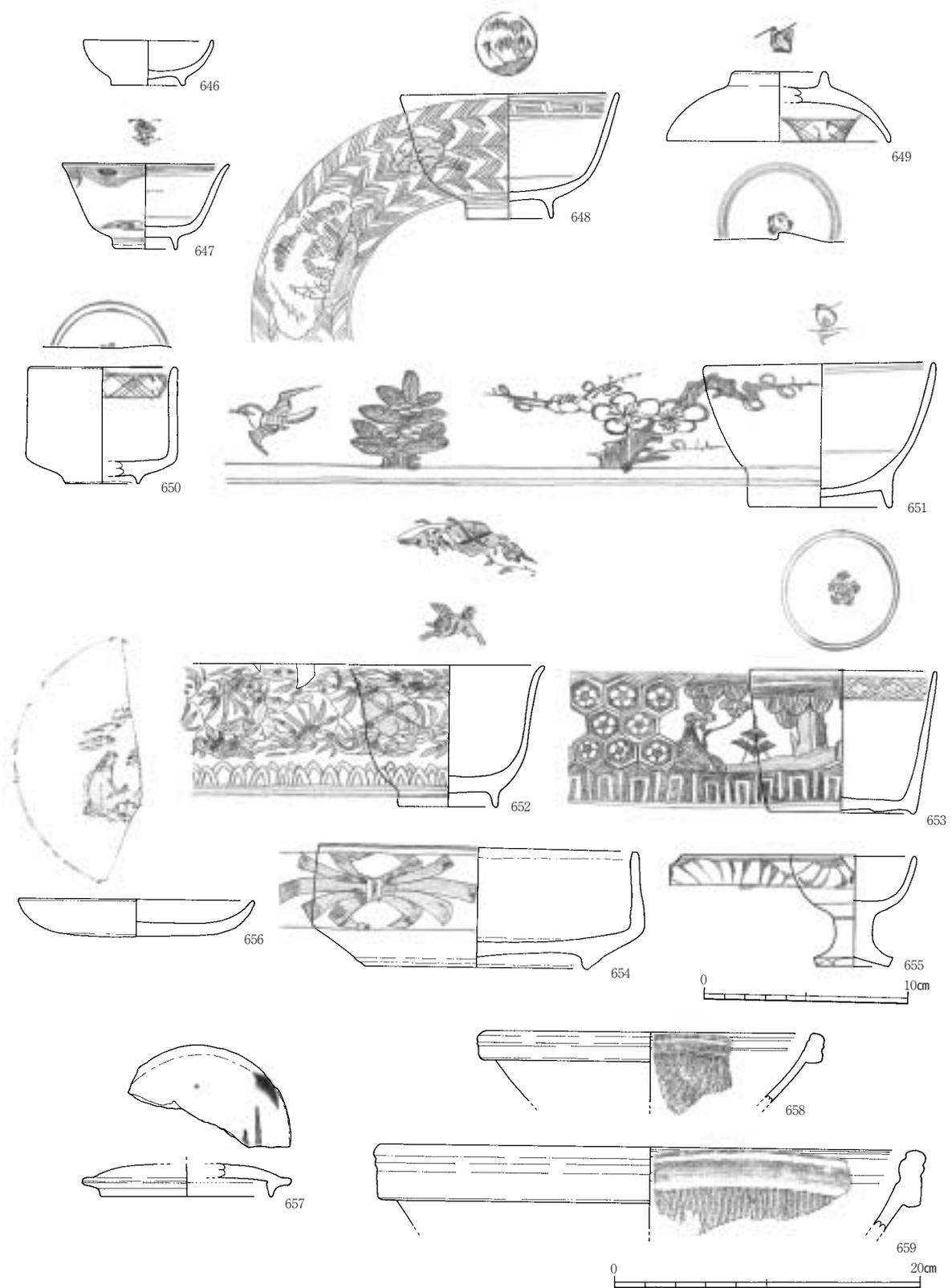


Fig.59 落込み1 出土遺物実測図

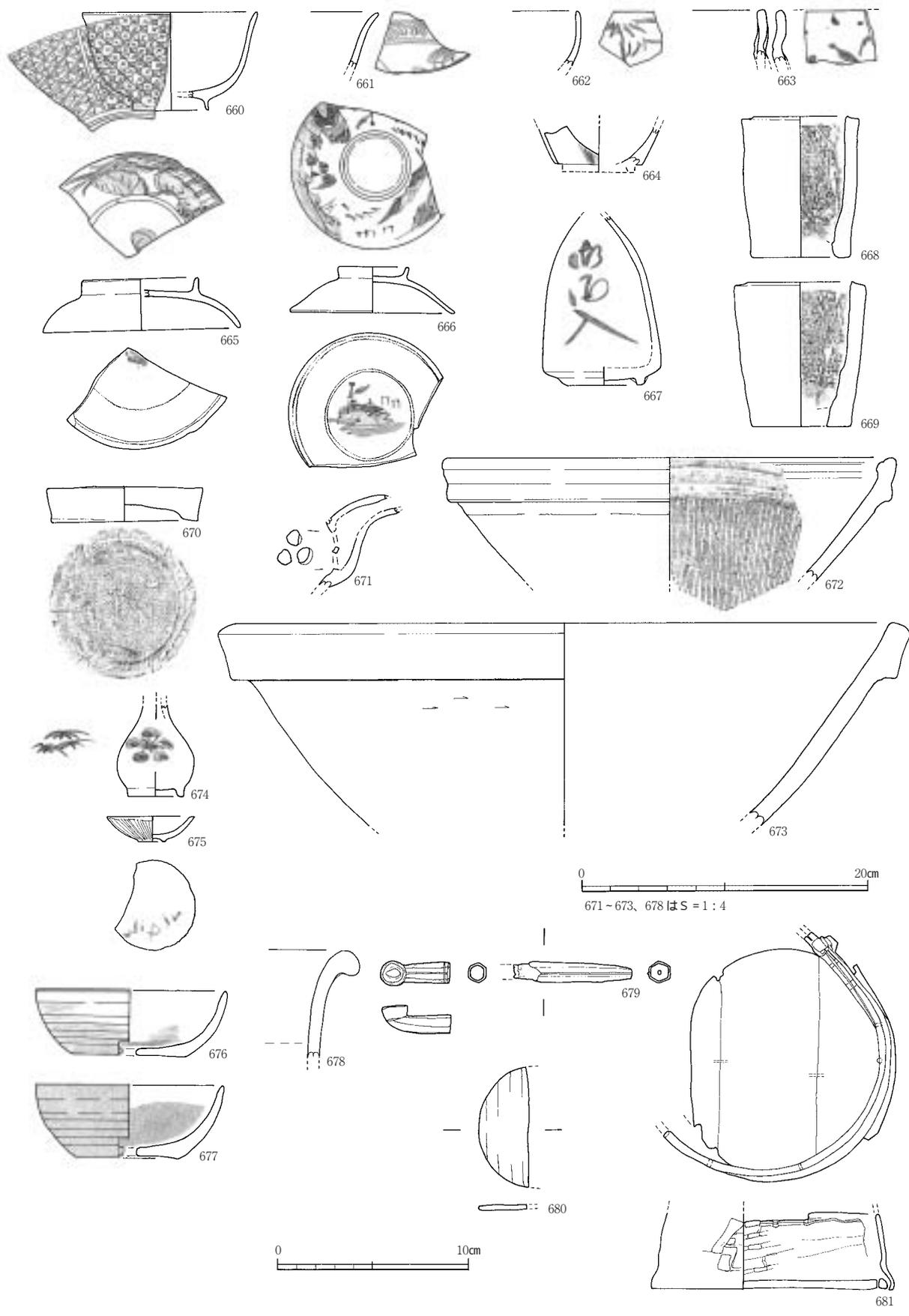
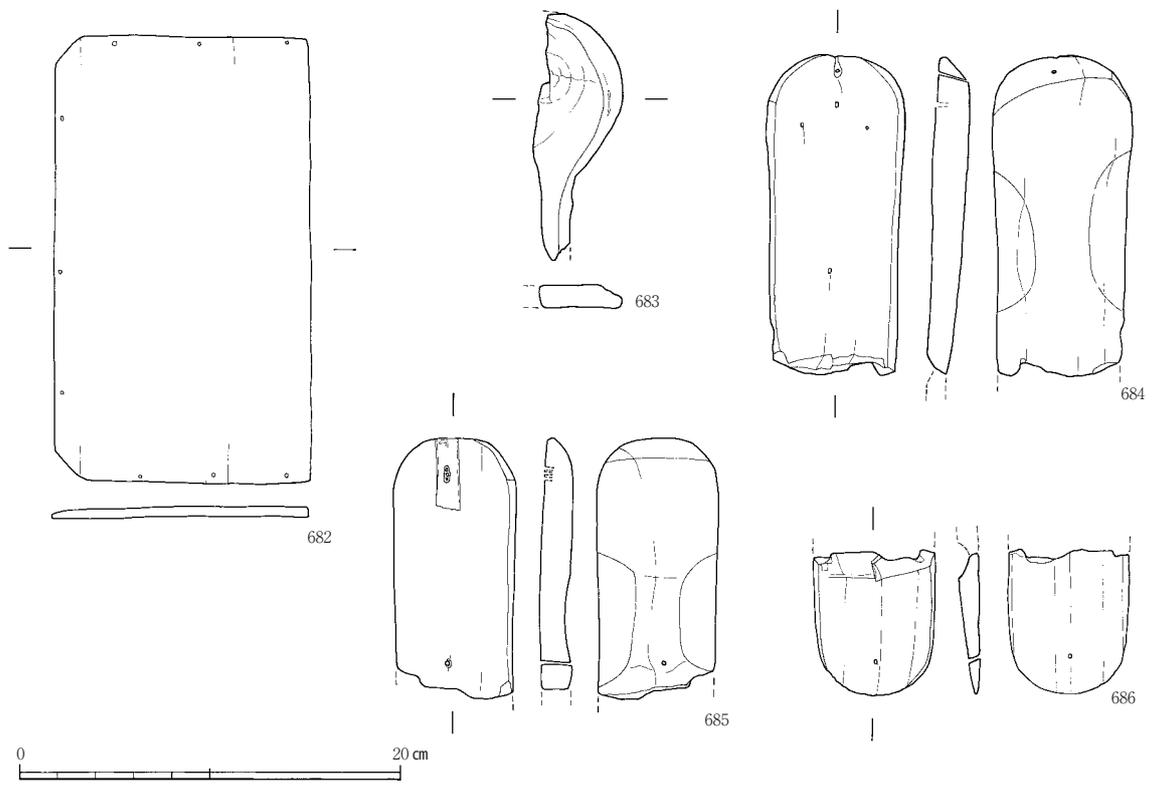
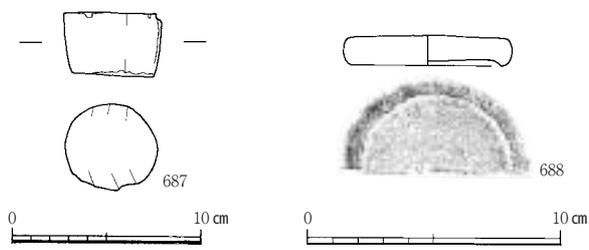


Fig.60 落込み2 出土遺物実測図



落込み 2



落込み 3

Fig.61 落込み 2・3 出土遺物実測図

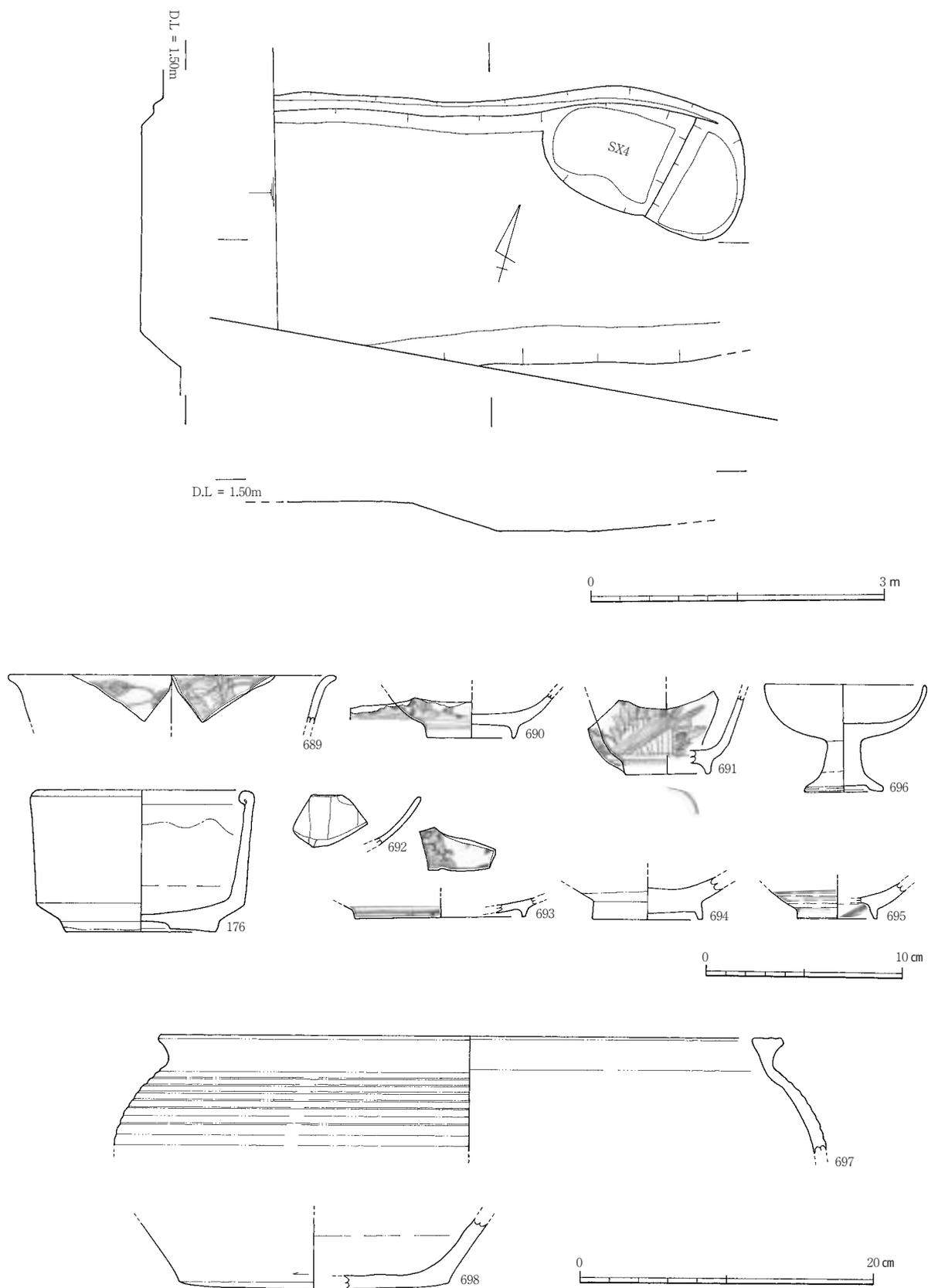


Fig.62 瓦溜10平面・エレベーション及び出土遺物実測図

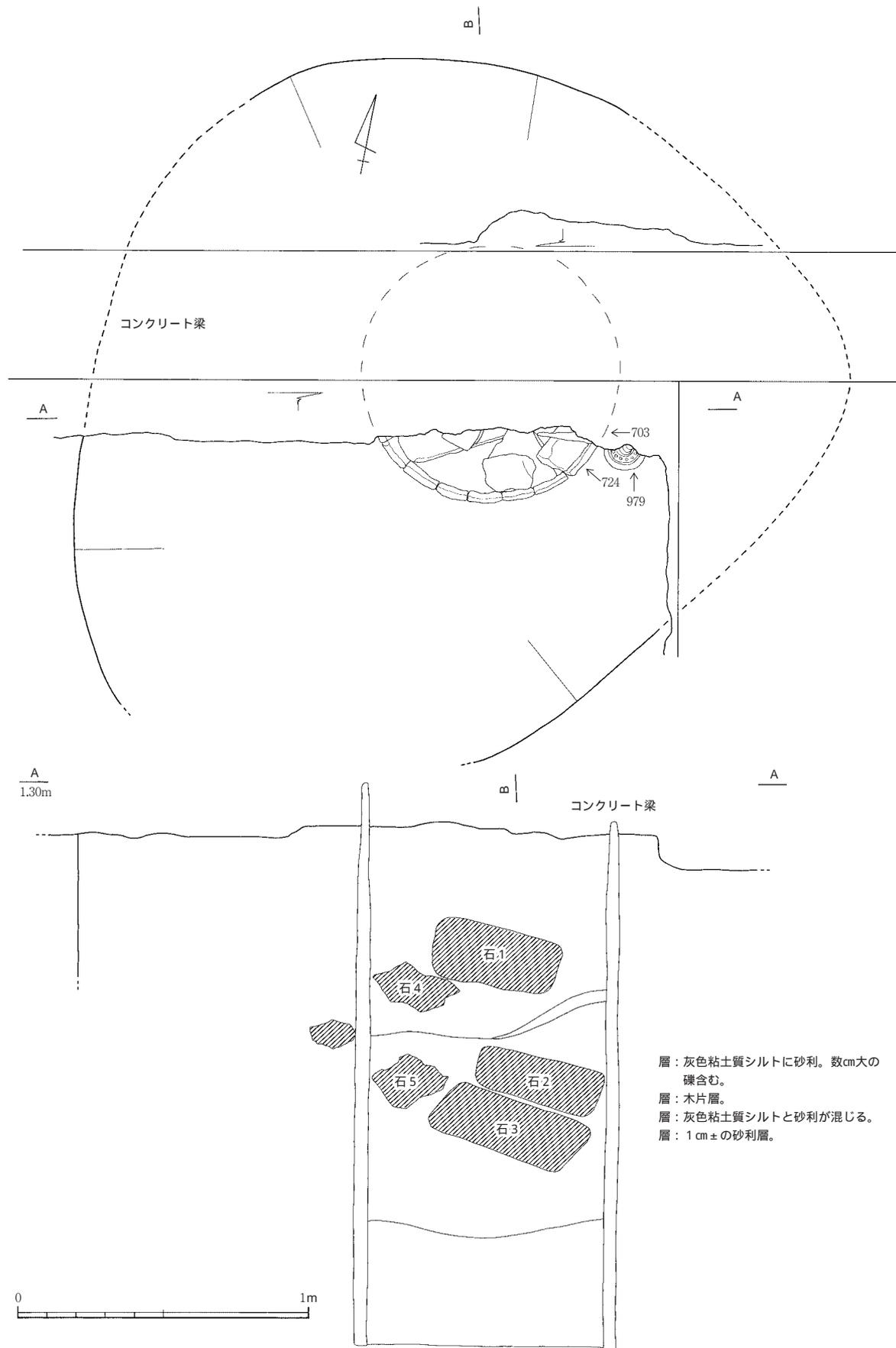


Fig.63 井戸1平面・セクション図

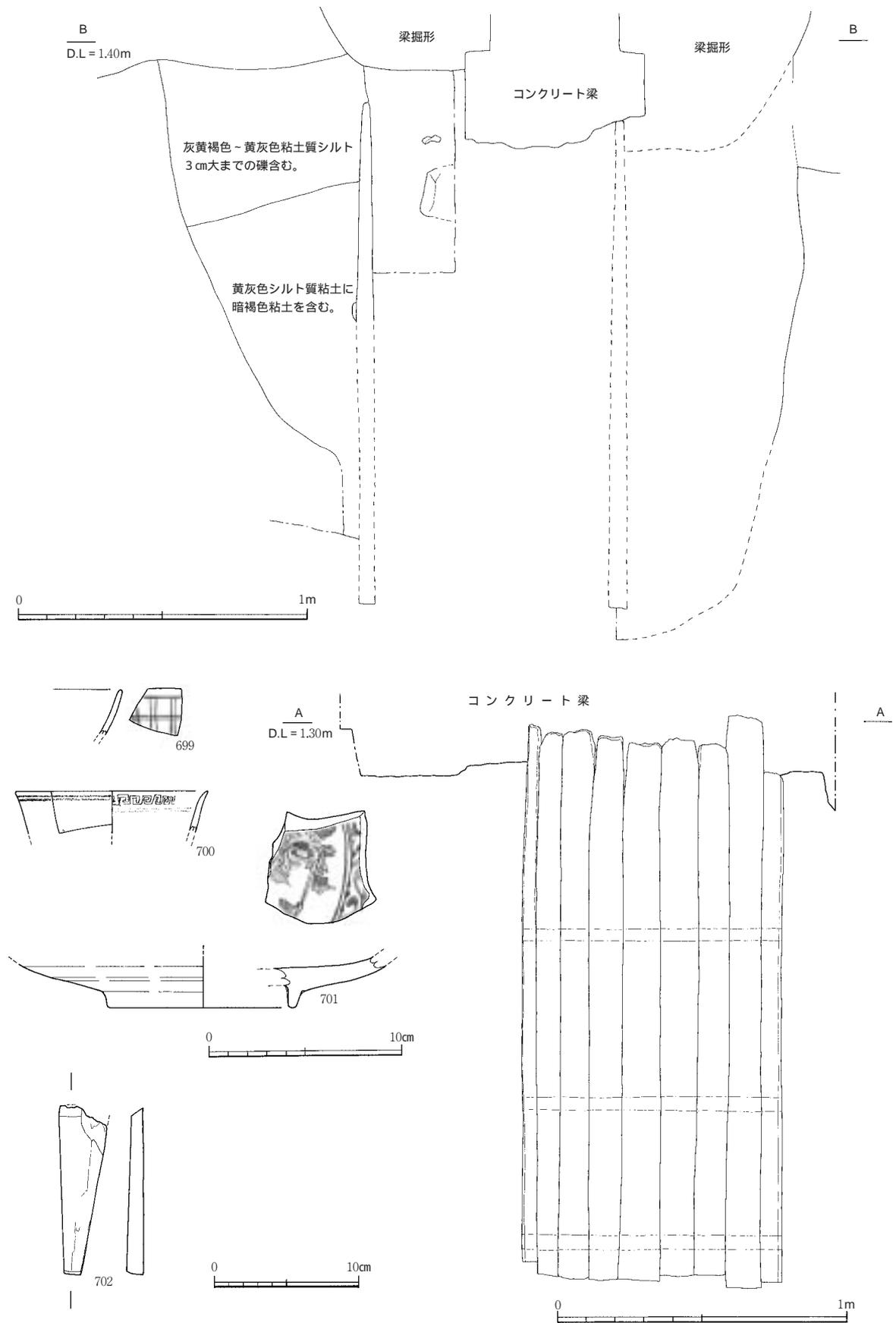


Fig.64 井戸1 セクション・側面・出土遺物実測図

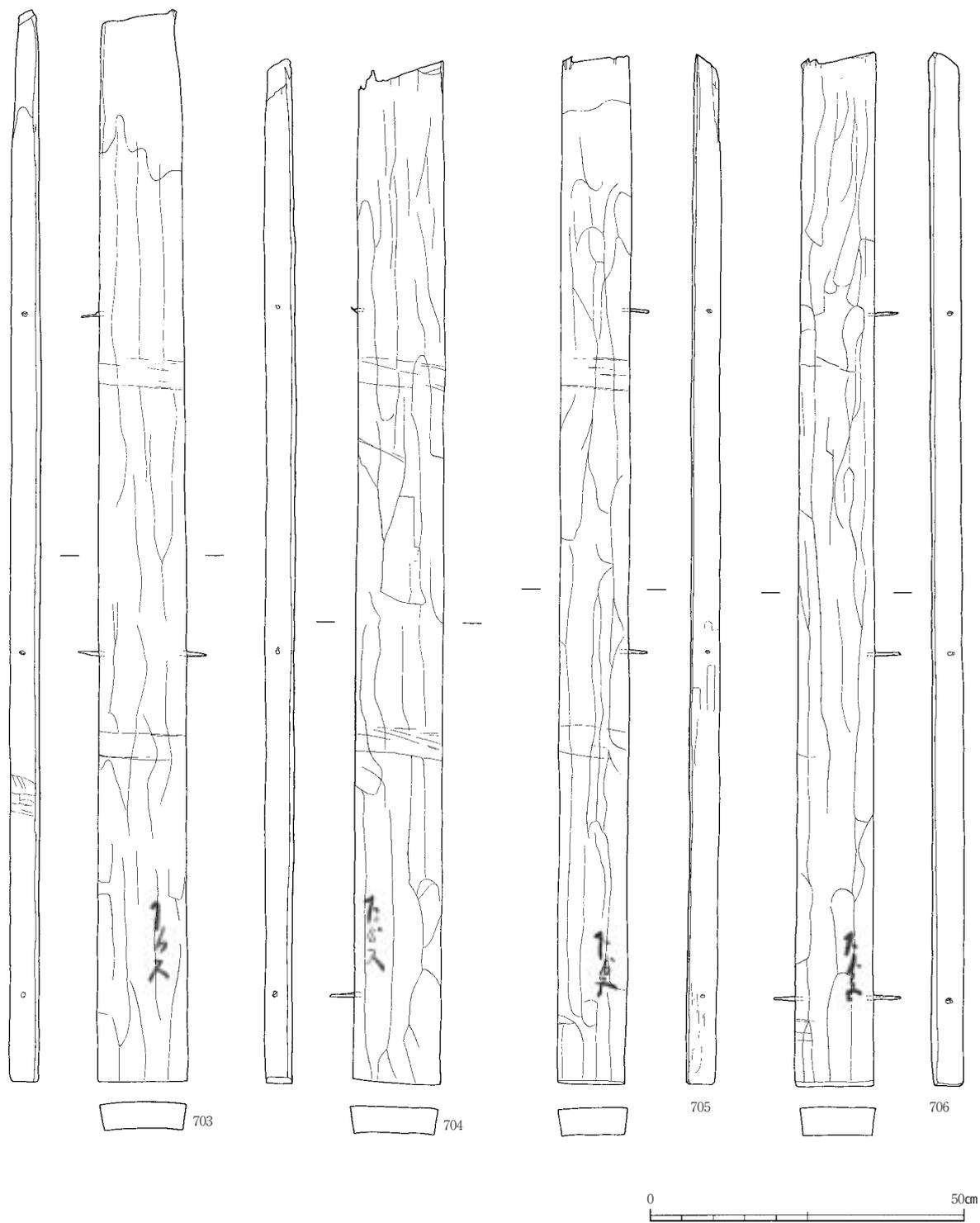


Fig.65 井戸1側板実測図(1)

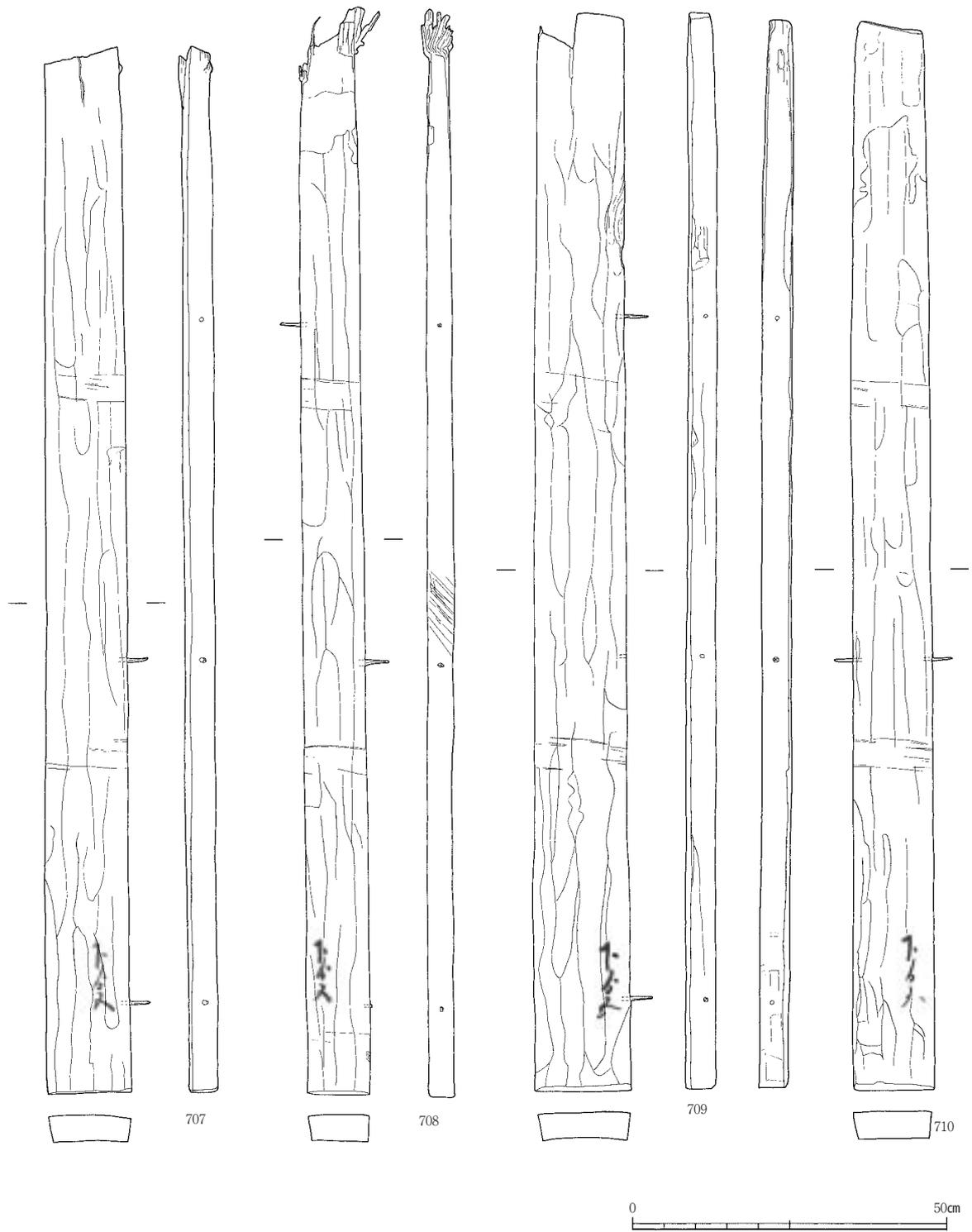


Fig.66 井戸 1 側板実測図 (2)

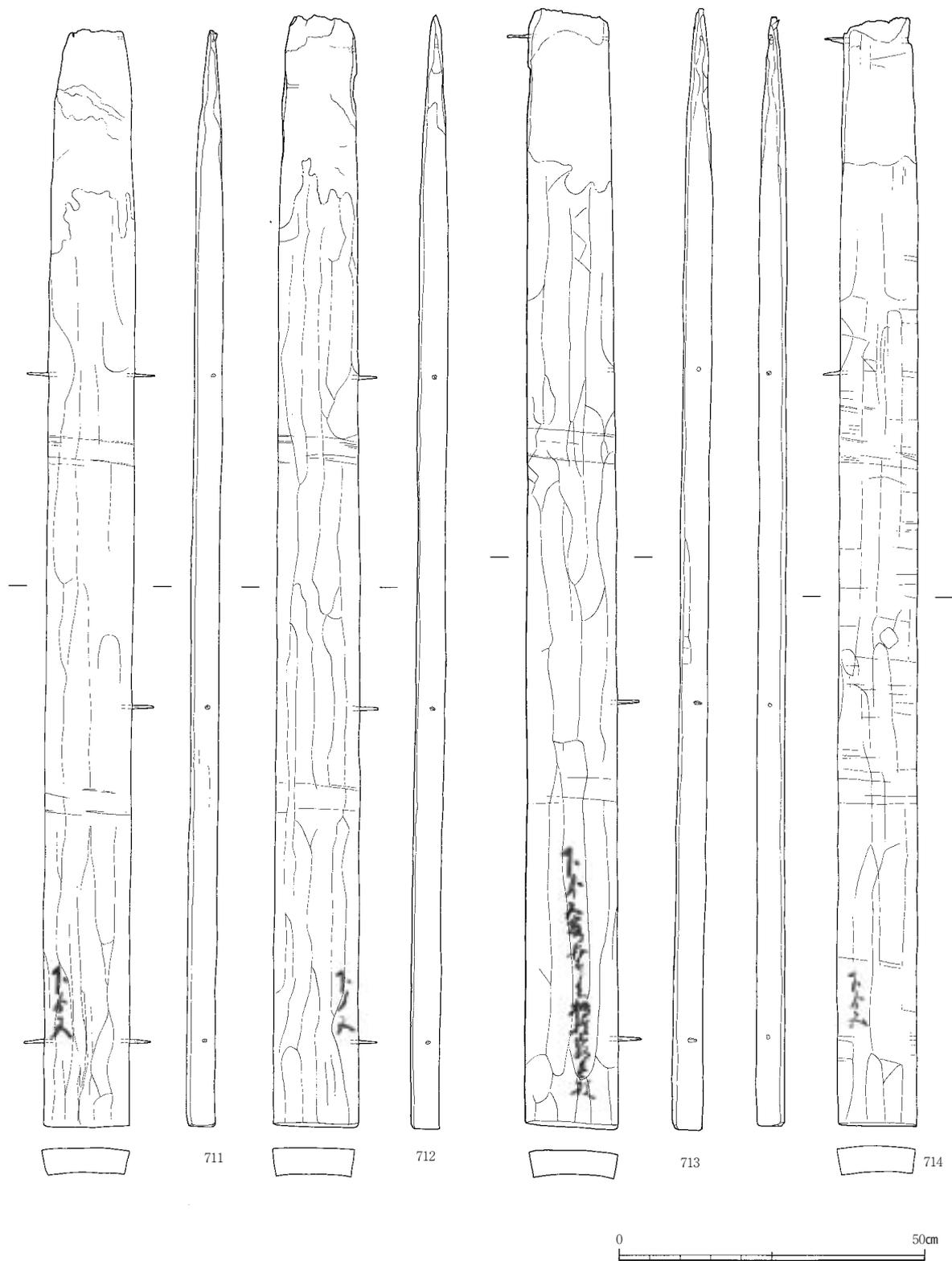


Fig.67 井戸1側板実測図(3)

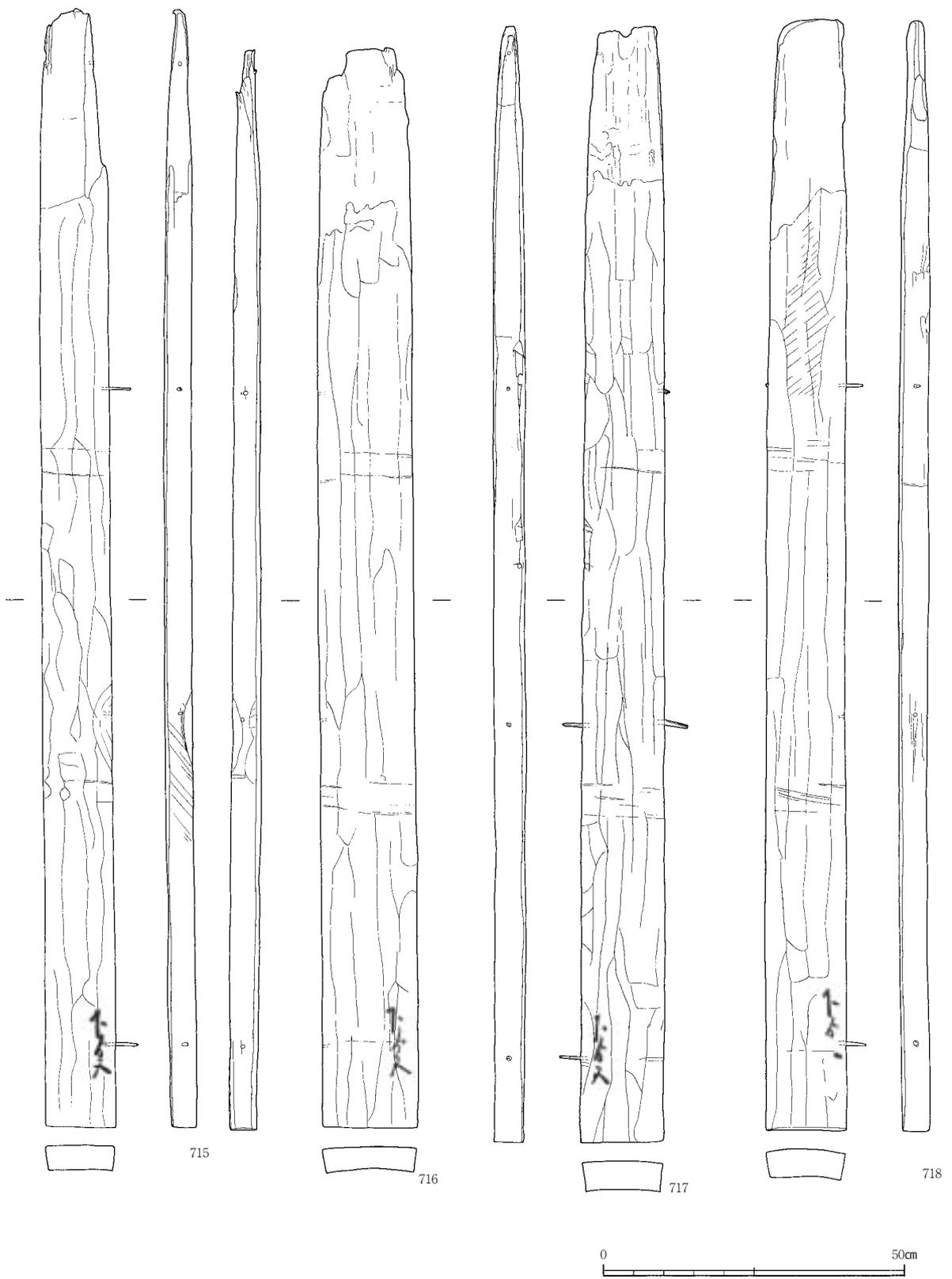


Fig.68 井戸1側板実測図(4)

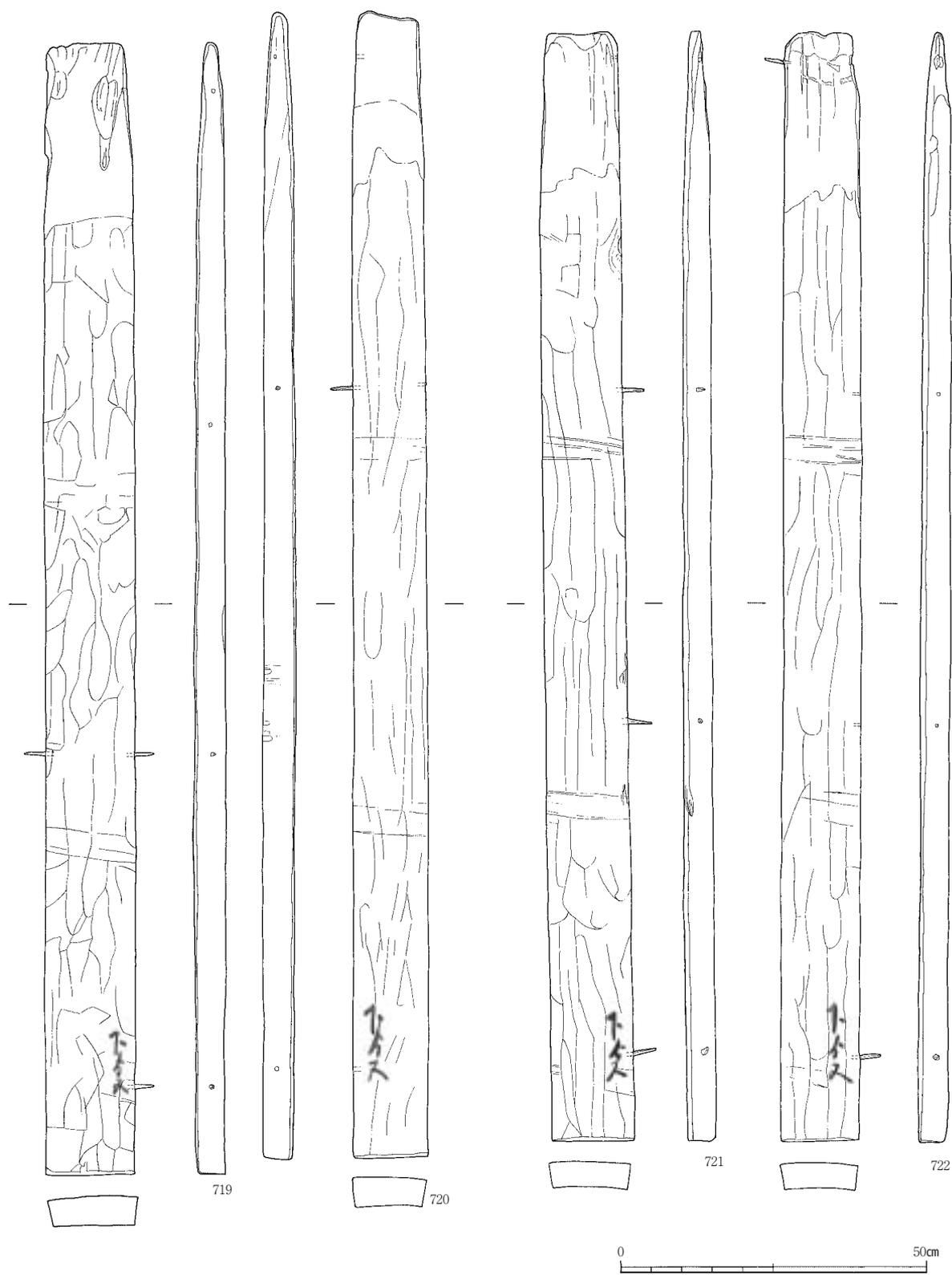


Fig.69 井戸1側板実測図(5)



下人及舟名之抄出書名板

713 墨書



Fig.70 井戸1側板及び墨書実測図

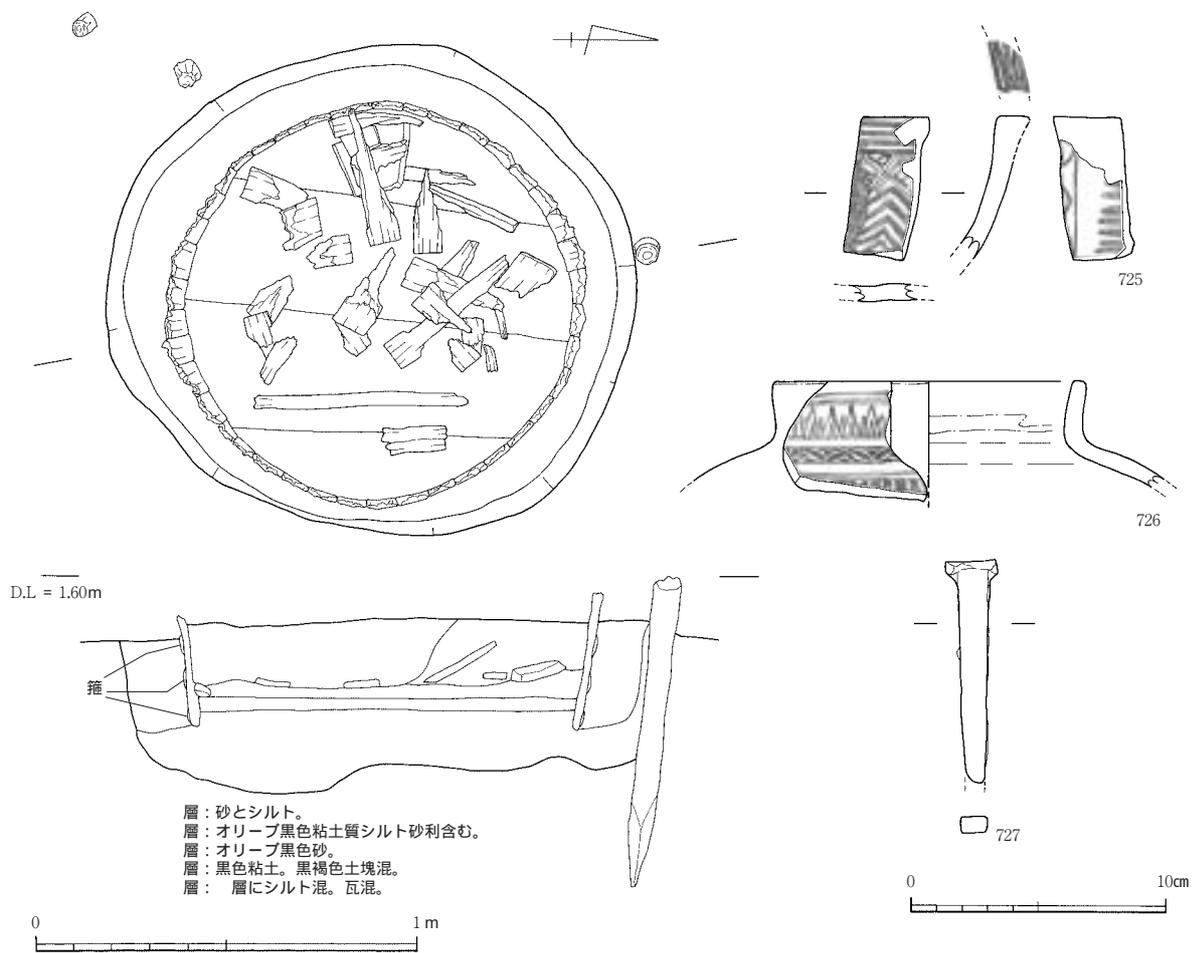


Fig.71 埋桶1平面・セクション及び出土遺物実測図

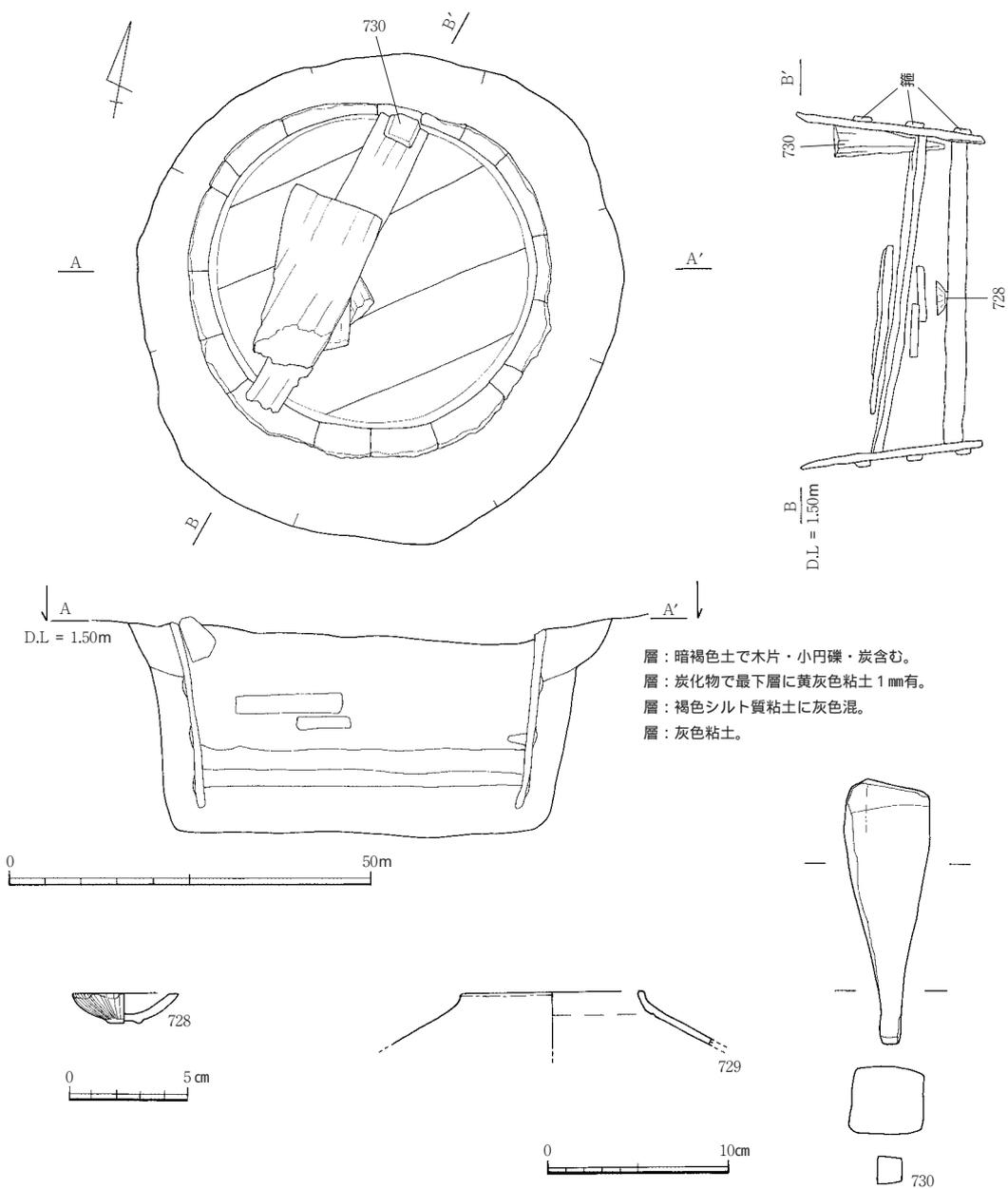


Fig.72 埋桶2 平面・セクション・断面及び出土遺物実測図

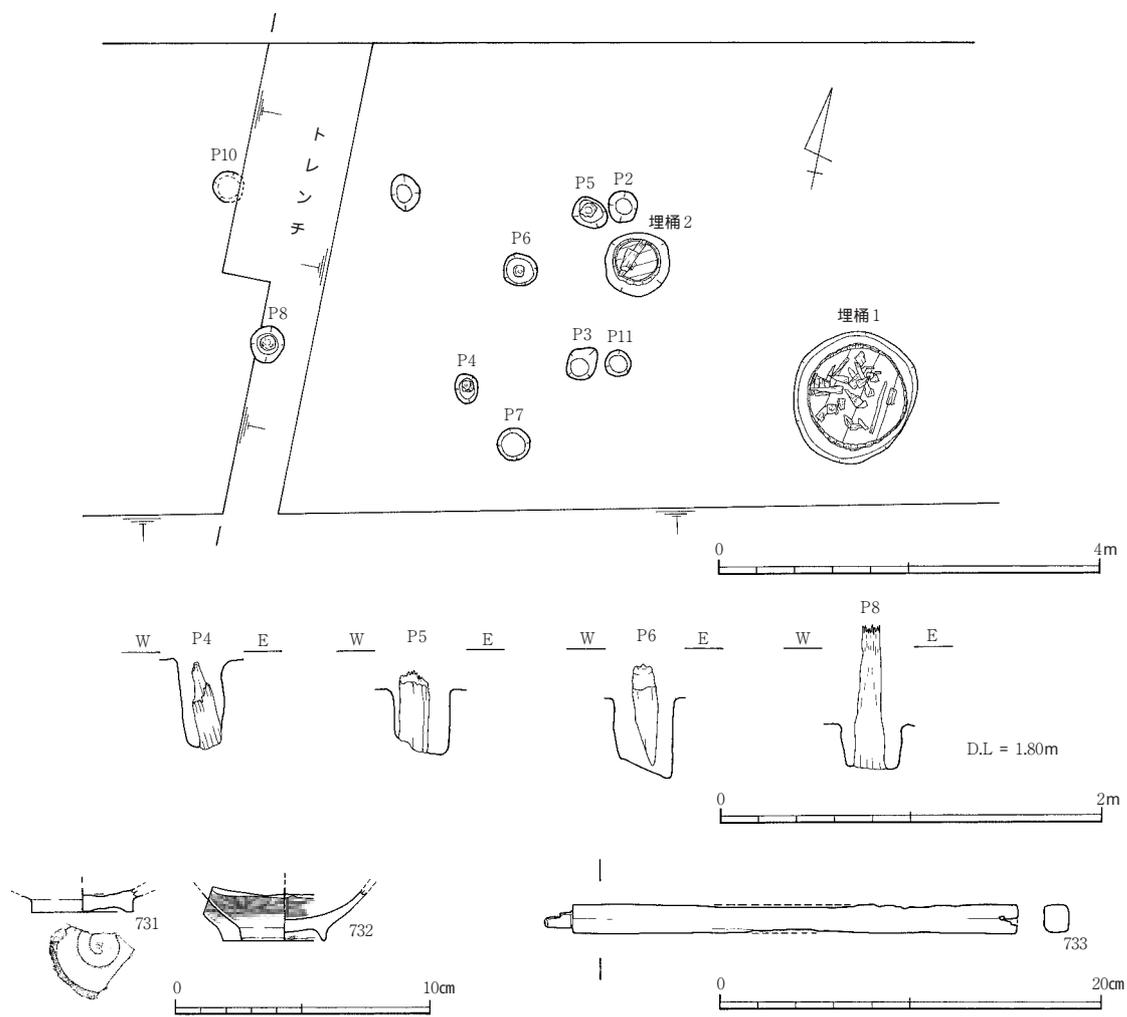


Fig.73 北部ピット群平面・エレベーション及び出土遺物実測図（近世後期）

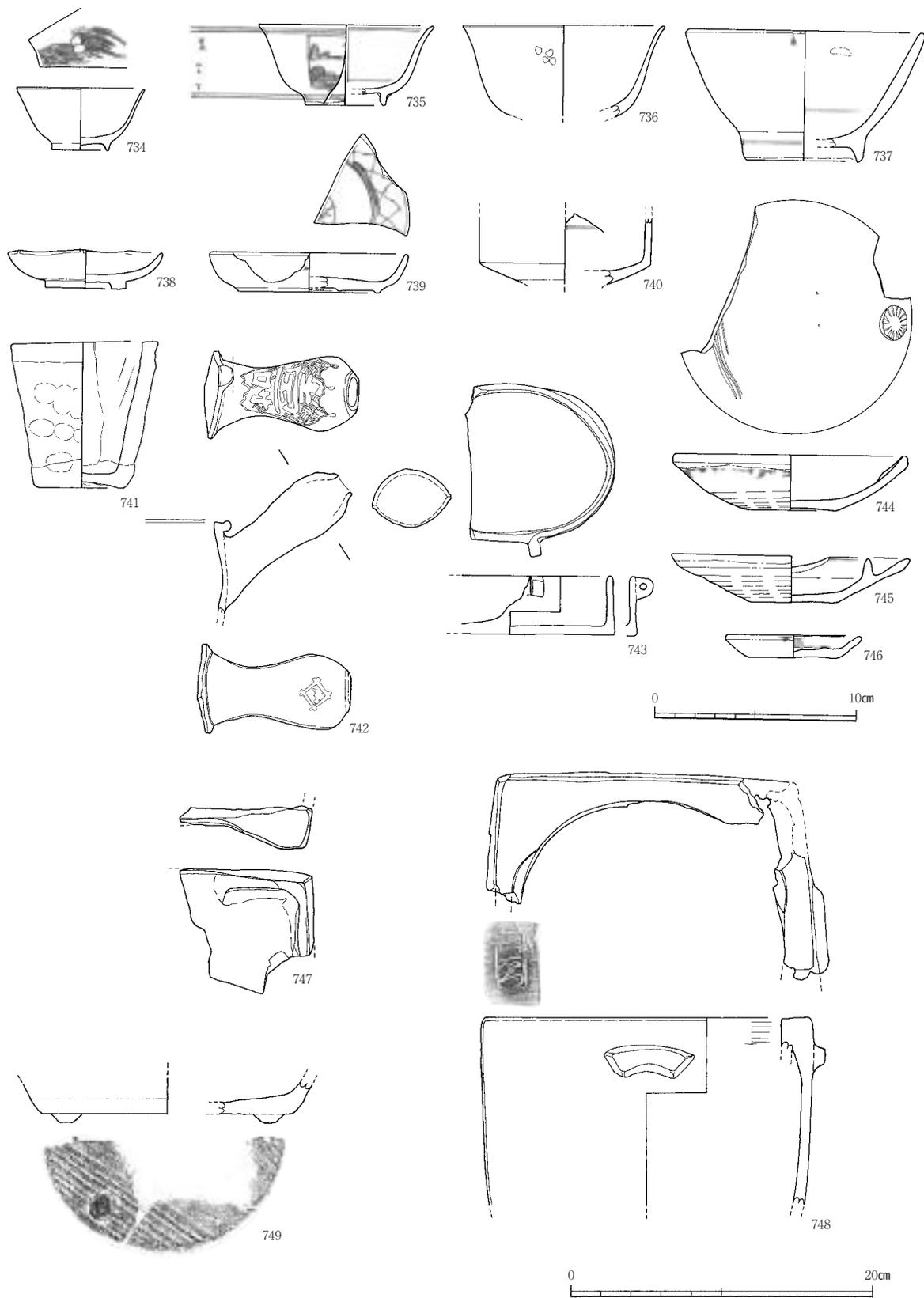


Fig.74 集中2出土遺物実測図

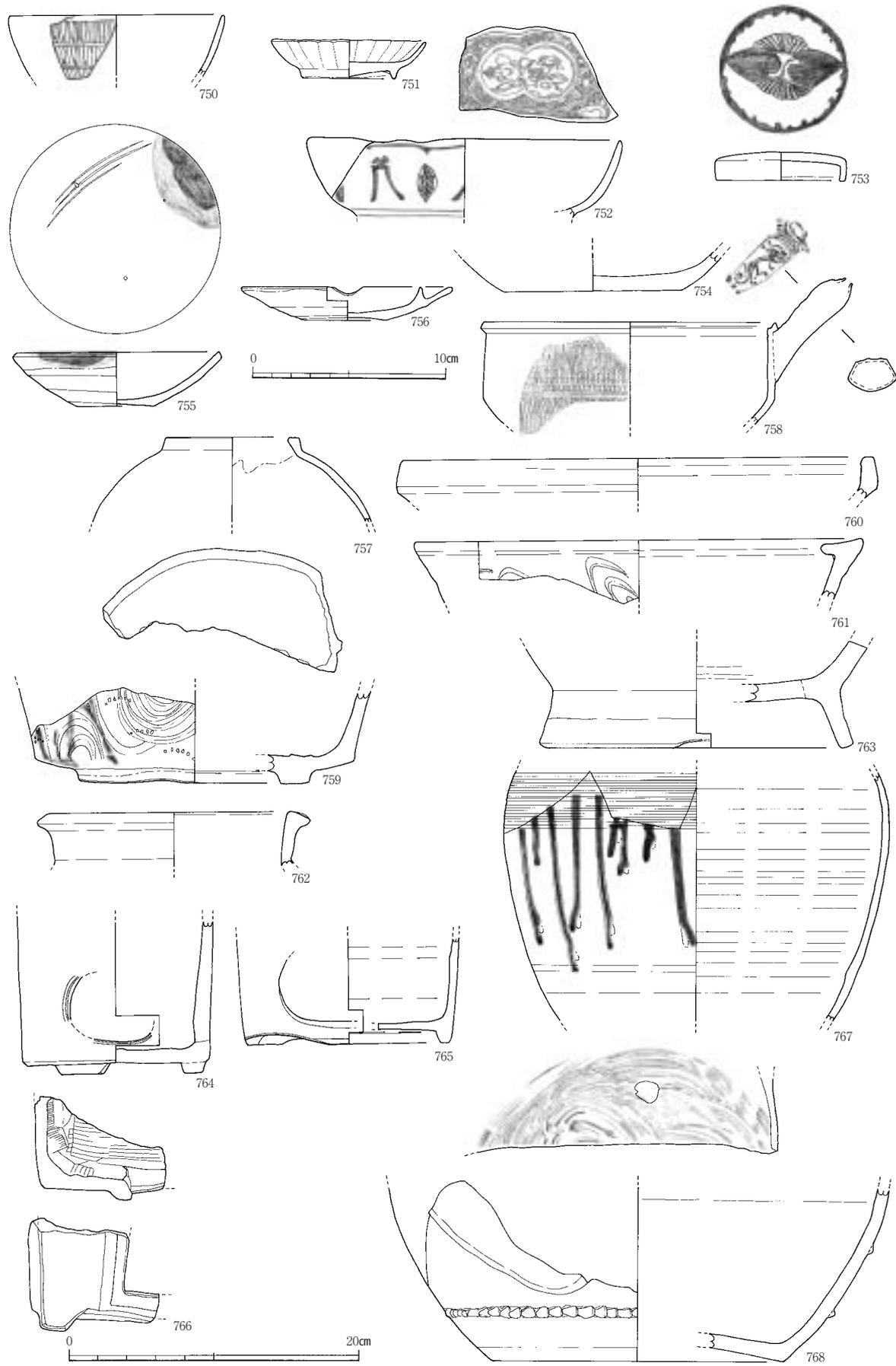


Fig.75 集中3出土遺物実測図

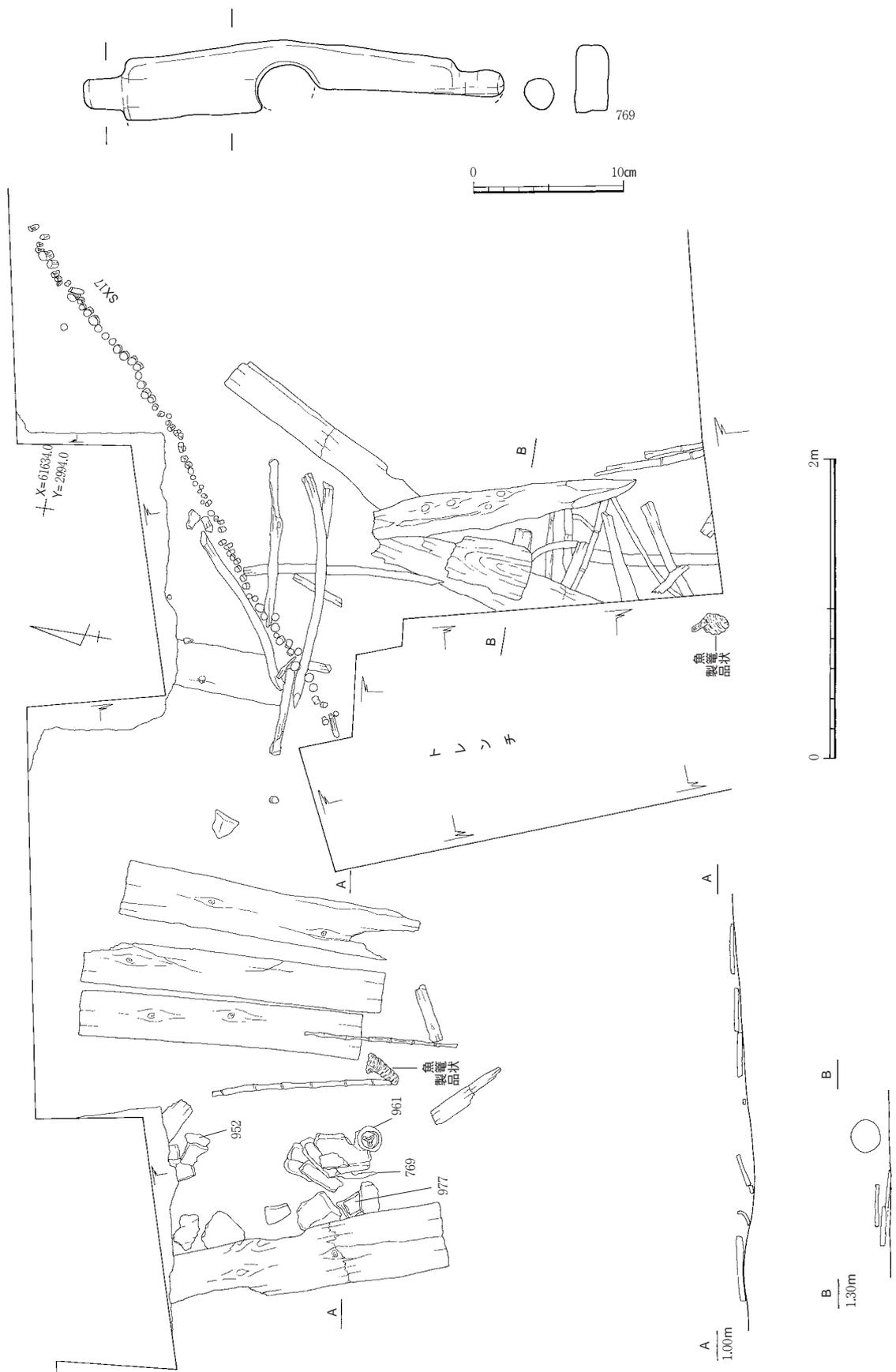


Fig.76 集中4平面・エレベーション及び出土遺物実測図

4．近代以降の遺構と遺物

(1) 明治時代の庁舎

基礎遺構 1

調査区のほぼ全域で検出した。上幅1.8m、底幅14.2m、深さ0.64mの断面逆台形を呈するトレンチ状の掘形の底に、直径16cm、長さ2m前後の尖端の杭を数cmから40cmの間隔で打ち込み、その上に原則として3段の石材を積んでいる。石材は、長さ70cm前後の横長に成形したものを中、上段に横位に使用し、掘形の両側や底面は30cm前後の任意の形状のもので充填している。横長の石材には、いくつかの面が平坦で直方体に近く整形されているものもあるが、主面が上面になっていないものも少なくない。隙間には砂利が充填されていた。最上段の中央にある横長の石材のうち、母岩を判断できたものをあげると、石灰岩106個、チャート17個、砂岩9個、変成岩1個を数える。全体の企画方位はN-10°6'-Wを測る。出土遺物は少ないが、Fig. 2、3に示したごとく、近世に帰属させ得る土層を全て切る一方、北部の昭和期コンクリート溜など本遺構を切る攪乱も多い。第1章の高知地家簡裁旧庁舎関係資料の平面図と一致し、明治29年竣工の高知地方裁判所庁舎の遺構である。礎石列1、2、3も同図に対応する。礎石列1は、基礎遺構以南の屋内部分では深さ17.8cm布掘りの掘り形を持ち、充填した砂利の上に52cmから74cmの礎石を配すが、北側の屋外部では各礎石ごとの掘り形を有する。礎石列2は60cmから80cmの石を配し、掘り形は検出されなかった。間仕切部分に相当する。礎石列3は砂利層の上で検出した。検出面では掘り形が検出されなかったが、下層で掘り形を持つ基礎遺構を検出した。この下層部分は掘り形内に石が設置される点では基礎遺構1に類似するが、底に杭を伴わず、石の間隔や掘り形の幅も基礎遺構1とは異なる。当該部は前記の平面図とは一致しない部分がある。なお、昭和期のコンクリート溜の位置から、昭和期の建て替え時には本遺構の当該部を利用してコンクリート槽を設置したことがわかる。

石組溝 1

基礎遺構1の各部に沿って検出した。Fig. 8、77を参照すれば、基礎遺構1の屋外側にのみ存在することから、同遺構に伴う雨落ち溝と考えられる。Fig. 2のごとくの掘り形内に幅21~30cm、長さ25~82.5cmの加工石材を縦位に並べ、その主面を内側にして溝の3面としている。掘り形の充填土は、層に類似するが赤土を含まないものである。溝内の埋土は赤土を主とし、漆喰やコンクリート片を含むもので、北東部のコンクリート溜の東側では大型のボルトが出土した。

(2) 瓦溜

所属時期に幕末を含む可能性のあるものを含めて、ここで報告する。

瓦溜 1

1-2区北部で検出し、コンテナ4箱分の瓦が出土した。近世後期の包含層を切っている。陶磁器等は出土していない。

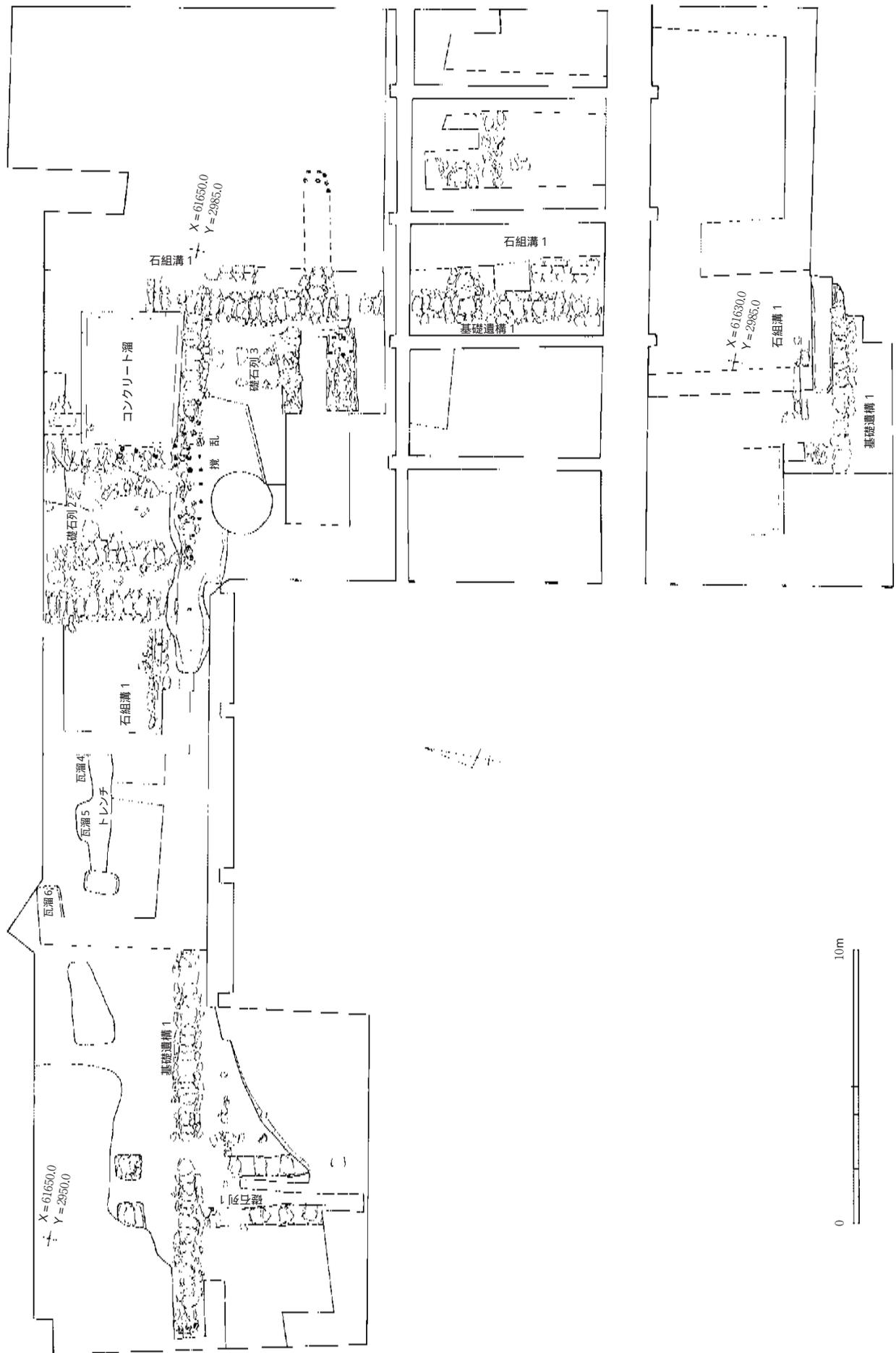


Fig.77 近代以降の遺構全体図 S = 1/200

瓦溜 3

4区北端の上層で検出した。近世の陶磁器5点と、型紙摺り染付碗1点がいずれも破片で出土している。

瓦溜 4

5区東部の、幕末以降とみられる整地層上面で検出した。規模は1m四方程度である。

瓦溜 5

5区西半の、幕末以降とみられる整地層上面で検出した。

瓦溜 6

西部北縁で検出した。Fig.3のごとく、幕末以降とみられる層を切る。遺物は、後期に比定できるものを含む近世陶磁器40片と窯道具1点、ガラス器1片が出土している。焼継ぎのある染付鉢1点が含まれている。

瓦溜 7

7-1区の瓦溜9検出前に、その上位付近より出土した瓦集中で、標高では近現代整地層付近である。従って瓦溜9より後出するか、或いは瓦溜9と一体であった可能性が考えられる。陶磁器は出土していない。

瓦溜 9

7-1区北壁際で検出し、近世後期以降の土層を切っている (Fig.3)。瓦溜7を除去後にプランを確認し、それとは別名称を付した。陶磁器は出土していない。

5. 包含層等出土遺物

多量に出土した遺物から抽出して報告する。層は第1章のごとく、最も遺物密度の高い包含層

位置 小区	包 含 層					遺 構 等
	- 4層	層	XII層	XIV層	XIV層	
0 - 4区			4点			SD2 4点、落込み3 1点
1 - 2区						SX13 2点
1 - 4区						SX9 2点、SX7 1点
1 - 5区		18点				SX8 1点
2 - 2区						基礎遺構1 1点
2 - 3区					1点	
2 - 4区	1点			1点		
3 - 1区						瓦溜8 1点
3 - 5区						SX6 3点
5 - 6区						暗灰粘 2点、5区TR 2点
7 - 2区						青灰粘 1点

Tab.2 古代の遺物点数

である。層でとり上げた遺物には、近世後期に属するものも含まれていたが、図示したような近世前期に属するものや優品が注意される。また、瓦では後述するような同范関係も認められた。

828、829は調査区北東部から出土している。831～834は古代に属すとみられる。細片も含めた古代の遺物の出土位置はTab. 2のごとくで、東部から南東部での偏在が認められるが、2-3区と2-4区でも須恵器瓦片が各1点出土している。層位はいずれも層以下の層序に属す。破片が多く、廃棄後の摩耗を認めるものが多い。

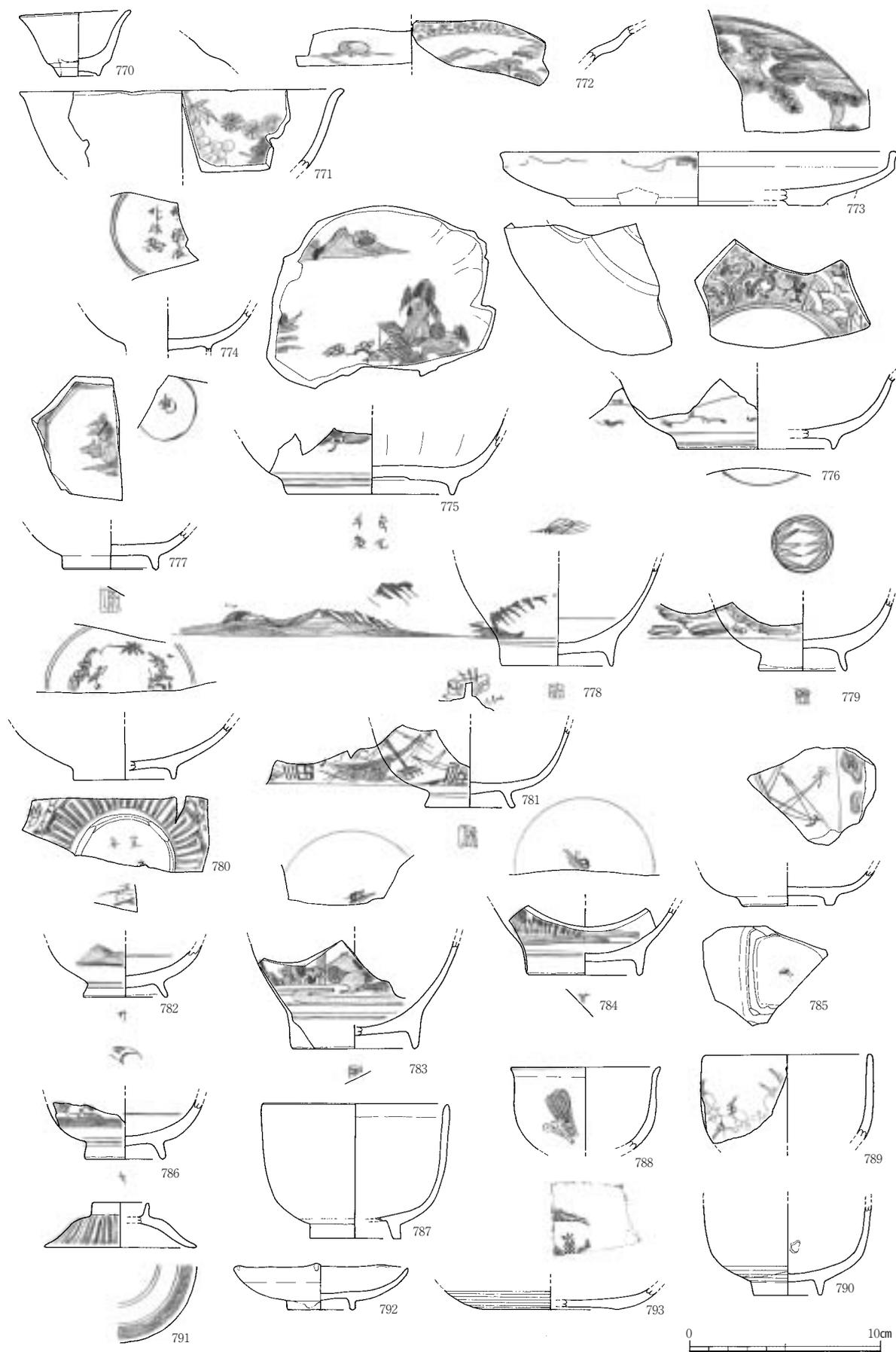


Fig.78 包含層出土遺物実測図

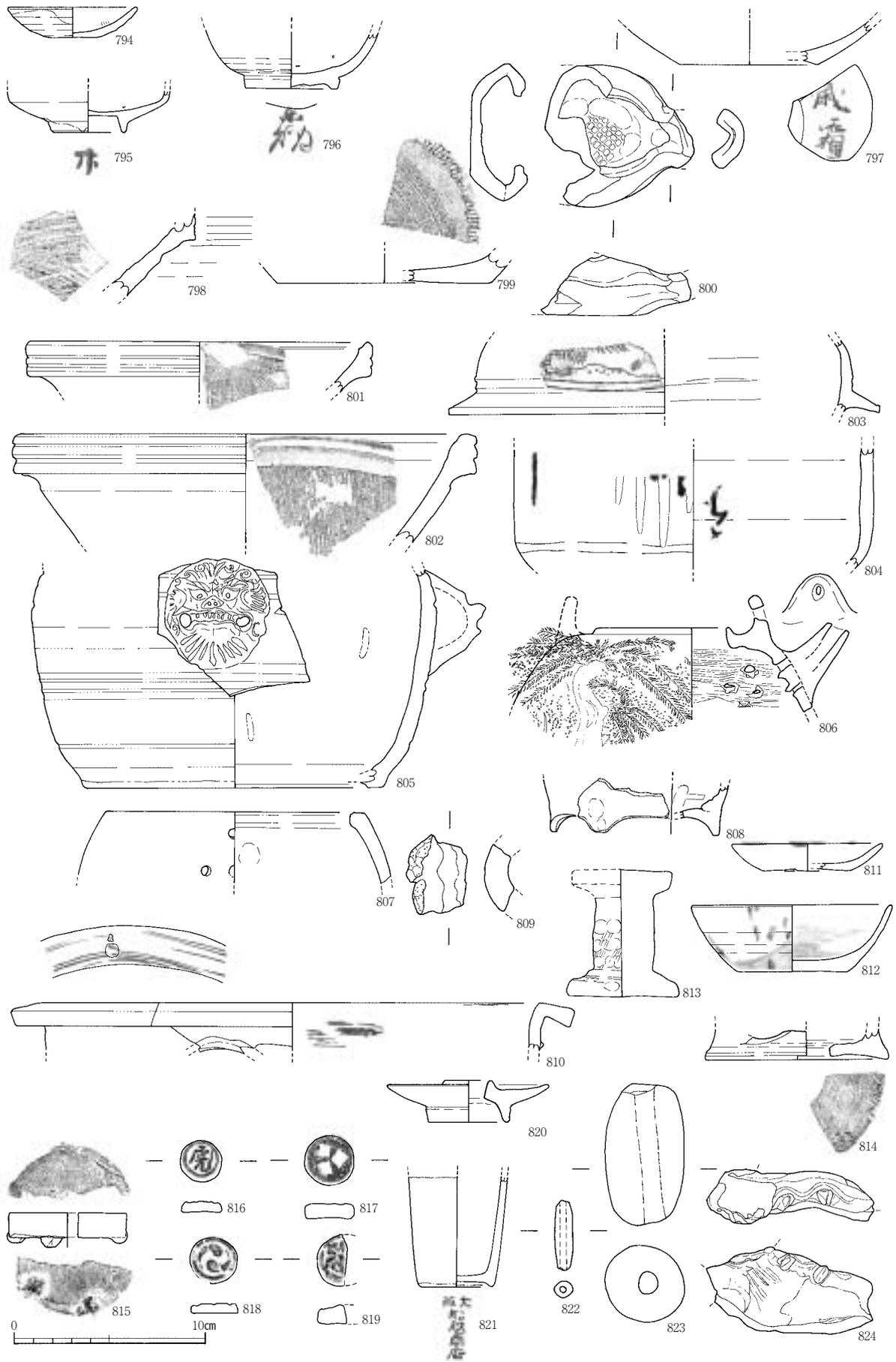


Fig.79 包含層等出土遺物實測圖

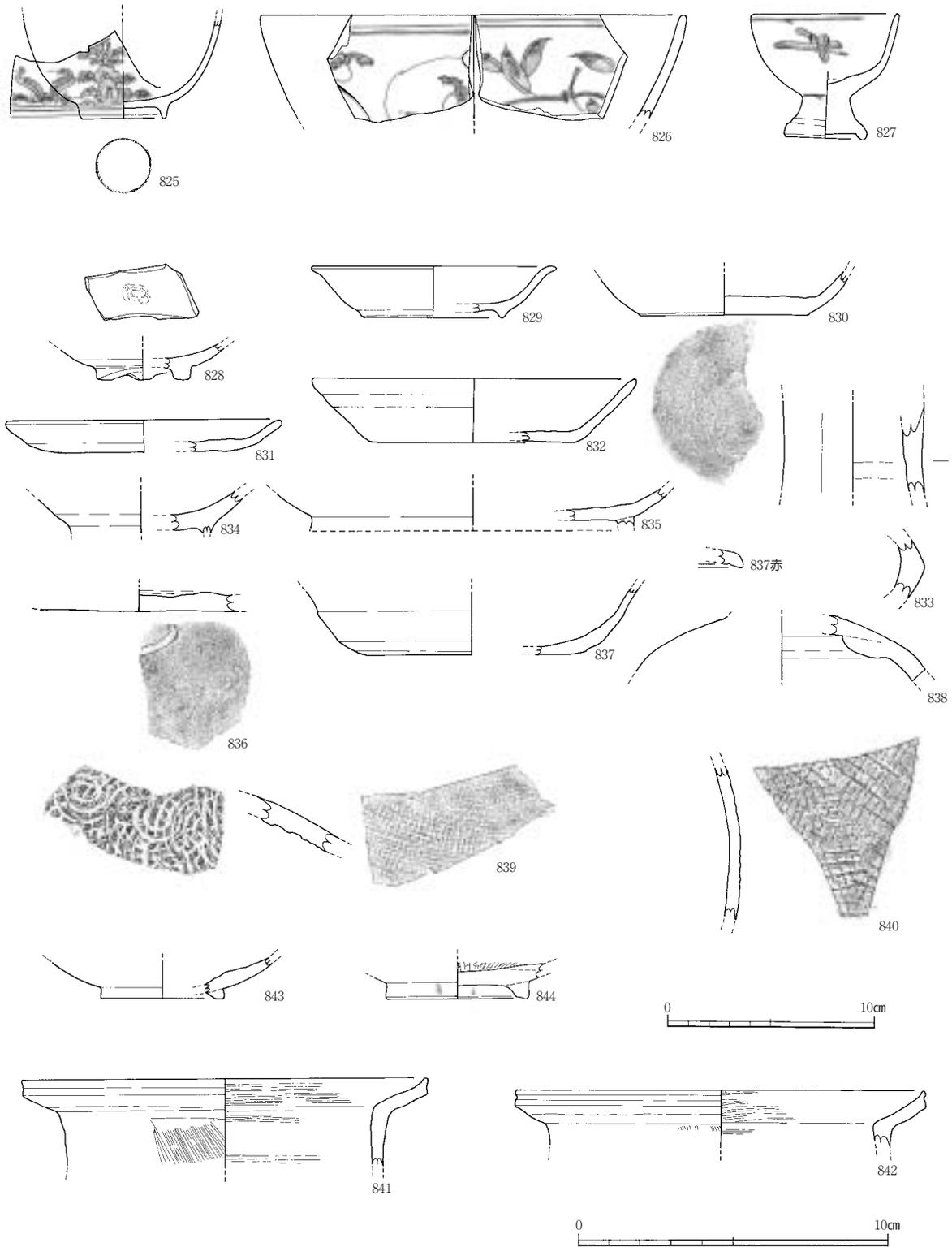


Fig.80 包含層及び古代～中世に属する遺物

観察表凡例（瓦を除く）

- 1 . 出土位置が複数のものは、各々が接合。
- 2 . 法量の計測部位は巻頭参照。
- 3 . 焼塩壺の身の法量は、内法。
- 4 . 発色欄の「断」は断面、「外」は外面、「内」は内面。
- 5 . 肥前産・肥前系の製品については佐賀県立陶磁文化館の大橋康二氏、京・信楽系製品については、滋賀県文化財保護協会の稲垣正宏氏、備前壺・甕については、岡山市企画局総合政策部文化政策課の乗岡実氏のご教示を得た。漆器については、北野信彦氏による第4章第1節を参照した。
- 6 . 「精土」は精製された胎土。
- 7 . 「硬」、「軟」は素地の比較的な焼成状態を示す。
- 8 . 「回」は回転運動の利用、「ケ」はヘラケズリ。
- 9 . 「糸切り」は、回転糸切り。
- 10 . 「摩」は摩耗、「荒」は荒れ・摩耗・傷み、「著」は著しい事を示す。
- 11 . 「C.」は「世紀」。
- 12 . 残存率欄の「完」は完品、「準完」はほぼ完品、「半」は半ば残存。「+」は強、「-」は弱。
- 13 . 文字の判読は、土佐史談会の高橋史朗氏による。編集の都合上、やむなく（ ）や の使用法に若干の変更をさせて頂いた。改行は、スペースで表現した。
- 14 . 下駄の属性は、「汐留遺跡」東京都埋蔵文化財センター 2000年 に依った。

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
1	SX18	土師器	鉢	10.9	6.3	-	-	-	砂岩円粒、 チャート含	-	外底指頭圧痕。内面ハケ+ナデ。外面上位キレツあり。外面被熱変色。摩。		底3/4
2	"	"	"	18.4	6.4	4.8	-	-	"	-	内外タタキ+タテハケ。内面摩、ナデ痕、付着物が。外面被熱変色。		底1/3
3	"	"	"	18.0	9.3	-	-	-	-	-	外面タタキ後部部をナデ。内面細めのハケ+ナデ。口縁端部面取り。		1/4+
4	"	"	"	21.0	13.3	5.8	-	-	チャート含	-	内面斜方向のハケ。外面ナデ仕上げ。下にタタキと指頭圧痕残る。口縁端部面取り。		1/3
5	"	"	甗	-	-	2.8	-	-	チャート他 円粒含	-	外面ハケ+ナデ。口縁端部面取り。口縁外面キレツ。		-
6	"	"	"	-	-	2.8	-	-	砂岩、 チャート円 粒含	-	外面タタキ、胴部ハケ。内面摩、ナデ痕。胴部外面ススク。		底1/4
7	2-4区 SR	土師質 土器	坏	-	-	7.2	-	-	にぶい褐	-	糸切り。摩。		1/4+
8	1-4区 SR 1	-	馬歯	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
9	堀1土橋 東トレ	磁器	小坏	-	-	4.0	-	白磁	-	肥前産	内面降灰。	1630~ 40年代	2/3
10	"	"	"	-	-	2.4	染付	-	-	"	外底露胎。蘭文。	"	1/1
11	堀1土橋 西壁	"	"	7.2	-	-	-	白磁・濁り、 粘りのある釉	-	"	-	1630~ 70年代	1/5
12	堀1	"	小碗	-	-	3.2	染付	-	-	"	釉中に微気泡。被熱か。	1680~ 1730年 代	1/1
13	"	陶器	碗	-	-	4.2	-	内面鉄釉	内黄灰、断 灰白	"	碗と皿の中間的な器形。釉中に多数の気泡。外底露胎、回ケ。	1590~ 1630年 代	1/3
14	堀1土橋 西	"	天目 碗	-	-	-	-	褐釉	断灰白	瀬美系	-	16c.後 半~17 c.前半	2/3
15	堀1土橋 東	"	碗	-	-	5.2	-	灰釉・白濁 した釉	内淡黄	不明	焼成不良。	-	1/1
16	堀1土橋 西	"	"	-	-	5.2	-	灰釉・外底 の釉は白濁	淡黄	肥前系	焼成不良。	-	2/3
17	"	磁器	皿	-	-	9.0	染付	青みがかった 釉	-	肥前産	濃い呉須。部分的に溜りあり。畳付に粗砂。	1630~ 40年代	1/3
18	"	"	瓶	-	-	-	"	白濁し、ねば りのある釉	-	"	頸部に鋸歯状文。残存部の上端に漆継ぎ痕。	17c.後 半	-
19	堀1土橋 東最下層	陶器	水差 し	-	-	-	-	-	内にぶい赤 褐、断灰白	"	白化粧土+錆釉様の鉄硝による文様。素地は焼結進む。	1630~ 70年代	破片
20	堀1中層	"	甗	-	-	-	-	-	外灰褐、断 にぶい赤褐	"	二彩手、内外白化粧土。外面象嵌。	17c.後 半~18 c.前半	"
22	堀1下層	"	播鉢	39.2	-	-	-	-	断橙	-	播り目上端ナデ消されない。口縁外面と体部内面に錆。		1/12
23	SD 2 上層	磁器	碗	13.0	-	-	染付	-	-	肥前系	薄手。	18c.第 4四半 ~19c. 前半	1/13
24	SD 2 底面	陶器	折縁 皿	11.0	2.2	6.6	-	厚い灰釉	断灰白	瀬美系	内外底釉ハギ。外底輪ト子痕か。削出し平高台。		1/2

Tab.3-1 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備 考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
25	SD 2 下層	陶器	折縁 皿	10.7	2.1	5.9	-	厚い灰釉	断灰黄	瀬美系	内底円形釉ハギ。外底輪ドチハクリ痕。		完
26	SD 2	"	-	-	-	-	-	内外褐釉・釉は両面とも流し掛けあり	断灰白	-	内面弧状に釉ハクリ。		1/2
27	SD 2 上層	土師質 土器	坏	10.8	2.7	5.4	-	-	-	-	-		3/4
28	SD 2 下層	"	皿	11.9	2.4	9.0	-	-	にぶい黄橙	-	外面指頭圧痕か。外底2条線圧痕のみ。内外黒色付着物。		1/4 -
29	SD 2 上層	陶器	鉢	-	-	14.0	-	灰釉・流し掛け風の部分あり	断灰白	瀬美系	外底露胎。内底胎土目部分釉ハギ。684と同一か。		1/1
30	"	"	"	20.5	-	-	-	内外灰釉	"	"	683と同一か。	19c. 前半	1/7
31	SD 2 中層		羽口	径 10.3	孔径 2.3	-	-	-	断灰白・胎土にスサ混入	-	先端部。付着したスラグは下方に若干垂れ、炉壁からハクリした耳状部分が残る、正面中央部は灰色、周縁部は黄色がかり気泡多し。		先端 1/2
36	SD 2 上層		銭貨	径 2.2	厚 0.09	-	-	-	-	-	洪武通宝。		完
37	石列 1 掘形上層	陶器	碗	-	-	4.8	陶胎 染付	厚い釉	-	肥前産	畳付に砂。		1/4
38	"	"	"	12.0	8.4	5.2	-	灰釉	断灰白	-	全面施釉。薄い釉膜。ごぼん多数。外面下位回ケ。高台外面の露胎部に、指の痕か。		底1/1
39	石列 1 掘形下層	"	"	13.2	-	-	-	"	"	-	細貫入目立つ。		1/5
40	石列 1 掘形上層	"	"	-	-	5.0	-	全面灰釉	"	-	畳付釉ハギ。高台内素地にキレツ。		1/2 -
41	"	"	"	-	-	5.0	-	不透明灰釉	断灰白・精土	-	全面施釉、ピンホール多し。		1/1
42	石列 1 掘形下層	磁器	大碗	-	-	6.7	染付	-	-	肥前産	精確な成形、均一な器壁と釉厚。繊細な筆致、微妙な濃淡と美しい発色の絵付け。内面に使用による擦痕。		1/4
43	"	陶器	碗	-	-	-	"	灰釉	-	-	-		破片
44	石列 1 掘形上層	磁器	蓋か	-	-	-	上絵付 (赤)	-	-	-	端部内側釉ハギ。		"
45	"	"	瓶	-	-	-	染付	-	-	肥前産	頸部。		"
46	石列 1 掘形下層	陶器	皿	18.8	-	-	-	外面灰釉、内面から口縁端部銅緑釉	断灰白	"	体部内面に段。		1/16
47	石列 1 掘形	"	"	23.2	-	-	-	透明感のない灰釉	"	-	-		"
48	石列 1 掘形下層	"	大皿	26.0	-	-	-	-	断にぶい赤褐	肥前産	二彩手。		1/15
50	石列 1 掘形上層	"	大皿	41.8	-	-	-	-	断にぶい橙	"	二彩手。		1/5
51	石列 1 掘形下層	土師質 土器	小皿	-	-	3.6	-	-	浅黄橙	-	糸切り。軟。摩。		1/1
52	石列 1 掘形	"	"	7.8	1.9	3.6	-	-	にぶい黄橙・精土	-	摩。		底1/3

Tab.3-2 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
53	石列1 掘形下層	土師質 土器	小皿	8.1	1.4	4.2	-	-	にぶい黄橙・ 精土	-	摩。糸切り痕。		底1/2
54	"	"	"	-	-	4.2	-	-	-	-	糸切り。軟。摩。		1/2+
55	"	"	"	-	-	4.2	-	-	にぶい橙・ 精土	-	糸切り。		1/3
56	石列1 掘形上層	"	"	9.8	2.0	-	-	-	にぶい橙	-	-		1/6
57	石列1 掘形下層	"	"	11.6	-	-	-	-	精土	-	軟。摩。		"
58	"	"	皿	11.2	1.7	4.9	-	-	にぶい黄橙・ 精土	-	摩。		1/4-
59	"	"	"	11.3	2.3	5.6	-	-	"	-	"		底1/4
60	"	"	小皿	9.6	-	-	-	-	"	-	口縁内面に凹線。摩。軟。		1/5
61	SX2	磁器	小坏	6.6	4.7	3.0	染付	-	-	肥前産	端反形。曇付砂付着。口縁部 シャープ。	1650～ 70年代	底1/1
62	SX2中層	"	碗	-	-	-	外面の み瑠璃 地+色 絵	-	-	"	色絵は痕跡のみ。	"	破片
63	"	"	皿	-	-	-	染付	ややオリ ブがかつた 釉	-	"	-	1640～ 60年代	"
64	"	"	小碗	-	-	3.8	"	釉白濁	-	"	高台脇にケズリ時の痕跡か。	1650～ 70年代	1/1
65	"	陶器	碗	-	-	6.1	"	-	精土	"	京焼風。漆継ぎ。風景文。 シャープで整いな仕上げ。焼 結並。	1660～ 70年代	1/2-
66	"	"	"	13.4	-	-	-	灰釉	断灰白	-	胎土気孔多。		1/5
67	"	"	碗か	-	-	4.8	-	薄い灰釉	灰白	非肥前 産	内面降灰。	-	1/2
68	SX2	磁器	皿	-	-	8.7	染付	-	-	肥前産	繊細・丁寧な文様。「大明成化 年製」。	1640～ 50年代	1/3
69	SX2中層	"	"	14.2	-	-	"	-	-	"	-	1660～ 70年代	1/6
70	"	"	"	-	-	5.0	-	青磁か・粘 りのある釉	内外明緑灰	"	曇付のみ釉八ギ、砂付着。	1630～ 40年代	1/4
71	SX2上層	"	鉢	12.8	5.5	5.4	染付	-	-	"	蜘蛛文。	1660～ 70年代	1/4+
72	"	"	"	19.5	-	-	-	青磁	-	"	釉厚0.3～0.4mm。	1630～ 17c.後 半	1/12
73	"	"	-	-	-	-	青花	-	-	景德鎮	芙蓉手。極薄手。素地には、 層状の摂理が生じている。	17c.前 半	破片
74	"	陶器	水指	8.8	-	-	鉄絵	-	断灰	肥前産	白化粧土。	1630～ 70年代	1/5
75	SX2中層	"	播鉢	-	-	-	-	-	にぶい橙	-	-		破片
76	SX2下層	"	"	-	-	-	-	-	にぶい赤褐	-	-		-
77	SX2中層	土師質 土器	小皿	7.5	1.4	3.8	-	-	-	-	糸切り。ミズビキ状痕。		1/5
78	SX2上層	"	皿	-	-	10.5	-	-	断灰黄褐	-	糸切り。内面黒色物付着。		1/4-

Tab.3-3 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備 考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
79	SX 2 最下層	土師質 土器	-	-	-	4.9	-	-	外灰黄	-	糸切り。内底ラセンナデ。		9/10
99	SX 4	陶器	碗	-	-	4.6	染付	濁りのある 釉	-	-	陶胎染付。素地厚手。	17c.後 半	1/2 -
102	SK 1	土師質 土器	-	-	-	6.0	-	-	にぶい橙・ 精土	-	摩。		1/5
103	SK 2	磁器	大形 香炉	-	-	11.0	-	青磁	外明緑灰断 灰白	肥前産	外底釉八ギ、蛇ノ目状に錆。 外面の突部に沈線。三足が付 く可能性あり。	17c.後 半	1/8
104	瓦溜 8	"	小坏	-	2.0	3.0	-	白磁	-	"	全面施釉。畳付に砂。	17c.中 頃～末	1/1
105	"	"	小碗	18.6	-	-	-	"	-	"	-	17c.後 半～18 c.初頭	1/4 -
106	"	"	皿か 鉢	-	-	-	染付	外面青磁釉	-	肥前産 (有田)	青磁染付。輪花。	1690～ 1730年 代	破片
107	瓦溜 8 西上層	"	碗	-	-	3.8	"	-	-	肥前産	薄手。	1670～ 1700年 代	1/5
108	埋桶 1 床板直上	"	小碗	-	-	3.3	-	白磁	-	肥前系	畳付内縁に微細砂。菊花形状 の稜。	17c.後 半～18 c.初頭	1/1
109	瓦溜 8	"	碗	-	-	-	内面 染付	外面青磁	-	肥前産 (有田)	青磁染付。被熱。	1680～ 1730年 代	破片
110	瓦溜 8 西上層	"	"	-	-	-	染付	-	-	肥前産	下面下位や高台内に圈線。被 熱か。	1690～ 1730年 代	"
111	瓦溜 8	陶器	"	-	-	5.0	-	灰釉	内外灰白・ 断灰黄	京都系	外底露胎。薄手。成形丁寧。	17c.後 半か	1/2 -
112	"	"	"	-	-	-	葉脈 は金	灰釉・文様 の葉は青磁 釉か	断灰白	-	-		破片
113	"	磁器	"	-	-	-	刷毛目	-	明色の素地	肥前系		17c.後 半～18 c.初	-
114	"	陶器	"	-	-	5.0	"	灰釉か	断黄灰	肥前産	被熱著。畳付のみ釉八ギ。	-	1/4 -
115	"	"	大皿	44.8	-	-	色絵	化粧掛けあ り	-	福建省	被熱。半磁器。	17c.前 半	1/24
116	"	"	蓋	-	-	-	-	上面緑釉	断暗灰	肥前産	下面糸切り痕。	1660～ 80年代	-
117	"	磁器	壺	9.4	-	-	染付	-	-	肥前産 (有田)	口縁部釉八ギ。内面部分的に 露胎。鋸歯状文。被熱。	1670～ 90年代	1/4
118	"	"	壺蓋	10.0	-	-	-	白磁・内面 も薄く施釉	-	肥前産	受部下面に微細砂附着。被熱 により釉に影響。	17c.後 半～18 c.前半	1/4 -
119	"	"	壺	-	-	10.0	-	"	-	"	畳付のみ釉八ギ。被熱。	17c.後 半	1/7
120	"	"	-	-	-	-	染付	-	-	肥前産 (有田)	型押成形。内面押圧。外面に レリーフ状文様。内面と外底 露胎。	1670～ 1710年 代	-
121	瓦溜 8	土師質 土器	皿	10.8	2.5	6.6	-	-	にぶい褐	-	糸切り。硬質。赤レキが融解。		1/8
122	"	"	"	13.4	3.3	8.8	-	-	-	-	糸切り。		1/10

Tab.3-4 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
123	瓦溜 8	-	-	厚さ 1.7	-	-	-	-	外にぶい赤 褐・スサ多 含。	-	直径 5 ~ 6 mm の管状の圧痕。 表は平らに成形。裏面は未調 整か。		破片
125	"	陶器	播鉢	-	-	8.2	-	-	断灰白	備前	-		1/4
126	"	"	鉢	-	-	-	-	-	内黄灰・断 にぶい黄橙	-	須恵質。比較的滑らかな仕上 げ。口縁外面重ね焼き変色。		破片
127	"	"	大皿	-	-	-	-	灰釉	内灰オリー ブ・外灰白・ 断灰	肥前産	被熱著、釉剥落。三彩又は三 島か。	17c.	-
128	"	"	"	-	-	14.8	-	-	内褐・灰白・ 断にぶい赤 褐	"	二彩手。内底砂目、畳付にも 重ね積み圧痕。	17c.	1/5
129	"	"	甗	28.0	-	-	-	-	灰	備前	焼結良好、一部ガラス化。肩 部以下薄い自然釉。		1/11
130	"	"	"	-	-	-	-	-	内外暗赤褐・ 断灰	"	硬。		破片
131	"	"	"	-	-	-	-	-	断灰褐	"	凹線が内面に反映。環状の浮 文。		"
132	"	"	"	-	-	-	-	-	内外暗灰・ 断灰	"	-		"
133	"	"	大甗	-	-	-	-	-	外にぶい赤 褐・断にぶ い橙	"	口縁内面ウロコ状ハクリ。138 と形態酷似。	慶長頃	-
134	"	"	"	-	-	-	-	-	内外灰赤・ 断灰黄褐	"	口縁外面から端部にかけて、 表面のハクリ著。	"	-
135	"	"	"	-	-	-	-	-	外黒褐・断 にぶい赤褐	"	-	"	-
136	"	"	"	-	-	-	-	-	内外暗赤褐・ 断にぶい赤 褐	"	-	"	破片
137	"	"	"	-	-	-	-	-	外灰褐・断 にぶい赤褐	"	口縁内外と肩部外面の表面に ハクリ、特に口縁外面は著。 口縁内面に焼成以前の縦位の 擦痕。	"	-
138	"	"	"	-	-	-	-	-	内外にぶい 赤褐・断明 褐灰	"	外面にウロコ状ハクリ。内面 ヨコナデ痕。133と形態酷似。	"	-
139	"	"	"	-	-	-	-	-	外暗赤褐・ 断にぶい赤 褐	"	口縁部や肩部外面の表面にハ クリあり。	"	-
140	"	"	"	-	-	-	-	-	内外暗赤褐・ 断にぶい赤 褐	"	-	"	-
141	"	"	"	-	-	-	-	-	外暗赤褐・ 断橙	"	ハクリした口縁外面。棒状工 具を用いて外側へ折り曲げ。	"	-
142	"	"	"	-	-	-	-	-	にぶい褐	"	外面円錐形ハクリ。	"	-
143	P13	瓦質	焔炉	-	8.4	-	-	-	断面にぶい 褐・赤レキ・ 雲母含	-	円形の低い脚。底部と体部の 接合部でハクリ。		-
144	SD3	磁器	小皿	-	-	6.4	上絵付 の痕跡	-	-	瀬美系	型作り。蛇ノ目凹形高台。	明治以 降	1/4
145	SD 3	陶器	灯明 皿	14.8	-	-	-	-	暗赤褐	-	焼締。外底回ケ。		1/12
152	SX 6	"	碗	-	-	5.4	陶胎 染付	-	-	-	丸形。厚手。内底に融着物。	18c. 前 半頃	1/2

Tab.3-5 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
153	SX 6	陶器	碗	-	-	5.7	-	濁った灰釉	-	肥前産か	砂目。全面施釉。	1610～ 30年代	3/4
154	"	"	甕	-	-	-	-	-	断灰・長石 他の粗粒含 む	-	外面押圧のある環状浮文、凹 線。硬。	不明	-
158	SX 7	土師質 土器	皿	-	-	4.6	-	-	-	-	外底糸切り、内底ラセンナデ 痕。底部中央穿孔。		5/6
159	"	陶器	土鍋 蓋	19.0	-	-	-	内面褐釉	-	関西系	行平形。外面飛鉋、錆。		1/5
160	"	"	鉢	27.0	-	-	-	灰釉	断にぶい橙	肥前産	内面白化粧土+ハケ目文。外 面下位露胎。	17c.後 半～18 c.中頃	1/10
161	"	"	播鉢	-	-	15.0	-	-	-	-	-		1/4+
162	SX 8	磁器	皿	19.6	-	-	染付	-	-	肥前産	厚手。	1610～ 30年代	1/9
163	"	陶器	甕	-	-	-	-	灰釉	断紫灰	"	三島手。	17c.前 半	破片
164	"	"	土瓶	-	-	-	-	外面灰釉	断灰	-	-	19c.	-
165	"	瓦	-	-	-	-	-	-	外灰黄褐・ 断にぶい橙	-	片面縄目か。片面布目。摩著。		破片
168	SX 9 下層	磁器	碗	10.8	-	-	染付	-	-	肥前系	内面に連弁状の痕跡。口縁内 面に浅い沈線、呉須による2 条圏線。薄手。	1780～ 1840年 代	1/11
169	SX 9	"	蓋	-	-	摘み径 3.6	"	光沢のある 釉	-	非肥前 産、肥 前系	-	1820～ 60年代	1/5
170	SX 9 下層	陶器	不明	12.0	-	-	-	灰釉	断灰	非肥前産	内外白化粧土。口縁外面に凹 線。	-	1/7
171	"	"	皿	15.0	-	-	-	内外褐釉	断黄灰	不明	口縁内に段。	-	1/8
172	"	磁器	碗	-	-	4.6	染付	やや青みが かった釉	-	肥前産	薄手。内底点状の融着物。	1670～ 1700年 代	1/1
173	SX 9	"	"	-	-	-	-	-	-	肥前系	174の口縁か。	1690～ 1710年 代	破片
174	SX 9 下層	"	不明	-	-	7.8	染付	-	-	肥前産	コンニャク印五弁花。被熱。	1690～ 1730年 代	1/6
175	SX 9 床	陶器	皿	-	-	4.1	-	灰釉	内灰黄・断 にぶい褐	肥前系	胎土目。外底露胎。削出し高 台。		1/2
176	SX 9 下層 /瓦溜10	磁器	火入	10.5	7.3	7.6	-	青磁	-	肥前産	外底と内面体部以下露胎。SX 9 下層と瓦溜10が接合。	17c.後 半	底1/1
177	SX 9 下層	陶器	碗	12.5	8.5	4.9	-	濁った灰釉	-	"	豊付のみ釉ハギ。高台外角ケ ズリ。	17c.後 半頃	"
178	"	"	播鉢	22.8	-	-	-	-	断赤橙	-	外面重ね焼痕。		1/15
179	SX 9 上層	"	不明	-	-	13.4	-	-	外還元銀色・ 断灰黄・石 英・長石の 粗粒多含	-	焼締。荒れ。		1/8
180	SX 9 下層	陶器	大甕	-	-	-	-	-	外灰褐・断 灰	備前	-	慶長頃	-

Tab.3-6 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備 考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
197	SX10上層	磁器	小鉢	6.1	3.2	3.1	染付	-	-	肥前産	口縁部釉ハギ。千鳥文。	1760～ 1800年 代	1/2
198	"	"	碗	8.6	-	-	"	-	-	肥前系	薄手。呉須は濃いめの発色。 釉濁る。	1810～ 1840年 代	2/7
199	"	"	小碗	-	-	-	"	-	-	"	広東形。	1770～ 1820年 代。 中心は 1780年 代	破片
200	"	"	碗	12.1	6.4	5.4	"	-	断明灰	"	広東形。厚手。		2/3
201	"	"	"	11.7	-	-	"	-	-	肥前産	丸形。	1760～ 90年代	1/4
202	SX10下層	陶器	小碗	9.0	5.7	3.7	"	-	-	瀬美系	口縁部より流し。粗い貫入。 胎土の焼結不良。		完
203	SX10上層	"	碗	9.8	-	-	-	灰釉	-	京信系	筒形。体部中位内面オリブ 色の一条の圏線。		1/9
204	SX10 上層・下 層/南肩	"	小碗	9.4	5.4	3.4	-	"	-	"	貫入が黒変。下位内外ピンク がかかる。	19c.	ほぼ完
205	SX 5	"	碗	9.3	6.0	4.4	-	"	内外灰黄	-	細貫入。高台内ラセンケズリ 痕。		-
206	SX10下層	"	"	10.0	6.0	5.2	-	"	断灰白	-	ごほん。		1/2
207	SX10上層	"	"	9.6	6.3	3.8	-	"	"	-	-		底1/1
208	"	"	"	-	-	4.0	-	"	-	尾戸	高台内ラセンケズリ。		底 1/2+
209	"	"	"	-	-	5.0	-	"	断灰白	-	-		底3/7
210	SX10下層	磁器	蓋付 鉢	9.2	5.0	4.7	染付	-	-	肥前産	口縁内面、畳付釉ハギ。外面一ヶ 所の磁器胎土融着片を研磨処理。	1760～ 90年代	3/4
211	"	"	皿	13.0	2.6	7.1	"	-	断灰	波佐見	くらわんか手。コンニャク印 判。厚手。ややオリブがか る。内底蛇ノ目釉ハギ。畳付 砂付着。	18c.後 半か	1/2
212	SX10上層	"	鉢	14.3	4.3	8.5	"	-	-	肥前産	輪花。畳付内側砂付着。	18c.後 半	1/4
213	"	"	碗蓋	9.4	-	-	"	-	-	肥前系 ?	端反形。薄手。	1820～ 60年代	1/4+
214	"	"	"	-	-	摘み径 5.8	"	-	-	肥前産	見込太極図文。広東形。	1780～ 1810年 代	摘み 1/1
215	SX10 上層/南肩	"	-	幅 1.9	-	-	-	透明釉	-	-	-		-
216	SX10上層	"	蓋	7.5	1.9	-	染付	-	-	肥前産	口縁部釉ハギ。	18c.第 4四半	1/3+
217	"	"	"	9.4	2.4	-	"	-	-	"	"	18c.後 半	3/7
218	SX10下層	"	"	9.0	2.1	-	"	-	-	"	上面釉厚0.3mm。口縁釉ハギ。	1760～ 90年代	1/2±
219	SX10上層	陶器	碗	13.4	4.2	5.6	-	褐釉・釉垂 れ	断にぶい赤 褐・細砂粒 含	大谷	外底露胎。	1820～ 30年代 から19c. 第2四半	底1/1

Tab.3-7 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
220	SX10上層	陶器	不明	14.4	-	-	-	乳白色釉	断灰白	-	底部内外とも露胎。		1/9
221	"	-	焼塩壺	5.4	6.3	3.6	-	-	雲母・赤レキ含	-	内面布目。		1/7
222	"	磁器	瓶	-	-	3.3	染付	半濁釉	-	波佐見	コンニャク印判。内外施釉。豊付釉ハギ。	18c.前半～中頃	底1/1
223	"	陶器	小壺	-	-	3.7	-	内外褐釉	精土	大谷	油壺か。内底融着物。外底露胎部明赤褐。外底糸切り。	1820～30年代以降	"
224	SX10下層	"	皿	20.6	4.6	7.0	鉄絵	灰釉	-	尾戸	内面蛇ノ目釉ハギ。高台内露胎・過巻状ケズリ。		1/4 -
225	SX10上層	"	土鍋	14.0	-	-	-	褐釉	-	-	注口付。		1/4 +
226	SX10上層/南肩	"	播鉢	-	-	-	-	-	-	-	-		破片
227	SX10下層	"	土瓶蓋	6.6	2.4	3.9	-	上面厚い鉄釉	-	-	菊形摘み。下面回ケ。		完
228	SX10上層	"	瓶	3.2	21.4	底径8.4 胴径11.5	-	灰釉・内面にも薄い釉	断灰白	-	底部露胎。肩部櫛状工具による糸線。胴部に刺突による刻書。		準完
229	"	"	-	-	-	8.8	-	灰釉	"	-	外底露胎。		3/7
230	"	磁器	紅猪口	5.0	1.3	1.4	-	白磁	-	-	外面露胎。		完
231	"	"	仏飯器	7.8	-	-	染付	-	-	肥前産	淡い呉須。雨降り文。	18c.前半	1/3
232	SX10	土師質土器	火具	-	-	-	-	-	外暗灰・オリープ黒・雲母多含	-	外面押型文、刻線文。突起部のハクリ痕あり。口縁部摩、被熱。		破片
233	SX10下層	"	焔炉	-	-	19.6	-	-	金雲母多含・赤色風化レキ含・チャート少量	-	窓の内側は貼付・肥厚。穿孔部6穴以上。外面板状工具による回転調整+丁寧ナデ。内面ナデ。窓及び穿孔部ススケ。		1/4 -
234	SX10上層	陶器	柄杓	9.4	5.3	4.7	色絵(緑・赤)	灰釉	断灰白	京信系	外底露胎。薄手。		1/2
235	"	"	灯明皿	12.6	-	-	-	"	-	-	内面クシ目。		1/9
236	"	土師質土器	小皿	3.9	0.6	2.0	-	-	橙	-	内面口クロナデ痕。外底糸切り。		1/2 -
237	SX10上層/南肩	"	"	6.6	1.4	3.9	-	-	"	-	口縁部にススケあり。内面タール付着。外底糸切り。		底1/1
238	SX10上層	"	皿	12.0	2.4	6.9	-	-	-	-	糸切り。		1/4 +
239	"	"	"	12.0	2.1	6.0	-	-	内橙	-	糸切り。外底の一部に黒色物質付着。		1/7
240	"	"	"	11.5	2.0	9.1	-	-	断灰白・精土	尾戸	白土器。内底押型文による陽刻文。全面平滑、全面黒色物質付着、口縁部は黒色物質付着著。		3/4 -
241	SX10下層	"	"	18.2	3.3	11.5	-	-	内橙色・精土・火山ガラス多含	-	内外ミガキ仕上げ。外面黒変。		1/4 -
242	SX10上層	"	坏	11.8	3.7	6.8	-	-	-	-	糸切り。		底1/1
243	"	窯道具	足付八マ	直径11.0	内径4.4	高さ1.3 高さ2.5	-	-	-	-	糸切り痕。足と本体の胎土色異なる。		1/4 +

Tab.3-8 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
244	SX10	金属器	調度 把手	座金径 1.90	環径 1.95	-	-	-	-	-	-	-	-
255	SX11	磁器	碗	9.7	5.1	3.8	染付	-	-	肥前系	広東形。貫入多。	1780～ 19c.第 1四半	3/4
256	"	陶器	碗	9.1	5.2	3.4	-	白濁した灰 釉	断灰白	京信系	粗めの貫入が黒変。外底露胎。		6/7
257	"	"	"	9.0	-	-	染付か	灰釉	"	"	外底露胎。		1/4+
258	"	磁器	碗	10.6	6.2	6.2	染付	-	-	肥前系	広東形。千芝福寿文。	1780～ 1840年 代	底1/1
259	"	"	碗蓋	8.2	2.4	摘み径 4.3	"	-	-	"	広東形。	"	完
260	"	土師質 土器	皿	11.6	2.2	7.4	-	-	内にぶい黄 橙	-	口縁端部つまみ上げ。外底系 切り。		底1/3
261	"	"	"	19.6	3.4	13.4	-	-	断にぶい赤 褐	-	全面平滑。外面回ケ痕。内面 黒色物質膜。外面黒変、黒色 物若干付着。		1/4+
262	"	金属器	煙管	全長 6.3	外径 1.1	-	-	-	-	-	銅合金。接合部に亀裂。	-	-
263	"	土師質 土器	焙烙	32.0	-	-	-	-	断にぶい橙・ 雲母多含・ 赤レキ含	-	外面ススケ。		1/8
264	"	陶器	土鍋	18.0	-	-	-	内外褐釉	-	-	体部外面回ケか。	-	1/5
265	"	"	"	10.6	-	-	-	外面灰釉・ 内面下位薄 い釉	外灰オリ ブ・断灰	-	上位ススケ。		1/3
266	"	土師質 土器	焔炉	-	-	19.8	-	-	内灰黄褐・ 雲母多含	-	脚部。接合部凹凸加工。		1/5
271	SX13東壁 下層	磁器	小坏	5.4	2.4	2.1	赤絵	-	-	肥前産	海老文。	19c.前 半	1/4
272	SX13 東壁中層	"	"	7.2	3.8	2.6	染付	-	-	肥前系	畳付に砂。	19c.前 半頃	底1/1
273	SX13東壁 層	"	"	7.0	3.3	2.8	"	-	-	肥前産	釉厚0.4mm±。釉中に気泡あり。 畳付に砂。	18c.中 頃～末	"
274	"	"	"	5.6	3.3	3.6	"	-	-	"	-	18c.後 半～19 c.初頭	1/2
275	SX13東壁 中層	"	"	5.4	3.7	2.8	"	-	-	"	畳付に砂。	18c.後 半	底1/1
276	SX13東壁 下層	"	"	6.3	3.0	2.1	"	-	-	肥前系	釉中に微気泡あり。	1780年 代～19 c.前半	完
277	SX13 層	"	小碗	9.0	4.4	4.4	"	-	-	"	-	19c.前 半	1/4+
278	SX13	"	碗	9.4	4.9	3.8	"	-	-	"	端反形。細貫入。口縁内面に 雨龍文。	"	底1/1
279	SX13下層	"	"	9.6	5.0	3.8	"	-	-	-	端反形。器厚薄い。	文化～ 1840年 代	完
280	SX13	"	"	9.2	4.9	3.6	"	-	-	肥前産	半球形。	18c.第 4四半	1/2+
281	"	"	"	9.5	-	-	"	-	-	肥前系	口縁端反り。薄手。鋭い口縁 端部。	19c.前 半	1/5

Tab.3-9 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
282	東壁 層	磁器	小碗	10.4	-	-	菊文の 地に染 付	-	-	肥前系	型紙摺り。桐文・菊文。		1/4
283	SX13 層	"	"	9.0	4.8	4.0	染付	-	-	"	広東形。梵字文。	1780～ 19c.初 頭1820 年代	1/8
284	"	"	"	9.9	5.4	3.6	"	-	-	"	小広東形。仙芝祝寿文。見込 み昆虫文様くすね。	1780～ 1810年 代	底1/1
285	SX13東壁 下層	"	碗	9.2	4.6	4.6	"	-	-	"	端反。薄手。	19c.前 半	1/3
286	SX13	"	"	10.6	5.7	5.9	"	-	-	"	広東形。漆継ぎ。		3/4
287	SX13東壁 中層・下層 /東トレ	"	"	10.0	6.3	6.0	"	-	-	-	広東形。		底1/1
288	SX13東壁 下層	"	"	11.7	6.2	6.5	"	-	-	肥前系	"	1780～ 1840年 代	1/2
289	SX13東壁 中層	"	"	11.8	6.6	6.6	"	-	素地は焼結 不良・やや 褐色がかる	瀬美系	広東形。疎い貫入。呉須は薄 く、ぼやける。		準完
290	SX13東壁 層	"	"	11.2	6.3	6.4	"	-	-	肥前系	広東形。	1780～ 1840年 代	底1/1
291	SX13東壁	"	"	14.0	-	-	上絵か	-	-	肥前産	外面に付着物。	18c.～ 19c.初 頭か	1/4
292	SX13	"	"	10.2	5.3	3.8	染付	-	-	肥前系	外側コンニャク印文。丸碗。 内底降灰。外面被熱。	18c後 半頃	4/5
293	SX13東壁 下層	"	小碗	6.5	4.9	3.3	"	-	-	肥前産	筒形。コンニャク印判。	1770～ 90年代	完
294	SX13東壁 /東トレ	"	碗	10.6	4.5	-	"	-	-	"	-	18c.後 半	1/6
295	SX13 層	"	"	-	-	5.8	"	-	-	不明	筒形。		1/5
296	SX13東壁 下層	"	"	-	-	-	"	-	-	肥前産	釉厚0.4mm。釉中に微気泡。高 台ハの字。波と梅文。	18c.後 半	破片
297	"	"	蓋付 鉢	10.2	5.0	4.8	"	-	-	"	-	18c.第 4四半 ～1810 年代	3/7
298	SX13東壁 中層・下層	"	"	8.6	4.7	4.2	"	-	-	肥前系		不明	底1/1
299	SX13	"	"	9.0	5.0	4.4	"	-	-	-	外底に施釉前の三本沈線。		1/2 -
300	SX13東壁	陶器	天目 碗	11.4	-	-	-	褐釉	断面灰黄・ 長石・石英 多含	-			1/7
301	SX13東壁 層 /東トレ	"	碗	11.8	-	-	鉄絵	灰釉	-	京信系	注連縄文。		1/6
302	SX13	"	"	10.4	-	-	"	"	-	"	"	19c.	1/4
303	SX13東壁 下層	"	"	9.4	5.2	3.4	"	"	-	"	細貫入。		準完
304	"	"	"	8.4	5.5	3.2	-	"	-	"	細貫入。底部中央に亀裂。		1/2 -

Tab.3-10 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
305	SX13	陶器	碗	10.6	-	-	鉄絵	灰釉	-	-			1/8
306	SX13層・層	"	"	-	-	5.8	上絵(緑)	"	-	京信系	細貫入。		底2/3
307	SX13	"	"	9.6	-	-	外面薄い鉄絵	"	-	-	-		1/4+
308	SX13東壁下層	"	"	9.2	5.9	3.8	-	"	-	在地	外底墨書「(次カ)」。		底1/1
309	SX13層	"	"	9.2	6.0	4.0	-	"	-	"	細貫入。		底1/2
310	SX13東壁下層	"	"	9.6	6.3	4.4	-	"	-	-	高台内ラセンズリ。		底3/4
311	"	"	"	9.6	6.2	4.3	-	"	-	在地	-		1/5
312	SX13東壁/東トレ	"	"	9.6	6.4	3.8	-	"	-	"	高台外端弱ナデ。口縁外や肥厚。		底4/5
313	SX13層・層/東トレ	"	"	12.6	-	-	-	"	-	"	口縁内外に僅かに釉たまる。		1/4+
314	SX13	"	"	-	-	3.2	-	"	-		細貫入。外底墨書あり。		4/5
315	"	"	"	-	-	5.0	-	"	-	不明	細貫入。内底に不明凹線。畳付以外全面施釉。畳付摩。		1/4
316	SX13層	"	"	9.6	-	-	-	口縁銅緑釉	-	京信系	細貫入。		1/8
317	"	"	"	9.0	4.7	3.0	-	上方より銅緑釉	-	"	比較的粗目の貫入。		1/2
318	SX13	磁器	皿	-	-	-	染付	-	-	-	白抜き紋様。		破片
319	SX13層	"	不明	-	-	4.2	-	白磁	-	-	高台内露胎、高台周縁釉ハギ、カンナ痕。内底蛇の目釉ハギ、ハクリ砂塗布。		1/4
320	SX13層	"	皿	14.2	4.7	7.9	染付	-	素地灰白	波佐見	コンニャク印判五弁花。輪花。器厚手。畳付砂付着。内底わずかなロク口目残る。	18c.後半	3/4+
321	SX13東壁中層	"	"	-	-	8.0	"	-	-	肥前産	蛇ノ目凹形高台。菊花形。畳付も施釉、外底蛇ノ目部分釉ハギ。	1780~1840年代	1/3
322	"	"	"	12.8	-	-	"	-	-	-	口縁断面ピンホール。		1/6
323	SX13	"	小皿	11.4	-	-	-	白磁	-	不明	菊花。		1/7
324	SX13層	陶器	皿	9.8	-	-	-	灰釉	断灰白	-	外底露胎。		1/4
325	SX13	磁器	碗蓋	8.2	2.4	摘み径3.6	染付	-	-	肥前系	端反形。	文化~1840年代	摘み3/4
326	SX13東壁	"	蓋	4.6	1.7	-	染付+上絵	-	-	肥前産	色絵。上絵は痕跡のみ。ごく一部に赤色残る。	18c.後半~19c.初頭	1/6
327	SX13東壁層	"	碗蓋	7.7	2.5	摘み径4.4	染付	-	-	肥前系、肥前産かも	広東形。	1780~1840年代	2/3
328	SX13	"	鉢蓋	8.6	2.7	-	"	-	-	肥前産	-	18c.第4四半~19c.初頭	1/2+

Tab.3-11 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
329	SX13東壁 下層	磁器	鉢蓋	9.1	2.5	-	染付	-	-	肥前系	細貫入。	18c. 第 4 四半 ~ 19c. 初頭	準完
330	SX13 層	"	"	8.7	2.3	-	"	-	-	-	-		1/2
331	"	"	碗蓋	10.5	-	-	"	-	-	肥前産	-	18c. 第 4 四半 ~ 1810 年代	1/4
332	"	"	蓋付 鉢	8.8	-	-	"	-	-	-	細貫入。		1/5
333	SX13東壁 層	-	焼塩 壺蓋	6.0	2.0	-	-	-	にぶい黄橙・ 雲母多含	-	内面布痕。		完
334	"	-	"	6.4	1.4	-	-	-	雲母・赤レ キ含	-	内面布目。上面板状工具痕。		"
335	"	-	焼塩 壺	4.8	5.9	3.5	-	-	雲母多含	-	内面粗い布目、接合痕。		"
336	"	-	"	5.6	6.2	3.6	-	-	にぶい黄橙	-	内面布痕、粘土板接合痕。底は 粘土塊を押し入れて閉塞。外面押 圧痕、ナデ仕上げ。		"
337	"	陶器	播鉢	29.4	-	-	-	-	外・断赤褐	-	-		1/10
338	SX13 層	"	"	32.0	-	-	-	-	外灰赤・断 にぶい赤褐	-	-		"
339	SX13	"	鉢	24.0	-	-	-	内外半濁釉	外明赤褐	-	白土による装飾。		1/4 -
340	SX13東壁 下層	土師質 土器	焙烙	31.0	6.0	-	-	-	雲母・赤レ キ多含	-	口縁部外面に接合痕。内底黒変、 外面ススケ。外底荒れ。搬入品。	18c. 末 ~ 19c.	1/3
341	SX13 層	陶器	土鍋	18.0	8.1	7.9	-	鉄釉	-	-	三足。内底メアト 5 点。		1/2
342	SX13 層	"	土瓶	6.4	-	胴径 16.2	-	黒褐色釉	断灰	-	内面露胎。		1/2 -
343	SX13中層	"	"	6.8	-	-	-	灰釉	-	-	外面凹線多条。注口部 3 穴。		2/5
344	SX13 層	"	"	7.0	-	胴径 19.1	-	外面灰白色 釉	-	-	外面下位変色、帯状に釉ハクリ、 ススケ。内面黒色物質付着、下 位に顕著。		3/7
345	SX13東壁 下層	磁器	紅猪 口	4.5	1.5	1.3	-	-	-	肥前系	外底露胎。	18c. 第 4 四半	完
346	SX13	不明	不明	6.4	1.8	3.6	-	上面鉄釉	内赤・外極 暗褐	-	外面指痕。外底糸切り。		"
347	SX13 層	陶器	小三 足	6.4	2.9	3.0	-	鉄釉	-	-	外底露胎、回ケ仕上。		1/4
348	"	磁器	小瓶	-	胴径 5.2	3.4	染付	-	-	肥前産	ラッキョウ形。豊付に砂。若松 文。	18c. 第 4 四半 ~ 19c. 第 1 四 半	1/1
349	"	陶器	-	12.0	-	-	-	外面と口縁 部に灰白色 釉	-	-	-		1/2 -
350	"	"	不明	-	-	7.4	-	内外濃い褐 釉	断灰	-	高台及び高台内露胎。		1/5
351	SX13 層 /東トレ	磁器	合子 身	5.3	2.1	4.0	-	白磁	-	肥前産	口ク口陽刻型押成形。外底釉ハ ギ。フタ接触部分に砂。菊・雲・ 波涛文。	18c. 代 か	1/2 +
352	SX13東壁 中層	"	髪油 壺	2.4	-	-	染付	-	-	"	窯割れ。扁平形。	18c.	-

Tab.3-12 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
353	SX13東壁 中層/東トレ	陶器	蓋	9.8	-	-	-	灰釉	断灰白	-	口縁部のみ釉ハギ。焼成良好。		1/2 -
354	SX13 層	"	"	7.3	2.6	-	-	上面鉄釉	外暗褐・断灰	-	内面墨書「(賄方カ)」。		2/3
355	SX13東壁 層	"	灯明 皿	10.6	1.8	4.4	-	上面灰釉	断灰白	-	外面口縁直下まで回ケ仕上。口縁部の1ヶ所を中心に、タール付着。		1/3
356	SX13	"	"	11.7	2.5	5.0	-	灰釉浸け掛け	"	-	内面クシ目・三足ハマ跡。外面は口縁部以外露胎・回ケ。口縁部タール付着。		2/3 -
357	SX13 層	"	"	11.0	2.9	3.8	-	灰釉	"	-	外面は口縁部以外露胎。外面下半回ケ。内面クシ目、菊文貼付。窯道具痕か。		完
358	SX13	磁器	火入れ か香炉	12.0	-	-	-	外面・口縁部内面青磁釉	-	肥前産	-	17c.後半~18c.前半	1/10
359	SX13 東トレ 中層	土師質 土器	火具	-	-	-	-	-	褐色土と灰白色土を重ねた胎土、文様・火山ガラス多含	-	練込み手。外面回ケ。		破片
360	SX13東壁 中層	"	火入	7.0	6.4	5.4	-	-	にぶい赤褐・雲母細片含	-	内面の突起と外底の脚は、粘土塊を圧着。外面ミガキ。		底2/5
361	SX13 層	瓦質 土器	釜か	-	-	-	-	-	外黒	-	外面文様帯に菊・桐の押型陽刻文。外面ミガキ。		破片
362	"	土師質 土器	皿	13.2	2.1	9.6	-	-	内外にぶい橙・精土	-	外面平滑仕上げ。		1/7
363	SX13東壁 層	"	"	17.9	3.7	11.2	-	-	内外淡赤橙・精土	-	内外平滑。外面ミガキ状仕上げ。外底同心円痕。		2/3 -
364	SX13東壁	"	"	12.2	1.9	9.8	-	-	内外灰白	-	内外平滑仕上げ、墨痕。		1/5
365	SX13 層	"	杯	10.5	4.5	5.0	-	-	内外にぶい橙・精土	-	外面平滑仕上げ。外底同心円痕。		底4/5
366	SX13東壁 中層	"	像	-	-	-	-	-	灰白・雲母? 剥片多含	-	象の頭部。押型分割成形。		-
367	SX13東壁 中層/下層	陶器	水入れ	11.1	2.9	12.5	-	灰釉	断灰黄	-	飼育具。外底露胎・格子目圧痕。口縁端部三角形に面取・釉ハギ。		準完
368	SX13 層	土師質 土器	七厘 さな	直径 9.8	厚さ 1.4	-	-	-	雲母多含	-	上面平滑、下面荒れ。上面黒変。		1/2
369	SX13	"	像	-	-	-	-	-	橙・雲母? の微小剥片含	-	狛犬。合わせ型作り。		-
370	SX13 層	"	"	-	-	-	-	-	灰白・雲母? 剥片多含	-	動物の脚部。押型分割成形、内面指頭痕。		-
371	SX13下層 東壁	"	人形	-	-	-	-	-	透明の雲母多含	-	帯?の一部残る。型押、モナカづくり、内面指頭痕著。外底黒書。		-
372	SX13東壁 中層	"	像か	-	-	-	-	-	にぶい黄橙・火山ガラス多含	-	モナカ作りの接合部でハクリ。中空。内面指頭痕著。		破片
373	"	"	"	-	-	-	-	-	"	-	モナカ作りの接合部でハクリ。		"
374	SX13東壁 層	陶器	徳利	-	-	8.0	鉄絵	-	灰白	信楽	底部露胎。	19c.	-
375	"	"	-	18.3	6.7	9.6	-	外面白濁釉	-	-	内面と置付は露胎。露胎部に黒色物質付着。		1/3 +

Tab.3-13 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
376	SX13 層	瓦質土器	羽釜	鐔部径 28.2	胴径 24.2	-	-	-	-	-	外面型押陽刻文。鐔部下面から体部下位ススケ著。		1/8
377	"	陶器	-	23.0	-	-	-	内外緑釉	断灰白	瀬美系	端部内側摩耗著。押型文。		1/11
378	SX13東壁中層	瓦質土器	七厘	16.8	-	-	-	-	-	-	口縁部刻線以上は極丁寧なミガキ。内面炭化物の膜。		1/10
379	SX13東壁下層 / 東トレ	陶器	中甕	17.1	20.8	胴径 19.1 底径 12.0	-	鉄釉。3ヶ所に黒釉流し。	断灰白	-	外底露胎、墨書あり。胎土焼結良好。		底1/1
380	SX13 層	土師質土器	焜炉	25.0	-	-	-	-	雲母赤レキ含	-	上位に穿孔。内面突起。外面ミガキ状仕上げ。		1/4
381	SX13 層 / 東壁中層 / 東壁 層	"	"	-	-	19.6	-	-	金雲母多含。赤色風化レキ含。チャートは僅少。	-	窓の内側は貼付・肥厚。外面丁寧なナデ、内面回転ナデ仕上げ。一部附接合痕残る。高台接合面はクシ状工具で条線を施してから接合。内面立上り部に使用痕か。		底1/1
382	SX13 層	陶器	-	-	-	-	-	外面透明感のある緑釉	外緑、断淡黄	瀬美系	貫入多。刻線文。内面錆。		破片
383	SX13東壁中層	"	水瓶	-	-	-	-	灰釉	断淡黄	"	外底のみ露胎。ヘラ片刃彫。		1/12
384	"	土師質土器	火具	-	-	22.0	-	-	外橙。雲母多含。	-	外面橙色塗装。畳付やや摩、一部に浅い抉り。		1/8
385	SX13 層	"	-	11.0	-	-	-	-	雲母多含	-	ススケ。		1/7
441	"	金属器	釘	全長 10.7	全幅 0.9	体部幅 0.4	-	-	-	-	角クギ。頭部扇形。		完
442	SX13	"	火箸か	全長 19.1	全幅 0.8	-	-	-	-	-	金色メッキ。	-	"
443	"	"	不明	全長 19.8	全幅 13.5	全厚 30.2	-	-	-	-	鉄。錆び。	-	-
444	"	"	杓子	全長 13.8	全幅 9.0	全厚 0.1	-	-	-	-	先端部屈折。	-	完
446	東トレ	磁器	小碗	10.0	5.3	5.0	染付	-	-	肥前系	広東形。粗製。畳付に砂。	1780年代～19c.前半	1/2
447	"	陶器	"	7.8	-	-	赤+緑の上絵付	-	断灰黄	京信系	-		1/6
448	"	"	"	-	-	4.4	-	灰釉	断灰白	-	外面下位回ケ、露胎。高台内弱い渦巻ケズリ、墨書「東休息所」。		2/3
449	"	"	碗	-	-	4.5	-	"	-	-	外面下位回ケ、露胎。高台内渦巻ケズリ、墨書「西裏休息所」。		3/4
450	東トレ下層	磁器	小碗蓋	8.2	2.5	摘み径 4.5	染付	-	素地わずかに褐色がかかる	-	広東形。細貫入。		準完
451	東トレ	土師質土器	皿	9.7	1.6	6.9	-	-	黄灰・精土	-	内面極平滑。内型作り。外面回ケ。		1/2
452	"	磁器	水滴	-	-	-	-	甲羅は瑠璃釉、空気孔周辺は鉄釉。やや青みのある透明釉。	-	肥前産(三川内か)	亀形。押型成形、外面陽刻、内面指頭圧痕、接合痕。首は接合。底部と内面は露胎。墨?付着。	19c.	
453	"	陶器	水瓶	2.9	-	-	-	内外灰釉。部分的に緑釉流し。	断灰	瀬美系	貫入著。ヘラ彫、一部片刃彫。素地は多気孔で焼結不良。		1/7

Tab.3-14 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
454	SX15	磁器	小碗	7.8	3.4	3.6	染付	-	-	肥前産	極薄手。	19c.初 頭～幕 末	3/7
455	"	"	皿	9.8	2.6	5.7	-	白磁。無光 沢不透明白 色釉	-	肥前系	糸切り細工。菊花。型作り。	19c.	完
456	"	"	碗	9.2	-	-	染付	光沢のある 釉	-	"	端反形。	1820～ 1860年 代	3/7
457	"	陶器	"	8.2	-	-	鉄絵	灰釉	-	京信系	細貫入。露胎部は褐色。		1/4 -
458	"	磁器	"	11.4	6.4	6.2	染付	やや濁った 釉	-	能茶山	広東形。内底に3点の目跡。		底1/1
459	"	陶器	皿	18.6	2.3	12.3	-	内面無光沢 釉	-	-	6角形。褐色顔料による施文。 線刻による刻線文。全体に凹凸 あり。外面露胎。外底布痕、指 頭痕、四つ一組の穴。口縁下を かき取り。		1/3
460	"	磁器	碗蓋	7.6	2.2	摘み径 3.0	色絵 (緑・赤 ・銀)	-	-	瀬美か 関西。	端反。文様は全て上絵付。口縁 部も赤塗り。	幕末～ 19後半	"
461	"	"	鉢蓋	12.4	-	-	染付	-	-	肥前系	口縁部釉ハギ。	18c.末 ～19c. 中頃か	1/4 +
462	"	"	小瓶	1.4	-	胴径 4.2	"	-	-	"	ラッキョウ形。	18c.末 ～19c. 前半	-
463	"	土師質 土器	小皿	6.6	0.9	5.4	-	精土	-	-	糸切り。口縁部ススケ。		1/2 -
464	"	"	皿	11.6	1.9	6.6	-	-	内にぶい褐	-	外面繊細な回ケ。内面回ナデ仕 上げ。		底1/3
465	"	"	"	-	-	6.2	-	-	灰白	尾戸	気孔多。		1/4
466	"	"	"	18.4	3.7	11.2	-	-	断橙	-	外面2.5mmピッチの回ケ。内外 黒色物附着、内底の附着物著。		1/5
467	"	金属器	釘	残長 5.2	体部幅 0.3	-	-	-	-	-	角クギ。		-
468	"	"	"	残長 4.1	全幅 5.5	-	-	-	-	-	-	-	-
469	"	"	"	全長 6.5	体部幅 0.3	体部厚 0.25	-	-	-	-	角クギ。		-
470	"	陶器	大鉢	47.6	-	-	-	-	断暗赤灰・ 3mm大ま での石英或 いは長石粒 含	-			1/5
471	"	"	土鍋 蓋	15.2	-	-	-	天井内面灰 釉	断灰黄褐	-	外面飛鉋 + 白化粧土と緑釉によ る施文。		1/7
472	"	磁器	土瓶 蓋	7.1	2.5	5.0	-	上面黒釉	断灰	-	素地回ケ仕上げ。		準完
473	"	陶器	土鍋 蓋	-	-	摘み径 4.7	-	内外施釉	内暗オリ ブ・断灰	-	外面多条線。素地硬質。	-	摘み 1/2
474	"	"	中甕	-	-	9.2	-	外面褐釉・ 光沢あり	外暗赤灰・ 断にぶい赤 褐精土・緻 密	大谷	外底露胎。下位回ケ痕。内面回 転ナデ痕。	1820年 代以降	1/7
475	"	"	-	-	-	19.0	-	体部外面石 英を含ませ た褐釉 + 灰 釉、内面灰 釉、外底 錆釉	-	瀬美系	内底大きな胎土目。		1/4

Tab.3-15 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
476	SX15	陶器	火鉢	-	-	-	-	外面緑釉・ 内面錆釉		瀬美産	瓶掛形。		胴 1/4+
477	"	土師質 土器	焔炉	-	-	-	-	-	断にぶい褐	-	隅に平面L字形の脚。内面粗め のハケ痕。外面平滑。長石、雲 母。		破片
478	"	瓦質 土器	焔炉 脚部	-	-	-	-	-	外黒・断灰	-	隅に脚。脚の間はアーチ状にケ ズリ・面取り。外面角部面取り。 側面丁寧なミガキ。内面粗いタ テハケ。	-	"
479	"	土師質 土器	-	-	-	-	-	-	精土・雲母 微細片多含	-	型打成形。内面指頭圧痕。浮文 字。窓あり。モナカ作りか。		-
615	SX16上層	磁器	碗	9.8	-	-	染付	-	-	肥前系	-	19c.前 半頃	1/5
616	"	"	"	9.2	5.0	3.7	"	-	-	"	端反形。	1820～ 60年代	底 1/2-
617	SX16	"	"	11.8	-	-	"	-	-	"	端反形。	1820～ 60年代	1/6
618	"	陶器	"	12.5	7.6	6.0	-	灰釉	断にぶい黄 橙	-	広東形。内底3点のメアト。		底1/1
619	SX16上層	"	"	14.4	-	-	-	-	断灰	-	-		1/11
620	SX16	"	"	-	-	4.0	-	灰釉	"	-	外底露胎、墨書「南」。		1
621	SX16下層	-	焼塩 壺蓋	6.2	1.2	-	-	-	にぶい黄橙・ 雲母多含	-	内面布目。		完
622	SX16	磁器	合子	5.1	1.6	4.3	-	白磁	-	-	口縁部と外底露胎。内底繊細な 回転力キ目。口縁部露胎部に紅 残留。		"
623	SX16上層	"	紅猪 口	4.6	1.5	1.2	-	"	-	肥前系	外面鍋、下位露胎、墨書あり。	19c.初 頭～幕 末	"
624	SX16	土師質 土器	皿	-	-	6.5	-	-	灰白	尾戸	白土器。内底に押型陽刻文(松 か)。外面丁寧な回ケ。		1/4-
625	SX16上層	磁器	-	-	-	7.1	刷毛目	灰釉	-	-	内底釉八ギ。内底と量付に微細 砂付着。		1/4
626	SX16	陶器	擂鉢	34.4	-	-	-	-	-	-	-		1/8
627	SX16上層	"	土鍋	17.1	-	-	-	褐釉	断灰	-	-		1/3
628	"	"	土瓶	9.8	器高 15.1 胴径 18.9	8.2	-	"	断橙	-	外底と内面上位露胎、口縁釉八 ギ。外面肩部多条凹線。把手付。 外底ススケ。		1/5
629	SX16	"	火鉢	-	-	-	-	"	"	"	650と同一。		1/9
630	SX16上層	"	"	16.0	胴径 23.0	-	-	緑釉・内面 錆釉	断灰白	瀬美産	瓶掛形。刻線文。獅子の把手の 孔には摩耗なし。		1/4+
631	SX16	土師質 土器	焔炉	-	胴径 20.8	17.0	-	-	灰黄褐・雲 母含まず・ 赤レキ含	-	胴部に複数の穿孔。一穴は、管 状工具で穿孔するも、排土残留。 内面ヨコハケ痕、外面回ケ痕他。 内面ススケ。		1/4
632	SX16上層	"	"	-	-	-	-	-	にぶい黄橙・ 黒色の輝石 細粒多含	-	隅に多角錘状の脚。窓部の枠の 一部残る。内面粗めのハケ。		破片
633	SX16	陶器	大鉢	38.0	8.5	18.2	-	厚手の灰釉	断灰白	瀬美産	外底露胎。内底5点の胎土目。 外底墨書あり。		底1/1
634	SX16上層	"	水瓶 か	-	-	21.5	-	灰釉	"	瀬美系	外底露胎。内底砂目。		1/7

Tab.3-16 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
638	SX16	金属器	煙管	全長 5.5	外径 1.0	-	-	-	-	-	銅合金。	-	-
639	SX17	磁器	-	10.6	-	-	染付	-	-	肥前系	蓋付。口縁部釉ハギ。コバルト。 爪形文型紙刷。	明治～ 大正	1/12
640	"	"	小碗	-	-	2.8	外面と 内底に 2色の 上絵	-	-	瀬美系	絵付は殆ど痕跡のみ、銀と赤か。	幕末～ 明治	1/1
641	"	"	大碗	16.0	-	-	染付	-	-	肥前産	-	19c.初 頭～幕 末	1/7
642	"	"	皿	10.8	2.0	6.3	"	-	-	肥前系	極繊細な線描き＋濃み。薄手。	1820～ 60年代	底1/4
643	"	陶器	"	10.7	2.2	4.4	-	-	断灰・白石 英多含	瀬美系 か	内底墨書「千万壽」。全面に銹 系切り。多気孔。		底1/1
644	"	磁器	鉢	14.5	-	-	染付	-	-	肥前系	口縁内面墨弾き。焼継ぎ痕。	1820～ 60年代	1/5
645	"	"	火具	-	-	10.6	"	-	-	肥前産 (有田)	コバルト顔料。内外底に回転ケ ズリによる細かい円条線。	明治～ 大正	3/2
646	落込み1	"	小皿	6.4	2.2	3.6	-	白磁	-	肥前産	畳付のみ釉ハギ。	18c.代	底1/1
647	"	"	小碗	8.2	4.2	3.0	染付	-	-	瀬美系	光沢感のある釉、小気泡含む。 畳付釉ハギ。		"
648	"	"	碗	10.5	6.1	4.3	"	-	-	-	薄手。全面、被熱により釉溶融 か。		6/7
649	"	"	蓋	10.8	3.4	摘み径 4.4	"	青磁染付	-	肥前産	天井内面印判。つまみ端釉ハギ、 砂付着。	18c.後 半	1/4
650	"	"	碗	7.2	5.7	3.6	"	"	-	"	筒形。畳付砂付着。	"	7/8
651	"	"	"	11.1	7.2	6.8	"	-	-	-	広東形。梅と鶯文。		完
652	"	"	"	9.5	5.0	4.8	"	-	-	-	-		準完
653	"	"	猪口	9.1	7.0	7.0	"	-	-	肥前産	筒形。蛇ノ目凹形高台。蛇ノ目 部釉ハギ。内底印判。呉須発色 鮮明、釉中に小気泡多数。	18c.後 半	底1/1
654	"	"	段重	15.6	5.8	11.0	"	-	-	"	のし文様。内底、口縁部 畳付 釉ハギ。釉極僅かにオリブが かる。	18c.第 4四半 ～19c. 初頭	"
655	"	"	仏飯 器	6.0	5.4	3.6	"	-	-	"	底部露胎。	18c.後 半	"
656	"	土師質 土器	皿	11.6	1.8	7.5	-	-	精土・微細 砂多含	尾戸	白土器。内面押型による陽刻文・ 松?と人物。内外とも規則的な 調整による丁寧仕上げ。		3/7
657	"	陶器	水瓶 蓋	11.6	-	-	染付か	上面灰釉・ 部分的に緑 釉掛け	-	瀬美系	-		"
658	"	"	播鉢	21.0	-	-	-	口縁と内面 に釉	-	-	-		1/8
659	"	"	"	35.0	-	-	-	-	-	-	-		"
660	落込み2 上層	磁器	小碗	9.2	5.2	4.0	染付	-	-	肥前系、 非肥前 か	端反形。	19c.前 半	1/4+
661	落込み2	"	不明	-	-	-	赤、金、 銀で絵 付。	-	-	-	彩色は一部のみ遺存。		破片

Tab.3-17 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
662	落込み2	陶器	碗	-	-	-	外面 鉄絵	灰釉	断灰白	京信系	-		-
663	"	"	"	-	-	-	-	濃い褐釉	"	-	外面一珍盛り風。器形に作為的 歪みあり。胎土に気孔。		-
664	落込み2 層	"	"	-	-	-	-	灰釉	"	京信系	小杉文。		1/6
665	落込み2	磁器	碗蓋	10.4	2.7	摘み径 6.0	染付	-	-	肥前産 か	広東形。	1780~ 19c.前 半	1/4+
666	落込み2 上層	"	"	8.7	2.4	摘み径 3.7	"	-	-	肥前系	端反形。	文化~ 1840年 代	摘み 1/1
667	落込み2 下層	"	瓶	-	胴径 6.2	4.0	"	青磁に近い 粘りのある 釉	-	肥前産	外面全面施釉。畳付に砂。煎酒 入。	17c.後 半	1/1
668	落込み2 上層	-	焼塩 壺	4.8	6.6	3.2	-	-	雲母・赤レ キ多含	-	内面布痕。底部ハクリ。		1/2-
669	落込み2	-	"	5.4	6.5	3.0	-	-	雲母多含	-	内面布痕。底部ハクリ。		2/3-
670	落込み2 上層	-	焼塩 壺蓋	5.8	1.8	-	-	-	"	-	内面布痕。		完
671	落込み2	陶器	土瓶	-	-	-	-	外面施釉	外暗赤褐・ 砂粒多含	-	焼結不良。	18c.	-
672	"	"	搦鉢	31.3	-	-	-	-	-	-	スリ目上端はヨコナデで消す。		1/8
673	落込み2 上層	"	鉢	45.6	-	-	-	内外薄い鉄 釉	花崗岩粗粒 含	-			1/5
674	"	磁器	小瓶	-	胴径 4.0	3.8	染付。 梅、竹 文。	-	-	肥前産	畳付のみ露胎。	18c.後 半~19 c.初頭	-
675	落込み2 層	"	紅猪 口	4.6	1.4	1.4	-	白磁	-	-	外面露胎、墨書あり。		底1/1
676	落込み2 -1層	土師質 土器	坏	9.8	3.4	5.8	-	-	-	-	内面平滑。外面回ケ。内面ター ル付着。外面黒色物薄く付着。 底部穿孔。		3/4
677	落込み2 層	"	"	9.7	3.8	5.4	-	-	-	-	外面下半回ケ。内外面ター ル付着。内面は厚い。底部穿孔は タール膜を切る、孔径6.5mm。		1/2
678	落込み2	陶器	甕	-	-	-	-	内外緑と白 色釉の掛分 け	断灰白	瀬美系	素地未焼結、気孔多。	-	-
679a	"	金属器	煙管	長さ 3.65	幅 1.1	-	-	-	-	-	断面六角形。基部に界線。上面 に接合線。銅合金。	-	-
679b	"	"	"	長さ 5.2	幅 1.1	-	-	-	-	-	吸口。断面六角形。接合線あり。 銅合金。腐食。木管残留。	-	-
688	落込み3	-	焼塩 壺蓋	5.5	1.2	-	-	-	にぶい黄橙・ 雲母多含	-	内面布目。		1/2
689	瓦溜10	磁器	鉢	16.4	-	-	染付	-	-	肥前産	発色良好。2次被熱か。	19c.初 頭~幕 末	1/10
690	"	"	碗	-	-	4.4	"	-	-	"	高台内にも一重の圈線。全く透 明感のない素地。	1670~ 90年代	1/1
691	"	"	小碗	-	-	4.2	"	-	-	"	釉に微気泡多。	18c.前 半頃	1/4
692	"	"	皿	-	-	-	-	白磁	灰白	-	菊花。口縁端錆。		破片

Tab.3-18 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
693	瓦溜10	磁器	皿	-	-	8.6	青花	-	-	景德鎮	濃い描線。薄手。細い高台。畳付に若干の付着物。	17c.前半	1/6
694	"	陶器	碗	-	-	5.6	-	濁った灰釉	断にぶい黄橙	不明	外底露胎、ケズリ仕上げ。	17c.後半頃	1/1
695	"	"	"	-	-	4.0	刷毛目	灰釉	断にぶい黄橙、明色	肥前産	畳付のみ露胎。	17c.第4四半~18c.前半	1/4
696	"	磁器	仏飯器	8.0	5.5	3.9	-	白磁	-	"	畳付露胎。	18c.頃	完
697	"	陶器	甕	41.7	-	-	-	-	断浅黄橙・石英多含	備前	外面に断面カマボコ形の多条凹線。口縁上面にも2又は3状の凹線。		1/11
698	"	"	-	-	-	18.2	-	-	断橙・石英多含	"	内外錆色。		1/4+
699	井戸1南掘形	磁器	碗	-	-	-	染付	-	-	肥前系	-	19c.前半	破片
700	"	"	"	10	-	-	"	-	-	"	端反形。	1820~60年代	1/6
701	井戸1中層	"	皿	-	-	9.7	"	青みのある釉	-	肥前産	-	1630~40年代	"
725	埋桶1上	"	鉢	-	-	-	"	-	-	肥前系	コバルト。菊花型状の稜。	明治~大正	破片
726	"	"	壺	13.2	-	-	"	-	-	肥前産(有田)	文様輪郭は細筆描き。頸部鋸歯状文。濃い発色。被熱。	1660~80年代	1/9
727	埋桶1掘形	金属器	釘か	残長8.75	全幅1.1	全厚0.7	-	-	-	-	断面長方形。頭部に段。	-	-
728	埋桶2床面直上	磁器	紅猪口	4.3	1.2	1.2	-	白磁	-	肥前系	外面露胎。	19c.初頭~幕末	完
729	埋桶2上層	陶器	土鍋	-	-	-	-	外面灰釉	-	関西系	口縁端部釉ハギ。	後期	1/7
731	4-1区P2上層	"	碗	-	-	4.0	-	灰釉	断灰	-	外底露胎。高台内渦巻状ケズリ。		1/4
732	4-1区P3	磁器	"	-	-	3.2	染付	青みがかった釉	-	肥前系	畳付に若干の砂。	18c.第4四半~19c.前半	1/1
734	集中2	"	小碗	6.2	3.1	2.8	"	-	-	"	極薄手。	1820~幕末	底2/3
735	"	"	碗	-	-	4.4	"	-	-	関西系か	濃く細い線描。釉中に微気泡多。	"	1/3
736	"	"	"	10.0	-	-	-	白磁	-	非肥前系	蟹手。素地から瀬美又は関西系か。	1820年代~幕末	1/11
737	"	"	"	11.6	6.5	5.6	染付	-	断灰白	瀬美系	広東形。高台側と内面に淡い界線。		底1/4
738	"	"	小皿	7.7	1.9	4.0	-	青磁	断白	京信系	輪花。蛇ノ目状の削出し高台。外底露胎。焼成良好焼結進む。		2/3
739	"	"	皿	9.6	2	6.8	染付	やや青みのある釉	-	肥前系	薄い発色。蛇ノ目凹型高台。蛇ノ目内縁に砂付着。	19c.前半	1/5
740	"	陶器	碗	-	-	-	-	灰釉	断灰白	京信系	筒形。内面に鉄絵。底部露胎。		"
741	"	-	焼塩壺	5.8	6.5	3.4	-	-	-	石英・長石・チャート・赤レキ多含・雲母なし	口縁端は平坦面。型作り。内外に接合痕。外面押圧痕。		準完

Tab.3-19 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
742	集中2	陶器	土鍋	-	-	-	-	灰釉	断灰	-	把手はモナカ作り、上下両面に押型陽刻文。口縁受部露胎。		把手
743	"	"	餌入れ	幅 2.9	長さ 8.5	-	-	"	-	-	外底露胎。耳付き。		1/2
744	"	"	灯明皿	11.5	2.8	4.2	-	"	-	瀬美系	口縁部を除き外面露胎。菊文貼付、クシ目。下面下半回ケ。口縁外面タール付着。		3/4
745	"	"	灯明受皿	11.8	2.2	4.2	-	"	-	-	口縁を除き、外面露胎、回ケ。タール付着。		2/3
746	"	土師質土器	灯明皿	6.6	1.1	4.6	-	-	にぶい橙	-	糸切り。ススケ。		底1/1
747	"	瓦質	焔炉	長 8.9	幅 8.3	厚 2.0	-	-	-	-	隅に平面形十字の脚を貼付。全ての角を面取り。体部はハクリ。内底円形に黒変。		破片
748	"	土師質土器	七厘	幅 22.7	-	-	-	-	-	-	二重構造の内側ハクリ。上面開口部内側ヨコハケ、部分的に弧状に削込み、ススケ。外側内面ケズリ、外面丁寧ナデ、全面面取り、耳貼付。上面隅に刻印。焼成良好。		1/2
749	"	"	焔炉	-	-	21.4	-	-	灰白	-	平面円形の脚。外底洗濯板状の圧痕、離れ砂。軟質。		1/3
750	集中3	磁器	碗	11.0	-	-	染付	-	-	-	小広東形。暦文。薄手。		1/13
751	"	"	小皿	7.8	2.0	4.8	-	白磁・青みのある釉	-	肥前産	口縁端錆。豊付釉ハギ。菊花。	江戸後期	底1/1
752	"	"	皿	8.0	-	-	染付 + 赤絵 + 金彩	-	-	肥前産 (有田か)	輪花。外面琴柱の文様。内面の界線・窓枠が呉須、花卉が赤、花芯・窓枠の縁取り・窓内の草花が金彩。外面染付。	18c.後半頃	1/5
753	"	"	合子蓋	6.6	1.5	-	染付	-	-	不明	型打成形。口縁端部にアルミナ砂。	19c.前半 - 1860年代	完
754	"	土師質土器	皿	-	-	9.2	-	-	灰白	尾戸	丁寧な仕上げ。形態、胎土、発色とも白土器に酷似。ただし、僅かに調整痕残る。		1/4
755	"	陶器	灯明皿	10.4	2.8	4.0	-	灰釉	-	-	外面体部以下露胎。外面体部以下回ケ。内面クシ目、三足ハマ痕。口縁部黒変あり。		完
756	"	"	灯明受皿	10.8	1.7	4.2	-	"	-	-	外面露胎。外面下半回ケ。		底1/1
757	"	"	土鍋	9.2	-	-	-	外面と口縁部灰釉・釉濁る	外黄褐・にぶい橙・胎土粗	-	口縁端面釉ハギ。		1/4
758	"	"	"	20	-	-	-	褐釉は外面と把手は薄い	断にぶい橙・精土・長石細粒含	-	行平。外面飛鉦。把手はモナカ作り、上面に押型陽刻文。底部ススケ。		1/9
759	"	"	水瓶	-	-	15.8	-	内外灰釉・外面流し掛け	断灰白	瀬美系	高台釉ハギ、高台内濃い錆。外面片刃彫り、列点による文様。内底胎土目。		1/5
760	"	土師質土器	焙烙	32.4	-	-	-	-	灰	関西系	-		1/10
761	"	陶器	水瓶	30.6	-	-	-	内外灰釉	断灰白	瀬美系	外面片刃彫り文様。		1/6
762	"	"	火鉢	16.0	-	-	-	厚い緑釉	"	"	-		"

Tab.3-20 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
763	集中3	土師質 土器	焜炉	-	-	21.5	-	-	断にぶい黄 橙・石英・ 長石・赤レ キ含	-	脚端部外面肥厚、畳付にアーチ 状の挟りあり。内面ナデ痕。		1/3
764	"	陶器	"	-	-	12.0	-	体部外面薄 い釉	外黄橙・断 浅黄橙・胎 土良	-	体部下位に窓。3基の脚貼付。 外面回ケ仕上。		底1/1
765	"	土師質 土器	"	-	-	13.8	-	-	灰白・精土	-	下胴部に窓。アーチ状の高台、 外側面取り。外面丁寧な回ケ仕 上げ。調整丁寧。内底スケ。		1/2 -
766	"	"	"	-	-	-	-	-	内褐灰・外 にぶい橙・ 雲母・黒色 のガラス質 鉱物含	-	方形の窓。隅角に平面三角形の 脚。全辺面取り。内面2種以上 のハケ仕上げ。被熱変色。		-
767	"	陶器	甕	胴径 40.0	-	-	-	内外褐釉	断灰白	-	釉は外面流し掛け部はあらかじ め釉八ギ。腰部に接合痕あり。 焼結良好。		1/2 -
768	"	"	"	-	-	30.0	-	"	断橙	-	口縁と内面は釉厚が薄く、刷毛 痕残す。外面断面三角形の突帯、 下位に刻目突帯。810と同一。		1/3
770	採取	磁器	小坏	5.6	3.5	2.1	-	白磁・不透 明で粘りの ある釉	断灰白	肥前系	いびつな削出し高台。内底融着 物。		底1/1
771	3-1区 層	"	鉢	17.0	-	-	青磁 染付	-	-	-	染付は線描+濃み。輪花。被熱 により釉が融けた部分あり。		1/8
772	1-1区 北西層	"	皿	-	-	-	染付	やや青みの ある釉	-	肥前産 (有田)	微妙な濃淡による優美な絵付。	1670～ 90年代	破片
773	5～6区 採取	"	"	20.0	2.8	13.0	"	-	-	"	蛇ノ目高台、三足付。高台下面 釉八ギ。正確な成形、均一な釉 膜、丁寧な絵付、優美な発色。 松と雲文。	1660～ 80年代	1/6
774	0-4区 層下	"	碗	-	-	4.5	"	-	-	-	内底と高台脇に細かい擦痕。	1750～ 60年代	3/5
775	1-5区 攪乱	"	-	-	-	8.6	"	-	-	-	菊花形。蛇ノ目凹形高台。「成 化年製」内底使用による擦痕か。		4/5
776	1-2～ 1-3区 層	"	鉢	-	-	8.2	"	-	-	-	線描き+濃淡の濃み、内面は墨 弾き併用。内底摩耗あり。		1/5
777	7-1区 採取	"	"	-	-	4.8	"	-	-	能茶山	8角形。		1/2
778	2-4区 東トレ	"	碗	-	-	5.8	"	-	-	"	広東形。		1/1
779	7-2区 層	"	"	-	-	4.4	"	-	-	"	-	-	"
780	1-2区 攪乱	"	"	-	-	5.2	"	-	-	肥前産	被熱。「宣徳年製」か。	18c.後 半	1/2
781	2-4区 -3層	"	"	-	-	4.6	"	-	-	能茶山	薄手。同じ文様が3復か。		2/3
782	7-2区 採取	"	"	-	-	4.3	"	-	-	"	-		1/4
783	1-4区 西-3層	"	"	-	-	6.6	"	-	-	"	広東形。		1/3
784	"	"	"	-	-	5.8	"	-	-	"	"		3/5
785	採取	"	皿か 鉢	-	-	4.6	"	-	-	"	方形。内底メアト。		

Tab.3-21 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
786	1-5区 採取	磁器	碗	-	-	4.0	染付	-	-	能茶山	-	-	-
787	2-5区 Nサブ -3層	陶器	"	9.7	7.0	4.8	-	灰釉	断灰白	-	外底露胎。外面下位回ケ、丁寧な仕上げ。内面は口縁部で境界をなして釉が薄い。		1/4+
788	2-5区 層	"	小碗	7.8	-	-	白土の盛りと鉄絵	内外灰釉	断灰	-	内面白化粧土。		1/5
789	5区採取	"	碗	8.6	-	-	2色の上絵付	灰釉	断灰白	京焼系	1色は赤、1色は痕跡のみが残る。		1/6
790	2-4区 -3層	"	"	-	-	3.6	-	"	断灰黄	-	外面下位回ケ。施釉前の補修痕あり。		1/1
791	1-2区 層	磁器	碗蓋	8.0	1.4	摘み径 2.8	染付	-	-	-	端反。		1/6
792	2-4区 -3層	陶器	皿	9.1	2.4	3.5	-	灰釉	-	-	外底露胎。輪花。		底1/1
793	1-2区 トレ	土師質 土器	"	-	-	7.0	染付	-	灰白	尾戸	白土器。内底に押型陽刻文(鶴と樹か)。外面回ケ。摩。		1/4
794	2-4区 -3層	陶器	灯明 皿	6.8	1.6	2.4	-	灰釉	断灰白	-	内面クシ目。口縁を除く外面露胎。外面回ケ。		1/2
795	採取	"	碗	-	-	3.7	-	"	"	-	筒形か。外底露胎、墨書「廿」薄手。外面下位回ケ。内底3点メアト。		1/1
796	2-4区 -3層	"	"	-	-	5	-	"	断淡黄	尾戸	外底露胎。外面下位回ケ、高台内ラセンケズリ。外底墨書「賄」。内底融着物。		3/4
797	3-1区 層	"	土鍋	-	-	7.2	-	内面褐釉	灰白	-	外面下位露胎、回ケ、墨書「歳霜」。		1/8
798	5-1区 層	"	播鉢	-	-	-	-	-	外にぶい赤褐・断にぶい黄橙	備前	硬質。		-
799	6-1区 -3層	"	"	-	-	14.8	-	-	明赤褐	-	内面火襖、使用による摩。		1/5
800	7-1区 層	"	不明	-	-	-	-	全面透明釉	内明赤褐・断橙	-	手握ね。内底に押型・格子目陽刻。内面押圧、皺。		-
801	7-1区 ~7-2区 -3層	"	播鉢	23.6	-	-	-	-	内外にぶい赤褐・断褐灰	備前	-		1/15
802	6-1区 -3層	"	"	31.0	-	-	-	-	明赤褐	堺明系	-		1/6
803	2-4区 層	瓦質	茶釜	胴径 26.2	鐙径 30.0	-	-	-	断灰白	-	外面上位押型陽刻文。焼成良好、瓦質化。内面横位のケズリ+ナデ。		1/8
804	2-4区 -4層 /3-5区 攪乱	陶器	甕か	胴径 25.0	-	-	-	外面褐釉・掛け流し	断灰黄褐	能茶山 か	縦位の鑄。内面墨書「さら」。透明感のない素地。		1/4+
805	2-4区 -3層 /4-1区 層	"	火鉢	-	-	20.8	-	褐釉	断灰褐	-	内面下位と外底は露胎。把手を獅子が噛む。		底1/6
806	-3層 /攪乱	瓦質	土瓶	9.2	-	-	-	-	外暗灰	-	外面押型陽刻文。内面ヨコハケ+ナデ。注口部は体部外側より4穴穿孔。把手通し孔は上部のみ摩耗。		1/2+
807	2-4区 -4層	土師質 土器	焔炉	18.2	-	-	-	-	橙	-	穿孔あり。外面平滑。		1/6
808	2-3区 -1層	"	"	-	-	11.8	-	-	にぶい橙・チャート細粒含	-	周縁部に舌状の脚。		1/5

Tab.3-22 遺物観察表(土器・陶磁器・金属製品)

図版No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作年代	残存率
				口径	器高	底径							
809	5-1区 トレ	-	羽口	外径 7.0	孔径 3.6	-	-	-	-	-	先端部。付着したスラグの鏝状部分は欠失。先端溶ける。	-	-
810	1-4区 東-3層	陶器	甕	29.6	-	-	-	-	-	-	768と同一。	-	1/9
811	1-1区 北面層	土師質 土器	灯明 皿	8.0	1.4	4.5	-	-	橙	-	雑な糸切り、やや粗い胎土。口縁にタール。荒。	-	1/4
812	2-4区 -3層	"	坏	10.5	3.5	5.8	-	-	灰黄	-	内面平滑。外面下半回ケ、外底弱いナデ仕上げ。内面タール、外面ススケ? + タール滴。	-	底1/1
813	2-5区 攪乱	窯道具	トチ ン	外径 7.8	9.0	-	-	-	にぶい黄橙・ 長石等粗粒 含	-	柱部斜位の条痕、指頭痕、ナデ仕上げ。	-	1/1
814	2-1区 層	"	-	-	-	9.6	-	-	褐灰	-	糸切り。ロクロ目著。硬。	-	1/5
815	"	"	足付 ハマ	-	-	-	-	-	内外灰褐・ 断灰	-	5~6足。中央円孔。上下面糸切り。極硬。破損面摩。	-	1/2
816	2-2区 層	土師質 土器	泥面 子	径 2.2	全厚 0.6	-	-	-	にぶい橙	-	-	-	完
817	5-1区 層	"	"	径 2.6	全厚 0.8	-	-	-	"	-	-	-	"
818	4-1区 層	"	"	径 2.5	全厚 0.5	-	-	-	"	-	巴文。	-	"
819	3-1区 層	"	"	径 2.7	全厚 1.0	-	-	-	-	-	桜文。摩。	-	1/2 +
820	攪乱	"	-	外径 8.6	2.2	内径 1.6	-	-	断黄灰・精 土	-	-	-	半完
821	4~5区 採取	陶器	不明	-	-	3.8	染付	-	断灰白	-	外底黒字印判「大阪船越商店」胎土焼結不良。被熱。	-	1/1
822	採取	-	土錘	全長 3.7	外径 1.0	孔径 0.35 重量 3.2g	-	-	-	-	管状。摩。	-	-
823	試掘 トレ11	土師質 土器	"	全長 7.3	外径 4.2	孔径 1.1 重量 125.4g	-	-	灰白	-	摩。一部欠損。	-	-
824	石組溝 1	陶器	像	-	-	-	-	褐色の薄い 釉	-	-	獣の顎部分。	-	破片
825	3-1区 層	磁器	碗	-	-	4.1	染付	-	-	肥前産 (有田)	線描 + 丁寧な濃み。薄手。	1670~ 90年代	1
826	6-1区 層	"	鉢	20.4	-	-	"	-	-	肥前産	線描 + 濃み。	1660~ 70年代	1/14
827	5-1区 層/ 6-1区 攪乱	"	仏飯 器	7.0	6.2	3.8	"	-	-	"	脚下面削出し。	17c.中 頃~未	3/4
828	1-2区 Ⅳ層	"	皿	-	-	4.6	-	白磁	断灰白	中国	アーチ状高台。接地部以外全面施釉。高台脇ケズリ。内底胎土目。焼結不全、素地に気孔。	-	底 1/4 +
829	1-3区 採取	"	"	11.5	2.5	6.6	-	"	-	-	畳付のみ釉八ギ。	-	1/6
830	SX13	土師質 土器	杯	-	-	8.1	-	-	灰黄	-	糸切り。硬。	-	1/2 +
831	5-1/ 6-1区 暗灰粘	須恵器	皿	13.0	1.55	8.0	-	-	-	-	内外底ナデ。	-	底1/6

Tab.3-23 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	材	器種	法量 (cm)			絵付	釉	発色・胎土	製作地	備考	製作 年代	残存率
				口径	器高	底径							
832	-5区 層・層	土師質 土器	杯	15.5	3.1	10.0	-	-	にぶい橙	-	口縁外面重ね焼痕か。摩。	-	底 1/2 -
833	SX 9 下層	土師器	高杯	-	-	-	-	-	長石・石英 の細粒・赤 レキ・極微 量の雲母含	-	脚部面取り、5～6角形。やや 硬。搬入品か。摩。	-	-
834	7-1区 XII層	須恵器	杯B	-	-	-	-	-	-	-	軟、摩。	-	1/4
835	1-5区 層	"	皿B	-	-	15.6	-	-	灰黄	-	高台ハクリあり、軟、摩。	-	1/5
836	瓦溜 8	"	-	-	-	-	-	-	-	-	外底断続ケ、刻書。	-	-
837	SD 2 上層	土師器	蓋	-	-	-	-	-	明赤褐色・ 断にぶい黄 橙・石英細 粒多含・ 群	-	内外赤色塗彩。摩。	-	破片
837'	0-4区 XII層	須恵器	-	-	-	9.2	-	-	-	-	内面及び外底断続ナデ。	-	1/5
838	SX 6	"	壺	-	-	-	-	-	長石粒含	-	上部を粘土盤で閉塞。	-	"
839	5～6区 灰色粘土	"	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
840	1-5区 層	"	甕	-	-	-	-	-	-	-	外面格子タタキ、内面当具痕す り消し。器厚均一。	-	-
841	"	土師器	甕	26.2	-	-	-	-	内にぶい橙・ 外にぶい褐 色・石英角 レキ多含	-	内外ハケ。体部外面ハケ痕未調 整。口縁部内外ヨコナデ。外面 ススケ。甕A 2・群。	-	1/9
842	SX 8	"	"	26.0	-	-	-	-	外にぶい橙・ 石英角粒他 多含	-	体部内外及び口縁部ハケ痕。摩。 甕A 2・群。	-	1/8
843	SX 6	土師質 土器	椀	-	-	5.9	-	-	浅黄橙・精 土に石英・ 砂岩等砂粒 含む	-	摩。	-	1/4
844	0-4区 XII層	須恵器	"	-	-	7.0	-	-	灰黄	-	内面密なミガキ、外底ナデ。高 台は太く、畳付やや凹。高台に 縦位の火禿。内面火禿。焼成や や不良。摩。	-	2/3

Tab.3-24 遺物観察表 (土器・陶磁器・金属製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
21	堀 1	椀身	口径 10.6	器高 4.4	底径 6.0	内赤、外黒。	外面に銀又は金色の文様。塗膜良好。	1/3
32	SD 2 下層	折敷	23.1	-	0.7	-	丁寧な仕上げは施さず。欠損。	-
33	"	不明	残長 13.6	0.8	0.5	-	上端は切込み部で折損。	-
34	"	箸	残長 22.1	0.6	0.5	-	-	-
35	"	"	26.4	0.8	0.4	-	わずかに胴張り。両端荒れ。	完か
80	SX 2 中層	椀身	口径 11.4	器高 4.2	底径 6.0	全赤。	口縁・高台端若干欠損。	1/2 -
81	SX 2	"	口径 11.2	器高 4.5	底径 6.3	全黒。	高台端摩滅か。変形あり。ハクリやや顕著。	1/1
82	"	"	口径 13.0	器高 4.0	底径 6.6	"	口縁欠損。高台端摩滅か。高台内に塗装後の切込み。塗膜ハクリあり。	1/2 +
83	"	椀蓋	口径 11.5	器高 3.1	摘み径 4.9	内外黒 (文様赤)	外面に赤の文様。塗膜はほぼ完存。	1/2
84	SX 2 中層	箸か	22.0	0.9	0.7	-	両端は扁平。	完
85	"	箸又は 楊枝	24.8	0.7	0.7	-	一端が焼失、他端ススケ。	-
86	"	楊枝	25.0	0.8	0.7	-	わずかに胴張り。先尖。上端面。	完
87	"	箸	25.9	0.8	0.7	-	わずかに胴張り。両端面。	"
88	"	"	27.7	1.0	0.6	-	両端面。わずかに胴張り。	"
89	"	"	30.3	1.0	1.0	-	大型。両端面。	"
90	"	木簡	17.6	3.4	0.5	-	両面墨書「？」・「？」	-
91	SX 2	"	6.9	4.8	1.0	-	両面押印 (焼印か) あり。上方に穿孔あり、焦げ跡あり。	-
92	SX 2 中層	"	17.2	4.5	0.9	-	両面墨書「拾八番 松平土佐守様御用讃岐や 兵助」・「五月十二日 四斗入 かけ」。板目材。上方に穿孔あり。	-
93	SX 2	膳	26.3	1.8	0.8	両面黒漆、上端面赤漆。	縁板。下辺接合部に木釘跡。	-
94	"	蓋	径 13.2	-	1.0	-	ツマミ痕、木釘あり。	-
95	SX 2 木片層	桶	34.2	4.5	1.7	-	ホゾ穴。	-
96	SX 2	下駄	19.5	10.1	6.6	-	差歯・霏卯・長方形・壺あり。後壺は後歯の後。後歯部で破断。前歯半損。後歯に砂利。接地部摩耗。台面に浅い切込み。歪みあり。	-
97	"	"	11.3	7.6	1.6	-	連歯・壺あり。欠損、荒れ著、部位不明。2又は3穴を認める。	-
98	SX 2 最下層	"	22.5	10.3	7.2	-	差歯・霏卯・小判形・壺あり。後右側壺わずかに残存か。差歯部で破損。指頭痕ありか。後ろ1/3は、台面荒れ著。	-
100	SX 4	"	22.5	9.9	4.0	-	連歯・長方形・壺あり。摩、歪みあり、破損部風化。	-
101	"	"	22.5	6.8	5.4	-	連歯・長方形・壺あり。1辺欠損。歯は摩耗。	-
124	瓦溜 8	椀	-	-	-	全黒。	-	1/6
146	SD 3	小皿	口径 8.2	器高 2.1	底径 5.8	内外赤、外底のみ黒。	黒褐色の下地。	1/2

Tab.4-1 遺物観察表 (木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
147	SD 3	箸	残長 12.7	0.7	0.4	-	端に面。	-
148	"	"	残長 12.3	0.7	0.5	-	"	-
149	"	栓	4.5	2.5	2.0	-	加工痕あり。	-
150	"	不明	2.7	2.7	1.1	-	-	-
151	"	下駄	24.3	8.9	2.8	-	草履型。小判形・壺なし。前後3ヶ所で台面を抉り、対の細孔。後ろには木釘残る。台面荒れ。	-
155	SX 6	柄	長 12.1	2.5	1.4	-	-	-
156	"	不明	4.3	9.5	1.9	-	ワッフル状の線刻。	-
157	"	-	30.0	5.2	2.3	-	"	-
166	SX 8	桶	径 23.5	-	1.1	-	-	-
167	"	-	85.0	12.8	2.4	-	把手はホゾで接合。	-
181	SX 9 下層	木筒	14.4	7.0	1.3	-	板目材。1面に墨書「(長カ)八 六兵衛 勘兵衛」。	-
182	"	"	12.4	1.6	0.2	-	一面墨書。破片。	-
183	"	"	18.4	6.2	1.4	-	片面墨書「寅弥太」。全周加工痕。裏は粗面。	-
184	"	斎串か	16.5	3.6	0.5	-	胴部に圧迫痕とキレツ。	-
185	SX 9 木片層	刃物柄	29.6	3.3	2.2	-	茎の挿入口あり。	-
186	"	不明	17.9	1.2	0.8	-	木釘残る。	-
187	"	クサビか	14.9	3.2	3.1	-	断面方形。加工痕。	-
188	"	栓	5.9	3.4	2.8	-	加工痕あり。	-
189	"	不明	15.7	1.2	-	-	-	完
190	"	箸	18.6	0.6	0.5	-	-	"
191	"	"	20.8	0.8	0.7	-	-	"
192	"	"	22.3	0.6	-	-	-	"
193	"	"	24.8	0.9	0.8	-	-	"
194	"	不明	残長 13.5	2.6	0.8	-	ワッフル状の線刻。歪みあり。	-
195	"	"	11.8	2.4	1.0	-	ワッフル状の線刻。	-
196	"	"	7.5	7.6	1.5	-	ワッフル状の線刻。加工痕。	-
245	SX10 中層	曲物	口径 19.0	-	-	組立後、外面黒漆塗。	焼失開口部と、その対面に釘痕。	-
246	SX10 上層	椀蓋	口径 12.0	器高 5.4	底径 2.6	内赤外黒。	外面に金色の丸紋。埋没中の圧力による褶曲・歪みあり。	3/4 -
247	SX10 最下層	漆器皿	口径 8.8	器高 1.8	底径 6.0	内外赤。サビ下地。 朱。	内面に蒔絵。	1/10

Tab.4-2 遺物観察表 (木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
248	SX10 バンク	膳	12.9	20.7	0.7	-	破損面が風化。	-
249	"	蓋	径 10.8	-	1.2	-	受部に段。円孔あり。	-
250	SX10 上層	調度	残長 17.3	4.9	0.7	-	前板。桐文銅金具。裏縁部に段。	-
251	SX10 最下層	盆か	径 21.1	-	0.6	両面褐色塗装。上面 弧状のハケ塗痕。	上面縁板接合痕、木釘。下面摩あり。	-
252	SX10	蓋か	29.7	15.6	1.4	上面朱塗。	把手板はホゾ差込。	-
253	SX10 上層	不明 木製品	30.0	6.6	1.8	全面塗装。下層は橙 色、上層は暗褐色。	一部にハケ目観察可。板材の縁に別材を接着か。	-
254	"	角材	残長 46.1	11.7	6.4	-	両端にホゾありか。一端は、高低のホゾがT字状に交わり、ノコギリによる溝に扁平なクサビ。他端は破断、荒れ。材の節目部分に補修。一辺にノコギリによる切込み多数。	-
267	SX11	木簡	12.8	3.0	0.7	-	両面墨書「(吉力)四郎」・「北 ()四斗計」。全面に加工痕。	-
269	"	下駄	24.0	10.0	4.5	-	連歯・小判形・壺あり。台面は良好。タテ方向の小溝多数。紐残る。歯は欠損。	-
270	"	不明	23.3	3.8	0.8	全面朱塗。	両端穿孔。側縁は斜めに面取り。	-
386	SX13 層	椀蓋か	口径 11.5	器高 4.0	底径 5.4	全赤。口縁端部のみ 黒。	塗膜剥離あり。歪みあり。摘み端欠損。口縁の一部が欠ける。	天井 1/1
387	SX13 下層	椀身	口径 13.0	器高 5.4	底径 6.4	全黒。	塗膜はほとんど残存。器体は口縁の一部が欠けるのみ。	1/1
388	"	"	口径 10.4	器高 6.7	底径 5.2	"	内面に塗膜の剥離あり。口縁部の一部のみ残存。	"
389	SX13 層	椀	-	-	-	内赤、外黒。	歪みあり。	1/4
390	SX13	皿	口径 17.6	器高 1.3	底径 16.0	全黒。	内面に赤と金色の文様。歪みあり。	1/2
391	"	"	-	器高 0.8	底径 14.0	"	内に赤の文様。剥離あり。	-
392	SX13 下層	椀蓋	口径 10.2	器高 3.2	底径 4.8	内赤、外黒。	外に銀又は金色の文様。塗膜ほぼ完存。	完
393	SX13	"	口径 8.2	器高 2.1	摘み径 3.6	"	外に金色の文様。下地は黒鉄色。約30片に分裂。歪みあり。	1/4
394	SX13 下層	曲物	口径 10.1	器高 5.3	底径 12.4	-	体部は、2~3重に巻いて、樹皮(?)でとめる。底板は木釘で接合。口縁部まで残るが、上方から圧縮されている。	-
395	"	不明	4.0	1.2	0.8	-	394の中より出土。	-
396	SX13 層	箸	3.2	0.7	0.3	赤塗。	-	-
397	"	"	6.0	0.6	0.4	"	-	-
398	SX13 層	"	21.0	0.7	0.6	-	両端に面。	完
399	SX13 東壁下層	"	21.0	0.7	0.5	-	"	"
400	"	不明	残長 12.6	0.5	0.5	-	先端を刀子状に尖らせる。	-
401	SX13 下層	膳	24.0	24.6	1.0	-	薄い塗膜。杵を木釘で留める。	-
402	SX13 最下層	"	24.0	8.4	0.9	全面黒漆。	折損。縁板のハクリ痕。縁に下からの木釘。側面にも木釘。両面に刃物傷。上面中央摩著。脚板のホゾは差込式。	-
403	SX13	"	26.4	残幅 13.9	0.6	片面黒塗、端面赤塗。	周縁に木釘、接合痕。	-

Tab.4-3 遺物観察表(木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
404	SX13	膳	14.8	13.9	0.7	-	上端木釘2点で接合。丁寧仕上げ。	-
405	SX13 最下層	"	22.4	残高 9.4	0.8	無塗。	-	-
406	"	"	5.5	7.6	0.8	朱塗。	脚板か。下端面摩。	-
407	SX13	不明	16.6	残幅 4.4	0.9	片面と端面赤塗。	-	-
408	SX13 層	杓子	13.7	9.1	1.7	全黒。	全面に加工痕。	-
409	SX13 下層	柄杓	7.9	2.5	1.8	-	-	-
410	SX13	蓋	10.7	10.9	1.1	-	受部あり。孔あり。	-
411	SX13 最下層	桶	高さ 5.4	7.5	0.8	内面黒、外面橙色塗 装。サビ下地。	外面タガ、内面底板の接合痕あり。歪みあり。	-
412	SX13	"	25.6	10.3	1.6	片面黒塗。	角木釘穴。	-
413	SX13 最下層	"	径 13.6	-	0.8	-	周縁に加工痕。	-
414	SX13	"	径 22.0	-	1.1	片面褐色塗か。	他面荒れ。木釘で2ヶ所を接合。	-
415	SX13 東トレ	"	13.1	10.0	1.2	-	片面周縁に段差、木釘。端部に加工痕。全面黒色。中央部両面摩。	-
416	SX13 最下層	"	径 26.8	-	1.3	-	角木釘で接合。	-
417	"	桶フタ	径 32.2	-	3.0	-	片面に円弧状の彫り込み。角木釘で接合。	-
418	SX13 下層	灯明台	10.5	10.7	4.0	-	ホゾ部へ下方より斜めに打込んだ角木釘と小釘によって接合。斜下方からも2点一対の釘跡。	-
419	SX13 東壁下層	"	4.4	10.0	0.6	-	-	-
420	SX13 最下層	調度	2.3	幅 11.0	1.0	黒漆。	角部面取り。下面は加工痕と剥離痕。両端欠損。	-
421	SX13 下層	不明	8.1	3.4	1.0	-	割り込みあり。加工痕。片面はハクリ・欠損か。	-
422	SX13	"	残長 13.9	2.0	1.6	-	-	-
423	"	"	21.8	2.5	1.0	朱塗。	端面にみる加工痕は粗雑。下辺で他材に接合か。	-
424	SX13 下層木片層	"	42.5	2.1	0.9	-	一辺に木釘残る。	-
425	SX13	下駄	9.9	5.9	3.7	-	連歯。前後不明。接地面摩。	-
426	SX13 東トレ	"	14.8	9.9	3.9	-	連歯・長方形・壺あり。各所に切削或いは傷跡。接地面摩。	-
427	1-2区 東トレ	刷毛	15.0	10.0	1.0	-	毛先は木釘で固定。	-
428	SX13 層	木簡	10.0	6.1	1.7	-	両面墨書「文化八年 未二月改 御(錠力)前役場」・「下女 壺人」。鐳札か。上方に穿孔あり。	-
429	"	"	14.4	2.8	0.7	-	両面に墨書「佐岡村 長吉」・「吉四斗入」。両面、両側に加工痕。	-
430	SX13 下層	"	19.6	5.7	0.6	-	墨書片面は「()斗入」。他面は「・・倉・」3つの人または地名等か。穿孔あり。	-
431	SX13 東壁上層	"	14.4	2.9	0.5	-	二面墨書「 村 助 」。上端に2ヶ所の切り込み。下端欠損。	-
432	SX13 層	"	9.3	1.8	0.4	-	両面に墨書「 村長」・「 四斗」。加工痕。破片。	-

Tab.4-4 遺物観察表(木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
433	SX13	調度	3.2	9.3	1.6	表面のみ赤黒塗装残る。サビ下地。	菊文の金具付き。	-
434	SX13 下層	角材	25.0	5.0	4.6	-	二面墨書「御料理方・・・」・「西御料理(方力)(所力)」。3面を平らに加工。特に主面には切削痕多数。方形の切欠きあり。材に節あり。	-
435	SX13 層	羽子板	27.4	8.8	0.8	薄く赤色顔料付着。	主面に文様(痕)残る。主面に微細な切削痕。裏面にやや荒い切削痕。先方欠損。	-
436	"	-	24.0	13.0	1.8	-	両面「御くら」。片面は墨書。他面は刃物による切込み+墨書、その他の切込みも多い。	-
437	SX13	不明	0.6	3.2	0.3	-	丁寧な仕上げ。	-
438	"	"	0.6	4.4	0.3	-	"	-
439	"	"	0.6	6.3	0.3	-	"	-
440	SX13 下層	"	全径 2.8	-	0.6	-	-	-
445	SX13 層	"	直径 17.7	-	0.8	-	片面墨書「深川善蔵様行」。欠損あり。端面の2ヶ所に木釘、うち1本は先端露出。	-
480	SX15	椀身	-	器高 2.6	-	全黒(外面オリブ黒)	内面荒れ。高台外端摩。	-
481	"	"	-	-	3.4	全黒。	高台つぶれる。塗膜ハクリあり。	3/4
482	"	"	-	器高 4.4	底径 2.8	"	内面の剥離顕著。	1/1
483	"	椀	-	器高 1.9	底径 7.0	"	生地は薄手。	-
484	"	椀身	-	4.3	-	"		1/2
485	"	"	-	器高 4.7	-	"	全面に剥離あり。	1/1
486	"	"	口径 15.0	器高 4.9	-	内赤、外黒。	ハクリ著。	3/4
487	"	"	-	-	底径 8.7	内外黒。	-	1/9
488	"	"	口径 12.0	器高 2.7	底径 8.6	内外赤。	下地は黒鉄色。ハクリあり。	1/5
489	"	"	口径 12.6	器高 3.2	-	内外黒。サビ下地。	内面に微妙なハグレ多し。外面良好。ケヤキ。	1/4
490	"	不明	-	器高 1.3	底径 5.6	全黒。	内面に赤色文様。外底は剥離と荒れ。	1/2
491	"	椀蓋か	-	器高 3.2	-	内赤、外黒。	外に金又は銀色の文様。内面塗膜剥離あり。摘み、口縁欠損。	1/1
492	"	椀蓋	口径 14.4	器高 2.2	摘み径 6.4	全黒。	-	1/4
493	"	"	口径 13.8	器高 1.8	摘み径 6.2	"	塗膜良好。下地は黒鉄色。	1/2
494	"	"	口径 12.4	器高 2.2	摘み径 5.0	"	-	1/4
495	"	椀	摘み径 4.6	-	-	黒。	歪みあり。ハクリ著。身か蓋か不明。	"
496	"	椀蓋	口径 10.8	器高 1.3	摘み径 5.0	全赤。	下地は黒。塗膜ハクリあり。歪みあり。	1/2 -
497	"	"	口径 13.4	-	摘み径 6.4	内外黒。	摘み欠損。	-
498	"	蓋	口径 14.0	器高 1.5	-	内面は暗赤褐色。サビ下地。朱。Au。	内赤、外黒、黄色の文様。	1/2

Tab.4-5 遺物観察表(木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
499	SX15	鉢	口径 23.8	器高 5.2	底径 12.2	-	内面、同心円状のロクロ目顕著。外面上半は断続ケズリ仕上げ。亀裂、変形あり。	-
500	"	箸	23.2	0.8	0.6	-	-	完
501	"	箸	22.5	0.7	0.6	-	-	完
502	"	"	21.7	0.7	0.6	-	-	"
503	"	"	19.4	0.7	0.7	-	-	"
504	"	"	5.3	0.7	0.3	赤塗。	圧縮か。	-
505	"	不明	18.6	0.6	0.3	-	-	-
506	"	"	15.5	1.0	0.7	-	-	-
507	"	"	11.7	0.8	0.3	-	一端に切込み、他端は焼失。加工痕により、断面8角形。	-
508	"	調度	5.4	1.4	1.1	黒漆。サビ下地。	-	-
509	"	"	4.8	2.0	0.8	黒漆。	-	-
510	"	"	5.5	16.7	1.5	両面赤、端面黒。サビ下地・朱・Au。	片面に黒褐色、褐、金色の文様。片面の両端に段差。他面の三辺にハクリ痕。	-
511	"	不明	全径 4.8	-	0.4	-	緻密な材。丁寧な仕上げ。	-
512	"	傘	4.9	5.3	4.1	-	竹管様の軸が通る。圧力により楕円形に歪む。	-
513	"	不明	9.5	最大幅 4.0	2.3	-	外側の部材は荒れ著、欠損あり。	-
514	"	"	4.4	最大幅 4.5	最大厚 3.2	-	一端は荒れ。	破損あり
515	"	独楽	径 5.9	-	3.5	-	下面は凸レンズ形。上面に多重圏線。軸は下方がやや太い。	-
516	"	羽子板	28.1	12.3	0.5	-	柄欠損。	-
517	"	"	34.1	10.2	0.8	-	加工痕及び切込痕。	-
518	"	調度	12.7	1.2	1.0	-	-	-
519	"	-	19.0	0.9	0.6	-	両端にミゾ。側面に加工痕多数。	-
520	"	鞘	16.9	3.1	0.8	片面黒色。	蛇行する変り塗り。	-
521	"	"	13.0	4.1	1.2	"	裏面先端に穿孔。	-
522	"	"	22.3	3.8	0.8	"	塗膜は大きくハクリ。	-
523	"	木簡	11.6	5.5	1.1	-	刻字は黒。上方に穿孔。片面荒れ。「草履札」。	-
524	"	"	11.5	3.4	0.8	第1面のみ墨書の上に赤塗。	両面に墨書、第1面「廣吉屋 只平」・第2面「四ノ五百」。	-
525	"	"	11.2	3.1	0.6	-	片面に墨書「蓮池村只平」。	-
526	"	板	5.2	6.3	0.7	-	墨書。両小口を切断。	-
527	"	木簡	13.6	3.0	0.7	-	片面に墨書「永野 喜作計」。上部切込み。下端尖らせる。	-

Tab.4-6 遺物観察表 (木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
528	SX15	将棋盤	33.8	15.2	1.8	-	彫線に墨入れしているもよう。4ヶ所に穿孔。片面に墨書「三岡田 様 賀代代永」、切傷。板目材。	-
529	"	木簡	12.7	3.0	0.8	-	両面に墨書「九衛門」・「夜須村」。上部両側は、両面から切込み。下端欠損。	-
530	"	木簡	13.0	3.0	0.9	-	両面に墨書「甲原村」・「吉米四」。上部は両側に切込み。下部焼失、炭化。	-
531	"	-	15.4	3.2	0.5	-	墨書あり。	-
532	"	木簡	10.9	2.1	0.2	-	両面に墨書「村」・「斗九升」。	-
533	"	"	19.7	9.6	0.7	-	両面墨書。墨痕のみが残る部分あり「寶積院 音丸」。上部穿孔。荒れあり。	-
534	"	曲物	残長 54.2	幅 8.9	厚さ 1.9	-	外面に墨書。両端及び中央で折られる。片側に2本の材を重ねて接合。樹皮の帯で縫い合わせて接合。内面には布片が残留。	-
535	"	-	17.8	12.8	1.4	-	板材。墨書。一端欠損。	-
536	"	木簡	13.0	4.2	0.4	-	両面に墨書「御やしき 井上雄次郎様江口庄左衛門 村野 郎様川村来吉」・「海上安全」。穿孔一基。整った面と形状。	-
537	"	板材	29.2	12.8	1.8	-	片面に墨書あり。一端欠損。端面に木釘痕。	-
538	"	膳	27.6	11.8	1.1	内外黒。	枠、脚欠失。枠は裏面から木釘で固定。脚はホゾで接合か。	-
539	"	調度	24.7	11.6	0.8	全面黒。サビ下地。Au。	金、銀、赤の文様。文様は薄い。一辺欠損。三辺はハクリ。	-
540	"	不明	14.2	5.9	0.6	裏面以外、薄い漆。	表面に稜線。縁と接合辺に木釘。	-
541	"	底又は蓋板	径 13.6	-	1.2	全体に薄い塗装(黒褐色)。周縁端部のみ赤彩残る。	周縁部ハクリ。	-
542	"	桶	径 19.1	-	1.5	片面黒塗。	木釘で接合。	-
543	"	"	18.2	-	0.9	黒褐色塗装。	木釘5点。接合痕。	-
544	"	不明	17.9	10.3	0.8	-	木釘4点。別材で充填した補修孔あり。	-
545	"	桶	18.0	-	1.9	-	木釘。荒れ。	-
546	"	"	径 21.9	-	2.3	-	切込みミゾあり。荒れ。	-
547	"	"	17.8	13.5	1.5	-	木釘で接合。	-
548	"	不明	11.4	3.3	1.5	-	木釘残る。	-
549	"	桶	18.8	6.6	1.7	-	嵌め込んだ円材に接して、挟り。接合部に木釘。全面黒変。	-
550	"	"	19.7	6.1	1.3	片面黒塗か。	木釘2点。	-
551	"	"	24.4	12.7	1.5	-	金釘3点。他面に1点。荒れ著。	-
552	"	"	25.7	9.9	11.1	片面黒色。	木釘。	-
553	"	栓	4.3	3.3	2.9	-	加工痕。	-
554	"	栓か	3.9	4.6	4.8	-	側面に加工痕。春材部の肉痩せ著。	-
555	"	桶	高さ 8.5	3.6	0.7	全面赤塗。	側板。外面にタガ痕。	-

Tab.4-7 遺物観察表(木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
556	SX15	柄	14.1	3.7	2.3	-	両側から各々2ヶ所を木釘で留める。	-
557	"	蓋	径 9.0	-	4.0	-	ツマミは差込み。受部に大きな段差。春材部肉痩せ。	-
558	"	"	15.1	15.5	3.8	-	-	-
559	"	桶	35.0	9.6	1.8	-	外面タガ痕、内面底板痕。	-
560	"	蓋	10.2	5.8	0.8	-	受部に段。	-
561	"	調度	5.3	8.2	1.6	外面赤、内面黒。サ ビ下地。朱。	フタか。内面の塗膜は薄い。圧力による変形著。	-
562	"	不明	16.4	13.7	1.2	-	周辺に受部作出。受部加工時の鋸痕。表面の3辺に面取り。2穴あり。	-
563	"	灯明台	12.0	2.2	0.6	-	部品。釘穴。	-
564	"	"	11.9	2.8	0.7	-	部品。春材部の肉痩せあり。	-
565	"	調度	5.3	7.9	1.5	-	薄い黒色塗膜。丁寧な仕上げ。	-
566	"	"	11.3	5.9	1.0	全黒。	薄い塗膜。	-
567	"	不明	径 9.8	-	0.5	-	中心に穿孔、焦げ。歪みあり。	-
568	"	"	10.7	10.7	0.6	-	中心に鉄金具貫通。中心部焦げ。片面の仕上げ粗雑。	-
569	"	曲物	-	-	0.4	-	-	-
570	"	-	径 10.6	-	0.4	-	歪みあり。	-
571	"	不明	径 12.3	-	0.1	-	中心部焦げ。歪みあり。	-
572	"	"	10.9	8.9	0.7	-	-	-
573	"	"	11.9	2.6	0.9	-	-	-
574	"	調度	4.2	9.0	1.7	-	両面漆。中央にホゾ。	-
575	"	不明	15.5	2.8	0.7	-	-	-
576	"	"	11.1	1.5	0.2	-	木釘あり。	-
577	"	"	19.9	8.5	0.9	-	春材部の肉痩せ著。	-
578	"	"	13.8	17.1	1.3	-	両面に鋸痕。	-
579	"	下駄	8.0	7.2	3.8	-	差歯・小判形・壺あり。状態良好。表面平滑。前歯部で切断か。	-
580	"	"	14.7	7.8	2.8	-	差歯・小判形・付け歯・壺あり。ほぞを切って、差し歯。歯間のみ横断面三角形。歪みあり。荒れ。	-
581	"	"	13.4	8.5	2.8	台面に黒塗残る。	連歯・長方形か・壺あり。荒れ。歯に大きなハクリ。摩。	-
582	"	"	8.6	6.6	2.6	接地部以外黒塗。	連歯・長方形・壺あり。小型。後壺部で破断。後壺後傾。接地部摩。	-
583	"	"	9.4	8.1	2.9	接地面以外黒塗。	連歯・割り歯・小判形・壺あり。割り込み前縁に前壺。斜めに切断される。接地面摩。埋没中の圧力による凹凸あり。	-

Tab.4-8 遺物観察表 (木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
584	SX15	下駄	8.4	1.0	2.6	-	連歯・小判形・壺あり。裏面連弧状割り込み。歪みあり。接地面摩。	-
585	"	"	11.7	5.3	3.1	-	連歯・小判形・壺あり。小型。隅丸方形の後壺は後傾。荒れ著。	-
586	"	"	16.6	7.5	3.5	台面と側面は黒色塗装の可能性。	連歯・小判形・壺あり。台面と側面に切削多数。歯は木目に沿って大きく欠損。	-
587	"	"	8.0	7.5	2.8	-	連歯・小判形か・壺あり。接地面を除き、表面黒色（技法不明）。接地面摩。全体に凹みあり。前歯の後方で破断。	-
588	"	"	21.0	8.5	5.2	側面に黒色塗装残る。	連歯・小判形・壺あり。縄紐残存。台面良好。壺穴は後傾。裏面摩耗。欠損あり。接地面砂利付着。	-
589	"	"	21.6	8.8	3.9	-	草履型・小判形・壺あり。後壺は後傾。全体に荒れ、ヒケ。歯は摩耗。	-
590	"	"	14.5	8.8	4.6	-	連歯・小判形・壺あり。側面に薄い黒色塗料。中央で切断。前壺に紐残る。接地面に砂利。摩。	-
591	"	"	23.2	8.7	2.4	-	連歯・小判形・壺あり。荒れ、折れ。接地面荒れ著。	-
592	"	"	16.5	8.9	4.2	-	連歯・小判形・壺あり。歪みあり。後壺を結ぶラインで切損して遺棄。その後斜方向に破損。	-
593	"	"	5.2	9.0	3.6	-	連歯・小判形か・壺あり。折損。台面荒れ。歯摩耗。	-
594	"	"	10.6	10.0	3.9	-	連歯・小判形・壺あり。歯に連弧状抉り。接地面摩。	-
595	"	"	5.9	10.1	4.7	-	連歯・小判形・壺あり。前歯直後で切断。荒れ。	-
596	"	"	7.7	8.9	4.2	-	連歯・小判形か・壺あり。後壺後傾。歯先摩。欠損。後壺部で破損。	-
597	"	"	11.0	8.0	2.2	-	草履型・小判形・壺なし。前緒に角釘貫通。裏面摩、前方隅が切削されている。	-
598	"	"	7.0	6.6	3.1	-	連歯・小判形・壺ありか。小型。	-
599	"	"	6.8	7.6	2.3	-	連歯・小判形・壺あり。接地面摩。後歯直前で破断。	-
600	"	"	14.0	6.5	1.7	-	草履型・小判形・壺なし。後緒部に長方形の割り込み、2穴2対。台面に傷、裏面摩。	-
601	"	"	23.9	7.5	2.3	-	草履型・小判形・壺なし。後緒部割り込み、2対の角木釘。台面に釘3、釘跡1。下面摩。欠損あり。	-
602	"	"	24.2	7.0	2.4	-	草履型・小判形・壺なし。台面前方に2対の釘穴、1穴に金釘残る。金釘1基残る。後方の割込みに2対の穴。木釘の先端残る。台面に多数の小切込み。裏面摩。	-
603	"	"	24.2	6.9	2.6	-	草履型・小判形・壺なし。台面前方に3対、後方に2対の釘穴。うち6穴に金釘残る。後方割込み。裏面摩。	-
604	"	"	22.7	6.9	1.4	-	草履型・小判形・壺なし。後緒台面を溝彫り。後緒に2対4点の角木釘。前緒部浅く削り込んで小穴。後緒部で破断。	-
605	"	"	16.8	7.2	2.5	-	草履型・小判形・壺なし。後緒部は、浅いV字形に溝彫り。前緒は浅い方形の彫り込みに一穴。台面に加工痕。側面にミゾ。後緒から中央部にかけて破断。	-
606	"	"	16.5	7.0	1.7	-	草履型・小判形。壺なし。前・後緒部に割り込みと釘跡。台面に釘。裏面摩。	-
607	"	"	18.1	6.5	1.7	-	草履型・小判形・壺なし。割り込み、2対の木釘穴。	前部と右側破損
608	"	"	23.5	6.8	2.3	-	草履型・小判形・壺なし。後緒部割込み、2対の角釘。台面に鉄釘、鉄釘跡。荒れ。	-
609	"	"	17.8	6.6	1.5	-	草履型・小判形・壺なし。前緒部浅いU字状抉り、方形の小穴跡。後部破断。裏面前方切削。摩。	-
610	"	"	17.0	8.0	1.3	-	草履型・小判形・壺なし。前緒は縄を角木釘でとめる。前端に小鉄釘跡2。荒れ。ヒケ著。	-
611	"	"	8.1	6.2	1.5	-	草履型・小判形・壺なし。前部全面前緒部浅く削り込んで2ヶ所の釘穴。裏面摩。	-

Tab.4-9 遺物観察表（木製品）

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
612	SX15	下駄	13.2	7.8	1.9	-	草履型。裏面荒れ。	-
613	"	下駄歯	7.6	10.9	1.4/ 釘2.4	-	角釘4点。接地面摩か。	-
614	"	不明	6.2	9.2	0.9	-	円周部端面に加工痕。	-
635	SX16 木屑層	"	5.9	5.9	1.3	-	部材の端切か。	-
636	SX16	曲物	径 7.5	-	0.5	-	接合用の巾6.5mの樹皮残る。歪みあり。	-
637	SX16 木屑層	箸	19.0	0.6	0.4	-	両端に面。	完
680	落込み2	曲物	径 6.5	-	0.2	-	-	-
681	"	"	径 11.0	底径 11.4	残高 4.0	-	側板は樹皮で接合。底板は3部を木釘で接合。体部上位は欠失か。歪みあり。	-
682	"	折敷	23.5	13.3	0.7	無塗装。	縁に下からの木釘。	-
683	"	不明	13.0	4.3	1.3	-	荒れ著。	-
684	"	下駄	16.8	7.3	2.1	-	草履型・小判形・壺なし。後緒部割り込み。前方4点、中央1点の小角釘跡。	-
685	"	"	13.7	6.4	1.7	-	草履型・小判形・壺なし。台面前緒部に浅い抉り。前緒部3点、中央部1点の小釘跡。	-
686	"	"	7.6	6.3	1.1	-	草履型・小判形・壺なし。後緒部に割り込み。木釘跡。	-
687	落込み3	栓	3.4	5.0	4.6	-	春材部の腐食、収縮著。	-
702	井戸1 掘形	不明	11.7	3.3	1.7	-	木目が緻密で堅い材。	-
703	井戸1	井戸側	173.2	14.5	4.6	-	下端墨書「下合(より)五」(以下同)	-
704	"	"	170.5	14.6	4.6	-	" 上端切断。	-
705	"	"	166.3	11.8	4.5	-	" 上端鋸で切断、端はもぎ取る。	-
706	"	"	176.6	12.4	4.7	-	" 上端切断。	-
707	"	"	169.4	13.5	4.6	-	" "	-
708	"	"	176.6	10.1	4.2	-	" 上端切断・もぎ取り。中央部両側面に顕著な切削痕。	-
709	"	"	174.5	15.1	4.7	-	" 上端切断。	-
710	"	"	174.3	13.0	4.6	-	" "	-
711	"	"	182.4	14.4	4.6	-	" "	-
712	"	"	185.3	14.2	4.5	-	" "	-
713	"	"	185.6	15.2	4.6	-	下位墨書「下合(より)五」ノ打・・・壺枚」	-
714	"	"	184.5	13.2	4.7	-	下端墨書「下合(より)五」	-
715	"	"	189.3	11.9	4.4	-	" 面取りなし。上端破損	-
716	"	"	183.1	16.3	4.7	-	"	-

Tab.4-10 遺物観察表(木製品)

図版 No.	位置	器種	法量 (cm)			塗 装	備 考	残存度
			全長	全幅	全厚			
717	井戸 1	井戸側	184.8	13.4	5.1	-	下端墨書「下合(より)五」。面取りなし。一辺の角部に2ヶ所の切り欠き。	-
718	"	"	187.9	13.3	5.0	-	下端墨書「下合(より)五」。外面の上位に斜位の加工痕。	-
719	"	"	188.4	15.2	5.1	-	下端墨書「下合(より)五」。	-
720	"	"	188.4	12.7	5.0	-	"	-
721	"	"	185.1	13.1	4.5	-	"	-
722	"	"	185.1	14.2	4.4	-	"	-
723	"	"	185	13.1	4.5	-	"	-
724	"	"	189	16.4	5.3	-	下端の面取りなし。	-
730	埋桶 2	不明	14.7	4.7	3.8	-	角錐形。上端は切断。荒れ。	-
733	4-1区 P3	"	24.6	1.5	1.3	朱塗	摩著。	-
769	集中 4	釣瓶	27.9	4.5	2.3	-	軸受け。瓦と共出。	-

Tab.4-11 遺物観察表 (木製品)

6. 瓦

瓦は軒平瓦，軒丸瓦，平瓦，丸瓦を中心に、敷瓦と思われるもの，鳥衾瓦，飾り瓦などが出土している。ここで資料として紹介するものは、軒平瓦・軒丸瓦をはじめ、文字を有する平瓦・凹面にコビキ痕が残る丸瓦と、何点かの道具瓦（棟瓦・鳥襖瓦）にとどめる。軒平瓦・軒丸瓦は瓦当文様の全てを提示できるように心がけたが、小破片となっているものが多く、それらは瓦当文様の確定が難しく時間的な制約から一部を除いて省略した。また、今回の報告では時間的な制約があったため、出土した瓦当文様を紹介する事に重点をおき、各分類のうち1点は断面図を載せるようにしたが、その他は拓影図のみの提示になっている。瓦の年代の検討などはまとめの章に譲り、ここでは、拓影図、および一部の断面図の提示を主な目的とする。

(1) 軒平瓦

軒平瓦については、瓦当文様から分類を試みた。なお、それは平成12年に調査された三ノ丸に準じるようにしている。しかし、三ノ丸で出土していなかった文様については新しく分類記号を与え、逆に三ノ丸類は今回は出土していないので空けておく。ここでは文様による分類に重点をおいて、正確には軒平瓦ではない軒棧瓦や、道具瓦もここで同時に分類している。

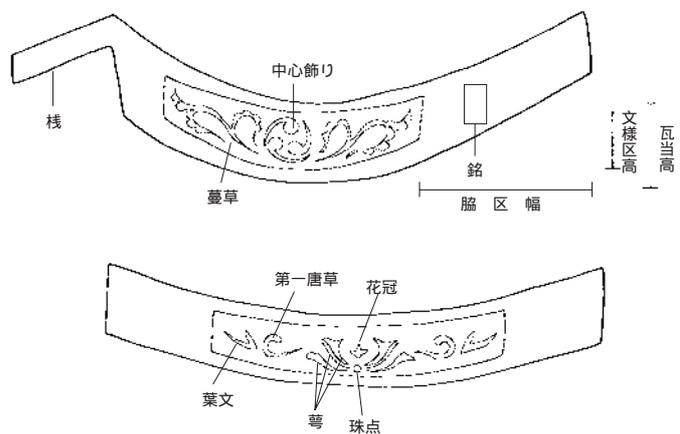


Fig.81 軒平瓦文様細部・部位の名称

軒棧瓦は、瓦当幅、文様区幅が左右で異なる場合が多く、また脇区幅も異なる。棧は、瓦当幅、文様区高が広い方に、脇区幅が狭い方につくようである。キラ粉の有無などの技法の特徴、棧が左右どちらについているかは、一覧表にゆだねる。

軒平瓦 類 (Fig.82-845・846)

三ノ丸で最も多く出土したタイプで、現在の高知城に葺かれている瓦のほとんどもこのタイプである。今次、この2点のみの出土である。2点ともにキラ粉がみられる。

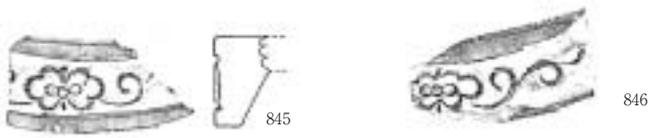
軒平瓦 類 (Fig.82-847~857)

847~854までは同文であるが、855~857は若干文様の意匠が異なるようにも思える。しかし、便宜上今回はこの分類にいれておきたい。3単位の雄蕊状文の中心飾りをもつタイプであり、三ノ丸では花のようなものが3つ集まっているので「三花文」と称し、今回も一覧表は「三花」としている。

[-1](847・848)

このタイプは雄蕊の茎が肉厚の線分1本で描かれている。847は珠点が塗りつぶされているが、848は線刻で描かれる。848には右隅に「左」とも読めるものがあるが、これがあるのはこの1点の

[類]



[類]

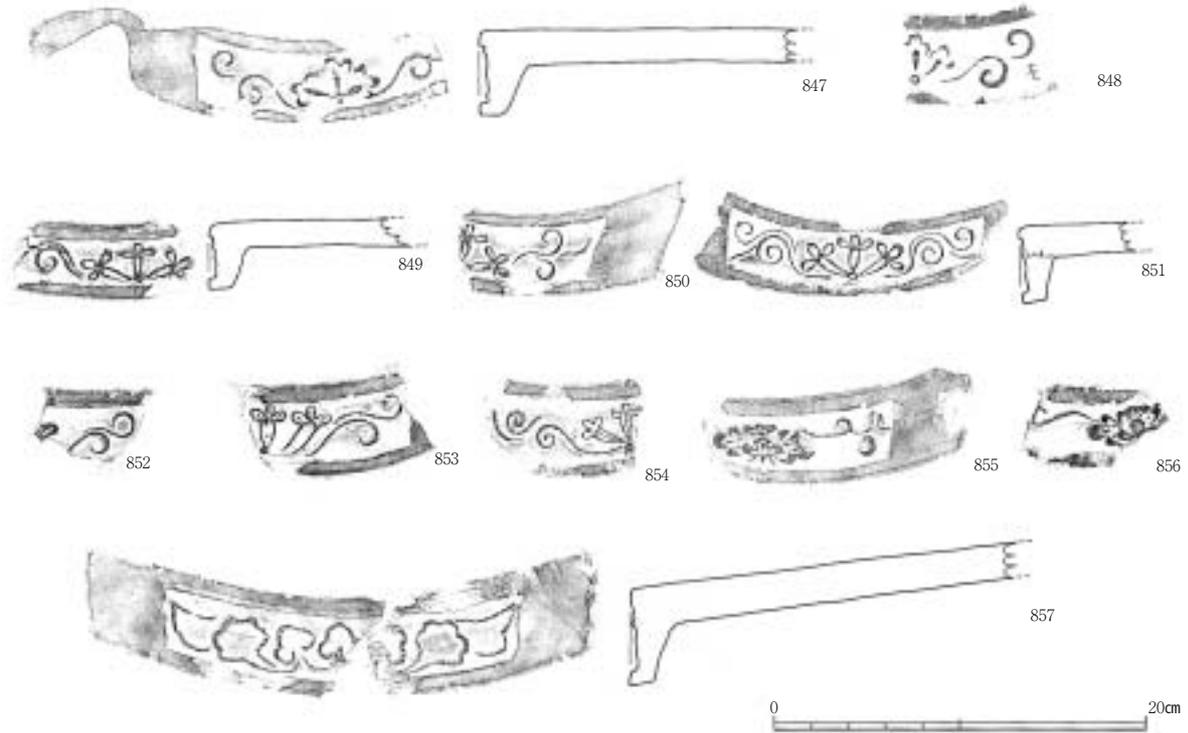


Fig.82 軒平瓦 (1)

みであり、刻印なのか、範の傷や、範のズレによるものなのかは断定できない。

[-2-a](849~852)

雄蕊状文と珠点が線刻で表れ、唐草が2転し、飛び唐草が1本あるタイプである。849は唐草の端がどう終わるか不明であるが、850~852と中心飾りは似ており、唐草も同様に終わるだろう。

850は右棧瓦である。849とは、唐草の形態がやや異なり、唐草の巻き込みが浅く、また右脇区に、「片勇」の銘がある。同範品が他にも2点出土している。851は850より唐草が巻き込む。

852は小片で文様の詳細は不明であるが、後の -3 類のように花卉の中に線分が入る事はないので -2 にしておく。

[-2-b](853・854)

3単位の雄蕊状文の中に、線分があるタイプである。853は、花卉の中に線分があり、珠点は塗りつぶされる。同範が他にも2点ある。854は花卉の中と茎に、線分があり、珠点は線刻で表され、同範が他にも2点ある。

[-3](855・856)

他の 類と違い3単位の雄蕊の下中央にもう一つ同じ様なものが描かれ、唐草も独特な形状であ

[類]

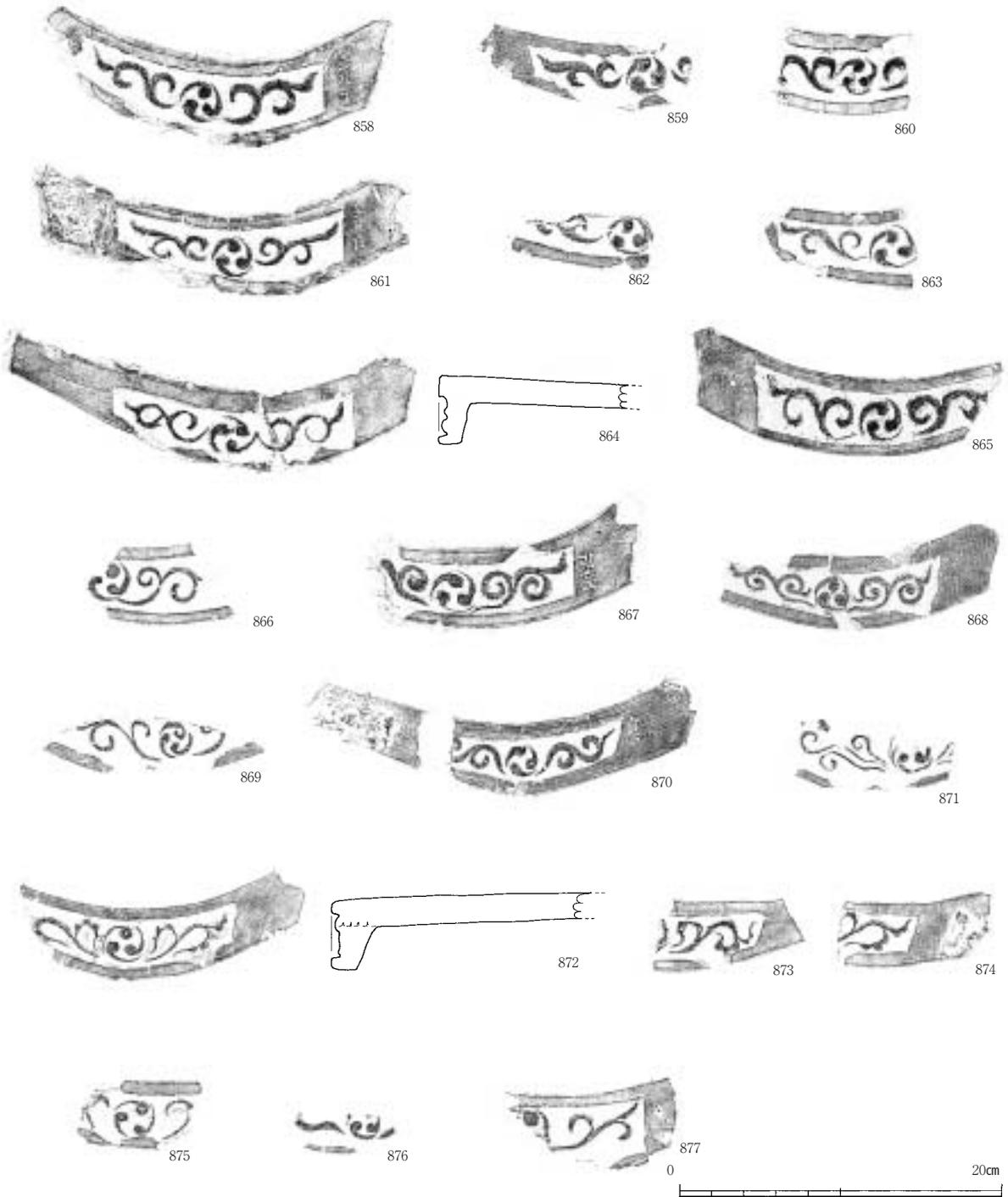


Fig.83 軒平瓦(2)

る。この2点は同範と思われる。また、2点とも棧瓦である。855は右に唐草の続きがあるような終わり方をしている。

[-4](857)

3単位の雄蕊状文があるのは他と同じであるが、脇の文様が他とは大きく異なる。全体的に他より大ぶりである。

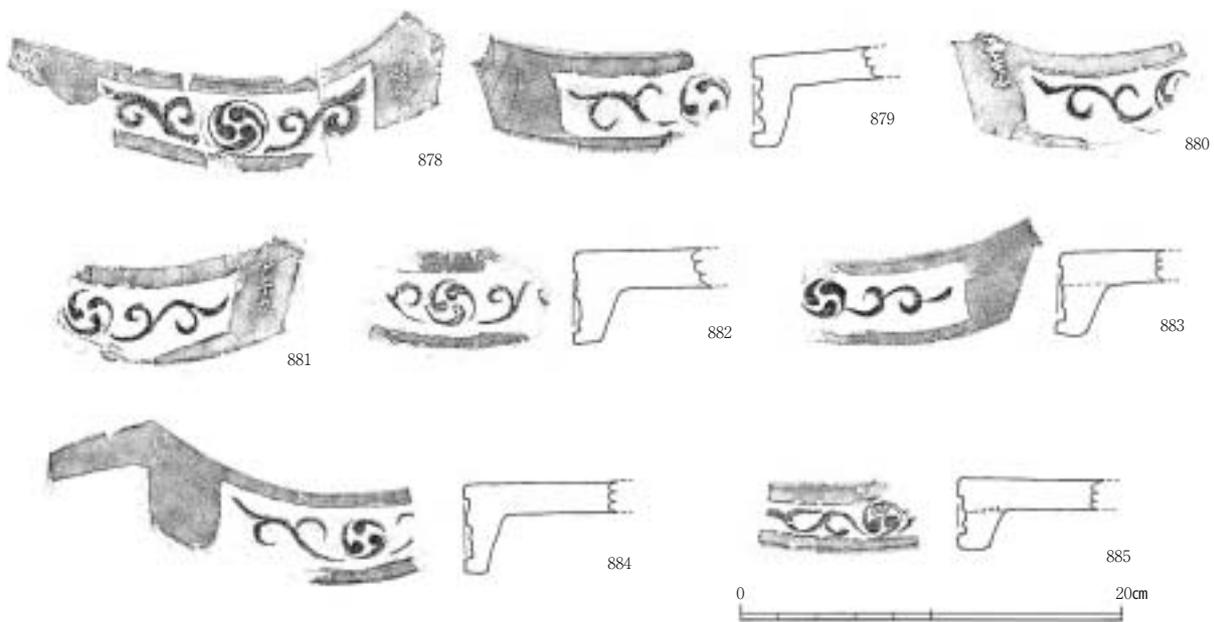


Fig.84 軒平瓦 (3)

これは両端が残っているが、棧はなく、他の 類は棧瓦が多いが、これは棧瓦ではない事がわかる。同範が他にも3点ある。

軒平瓦 類 [Fig.83-858 ~ 877、 Fig.84-878 ~ 885、 Fig.85-886 ~ 895]

巴文を中心飾りとするものである。

三巴を -1として、左巻きを -1-a、右巻きを -1-bとする。

二巴を -2として、左巻きを -2-a、右巻きを -2-bとする。

一巴を -3として、これは1点のみの出で、それが右巻きなので -3-bとする。

文様に少しずつ差異があるが、完形で残っているものにはすべて棧があり、 類はほぼ軒棧瓦と考えてもよいであろう。

[-1-a-ア] (858 ~ 869)

中心飾りが三巴で、唐草が上向き - 下向き - 飛び唐草のような巻きこみのない唐草が上向き、となるタイプ。858は「アキ九平」の銘があり、高知県東部の安芸市（現在も瓦の産地である）でつくられたものと思われる。859は、肉厚で凹凸が激しく、文様区高が狭い。860は巴と巴尾の間が広い。861は「蕪生長」の銘があり、高知県香北町蕪生野産の瓦だと思われる。左端に、漆喰が付着する。862は唐草が低いところで折り返しており、かなり肉厚である。唐草の割合に比べれば、巴はシャープである。キラ粉が顕著で銀化現象が見られる。863は861とよく似ている。861の方が第3唐草が少し長く肉厚で、同範ではないと思われるが、酷似している。864は858 ~ 863と比べると、巴が45度ほど傾き第3唐草がかなり短い。第2唐草がかなり巻き込む。865 ~ 869は、唐草がかなり立ち上がり、巻き込みも大きく、文様区も広い。865は唐草が上にはねる形で巻き込み、第3唐草は、はね上る。キラ粉が顕著で銀化現象がみられ、漆喰が付着している。「匡兼」の銘がある。866

は第1唐草が第2唐草の半分程で小さい。唐草が巴につながっている。867は唐草の巻き込みがかなりするどく「弘？」の銘がある。

868は唐草がかなり巻き込み、第1唐草は、内側に向けて枝別れして、唐草が出ている。先を丸くおさめており、巴も他に比べて小さい。「安キ助」の銘があり、安芸産の瓦と思われる。

869は唐草の線が細く、巴頭が鉤状になっている。

[-1-a-イ](870)

唐草の反転方向がこれまでの -1-a-アと逆で、下向き - 上向き - 飛び唐草のような巻き込みのない唐草も上を向くタイプ。巴が868よりさらに小さい。「片治」の銘があり、高知県土佐山田町片地産の瓦と思われる。今次調査地では、頭文字に「片」がつく刻銘瓦が多数出土している。895が、同範の可能性はあるが、小片のためはっきりわからない。

[-1-a-ウ](871)

3本の唐草の起点がほぼ同じで、か細い印象を受ける。

[-1-a-エ](872~874)

中心飾りの両脇が唐草でなく蔓草になる。872に「片常」、874に「片常」の銘があり、872と874は文様、文様区高ともに同じで、文様区は同範で、銘は同義である。

[-1-a](875~877)

唐草部分があまり残っていないため、小分類が不可能である。875は唐草の巻き込みがかなり浅い。876は巴の尾がつながり圏線状になる。877は唐草が直線的であり、巴頭が大きいようである。ともに、第1唐草は上を向くようである。

[-1-b-ア](878~884)

本類は、中心飾りが右巻きの三巴で、上向き - 下向き - 上向きとなるタイプである。878は879に似ており、かなり大きい巴になっている。しかし、878の方がかなり唐草が肉厚で、巴頭が878の方が丸く、879が巴尾がつながり圏線状になるのに対し、878は巴尾が1カ所しかつながらない。878には左隅に漆喰が付着しており、-1-a-アの867と同じ「弘？」の銘がある。

879・880は、巴が圏線状になり、第1唐草が巻き込まず、小さい。880より879の方が全体的に大きく同範ではない。880は「アキセ」の銘があり、安芸産の瓦と思われる。

881・882は879・880と同様に第1唐草が第2唐草に比べて小さいが、879・880と違い唐草の先端は横方向に巻き込む。881と882は両者とも巴が鉤状になっており、文様細部まで酷似し、文様区高も同じであり、おそらく同範であろう。881には880と同じ「アキセ」の銘がある。

883は唐草の形状が他の -1-b類とは全く異なり、短くあまりまきこまない唐草3本で構成される。文様区の中で、文様の占める面積が他より少ない。

884は唐草の形状は879・880に似て第1唐草の巻き込みがほとんどないが、第2唐草が884の方が横に扁平になり、巴が圏線状にならない。881・882も比較的巴が小さいが、884はさらに小さくなっている。

[-1-b-イ](885)

885は文様区が他に比べて極端に狭い。唐草の向きが -1-a-イ(870)と同じで、他のものと

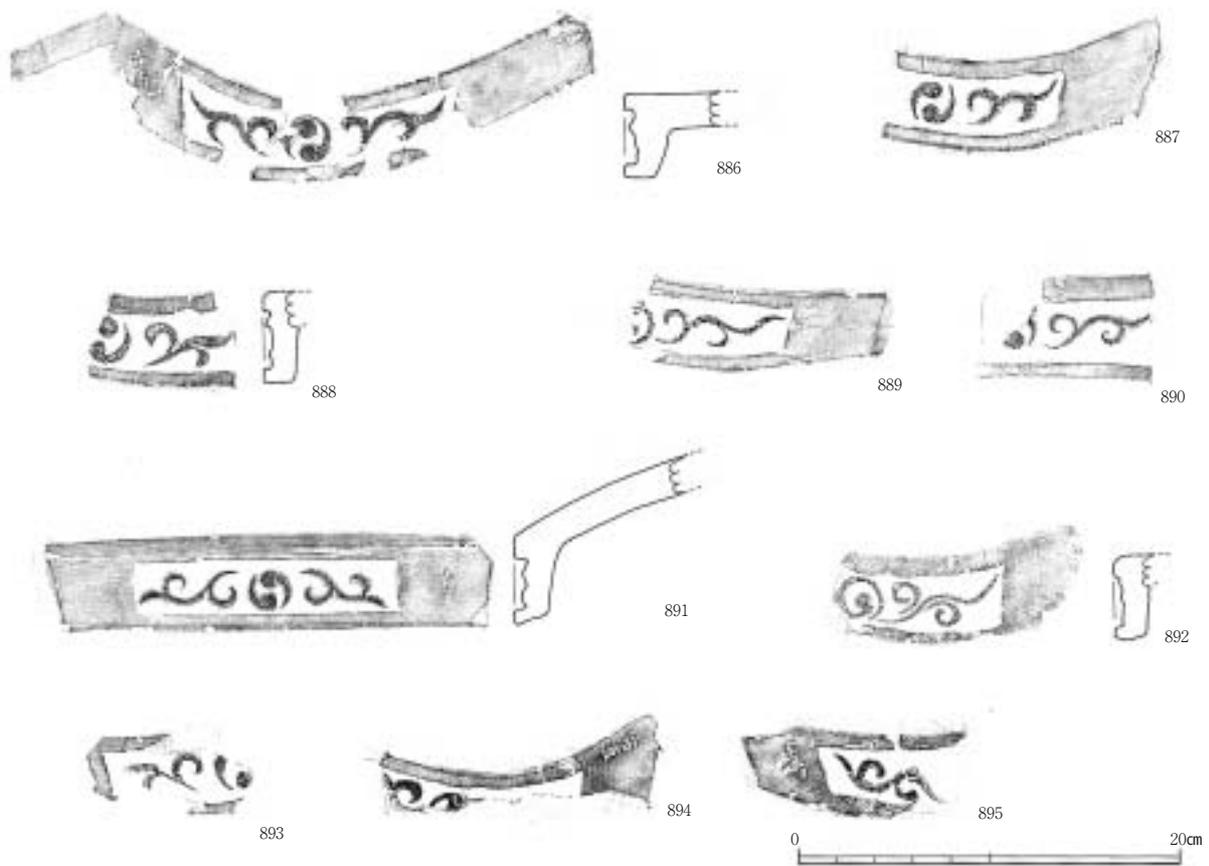


Fig.85 軒平瓦(4)

は反転方向が上下逆の唐草になる。右巻の三巴の中ではこの1点のみの出土である。

[-2-a-ア](886 ~ 888)

中心飾りが左巻きの二巴である。唐草はかなり肉厚で、あまり巻き込まない。おそらく886・887は同範であると思われる。887の方が全体的に線が細く、第3唐草が887の方が少し長いなど、小さな差はあるが、範の押方による差異ととれる範囲内だろう。なお887には漆喰が付着している。

888は、唐草が1点から3つに分かれるような形状である。

[-2-b-ア](889)

中心飾りが右巻きの二巴である。889は、第3唐草が長く、平瓦部凹面には銀化現象がみられる。

[-2-b-イ](890)

軒の部分が直線であり、棟瓦かと思われる。

[-2-b-ウ](891)

890と同様に棟瓦かと思われるが、891は、890と唐草の反転方向が上下逆になる。「布直」の銘がある。

[-3-b](892)

右巻の一巴で、高知城関係では今回が初めての出土である。右に棧があったような痕が確認できる。かなり摩耗しており、表面のキラ粉などの確認が不可能である。

〔類〕

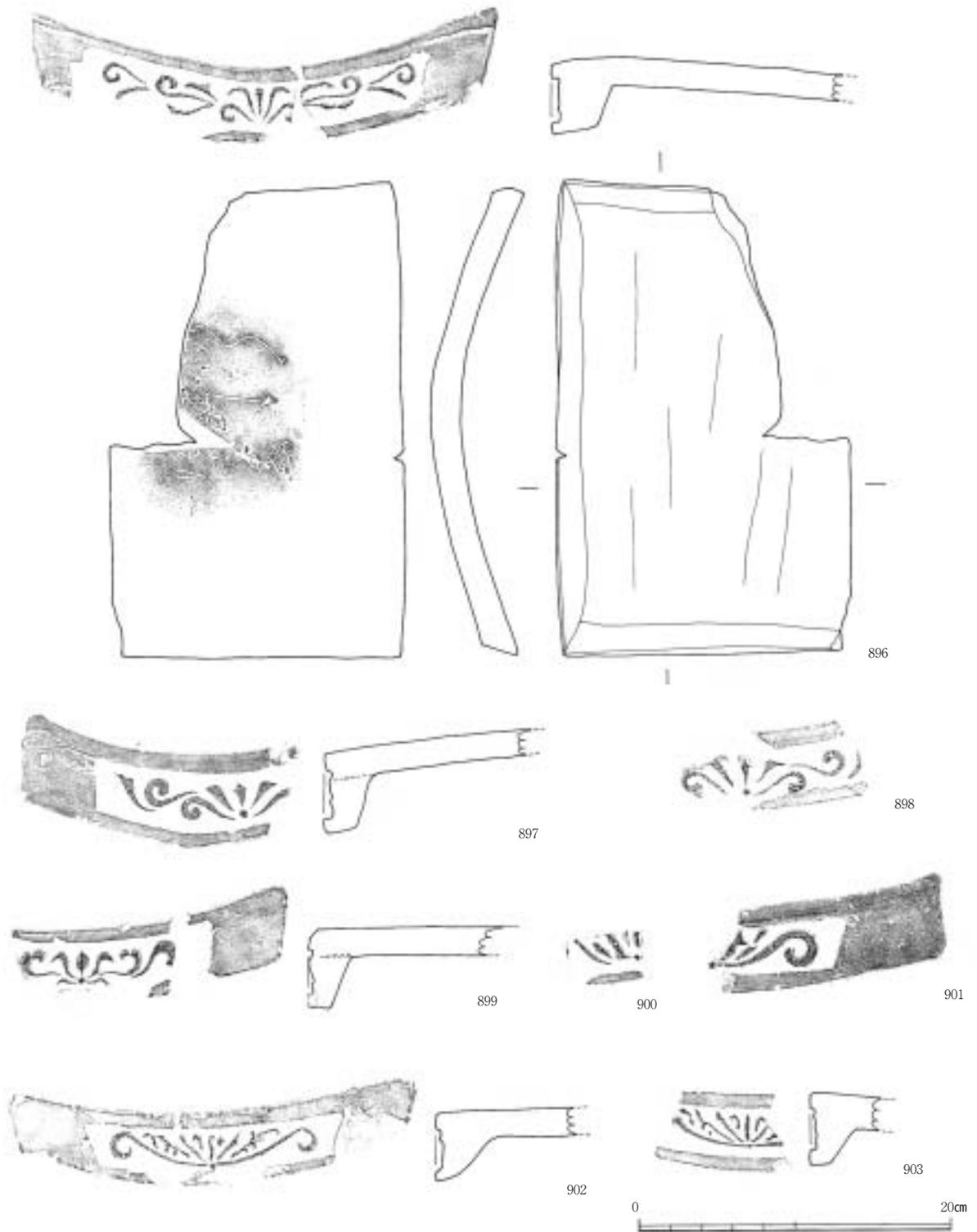


Fig.86 軒平瓦 (5)

〔 -a 〕(893・894)

-aは左巻きである事はわかるが、三巴か二巴かはっきりしないものである。893には唐草が同範のものが他に2点あり、いずれにも平瓦部凹面にキラ粉がある。894は左巻の巴であるが、「布直」

の銘があり、巴や唐草の位置などが886と似ており同範の可能性はある。

[](895)

中心飾りが欠損しているが、唐草の形態から巴文と思われる。 -1-a-カ(870)に唐草が酷似しており、また「片治」の銘も同じであり、870と同範の可能性はある。

軒平瓦 類 (Fig.86-896~903)

三ノ丸では、三子葉文のみの出土であったため 類は三子葉文としているが、今回は五子葉文も出土しており、これも 類とし、三子葉文を -1 類、五子葉文を -2 類とする。なお、今回、三・五子葉文と橘状文との区別が付きにくいものが数点あったのだが、その区別は、花冠のすぐ脇が芽状突起になっているものを橘状文とした。

[-1-a](896)

今回出土の 類のなかで、唯一珠点をもたない。第1唐草が三子葉文のすぐ脇にあり、第2唐草の上下と、第3唐草の下に蔓草が描かれる。これと同範と思われるものが、高知城三ノ丸でも出土している⁽¹⁾。平瓦部凹面に篋書きがあり、また瓦当面はハナレ砂が顕著である。

[-1-b](897・898)

897と898は同範であると思われる。胎土も表面もよく似ている。珠点をもち、三子葉の中央は菱形になっている。また、第3唐草に相当する飛び唐草のようなものは、芽状突起になっており、橘状文に類似性がうかがえるが、前述した通り、三子葉中央の菱形状のものすぐ脇が芽状突起になっていないので、三子葉文としておく。

[-2-a](899)

これも橘状文のようにも見えるが、五子葉中央の楕円状のものすぐ脇が芽状突起になっていないので、五子葉文としておく。第1唐草にくびれがあり、蔓草になっていると思われる。

[-2-b](900・901)

900と901は同範であると思われる。珠点をもち、中心飾りと第1唐草の間の線分は半分くらいで一度切れている。唐草はのびやかに一転し、 -2-c類に類似性がうかがえる。

[-2-c](902・903)

中心飾りは五子葉文と思われる。珠点をもち、中心飾りと第一唐草の脇に蔓草のようなものがあり、その脇に長い唐草がのびやかに一転し、先述の -2-b類との類似性がうかがえる。高知城御台所屋敷跡で同範かと思われるもの(珠点の位置や細部に至るまで酷似)が、近世から近代と比定される面で出土している⁽²⁾。902は瓦当の裏部分が特徴的で、なだらかである。同範の903はそのような事はない。

軒平瓦 類 (Fig.87-904~934、Fig.88-935~941)

橘状文を中心飾りとするものである。前述したように 類の三、五子葉文と区別しにくいものがあるがここでは、中心の花冠の脇に芽状突起があるものは、橘状文とした。花冠がフォーク状になる -1 類、花冠が扇状になる -2 類、花冠がクローバー状になる -3 類、花冠が楕円になる -4 類に大別される。

〔類〕

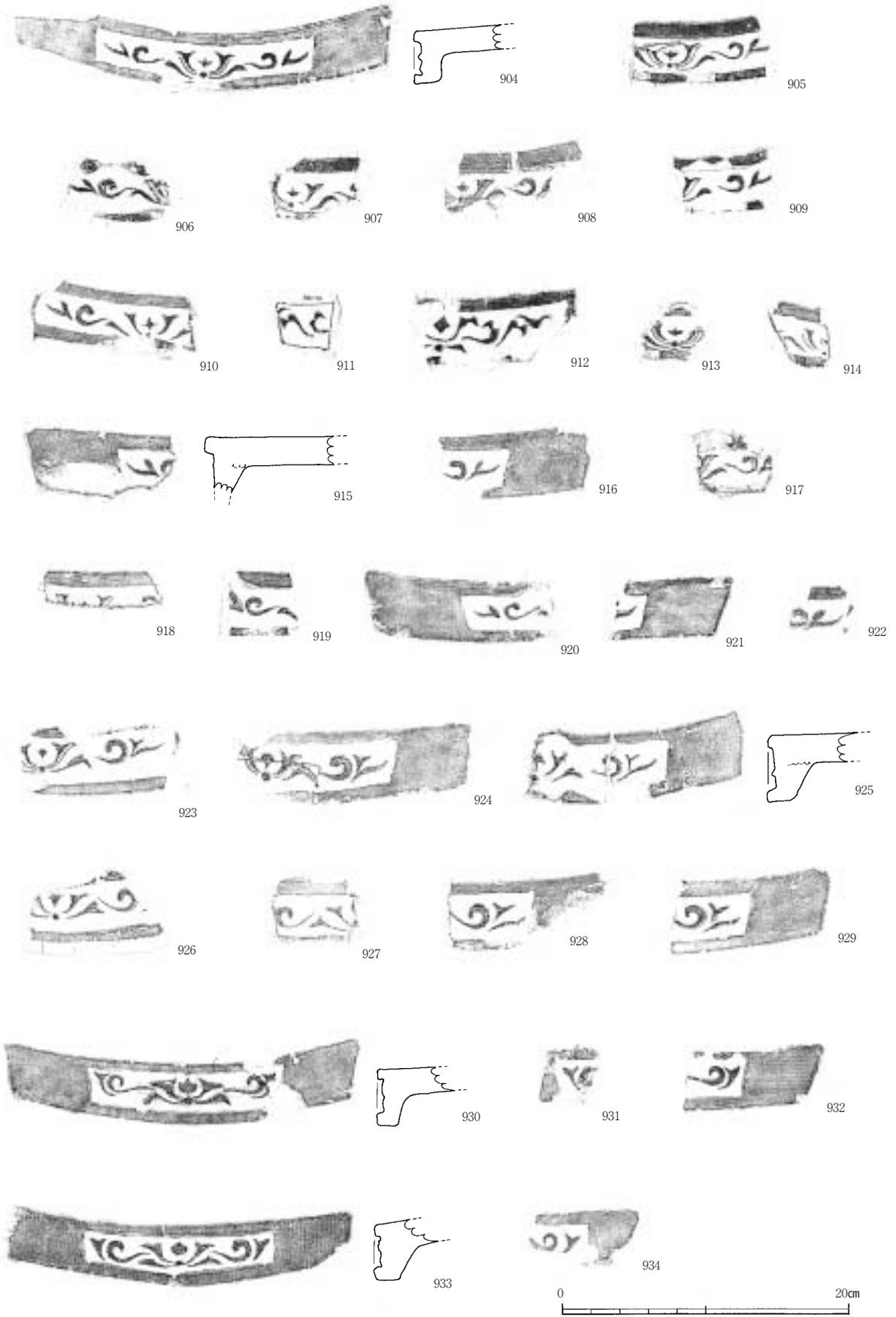


Fig.87 軒平瓦 (6)

[-1-a](904~909・913・914)

花冠がフォーク状に三つ又になり、その脇に萼が3枚あるタイプで、花冠のすぐ脇に芽状突起のものがあり、そのすぐ外(2枚目)に細い線分があり、その外(3枚目)に芽状突起にならないものがある。

905は904より唐草の起点もやや中心寄りで葉文は分かれていない部分が長く、花冠もフォーク状に分かれていない部分長い。906・907も唐草の起点は中心寄りである。

908はフォーク状花冠があまりえぐれていない。909は花冠が残っていないので、はっきりとはわからないが、唐草が908に酷似しており、同範の可能性はある。913・914はフォーク状に三つ又になる花冠と、萼が3枚確認できるので、この類に入れる。

[-1-b](910)

この類は芽状突起の萼の外の細い線分がなく、そのため萼は2枚しかない。それ以外は -1-aと同じである。

[-1-c](911・912)

-1類の中では異色であるが、花冠がゆるやかではあるがフォーク状になるので、-1類にしている。萼は2枚で構成され、他の-1類は一番外側(2枚目あるいは3枚目)が長い、これはその逆で2枚目は短い。また、唐草にあたるものが蔓草で表現され、蔓草が2本と蔓草の飛び唐草が1本ある。

[-1](915~922)

-1類であることはわかるが、小片のため小分類ができないものである。916は、葉文が-1-a類の905に似ているが、第1唐草が905のほうがもう少し巻き込む。920は、-1-a類の906に似ている。

[-2-a](923・924)

-2類は、花冠が扇状になり、第1唐草があり、第2唐草に相当する葉文があり、第3唐草に相当する飛び唐草があるものである。-2-aは萼が細い線分も含めて3枚ある。

924は923に比べて、珠点と花冠が大きく、923は第2唐草に相当する葉文と、第3唐草に相当する飛び唐草の起点が同じなのに対し、924は違っている。全体的に923の文様の方がシャープである。

[-2-b](925~927)

-2-bは、細い線分の萼がなく、萼は2枚である。926・927は925に比べ第1唐草の起点が中心よりである。926と927は、萼の先端の割れ方も、第1唐草の起点も同じで、同範かと思われる。

[-2-c](928・929)

中心飾り部は欠損しているが、唐草・葉文の形態から、-2類と思われる。

928・929は第1唐草のおさめ方が似ており、第3唐草に相当する飛び唐草が同じ所で屈曲しており、同範かと思われる。

[-3](930~935)

-3類は、花冠がクローバー状になり、第1唐草、そして第2唐草に相当する葉文があり、萼は細い線分がなく、2枚で構成されるタイプである。930は銀化現象が顕著である。

931~933は930に比べ、第1唐草が下に垂れており、第2唐草に相当する葉文の起点が外側で中心飾りも若干小さい印象である。その内の933は銀化現象が顕著である。934は、第2唐草に相当する葉文の起点が930ほど中心ではないが931~933ほど内側でもない。凹面に、漆喰のようなものが付着している。935は、930より、萼や第2唐草に相当する葉文のY字が深くえぐれており、また、第1唐草が萎縮している。

[-4-a](936)

-4類は花冠が丸になるタイプである。 -4-a(936)、 -4-b(937・938)は、第2唐草に相当する葉文が、外側に開いている。 -4-a(936)は、萼は2枚で構成され、第1唐草の先端が丸くおさまり、文様全体が、丸みを帯びた印象である。

[-4-b](937・938)

936と似ているが、 -4-a(936)は2枚目の萼が芽状突起になっていなかったが、 -4-bは萎縮してはいるが芽状突起になっている。また、1枚目の萼が -4-aより -4-bのほうが立ち上がっている。 -4-bはこの残存部より上にも文様の続きがあり、文様区が -4-aより広く、 -4-aと -4-bは似てはいるが完形で残っていれば雰囲気も違っていただろう。937と938は、おそらく同範であろう。珠点が938のほうが小さいが範の押し方の範囲内ではないだろうか。2枚目の細い線分の萼が938では確認できるが、珠点から始まるのではなく上半分ほどの所から始まっている。したがって、937に2枚目の細い線分の萼が現れてなくてもよいだろう。2枚目の萼の芽状突起の形状などが酷似しており、胎土も似ている。

[-4-c](939)

萼は2枚で構成され、萼の2枚目には芽状突起がない。第1唐草があり、第2唐草に相当する上向きの葉文がある。 類宝珠文(942・943)に中心飾りや唐草の形態がやや似ている。現時点ではそれが何か意味をもつのか不明である。

[-4-d](940)

唐草は -2類(923~929)と同じで、第1唐草があり、第2唐草に相当する葉文があり、第3唐草に相当する飛び唐草があるものである。 -2類よりは第2唐草に相当する葉文がかなり退化している。文様区の下半分は二次被熱を受けている。

[-4-e](941)

萼が3枚あるが、これ以外の橋状文は2枚目が細い線分で表されているのに対し、これは1枚目、3枚目と大差がなく、様相が異なる。1枚目の萼の部分はほとんど欠損しているが、芽状突起になるようである。第1唐草がかなり萎縮して小さくなっており、第2唐草に相当する葉文も他の葉文とは異なる。

軒平瓦 類 (Fig.88-942・943)

中心飾りは宝珠文と思われる。唐草が1転巻き、葉文がある。同範のものがあと1点ある。橋状

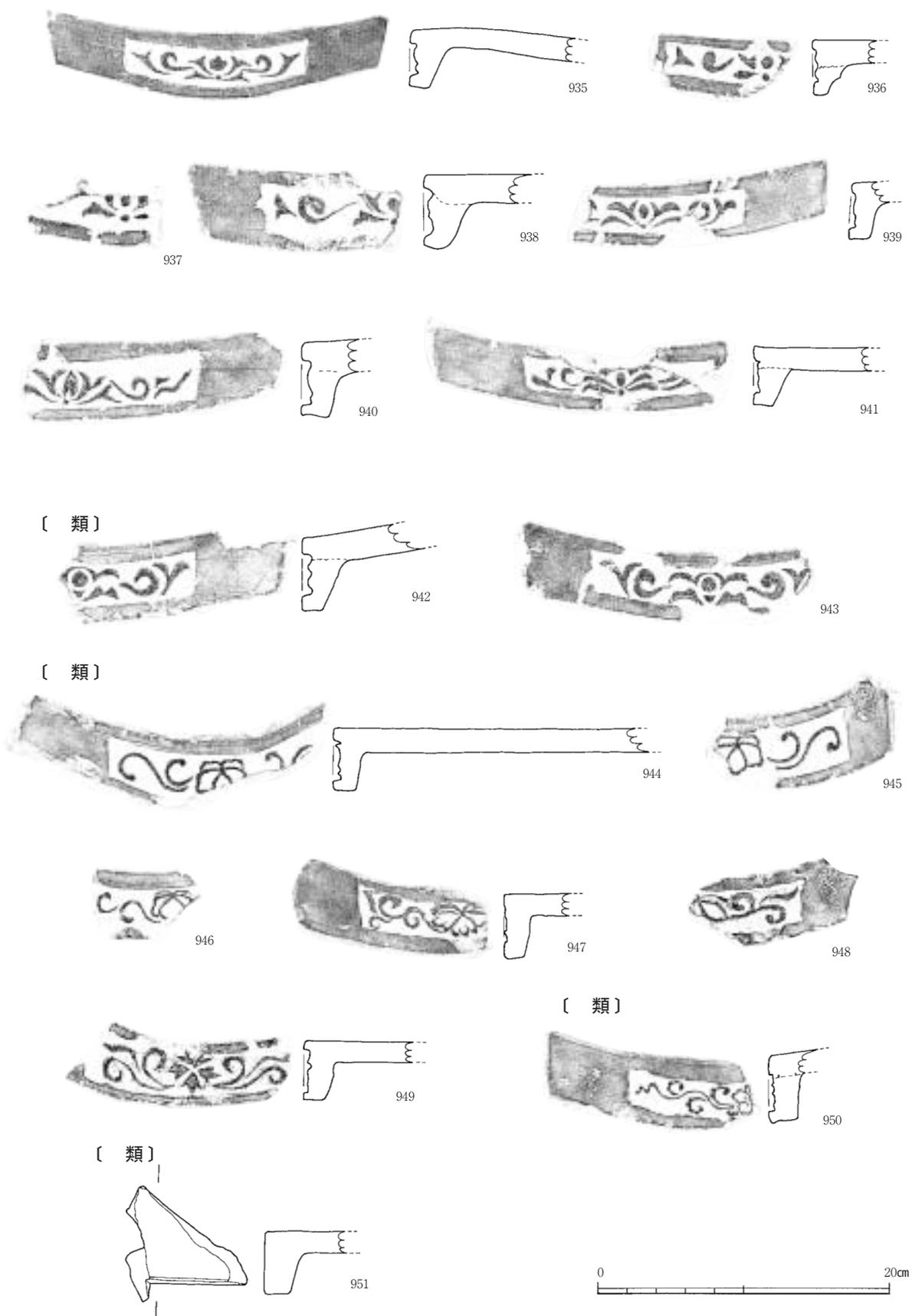


Fig.88 軒平瓦 (7)

文である -4-c (939) にやや似ているが、中心飾りの上の の上にアーチ状になるもの（橋状文なら、これが1枚目の萼）があり、 の下には逆三角形になるもの（橋状文なら、これが珠点）がある。萼が花冠上部でつながり、珠点が逆三角形となる橋状文は管見ではなく、文様全体の雰囲気としても橋状文とは異なる印象を受ける。したがって現時点では宝珠文という事にしておく。

軒平瓦 類 (Fig.88-944 ~ 949)

類は蔦文を中心飾りとするものである。

[-1](944・945)

中心飾りの脇に先を丸くおさめた唐草が2本ある。945は右肩に「中」の銘がある。944・945はおそらく同範であろう。

[-2](946)

-1類 (944・945) より中心飾りが小振りで、 -1とは唐草の反転方向が上下逆である。また第2唐草が蔓草になる。

[-3](947)

中心飾りの蔦の葉の欠刻が、 -1・ -2より丸みを帯びて葉の中に入りこんでいる。唐草は、3転巻いて、飛び唐草が1本ある。

[-4](948)

中心飾りの蔦の葉に欠刻がなく、唐草は、2転巻いて飛び唐草があるのだが、第2唐草は蔓草になっている。右肩に「アキ重」の銘があり、安芸産の瓦である。

[-5](949)

他とは少し雰囲気が異なるが葉は5枚有り、蔦文の一種だろう。2本の唐草が同じ所から出ており、飛び唐草がある。

軒平瓦 類 (950)

5弁の花が中心飾りで、1本長い蔓草が中心飾りのすぐ脇から出ており、その脇に4本の短い蔓草がある。左に「御瓦師」の銘がある。

軒平瓦 類 (951)

軒丸部分と軒平部分が一つになった軒棧瓦で、軒丸部分・軒平部分ともに瓦当文様を持たないので実測図のみを提示した。今次はこれを含めて5点の出土である。銀化現象がみられる。

(2) 軒丸瓦

軒丸瓦は、瓦当文様が山内氏の家紋である三ッ葉柏紋（ 類）と、巴文（ 類）に大別される。三ノ丸では桐紋瓦の出土があったため、それを 類にしているが、今回は出土していないので 類は空けておく。

軒丸瓦 類 (Fig.89-952 ~ 962)

[-1-a](952 ~ 960)

山内氏の家紋である三ッ葉柏紋でありこの9点は全て同範であると思われる。 -1-a類は瓦当直径が12.6cmと小さく、出土場所から見ても塀瓦の可能性が考えられる。952、955、957は丸瓦部も

〔 類 〕

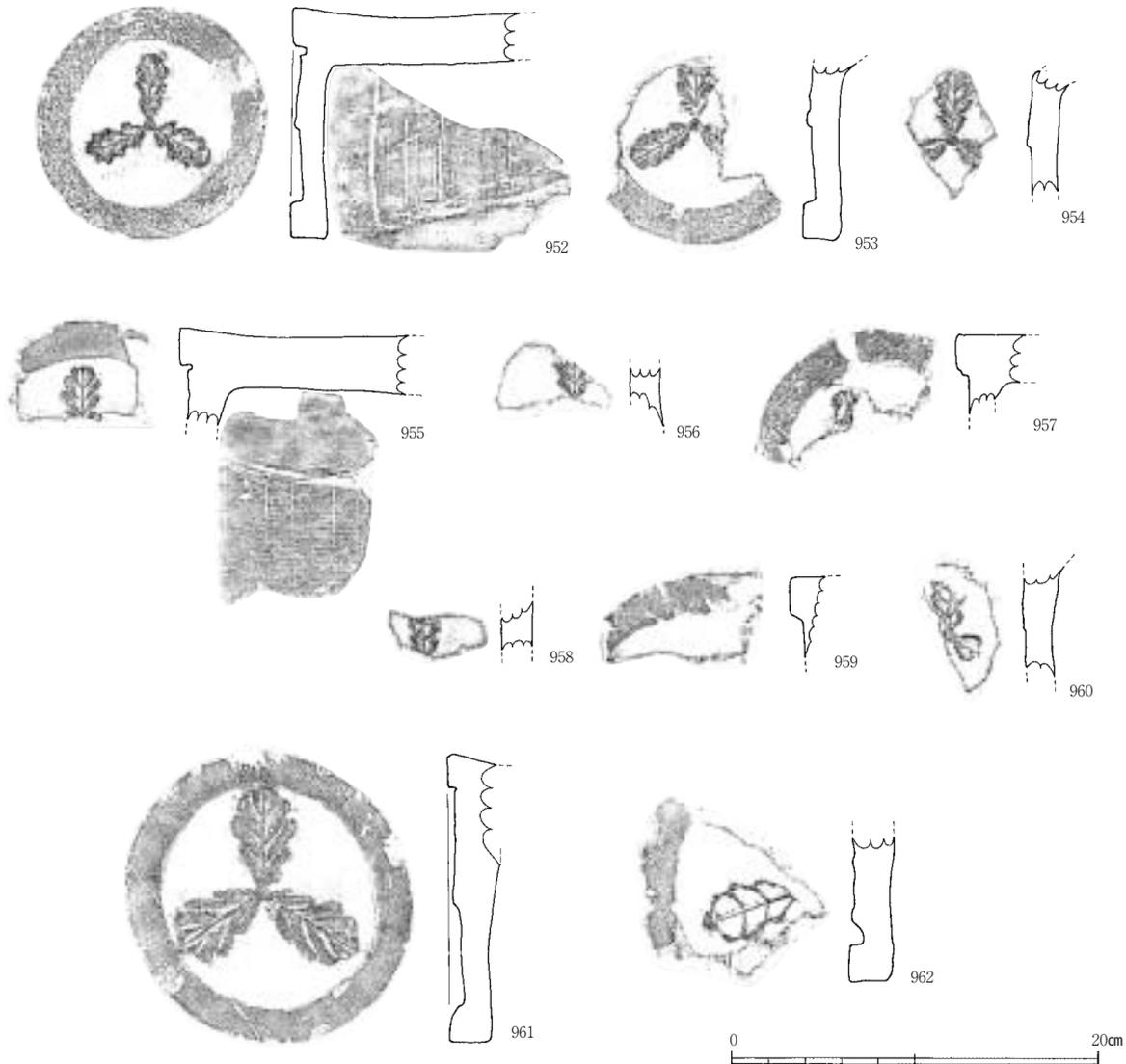


Fig.89 軒丸瓦 (1)

残存しているが、丸瓦部が瓦当面の割合から見てかなり厚くなっており、3.2cm以上ある。表面は二次被熱を受けており、凹面はすべてコビキBである。

[-1-b](961・962)

-1-a (952~960) に比べると直径が大きく、961は15.8cmである。三ツ葉柏の葉も -1-a (952~960) よりふくらみをもつ。

軒丸瓦 類 (Fig.90-963~1000)

三巴については、瓦当文様からの分類は難しいので、巴が右巻き (-1) か左巻き (-2) か大きく分類し、瓦当直径から小分類 (アルファベットの小文字) を試みた。なお、完形で残っているものは少なく、ほとんどが残存する破片から推定の直径をだした。同様に珠文数も復元による推定でだしている。文中で、復元か、そうでないかを書き分けると繁雑になるので、それは避けるが、瓦当が完形であるもの以外はすべて復元推定である。

[類]

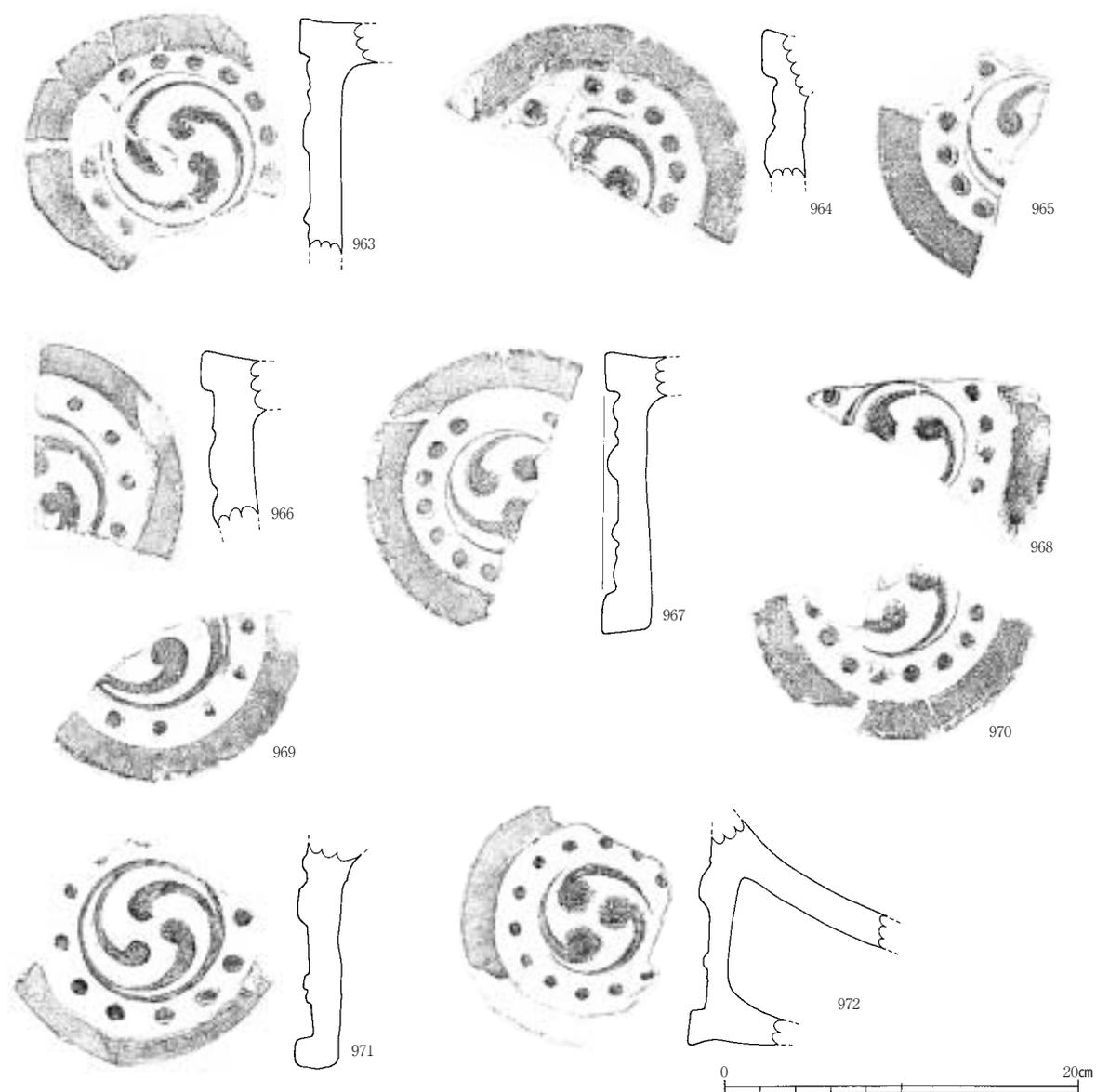


Fig.90 軒丸瓦(2)

[-1-a](963)

瓦当直径が17cmのものである。巴尾が長く、巴頭はくびれ、珠文は大きい。

[-1-b](964・965)

瓦当直径が16.8cmのものである。964・965ともに珠文数が16個である。964は巴尾が短い。965は巴尾が長く次の巴尾について、圏線状になる。巴頭はくびれている。

[-1-c](966)

瓦当直径が16.6cmのものである。珠文数が12個と少なく、また小さい。巴頭は大きい。

[-1-d](967~970)

瓦当直径が16.0cmのものである。967、968、970は珠文数が16個で、969は珠文数が12個で少なく、

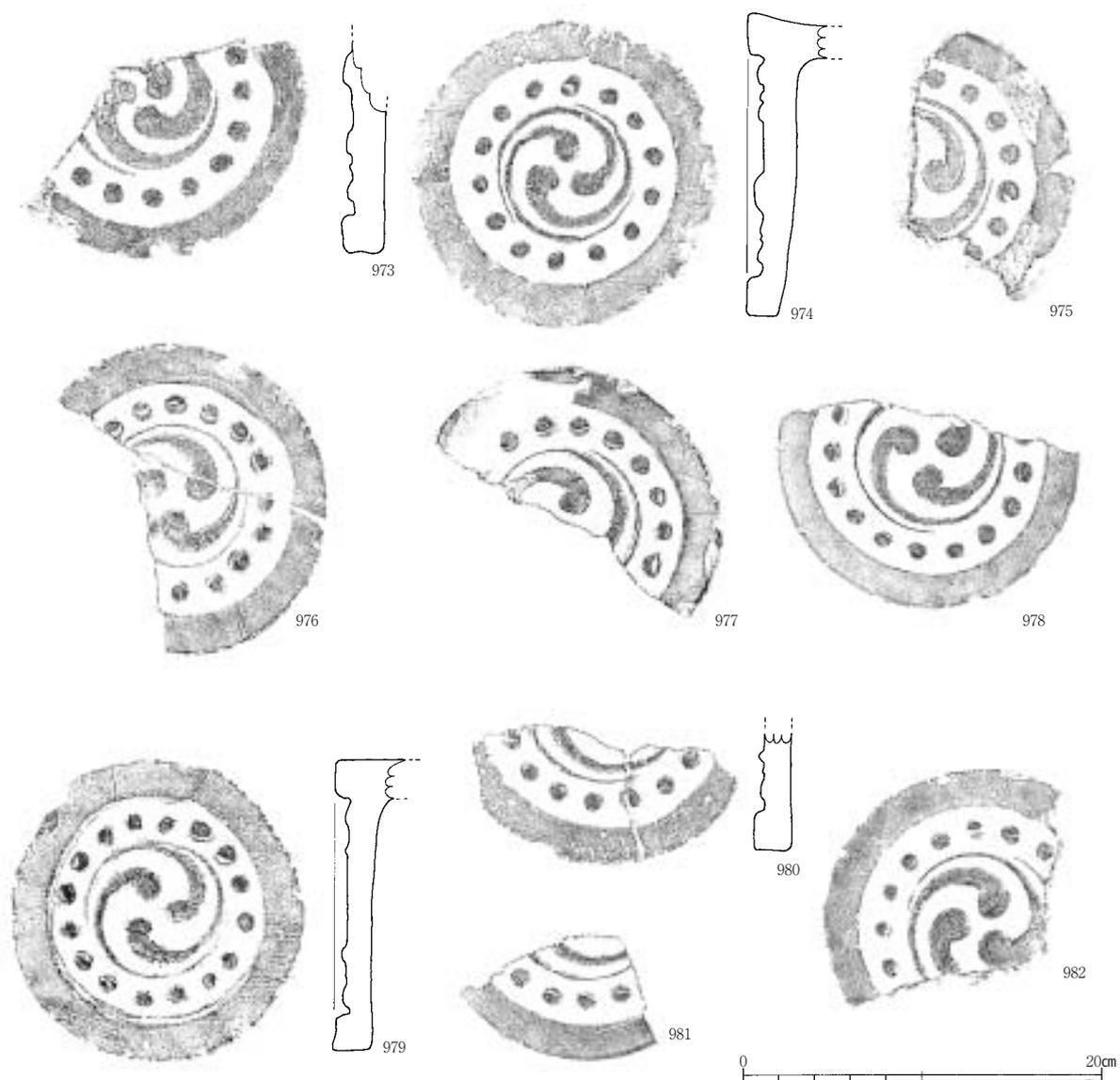


Fig.91 軒丸瓦 (3)

巴頭がかなりくびれる。969以外は巴尾が圈線状になり、巴頭はややくびれる。このように、969は他の3点と異なる点が多い。その相異は出土場所によるものと思われ、969は表採で、他の3点は瓦溜8出土である。

[-1-e](971)

瓦当直径が15.6cmのものである。珠文数が12個で、巴尾は圈線状になる。

[-1-f](972)

鳥襖瓦である。瓦当直径が16.4cmで、珠文数は13個である。

[-2-a](973)

瓦当直径が18cmで、珠文数は17個である。

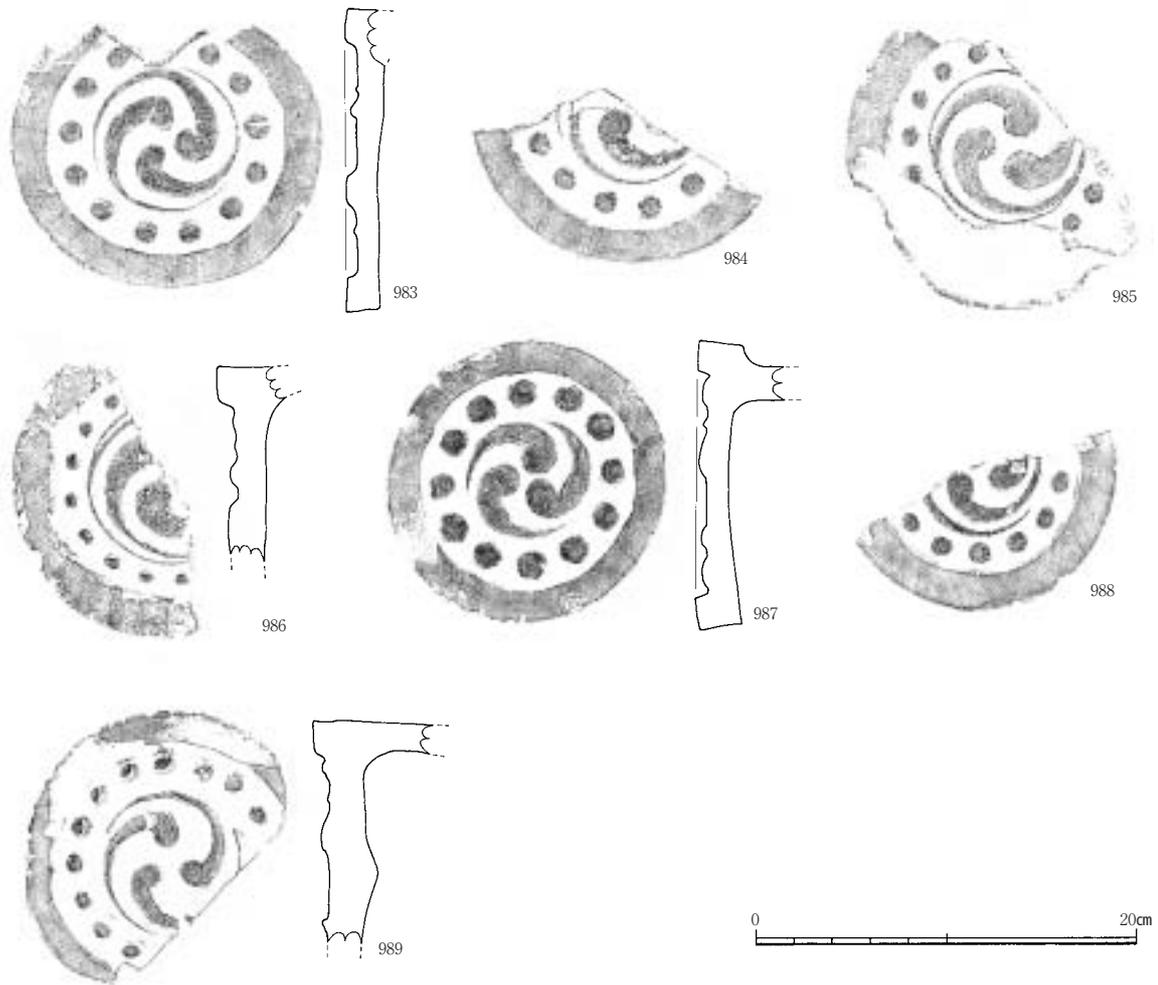


Fig.92 軒丸瓦(4)

[-2-b](974~978)

瓦当直径が17cmのものである。巴頭は全てくびれる。974は珠文数が14個で、975は15個、976~978は16個である。これらの中で974は比較的巴頭が中心につまっている。

[-2-c](979~982)

瓦当直径が16.8cmのものである。979は珠文数が16個で、980~982は17個である。979は左側の巴尾はくっついているが、右側の巴尾はくっついていない。

[-2-d](983・984)

瓦当直径が16.2cmのもので、983、984ともに珠文数が13個である。ともに巴頭があまり丸くなく、C字状に近くなっている。共に瓦溜8出土である。

[-2-e](985・986)

瓦当直径が16.4cmのものである。985は珠文数が15個、986は17個である。ともに巴尾が圈線状になる。

[-2-f](987・988)

瓦当直径が14.5cmのものである。987は珠文数12個、988は珠文数が13個である。987は、珠文が今回出土の三巴軒丸瓦の中で一番大きい。また、巴尾が極端に短く、太い。988は987より巴尾が長く、巴頭が小さく、珠文が小さい。

[-2-g](989)

瓦当直径が15cmのもので、珠文数が16個である。文様区に斜めの線がいくつも入り、調整などもあまりなく、かなり雑なつくりのものである。

[-2-h](990~997)

瓦当直径が14cmのものである。珠文数が12個(990・991・993~995・997)もしくは13個(992・996)である。全て瓦溜10からの出土で、キラ粉が認められ、巴尾の長さや、巴頭の形が同じである。

[-2-i](998)

瓦当直径が13.7cmのもので珠文数が13個である。

[-2](999)

瓦当直径は不明であるが、左巻きである事はわかる。珠文数は14個である。

[-2-j](1000)

瓦当直径が14.8cm、珠文数が18個で、珠文が今次出土の三巴軒丸瓦の中で最も小さい。凹面はコビキAで、今次出土の三巴軒丸瓦の中で丸瓦部のコビキがはっきりわかるのはこの1点である。ここまでハナレ砂が顕著なものこの1点である。

(3) 丸瓦

ここでは、コビキ痕が残るものと完形に近いもののみを取り上げる。

[コビキA](Fig.94-1001~1010)

1001・1004・1006・1010には縄目痕がある。1004・1005・1007は銀化現象がみられる。

[コビキB](Fig.94-1011・1012)

1012には、布目痕もみられる。

(4) 刻銘瓦 (Fig.95-1013~Fig.103-1095)

瓦に銘を押されているものが多数出土しており、ここでは全種類を紹介するようにした。各遺構の量的な検討と、その銘の産地の推定を表にしている。「瓦の種類」目であるが、平瓦と棧瓦は棧の部分が残存していなければ区別ができない。したがって、棧が残存し、明らかに棧瓦であるとわかるもの以外は平瓦としてカウントしている。銘は平瓦・棧瓦・丸瓦・軒平瓦に押されていた。1015の3文字目の意味は不明であるが、今次出土以外で「アキ丑」という銘も確認されており、それにあたるか、もしくは、安芸の五郎右衛門という人物が御瓦師になっており、その頭文字の「五」の略字であろうか。1019・1020は、高知城三ノ丸の概報で⁽³⁾で既述のように、幕末から、五郎右衛門に代わって御瓦師になった人物である。1040~1052はすべて「片」の文字が含まれ土佐山田町旧片地村の産の可能性があるが、詳細は不明である。1062の小津という地名は高知城下にあり、土

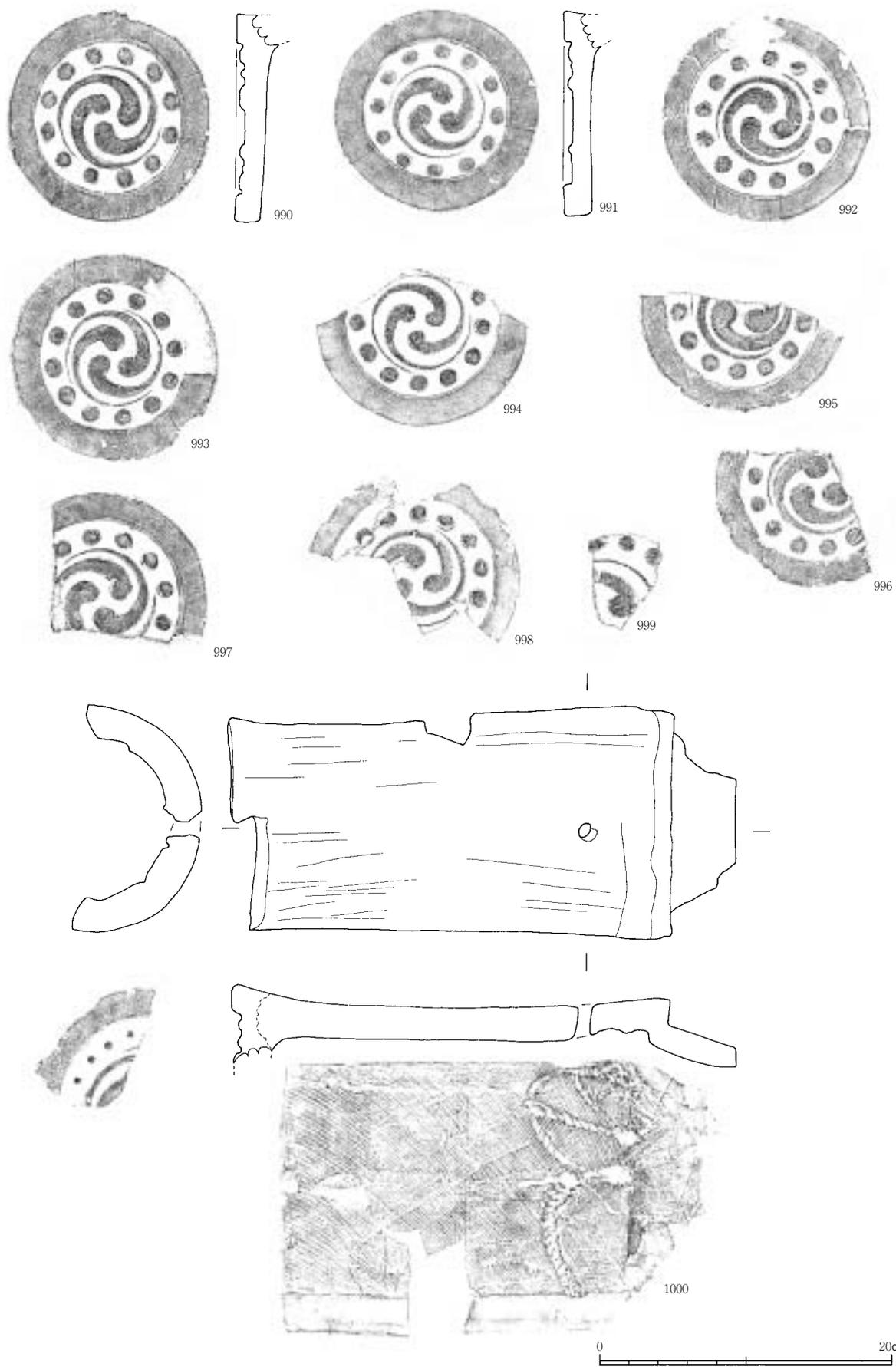


Fig.93 軒丸瓦 (5)

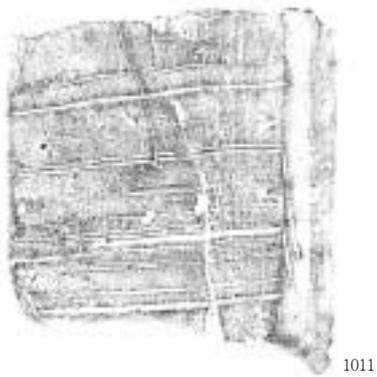
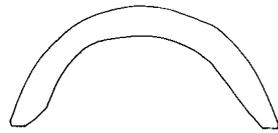
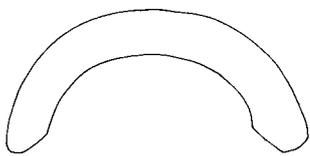
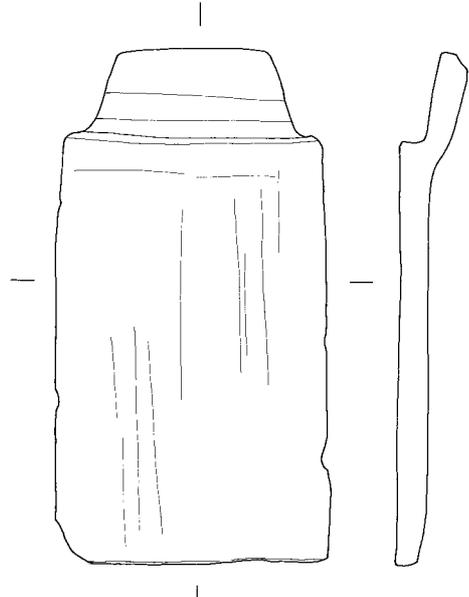
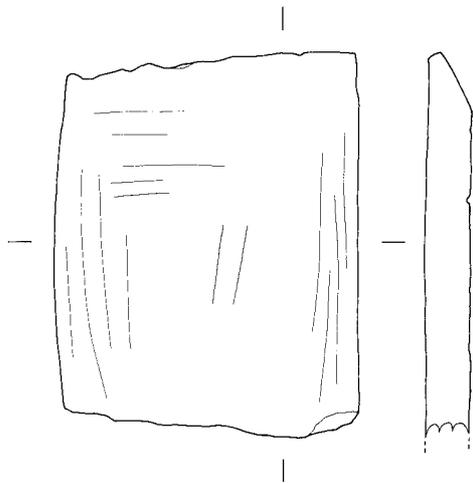
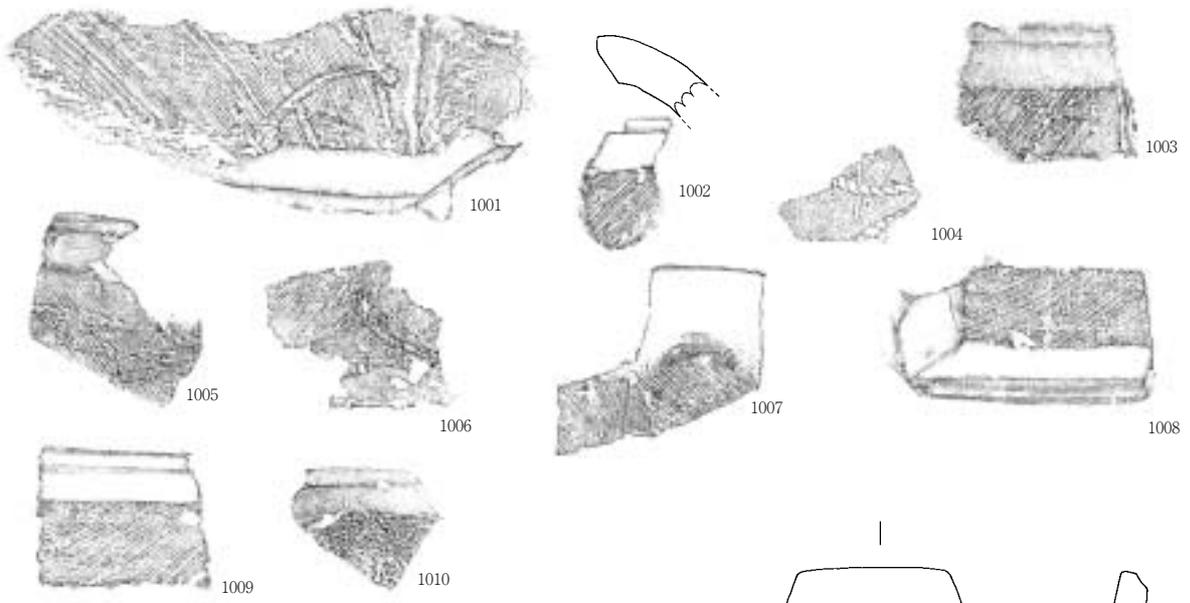


Fig.94 丸瓦

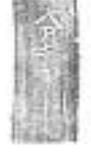
図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類...(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1013		ア キ	平瓦... 2 丸瓦... 1 計 3	SX10 ... 1 層 ... 1 SX 5 ... 1	高知県 安芸市
1014		ア キ 瓦	平瓦... 2 計 2	瓦溜 6 ... 1 層 ... 1	"
1015		ア キ 土	平瓦...19 丸瓦... 2 棧瓦... 5 計26	SX16 ...13 -4層 ... 2 層 ... 2 その他... 2	"
1016		ア キ 重	平瓦... 5 丸瓦... 1 棧瓦... 4 計10	SX16 ... 3 層 ... 1 層 ... 1 その他... 2	"
1017		ア キ 兼	平瓦... 3 計 3	瓦溜 1 ... 2 層 ... 1 その他... 1	"
1018		ア キ タ	平瓦... 6 計 6	層 ... 1 層 ... 1 その他... 4	"
1019		今 キ 卯 平	平瓦... 2 棧瓦... 1 計 3	瓦溜 6 ... 1 瓦溜 4 ... 1 層 ... 1	"
1020		今 キ 卯 平	平瓦... 1 棧瓦... 1 計 2	SX16 ... 1 層 ... 1	"
1021		安 キ 助	平瓦... 1 計 1	瓦溜 6 ... 1	"

Fig.95 刻銘瓦(1)(S=1/2)

図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類...(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1022		安 友	平瓦... 5 丸瓦... 1 棧瓦... 1 計 7	SX16 ... 1 層 ... 2 層 ... 1 その他... 3	高知県 安芸市
1023		ア キ 友	平瓦... 2 棧瓦... 1 計 3	層 ... 1 その他... 2	"
1024		キア 渡	平瓦... 1 計 1	瓦溜 1 ... 1	"
1025		ア キ 吉	平瓦... 1 計 1	瓦溜 6 ... 1	"
1026		アキ 安岡製	平瓦... 4 棧瓦... 1 計 5	瓦溜 3 ... 1 瓦溜 4 ... 1 層 ... 3	"
1027		キア 會社製	平瓦... 2 計 2	層 ... 2	"
1028		並 生 長	平瓦... 28 棧瓦... 8 計 36	瓦溜 3 ... 2 瓦溜 4 ... 3 瓦溜 6 ... 19 瓦溜 7 ... 3 層 ... 5 層 ... 4	高知県 香北町 菲生野
1029		並 生 倉	平瓦... 1 計 1	SX 9 ... 1	"
1030		菲 生 舛	平瓦... 11 棧瓦... 3 計 14	瓦溜 2 ... 1 層 ... 2 層 ... 1 層 ... 11	"

Fig.96 刻銘瓦(2)(S=1/2)

図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類..(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1031		御 瓦 師	平瓦... 4 棧瓦... 4 計 8	瓦溜 4 ... 1 瓦溜 7 ... 2 瓦溜 8 ... 2 層 ... 2 層 ... 1	高知県 安芸市
1032		御 瓦 師	平瓦... 3 棧瓦... 3 計 6	SX16 ... 4 層 ... 1 層 ... 1	"
1033		御 瓦 師	棧瓦... 1 丸瓦... 1 計 2	瓦溜 6 ... 1 落込 2 ... 1	"
1034		御 瓦 師	棧瓦... 1 計 1	SX11... 1	"
1035		布 源	棧瓦... 1 計 1	瓦溜 4 ... 1	高知県 高知市 布師田
1036		布 源	平瓦...12 計12	瓦溜 3 ... 4 瓦溜 4 ... 2 瓦溜 6 ... 6	"
1037		布 直	平瓦...10 棧瓦... 6 計16	瓦溜 1 ... 2 瓦溜 3 ... 3 瓦溜 4 ... 1 瓦溜 6 ... 2 瓦溜 7 ... 1 瓦溜10... 1 層 ... 1 層 ... 1 層 ... 1 その他... 3	"
1038		蒲 百	平瓦... 2 計 2	SX16 ... 1 層 ... 1	高知県 南国市 蒲原
1039		蒲 林	平瓦... 6 棧瓦... 3 計 9	瓦溜 3 ... 2 瓦溜 4 ... 2 瓦溜 6 ... 1 層 ... 4	"

Fig.97 刻銘瓦(3)(S=1/2)

図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類...(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1040		片 治	平瓦...48 棧瓦...18 計66	瓦溜 3 ... 2 瓦溜 4 ... 5 瓦溜 6 ... 26 瓦溜 7 ... 2 瓦溜 9 ... 1 層 ... 20 層 ... 6 その他... 4	高知県 土佐山田町 片地
1041		片 万	平瓦...39 棧瓦...12 計61	瓦溜 1 ... 3 瓦溜 3 ... 5 瓦溜 4 ... 4 瓦溜 6 ... 14 瓦溜 7 ... 1 層 ... 2 層 ... 7 層 ... 1 層 ... 13	"
1042		片 常	平瓦... 6 棧瓦... 3 計 9	瓦溜 1 ... 1 瓦溜 2 ... 1 瓦溜 6 ... 6 層 ... 4 その他... 1	"
1043		片 兼	平瓦...19 棧瓦...20 計39	瓦溜 3 ... 2 瓦溜 4 ... 1 瓦溜 6 ... 5 SX15 ... 1 SX16 ... 18 層 ... 8 層 ... 8 層 ... 4 その他... 2	"
1044		片 保	平瓦... 1 棧瓦... 1 計 2	瓦溜 4 ... 1 層 ... 1	"
1045					
1046		片 儀	平瓦... 4 棧瓦... 5 計 9	瓦溜 3 ... 1 SX13 ... 1 層 ... 6 その他... 1	"
1047		片 馬	平瓦... 1 計 1	瓦溜 4 ... 1	"
1048		片 長	平瓦... 5 棧瓦... 2 計 7	瓦溜 3 ... 1 瓦溜 4 ... 1 層 ... 2	"
1049		片 熊	平瓦... 3 棧瓦... 5 計 8	瓦溜 3 ... 2 瓦溜 4 ... 2 層 ... 3 層 ... 1	"

Fig.98 刻銘瓦(4)(S=1/2)

図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類..(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1050		久 片	平瓦... 1 計 1	SX16 ... 1	高知県 土佐山田町 片地
1051		久 片	平瓦... 3 棧瓦... 2 計 5	瓦溜 6 ... 2 層 ... 3	"
1052		久吉 片	平瓦... 4 棧瓦... 1 計 5	瓦溜 6 ... 1 瓦溜 9 ... 1 層 ... 2	"
1053		中山林	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	高知県 野市町 中山田か?
1054		中友	平瓦... 2 棧瓦... 1 計 3	瓦溜 6 ... 1 瓦溜 10 ... 1 その他... 1	"
1055		中	平瓦... 11 棧瓦... 8 丸瓦... 3 計 22	瓦溜 5 ... 2 瓦溜 8 ... 1 SX16 ... 3 SD 3 ... 1 落込 4 ... 2 層 ... 1 層 ... 2 層 ... 3 層 ... 4 層 ... 1 その他... 2	"
1056		(中山林か?)	丸瓦... 1 計 1	層 ... 1	"
1057		クレタ八百	平瓦... 2 計 2	落込 4 ... 1 その他... 1	高知県 南国市 久礼田
1058					
1059		久? ?	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不明

Fig.99 刻銘瓦 (5) (S = 1/2)

図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類...(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1060		夜 須	平瓦... 1 計 1	SX13 ... 1	高知県 夜須町
1061		手 結 喜	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	高知県 夜須町 手 結
1062		小 津	平瓦...30 棧瓦...10 計40	瓦溜 1 ... 2 瓦溜 3 ... 5 瓦溜 4 ... 1 瓦溜 5 ... 1 瓦溜 6 ... 25 層 ... 4 その他... 2	高知県 高知市 小津町
1063		小 の ?	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不 明
1064		徳 三	平瓦... 6 棧瓦... 1 計 7	瓦溜 4 ... 2 瓦溜 6 ... 1 層 ... 1 層 ... 3	高知県 香我美町 徳王子
1065		徳 周	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	"
1066		佐 用	平瓦... 1 計 1	その他... 1	高知県 佐川町
1067		佐 番	平瓦... 1 計 1	その他... 1	"
1068		穴 内	平瓦... 1 計 1	SX 9 ... 1	不 明

Fig.100 刻銘瓦(6)(S=1/2)

図版 番号	拓影 図	文 字	瓦の種類...(点数)	出 土 場 所 ... (点数)	推定産地
1069		貞 安	平瓦...12 棧瓦... 6 計18	瓦溜 3 ... 1 瓦溜 4 ... 1 瓦溜 6 ... 4 瓦溜 7 ... 2 瓦溜 9 ... 1 SD 4 ... 1 層 ... 6 その他... 1	不 明
1070		貞 改	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不 明
1071		山 寅	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不 明
1072		前 寅	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不 明
1073		前 兼	棧瓦... 1 計 1	瓦溜 1 ... 1	不 明
1074		王 兼	平瓦... 1 計 1	瓦溜 6 ... 1	不 明
1075		西 庫	平瓦... 2 棧瓦... 1 計 3	層 ... 3	不 明
1076		?	平瓦... 1 計 1	SX10 ... 1	不 明
1077		工 子	棧瓦... 1 計 1	層 ... 1	不 明
1078		た ろ 丸	平瓦... 4 計 4	瓦溜 4 ... 1 瓦溜 6 ... 1 層 ... 2	不 明

Fig.101 刻銘瓦 (7) (S = 1/2)

図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類..(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1079		下 田 幸	平瓦... 1 計 1	その他... 1	不 明
1080		却 土 (?)	平瓦... 1 計 1	その他... 1	不 明
1081		不 明	平瓦... 1 計 1	SX13... 1	不 明
1082		三 ?	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不 明
1083		◁	平瓦... 1 計 1	SX13... 1	不 明
1084		堺 大 小 路	平瓦...65 計65	瓦溜 6 ... 1 瓦溜10...64	大阪府 堺 市
1085					
1086		堺	丸瓦... 5 計 5	瓦溜10... 5	"
1087		堺	丸瓦... 3 計 3	層 ... 3	"
1088		堺	丸瓦... 1 計 1	瓦溜10... 1	"

Fig.102 刻銘瓦 (8) (S = 1/2)

図版 番号	拓影図	文字	瓦の種類...(点数)	出土場所...(点数)	推定産地
1089		○	平瓦... 1 計 1	瓦溜10... 1	大阪府 堺市
1090		○	平瓦... 1 計 1	瓦溜10... 1	"
1091		池 亀	平瓦... 1 計 1	瓦溜 1 ... 1	不明
1092		小原...	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不明
1093		...野村	平瓦... 1 計 1	層 ... 1	不明
1094		斗賀 ...?	平瓦... 1 計 1	瓦溜 6 ... 1	不明
1095		安佐	平瓦... 1 計 1	上層 ... 1	高知県 安芸市か?

Fig.103 刻銘瓦(9)(S=1/2)

出土場所は、遺構ごとに、包含層は区が違っても層が同じならひとくくりになっている。「その他」には、攪乱、表採、排土中、TRを含む。

佐山田町旧片地村とあわせて、高知城下の瓦生産や流通を考える上で重要になるであろうが、今回は詳細な検討を成し得ておらず、今後の課題としたい。1067の2文字目は「留」の異体字であろうか。1084・1085は、文字の微妙な差異（はねや、はらい）はあるが、焼きひずみや、刻印の押し方で変わるものなのか判断しかねる。したがって、ひとまとめにしてカウントしている。

[註]

- (1) 未発表であるが黒鉄門周辺でも同範と思われるものが出土している。
- (2) 『高知城跡 - 伝御台所屋敷跡史跡整備事業に伴う発掘調査報告書-』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995.3
- (3) 『高知城三ノ丸跡 - 石垣整備に伴う試掘確認調査概要報告書-』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001

[参考文献]

- 『府内城三ノ丸遺跡 - 大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』大分県教育委員会 1993
- 『香川県歴史博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 高松城跡』香川県埋蔵文化財研究会 1999
- 『史跡保存整備事業 史跡岡山城跡本丸下の段発掘調査報告』岡山市教育委員会 2001

軒平瓦一覽表

図版 番号	分 類	出 土 場 所	文様 中心飾	法量 (cm)				棧	技法などの特徴	色	
				唐草	平瓦厚	瓦当高	文様区高			表面	胎土
845		7-2区 表採	花	(1転)	1.6	4.7	2.9	-	キラ粉	暗灰	灰白
846	"	3-5区 攪乱	"	3転	1.7	4.5	2.5	-	"	"	"
847	-1	2-4区 層	三花	2転	1.7	4.0	3.0	左	"	"	灰
848	"	6-1区 南トレ 下層	"	"	1.4	4.8	3.5	-	キラ粉?	"	"
849	-2-a	2-4区 層	"	(2転)	-	-	-	-	"	"	"
850	"	2-4区 -3層	"	3転	-	-	-	右	「片勇」の銘	"	"
851	"	1-2区 SX13 東壁	"	"	1.6	4.2	2.8	-	キラ粉	"	"
852	"	表採	"	2転	-	-	-	-	"	"	"
853	-2-b	2-5区 層集中	"	(2転)	1.7	4.4	3.0	-	"	"	"
854	"	7-2区 西トレ 層	"	(3転)	1.6	4.7	3.15	-	ツルツル	灰	灰白
855	-3	表採	"	3転	1.5	4.2	2.7	右	キラ粉	暗灰	"
856	"	2-1区 -2層 バンク	"	(1転)	1.8	4.0	2.7	-	"	"	"
857	-4	2-1区 中央バンク SX10 層	"	-	2.0	5.2	3.3	-	"	灰	灰
858	-1-a-ア	表採	三巴(左)	3転	1.7	4.6	3.9	右	キラ粉「アキ九平」の銘	暗灰	灰白
859	"	1-2区 瓦溜1	"	"	1.5	4.0	2.5	左か?	キラ粉	灰	"
860	"	3-5区 攪乱	"	(2転)	1.6	4.5	2.8	-	キラ粉 銀化現象	暗灰	"
861	"	5-1区 層	"	3転	1.5	4.3	3.0	右	キラ粉「葦生長」の銘	灰	"
862	"	1-2区 瓦溜	"	(2転)	-	-	-	-	キラ粉 銀化現象	暗灰	"
863	"	1-4区(東) SX16	"	3転	1.7	4.3	2.9	-	キラ粉	"	"
864	"	7-2区 攪乱	"	"	1.5	4.3	2.4	右	"	灰	"
865	"	2-4区 石組み溝1	"	"	1.5	4.3	3.1	左	キラ粉 銀化現象「王兼」	暗灰	"
866	"	表採	"	(3転)	1.5	4.5	2.9	-	"	灰	"
867	"	1-1区 西 攪乱	"	3転	1.5	4.5	2.9	右	キラ粉「弘?」	暗灰	"
868	"	1-2区 瓦溜1	"	(3転)	1.5	4.2	2.5	-	キラ粉「安キ助」	"	"
869	"	4-1区 落込1	"	"	-	-	-	-	キラ粉	灰	灰
870	-1-a-イ	6-1区 瓦溜6	"	3転	1.4	4.3	2.5	右?	「片治」	暗灰	灰白
871	-1-a-ウ	3-5区 攪乱	"	(3転)	1.5	4.5	3.0	-	"	灰	灰
872	-1-a-エ	表採	"	3転(蔓草)	1.7	4.4	2.5	右	キラ粉「片常」	暗灰	灰白
873	"	排土中	"	"	-	-	-	-	キラ粉	灰	灰
874	"	2-2区 石組溝1	"	"	1.5	4.0	2.5	-	キラ粉 漆喰付着「片常」	暗灰	"
875	-1-a	5-1区 表採	"	(1転)	1.6	4.0	2.6	-	"	"	灰白
876	"	排土中	"	"	-	-	-	-	キラ粉	灰	灰
877	"	3-1区 層	"	3転	1.6	4.5	3.3	-	"	暗灰	灰白
878	-1-b-ア	5-1区 層 6-1区 層	三巴(右)	"	1.6	4.7	3.2	右	キラ粉「弘?」	"	"
879	"	1-1区(東) 層	"	"	1.6	4.7	2.9	左	キラ粉 銀化現象	灰	"
880	"	1-4区(東) SX16	"	"	1.6	4.7	2.9	-	「アキ九」	灰白	"
881	"	2-4区 攪乱	"	"	1.8	4.7	2.9	右	キラ粉「アキ九」	暗灰	"

Tab.5-1 遺物観察表(瓦)

図版 番号	分 類	出 土 場 所	文様 中心飾	法量 (cm)				棧	技法などの特徴	色	
				唐草	平瓦厚	瓦当高	文様区高			表面	胎土
882	- 1 - b - ア	2 - 2 区 落込 2	三巴(右)	(2 転)	2.0	4.9	2.9	-	キラ粉	"	"
883	"	表採	"	2 転 + 飛唐草	1.6	4.4	2.9	右	"	灰	灰
884	"	2 - 2 区 層	"	3 転	1.6	4.7	3.1	左	"	暗灰	"
885	- 1 - b - イ	6 - 1 区 瓦溜 6	"	(3 転)	1.5	3.8	1.9	-	"	"	灰白
886	- 2 - a - ア	1 - 2 区 瓦溜 1	二巴(左)	3 転	1.8	4.5	2.8	左	"	"	"
887	"	2 - 1 区 トレンチ	"	"	1.6	4.0	2.6	右	"	"	"
888	"	5 - 1 区 表採	"	"	1.8	4.6	3.0	-	"	"	灰
889	- 2 - b - ア	1 - 4 区 (東) SX16	二巴(右)	"	1.7	4.4	2.8	-	銀化現象	"	灰白
890	- 2 - b - イ	表採	"	(3 転)	1.9	4.6	2.7	-	キラ粉	"	"
891	- 2 - b - ウ	2 - 5 区 層	"	3 転	1.9	4.6	2.7	-	キラ粉「布直」	"	"
892	- 3 - b	2 - 4 区 攪乱	一巴(右)	"	1.7	4.5	2.6	右?		灰白	灰
893	- 2	6 - 1 区 南北トレ 攪乱	三or二巴	"	1.6	4.2	2.6	-	キラ粉	暗灰	灰白
894	- a	1 - 2 区 瓦溜 1	(左)	-	1.7	-	-	右	キラ粉「布直」	"	"
895	- 1 - a - カ	2 - 1 区 攪乱	-	3 転	1.6	3.9	2.4	左	キラ粉「片治」	"	"
896	- 1 - a	SD 2 ・ SD 2 下層	三子葉	3 転 + 蔓草 3 本	1.8	4.5	2.8	なし	ハナレ砂	灰	"
897	- 1 - b	6 - 1 区 層	"	3 転	1.7	5.1	3.0	-	"	"	"
898	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	(3 転)	1.7	5.1	3.0	-	ハナレ砂 二次被熱	浅黄	浅黄
899	- 2 - a	"	五子葉	2 転	1.8	5.1	2.8	-	二次被熱	"	灰白
900	- 2 - b	"	"	-	-	-	-	-	"	"	浅黄
901	"	1 - 4 区 (東) SX16 上層	"	1 転	1.5	5.0	3.1	-	ハナレ砂	灰	灰
902	- 2 - c	4 - 1 区 瓦溜 8	"	蔓草 1 本 + 1 転	1.5	4.5	2.7	なし	ハナレ砂?	"	灰白
903	"	3 - 1 区 瓦溜 8	"	"	2.0	4.5	2.7	-	"	"	"
904	- 1 - a	4 - 1 区 瓦溜 8	橋状	1 転 + 葉文	1.7	3.7	2.2	なし		暗灰	灰
905	"	"	"	"	1.7	4.0	2.6	-	ハナレ砂? 二次被熱	浅黄	浅黄
906	"	"	"	"	2.0	4.0	2.6	-	二次被熱	"	"
907	"	3 - 1 区 瓦溜 8	"	(1 転)	2.0	4.0	2.6	-	ハナレ砂?	灰	灰白
908	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	1 転 + 葉文	2.0	4.0	2.6	-		暗灰	"
909	"	4 - 1 区 攪乱	"	"	2.0	4.0	2.6	-	ハナレ砂	浅黄	"
910	- 1 - b	1 - 5 区 SX 7	"	"	2.0	4.0	2.3	-		暗灰	"
911	- 1 - c	4 - 1 区 堀 1	"	(2 転)	-	-	-	-	ハナレ砂 二次被熱	橙	橙
912	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	2 転 + 飛唐草	1.9	4.9	3.2	-	ハナレ砂	"	"
913	- 1 - a	3 - 1 区 瓦溜 8	"	-	1.8	4.7	2.4	-	二次被熱	浅黄 橙	灰白
914	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	-	-	3.6	2.2	-	ハナレ砂?	黒灰	"
915	- 1	6 - 1 区 堀 1	"	(葉文)	1.9	4.3	2.5	-	ハナレ砂 二次被熱	浅黄	浅黄
916	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	(1 転 + 葉文)	1.9	4.3	2.5	-	"	橙	黄橙
917	"	2 - 3 区 瓦溜 8	"	"	1.9	4.0	2.3	-	瓦当部二次被熱	灰	灰白
918	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	-	-	-	-	-		灰白	"
919	"	"	"	(1 転 + 葉文)	-	-	-	-		浅黄	"

Tab.5-2 遺物観察表 (瓦)

図版 番号	分 類	出 土 場 所	文様 中心飾	法量 (cm)				棧	技法などの特徴	色	
				唐草	平瓦厚	瓦当高	文様区高			表面	胎土
920	- 1	2-1区 中央バンク SX10 上層	橋状	(1 転 + 葉文)	1.7	4.0	2.4	-	ハナレ砂	暗灰	灰白
921	"	4-1区 埋桶1直上	"	(葉文)	1.7	4.0	2.4	-		浅黄	"
922	"	3-1区 瓦溜8	"	(1 転 + 葉文)	1.9	-	-	-	ハナレ砂 二次被熱	"	黄橙
923	- 2 - a	4-1区 瓦溜8	"	1 転 + 葉文 + 飛唐草	2.1	5.0	3.0	-	二次被熱	"	"
924	"	1-5区 SX7	"	"	1.8	4.5	3.0	-	ハナレ砂	暗灰	灰白
925	- 2 - b	4-1区 瓦溜8	"	"	1.8	4.5	2.8	-	瓦当部ややキラ粉有り	"	"
926	"	3-1区 瓦溜8	"	(1 転)	-	-	2.9	-		灰	灰
927	"	"	"	"	1.7	-	-	-	キラ粉	"	"
928	- 2 - c	3-1区 堀1 サブトレ	"	1 転 + 葉文 + 飛唐草	1.9	4.7	2.9	-	"	橙	橙
929	"	3-1区 瓦溜8	"	"	1.9	4.7	2.9	-	"	灰	灰
930	- 3	7-1区 瓦溜10/7-2区 瓦溜10	"	1 転 + 葉文	1.8	4.0	2.2	-	"	暗灰	灰白
931	"	7-2区 瓦溜10	"	(1 転 + 葉文)	1.5	3.5	2.2	-	"	"	"
932	"	"	"	"	1.6	3.8	2.1	-	"	灰	灰
933	"	"	"	1 転 + 葉文	1.8	4.4	2.1	なし	"	"	灰白
934	"	2-1区 中央バンク SX10 上層	"	"	1.5	4.0	2.1	-	キラ粉 漆喰付着	暗灰	"
935	"	7-1区 瓦溜10	"	"	1.7	4.1	2.1	なし	ハナレ砂?	灰	灰
936	- 4 - a	7-2区 瓦溜10	"	"	1.6	3.8	2.2	-	一部二次被熱か?	暗灰	灰白
937	- 4 - b	3-1区 瓦溜8	"	-	-	-	-	-	ハナレ砂	灰白	"
938	"	4-1区 瓦溜8	"	1 転 + 葉文	2.0	5.1	2.8	-		灰	"
939	- 4 - c	7-1区 瓦溜10	"	"	1.5	3.9	2.4	-	キラ粉	"	"
940	- 4 - d	1-5区 SX14	"	1 転 + 葉文 + 飛唐草	2.2	5.1	2.9	-	"	暗灰	"
941	- 4 - e	7-2区 瓦溜10	"	"	1.6	4.1	2.2	-	"	灰	"
942		4-1区 瓦溜8	宝珠	1 転 + 葉文	2.0	5.0	2.7	-		橙	灰
943	"	"	"	"	1.8	4.7	2.7	-	ハナレ砂	"	"
944	- 1	2-4区 (東) 南北トレ 攪乱	鳶	2 転	1.6	4.2	2.7	-	キラ粉	暗灰	灰白
945	"	1-4区 (東) SX16	"	"	1.6	4.7	3.2	右	「中」	"	"
946	- 2	2-1区 SX10 下層	"	(2 転)	1.6	4.3	2.5	-	キラ粉	灰	"
947	- 3	2-4区 - 3層	"	3 転 + 飛唐草	1.3	4.5	2.5	-	キラ粉?	暗灰	灰
948	- 4	表採	"	2 転 + 飛唐草	1.8	4.5	2.7	-	「アキ重」キラ粉	"	"
949	- 5	2-5区 攪乱	"	"	1.4	4.1	3.0	-		"	灰白
950		1-5区 攪乱	5 弁の花	5 転 (蔓草)				-		"	灰
951		1-1区 (西) 攪乱	-	-	1.5	4.3	-	左	キラ粉	"	灰白

* 瓦当高・文様区高等、法量の計測位置は、本文のFig.81に示した。

* 唐草の()は確認できるものの数値である。

* 法量・棧で不明なものは- にしている。

Tab.5-3 遺物観察表(瓦)

軒丸瓦一覧表（三つ葉柏）

図版番号	分 類	出 土 場 所	瓦当直径	技法などの特徴	表面色	胎土色	残存率
952	- 1 - a	2 - 5 区 層	12.6	二次被熱	暗灰	暗灰	完形
953	"	3 - 1 区 瓦溜 8	12.6	"	灰	"	3分の2
954	"	7 - 1 区 堀 1 (土橋東) 最下層	-	"	"	灰白	4分の1
955	"	3 - 1 区 瓦溜 8	12.6	二次被熱 布目痕 コピキA	浅黄	灰	5分の1
956	"	"	-	二次被熱	暗灰	灰白	"
957	"	"	12.6	"	灰	浅黄	"
958	"	"	-	"	"	"	10分の1
959	"	5 - 1 区 石列 1 掘形 上層	-		暗灰	灰	5分の1
960	"	3 - 1 区 瓦溜 8	-		灰	暗灰	"
961	- 1 - b	2 - 5 区 集中 4	15.8		"	灰	完形
962	"	7 - 1 区 SD 3 2層	17.4		"	暗灰	4分の1

* 瓦当直径の () がついている数値は復元推定によるものである。

軒丸瓦一覧表（三巴）

図版番号	分 類	出 土 場 所	巴の 巻方向	瓦当直径	珠文数	技法などの特徴	表面色	胎土色	残存率
963	- 1 - a	7 - 2 区 瓦溜10	右	17.0	16	キラ粉	黄灰	灰白	5分の4
964	- 1 - b	5 - 1 区 表採	"	16.8	16	ハナレ砂	灰白	"	5分の3
965	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	16.6	16		浅黄	浅黄	5分の2
966	- 1 - c	1 - 2 区 SX13 東壁	"	16.6	12	キラ粉	暗灰	灰白	"
967	- 1 - d	3 - 1 区 瓦溜 8	"	16.0	16		"	"	5分の3
968	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	16.0	16		"	"	3分の1
969	"	表採	"	16.0	12		"	"	2分の1
970	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	16.4	16		"	"	5分の3
971	- 1 - e	2 - 1 区 SX10	"	15.6	12	キラ粉	"	"	5分の4
972	- 1 - f	1 - 5 区 (西) SX17	"	16.4	13	"	"	"	"
973	- 2 - a	3 - 5 区 層	左	18.0	17		"	"	3分の2
974	- 2 - b	1 - 5 区 層	"	17.0	14		明褐灰	明褐灰	瓦当完形
975	"	4 - 1 区 攪乱	"	17.0	15		暗灰	灰白	3分の2
976	"	6 - 1 区 SX 2 中層	"	17.2	16		"	"	4分の3
977	"	2 - 5 区 集中 4	"	17.0	16		"	"	2分の1
978	"	3 - 5 区 層	"	17.0	16		"	"	3分の2
979	- 2 - c	2 - 4 区 井戸 1 掘形	"	16.8	16		"	"	瓦当完形
980	"	3 - 1 区 堀 1	"	16.8	17		灰	"	3分の1
981	"	"	"	16.8	17		暗灰	"	"
982	"	4 - 1 区 瓦溜 8	"	16.8	17		浅黄橙	浅黄橙	3分の2
983	- 2 - d	3 - 1 区 瓦溜 8	"	16.2	13		灰	灰白	ほとんど瓦当完形
984	"	"	"	16.2	13		"	"	3分の1

Tab.5-4 遺物観察表（瓦）

図版番号	分類	出土場所	巴の 巻方向	瓦当直径	珠文数	技法などの特徴	表面色	胎土色	残存率
985	- 2 - e	6 - 1 区 表採	左	(16.4)	(15)		暗灰	灰白	3分の2
986	"	1 - 4 区 SX9 上層	"	(16.4)	(17)		灰	灰	2分の1
987	- 2 - f	1 - 5 区 層	"	14.5	12	キラ粉	暗灰	暗灰	瓦当面完形
988	"	1 - 4 区 SX9 下層	"	(14.5)	(13)	キラ粉 (粒子大きい)	"	灰白	2分の1
989	- 2 - g	1 - 2 区 排土中	"	(15.0)	(16)	キラ粉	"	"	3分の2
990	- 2 - h	7 - 2 区 瓦溜10	"	14.0	12	"	"	"	瓦当面完形
991	"	7 - 1 区 瓦溜10	"	14.0	12	"	"	"	"
992	"	7 - 2 区 瓦溜10	"	14.0	13	"	"	"	"
993	"	"	"	14.0	12	"	"	"	"
994	"	"	"	(14.0)	(12)	"	"	"	4分の3
995	"	"	"	(14.0)	(12)	"	灰	"	2分の1
996	"	"	"	(14.0)	(13)	"	"	"	3分の1
997	"	"	"	(14.0)	(12)	"	"	"	3分の2
998	- 2 - I	7 - 2 区 層	"	(14.4)	(13)		暗灰	"	4分の3
999	- 2	4 - 1 区 堀1	"	不可能	14		浅黄	浅黄	5分の1
1000	- 2 - j	2 - 5 区 集中4	"	(14.8)	(18)	ハナレ砂	灰	灰	"

* 瓦当直径の () がついている数値は復元推定である。

丸瓦・刻銘瓦一覧表

図版番号	出土場所	瓦の種類	厚さ	技法などの特徴	表面	胎土
1001	3 - 5 区 層	丸瓦	2.3	コビキA	暗灰	灰白
1002	4 - 1 区 攪乱	"	2.3	コビキA 二次被熱	浅黄	"
1003	0 - 4 区 SD2 上層	"	2.1	コビキA	暗灰	"
1004	2 - 3 区 表採	"	1.9	キラ粉・コビキA	"	"
1005	3 - 5 区 SX6	"	1.5	銀化現象・コビキA	"	"
1006	6 - 1 区 瓦溜6	"	2.3	コビキA	"	"
1007	2 - 3 区 表採	"	2.0	銀化現象・コビキA	灰	灰
1008	4 - 1 区 瓦溜8	"	2.3	コビキA 二次被熱	浅黄	"
1009	"	"	2.3	"	"	"
1010	"	"	1.9	"	"	灰白
1011	2 - 4 区 - 3層	"	1.6	コビキB布目	暗灰	"
1012	3 - 5 区 層	"	2.3	コビキB	"	"
1013	2 - 2 区 SX10 下層	"	1.8		"	"
1014	6 - 1 区 瓦溜6	平瓦	1.8		"	灰
1015	1 - 4 区 (東) SX16	棧瓦	1.8	キラ粉	"	"
1016	2 - 4 区 - 3層	"	1.5	銀化現象	"	暗灰
1017	1 - 2 区 瓦溜1	平瓦	1.8	"	灰	灰
1018	6 - 1 区 瓦溜6	"	1.7	"	"	"

Tab.5-5 遺物観察表 (瓦)

図版番号	出土場所	瓦の種類	厚さ	技法などの特徴	表面	胎土
1019	5-1区 層	棧瓦	1.8	銀化現象	暗灰	暗灰
1020	1-4区(東)SX16	"	1.9	"	"	灰
1021	6-1区 瓦溜6	平瓦	2.0	キラ粉	"	"
1022	2-4区 攪乱	棧瓦	1.8	銀化現象	"	"
1023	2-2区 層	平瓦	1.8	"	"	"
1024	7-1区 瓦溜7	"	1.7	"	灰	"
1025	6-1区 瓦溜6	"	1.7	キラ粉	暗灰	"
1026	5-1区 層	"	1.6	"	"	"
1027	7-1区 層	"	1.7	"	灰	"
1028	6-1区 層	"	1.7	"	暗灰	"
1029	2-1区 層	"	1.7	"	"	"
1030	7-1区 層	"	1.6	"	"	灰白
1031	1-4区(東)SX16	棧瓦	1.6	"	"	灰
1032	5-1区 層	平瓦	2.1	"	"	"
1033	7-2区 攪乱	"	1.7	"	"	"
1034	1-4区(東)SX16	"	1.7	銀化現象	"	暗灰
1035	5-1区 瓦溜4	棧瓦	1.8	キラ粉	"	灰
1036	4-1区 瓦溜3	平瓦	1.8	"	"	"
1037	表採	"	1.6	"	"	灰白
1038	1-4区(東)SX16	"	1.6	"	灰	灰
1039	5-1区 層	棧瓦	1.7	銀化現象	暗灰	"
1040	7-1区 層	平瓦	1.5	キラ粉	"	"
1041	6-1区 瓦溜6	"	1.7	"	"	灰白
1042	6-1区 層	"	1.7	"	"	"
1043	6-1区 瓦溜6	"	1.9	"	"	暗灰
1044	5-1区 瓦溜4	"	1.9	"	"	灰白
1045	7-1区 層	棧瓦	1.6	"	"	"
1046	"	平瓦	1.5	"	"	灰
1047	5-1区 瓦溜4	"	1.7	"	灰	灰白
1048	6-1区 層	棧瓦	1.8	"	暗灰	"
1049	7-1区 層	"	1.6	"	"	"
1050	1-4区(東)SX16	平瓦	1.8	"	"	"
1051	6-1区 瓦溜6	"	1.5	"	"	"
1052	7-1区 瓦溜9	"	1.5	"	"	"
1053	5-1区 層	"	1.8	"	"	灰
1054	6-1区 瓦溜6	棧瓦	1.8	銀化現象	"	"
1055	7-1区 SD3	平瓦	1.6	キラ粉	"	"
1056	2-5区 層	丸瓦	1.9	銀化現象 布目	"	"
1057	1-5区(西)SX17	平瓦	1.5	キラ粉	"	"

Tab.5-6 遺物観察表(瓦)

図版番号	出土場所	瓦の種類	厚さ	技法などの特徴	表面	胎土
1058	3-5区 攪乱	平瓦	1.6	キラ粉 漆喰	暗灰	灰
1059	5-1区 層	"	1.6	銀化現象	"	"
1060	1-2区 SX13 東壁	"	1.7	"	"	"
1061	3-1区 層	"	1.6	"	"	"
1062	4-1区 瓦溜3	"	2.1	キラ粉	"	灰白
1063	2-5区 層集中	"	1.7	"	灰	灰
1064	6-1区 層	"	1.8	"	暗灰	暗灰
1065	5-1区 層	"	1.5	"	"	灰
1066	2-4区 トレ攪乱	"	2.0	銀化現象	"	灰白
1067	1-5区 表採	"	1.8	"	灰	"
1068	1-4区(西) SX 9上層	"	1.8	キラ粉	暗灰	灰
1069	7-1区 瓦溜7	棧瓦	1.5	"	"	"
1070	4-1区 層	平瓦	1.6	"	灰	"
1071	7-1区 層	"	1.7	"	暗灰	灰白
1072	6-1区 層	"	1.6	"	"	"
1073	1-2区 瓦溜1	棧瓦	1.6	銀化現象	"	"
1074	6-1区 瓦溜6	平瓦	1.6	キラ粉	"	灰
1075	6-1区 層	"	1.5	銀化現象	"	"
1076	2-2区 SX10	"	1.2	"	灰	"
1077	1-4区(東) -4層	棧瓦	1.7	"	暗灰	"
1078	5-1区 層	平瓦	1.7	"	"	"
1079	1-5区 表採	"	1.8	キラ粉	"	"
1080	2-4区 攪乱	"	1.4	"	"	"
1081	1-2区 SX13 層	"	1.5	銀化現象	"	灰白
1082	1-4区(西) -3層	"	1.9	"	"	灰
1083	1-4区 SX13 層	"	1.6	銀化現象	"	"
1084	1-4区(東) SX16	"	1.8	"	"	"
1085	7-2区 瓦溜10	"	1.6	"	"	"
1086	"	丸瓦	1.8	"	灰	灰白
1087	"	"	1.8	"	"	"
1088	"	"	1.8	"	"	灰
1089	"	平瓦	2.3	"	"	灰白
1090	"	"	1.6	"	"	"
1091	1-2区 瓦溜1	棧瓦	1.6	キラ粉	暗灰	灰
1092	7-1区 層	平瓦	1.6	"	"	"
1093	5-1区 層	"	2.0	銀化現象	"	"
1094	6-1区 瓦溜6	"	1.6	"	"	灰白
1095	2-1区 上層	"	1.6	キラ粉	"	"

Tab.5-7 遺物観察表(瓦)

第3章 まとめ

第1節 高知城伝下屋敷跡出土の瓦

1、はじめに

高知城伝下屋敷跡出土の瓦には堺産の瓦が含まれているのだが、これは全国で普遍的に出土するものではないようである。管見では、大阪府、山口県¹、東京都、兵庫県、京都府²、奈良県、長崎県³、そして高知県（高知城・及び今次調査）ぐらいである。このように、現在の出土状況は、近畿地方を除いて「点的」ともいえる分布をしている。堺産瓦については、高知県ではこれまであまり議論されてこなかった経緯があり、今次調査を機会に検討を加えることは意味のないことではなかろう。そこで、本項では今次出土の瓦についてまとめ、堺産瓦についても若干の考察を行いたい。また今次は、まとまった量の陶磁器を伴う遺構出土の瓦も多く、実年代観は陶磁器に依らざるを得ないが、編年の試案をまとめておく。

2、堺産瓦出土

ここでは、消費地である高知城伝下屋敷跡から見た、堺の瓦生産にふれたい。

「堺大小路」（出土したものすべて平瓦の小口部に押印。以下、見にくくなるので枠を取り「堺大小路」と記す）、「」「」（玉縁の丸瓦部連結面及び玉縁に押印）が出土している。「」は、全国的に、しかも時間幅も広い範囲で存在する刻印であるので、これが堺のものだとは断定はできないのだが、今次出土の瓦でみると、「」と「」銘瓦とは、似た胎土で焼成も似ている。また、大坂城でも「」と共に「」が検出されている。生産地である、堺北瓦町の瓦屋下田源兵衛の屋敷地の調査でも「」」がともに出土しており⁴、「」も堺産としておく。以下、順を追って「」」」の刻印について詳述していく。

1) 「堺大小路」銘瓦の製作者

堺では元禄2年（1689年）に「堺大絵図」が描かれている⁵。堺には現在も、旧港のある北西から南東を結ぶ大通りがあるのだが、それが絵図にも「大小路」として描かれている。その大小路が南東の東環濠に突き当たるのだが、その東環濠の外側のあたりを「大小路口瓦町」と記しており、「瓦屋…」という屋号の建物が四軒存在する。瓦屋嘉右衛門、瓦屋久左衛門、瓦屋弥三左衛門、同じく瓦屋弥三左衛門の掛け屋敷である。

今次出土の「堺大小路」という銘を有する瓦は、文字通り堺の大小路口瓦町で生産されていたものであろう。堺から来た工人が高知で焼いていたという事も考えられなくも無いのだが、今次出土の他の瓦と、「堺大小路」銘瓦を比較してみると、両者では胎土が異なる。また、「堺大小路」というのは地名であり、名前の刻印を、土佐に来てもし使い続けるならまだしも、地名の刻印をそのまま使うとは考えにくい。以上の点から、「堺大小路」銘瓦は堺産であるとして話を進める。

「堺大小路」銘は生産地である堺でも、現在の所2地点で確認されている。南宗寺⁶と堺環濠都

市遺跡⁷のもので、鬼瓦以外の瓦には「榎木作 弥三左門」の刻印のみが押されるようであるが、鬼瓦には、「堺大小路」の刻印の下に「榎木作 弥三左門」（以下、枠を取り「榎木作 弥三左門」と記す）の刻印がセットで押されており、南宗寺で確認されている刻印と、堺環濠都市遺跡出土の刻印は同範のようである。しかし、今次出土の「堺大小路」銘瓦には「堺大小路」しか押されていない。編年試案の箇所では後述するが、堺の南宗寺で確認される、承応二年（1653年）前後（後述するが南宗寺仏殿の上棟の年号である）の銘は「榎木作 弥三左門」のみか、あるいは「堺大小路」「榎木作 弥三左門」のセットで押されており、今次出土瓦のように「堺大小路」のみというのは、見当たらない。したがって、今次出土の「堺大小路」刻銘瓦は大小路口の瓦屋のうち、誰が製作したのかという問題が出てくる。

現在のところ、堺大絵図で確認できる大小路口瓦町の瓦屋（上記の3名）の中で、瓦の銘が確認されているのは、瓦屋弥三左衛門（「堺大小路」「榎木作 弥三左門」）と、瓦屋嘉右衛門（「堺嘉右衛門」）⁸である⁹。「堺嘉右衛門」の方には「堺大小路」の刻印は押されていない。したがって現在確認されるもので、「堺大小路」という刻印を使っているのは、瓦屋弥三左衛門のみである。「堺嘉右衛門」の方は、その銘の中に「堺」が入っているため瓦屋弥三左衛門のように、名前とは別に「堺大小路」の刻印を押す必要はなかったのではないだろうか。

以上の事から今次出土の「堺大小路」銘瓦は、現時点では瓦屋弥三左衛門の作である可能性が考えられる。しかし、堺で確認される「堺大小路」の刻印と、今次出土の「堺大小路」の刻印は同範ではない（Fig.104³³参照）。今次出土のものは、堺のものより「堺大小路」という文字を囲む枠が角ばり、文字は細い線で書かれ、「小」の文字が大きいなど、違いが多く見られ全体としてシャープな印象をうける。後で詳述するが、堺で確認される「堺大小路」銘瓦と、今次出土の「堺大小路」銘瓦には時期差があると思われ、このような範の違いは時期差によるものの可能性がある。

2) 「○」・「」の刻印を使用する瓦屋について

堺瓦の出土が報告される所では、「○」・「」の刻印が含まれることが多いが、この刻印はどのように使われていたのであろうか。特定の瓦屋が使っていたのか、あるいは堺の瓦屋が普遍的に使用していたのであろうか。現時点でそれを明確にする事はできないが、「堺大絵図」の北瓦町に記される「下田源兵衛」の屋敷地が発掘調査されており、「○」・「」刻印瓦が出土し、この刻印を使用していたことがわかっている¹⁰。

では、今次出土の「○」・「」刻印瓦はどの瓦屋が製作したものであろうか。今次調査地では、「堺大小路」、「」、「○」は同じ遺構（瓦溜10）から出土している。同時期に大量の瓦が必要になり、堺のいくつかの瓦屋から買い求めたという事か、もしくは、「堺大小路」銘を使用している可能性がある瓦屋弥三左衛門が、同時に「堺大小路」、「」、「○」を押して製作し¹¹、販売したという2つの事が、考えられるのではないだろうか。後者の場合、刻印の違いは販売先の違いを意味するのであろうか。今次は同一遺構内からの出土であるので、筆者の推察が正しければ前者の場合にあたる。「○」・「」は、屋号を持つ刻印ではなく、屋号を冠する銘使用の前段階に、堺で普遍的に使われていたものという可能性も捨てきれず、やはり、現時点では今次出土の「○」・「」刻印瓦を誰が製作したのかまで特定はできない。しかし、使用した時期にそれほどの差はな

	17C	18C	19C
	慶安三年 (1651年) 「榎木…」 籠書き	元禄二年 (1689年) 「堺大絵図」	寛政二年 (1790年) 文政六年 (1823年) 「大坂瓦屋仲間記録」
榎木弥三左衛門 (大小路口瓦町)	-----		
下田源兵衛 (北瓦町)	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">○の使用時期</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">㊦の使用時期</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">瓦屋号の刻印「堺下田亦三郎」「堺下源」</div> </div>		
下屋敷の大きな流れ	<div style="display: flex; justify-content: space-between;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">I期</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px;">II期</div> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-top: 10px;"> <div style="text-align: center;">享保一二年 (1727年) 享保の大火</div> <div style="text-align: center;">文化八年 (1811年) 「文化八年」木簡</div> </div>		

Fig.105 堺瓦屋活動期推定表

と思われる、下田源兵衛が「○」・「㊦」刻印を使用していたことは間違いないので、本稿では、堺産瓦の製作者の候補として下田源兵衛をとらえ、今次出土の「○」・「㊦」刻印について考えていく。

3) 今次出土の堺刻印銘瓦製作者の活動時期

ここでは、出土した堺産瓦の製作者の候補2軒（瓦屋弥三左衛門・下田源兵衛）の、推定される活動時期を考えたい（Fig.105に、今次調査地の主な流れとともに表にして示した）。まず、両者ともに判明している年代としては、先に掲げた、元禄二年（1689年）の「堺大絵図」¹²に瓦屋弥三左衛門（大小路口瓦町）、下田源兵衛（北瓦町）、両者の屋敷地が見られ、元禄二年（1689年）段階で、両者の活動が確認される。

では、まず下田源兵衛の活動時期についてまとめておく。当該屋敷地は、近世の地名表記で「北瓦町」と呼称される場所に位置し、先述したように、当該屋敷地は発掘調査されており詳細が判明している。堺市立埋蔵文化財センターの嶋谷和彦氏は、発掘調査の成果を踏まえ下田源兵衛の瓦生産の展開を明らかにされている¹³。それによると、発掘調査地点における瓦生産の開始は1620年頃と考えられ、この頃の丸瓦には「○」の刻印がある。生産の最盛期は17世紀中葉～18世紀初頭で、18世紀初頭～前半頃には生産が減少し、18世紀前半～中葉頃には衰退期に入るが、この面にのみ、「㊦」の刻印が見られる。18世紀中葉～後半¹⁴には本地点での生産が終焉するようである。この面になると瓦屋号を有する刻印瓦が出土するようになる¹⁵。また、18世紀第二四半期（1725年～1750年代）の一括資料である中百舌鳥遺跡（NAN15地点）SD002出土瓦には「○」の刻印を有するものしか存在しない¹⁶。

このことから、「○」の刻印は1620年～1750年代に使用されたことがわかる。

次に瓦屋弥三左衛門の活動時期について考えてみたい。瓦屋弥三左衛門の瓦生産がいつから始まるかを示す明確な資料は文献・考古資料ともにない。現段階での初現は、堺環濠都市遺跡 - SKT153地点 - で出土した鬼瓦で「榎木弥三□□門作 慶安三□□月吉日」の慶安三年（1651年）籠書き瓦である¹⁷。次いで南宗寺仏殿上棟当初（南宗寺仏殿上棟は承応二年（1653年））の瓦で、

「堺大小路」「榎木作 弥三左門」がセットで押される鬼瓦と、「榎木作 弥三左門」のスタンプのみの平瓦、軒丸瓦（三巴）、二ノ平瓦、丸瓦がある¹⁸。次に元禄二年（1689年）の「堺大絵図」の記載があるので、この時期に活動していることも確認できる。しかし、寛政二年（1790年）の『大坂瓦屋仲間記録』の史料には瓦屋弥三左衛門の名はなく¹⁹、この頃には生産は衰退しているか、終焉しているかと思われる。

このように、慶安三年（1651年）～元禄二年（1689年）には確かに活動しているが、元禄二年（1689年）～寛政二年（1790年）の約100年間の活動については不明である。しかし筆者は、刻印の検討と今次の出土状況から、瓦屋弥三左衛門は、生産活動の正否が不明の時期に含まれる18世紀前半までは活動していたのではないかと考える。その根拠は、次の3点である。

①「堺大小路」銘瓦の製作者の項で触れたように、今次出土のものと、南宗寺・堺環濠都市遺跡の刻印は同範でなく、刻印の内容は同じでも両者では異なり、それが時期差に関係するのではないかとと思われる点である。

②「堺大小路」の刻印の使い方が、堺で確認される瓦と、今次出土の瓦で相違がある点である。堺の南宗寺で確認されている承応二年（1653年）の銘は瓦屋号（「榎木作 弥三左門」）のみか、あるいは「堺+町名」+「瓦屋号」（「堺大小路」「榎木作 弥三左門」）が押されており、今次のように「堺+町名」のみというのは、現時点の堺の資料では見当たらない²⁰。これは時期差を意味するのではないだろうか。

現在、銘のスタイルの移り変わりについては、堺の嶋谷氏²¹、萩の柏本氏²²が詳細に研究されているが、両者の分析されている資料の中に、今次の「堺大小路」のように、瓦師名もなく、地名だけというものはない²³。また両者が指摘されているように、「○」→「」→「生産地名+瓦屋号」→「生産地名+改+瓦屋号」の移り変わりに、瓦屋弥三左衛門は乗っていかないようにも思われる。それは上記の様な移り変わりを下田源兵衛が「○」の刻印を使っている1620年～1750年代の間に、瓦屋弥三左衛門は「堺+町名」+「瓦屋号」（「堺大小路」「榎木作 弥三左門」）の刻印を使っていることから言えるのではないだろうか。

③今次、「堺大小路」銘瓦は、陶磁器から廃棄年代が幕末に位置づけられ、瓦からは18世紀中頃からと考えられる瓦溜10で出土している点である。

以上の点から瓦屋弥三左衛門は、現在生産活動が確認されている、慶安三年（1651年）～元禄二年（1689年）よりも、時期が下る1700年代前半までは活動していたのではないかと考える²⁴。

4) まとめ

今次調査地では「○」、「」、「堺大小路」銘瓦が同一遺構内（瓦溜10）から出土し、それ以外の遺構からはほとんど出土しないことが注目される。

堺での「○」、「」刻印は発掘調査で、18世紀中葉までの時期しか見られないので、今次調査地の瓦溜8の遺物年代（17世紀前半～18世紀前半）に一致してくる。したがって、瓦溜8に堺の刻印瓦が含まれば、瓦溜10の堺の刻印瓦はI期からの再用品とも考えられる。しかし、瓦溜8には、堺の刻印瓦がまったく見られない。

また、後述するように、瓦溜8の大半の瓦は享保十二年（1727年）等の大火と関連するとみられ

る二次被熱が認められる。したがって、瓦溜10出土の堺の刻印瓦にも二次被熱が認められれば、これが瓦溜8の頃に購入され、焼け残ったので再利用したとも考えられるが、瓦溜10では二次被熱が認められない。

以上の、瓦溜8から堺の刻印瓦が出土しないという点、瓦溜10に二次被熱が認められないという2点から、瓦溜10の堺瓦は瓦溜8のI期の頃に使われた瓦の再利用品という可能性はないと考える。したがって、今次の出土状況から考えると、瓦溜10出土の「○」、「罽」、「堺大小路」銘瓦は、享保の大火等の直後に同時に購入されたと考えられる。

また本項では、堺では元禄二年（1689年）までの足跡しか判明していない瓦屋弥三左衛門も、18世紀中頃までは生産活動をしていた可能性があることを指摘できたのではないだろうか。

3、高知城伝下屋敷跡出土瓦編年試案

1) 編年試案

陶磁器の年代観に基づき、瓦当文様を中心とした²⁵編年を提示してみることにする。軒丸瓦は同じような文様で変遷を追っていくが、軒平瓦は文様が多種多様であり、文様の変遷を追うに妥当な資料と考えるので、軒平瓦の瓦当文様を軸に検討していきたい。

当地は陶磁器などの遺物からみて、近世に入ってから、18世紀前半までと18世紀後半以降に生活の痕跡がみられ、18世紀中葉の断絶が看取できる。また近代には裁判所が建築されている。第2節のとおり、文献から当地は享保十二年（1727年）等に火災にあっており、陶磁器の年代観とも符合する。そこで、本項では、16世紀末頃～18世紀前半までをI期、18世紀中頃～19世紀中頃をII期とし、明治29年竣工の裁判所建物をIII期とする。以下、各期の特筆されることを簡単に記し、どの遺構にどのような瓦が出土しているのかを提示しつつ年代観を推考していく。周知のとおり、年代観は、瓦の廃棄年代であり製作年代ではないということや、火災や地震などで瓦が一度に大量に使用できなくなるという事がない限り、瓦の使用期間は陶磁器のそれより長いと思われることを確認しておく。

〔I期〕 I期の瓦にはハナレ砂が確認できるものがあるが、II期以降は見られない。

SD2

陶磁器などから、中世末～近世初期の可能性のある遺構である。瓦では、IV類（三・五子葉文）の三子葉文である896が下層から1点のみ出土している。三子葉文は安土城系列の城郭に頻繁に見られる文様で、16世紀～17世紀前半におけるものである。今次出土の896は、今次出土の他の三子葉文とは様相が異なり、中心飾りに珠点をもたず、文様区面積の割合が他のものより大きい。平瓦部凹面には篋書きがある。また、瓦当面のハナレ砂が顕著である。このように、瓦の様相からも他に先行するといえそうである。

堀1

陶磁器の年代によれば、埋没の上限が17世紀後半～18世紀前半で、機能した時期は1590～1630年代頃に近くなる可能性がある。しかし、他節で述べられている様に埋土には焼土が見られず、大火以前に埋没しているようである。

まず、堀1出土の瓦を概観すると（文様の説明や詳しい説明は、まとまった量が出土している後述の瓦溜8に譲りたい）、軒平瓦では、橋状文VI-1-c（911）、VI-1（915）（911・915は花冠が三つ又）、VI-2-c（928）（花冠が扇形）があり、軒丸瓦では、三ツ葉柏文II-1-a（954）、三巴文III-2-c（980・981）、III-2（999）がある。このように堀1からは、瓦溜8と同範もしくは同文の瓦のみが出土している。

石列1

石列1の掘形上層から、瓦溜8で9点確認される三ツ葉柏と同範のものが1点出土しており、第2節で述べられているように堀1と併存した可能性が考えられ、また、掘形からの出土ということは、三ツ葉柏軒丸瓦で葺かれた建物と同時期か、またはそれ以後に構築されたと考えられよう。

SX2

SX2では、第2節のとおり「松平土佐守様・」木簡が出土している。陶磁器などから、堀1の埋没の過程あるいは埋没後から被災までの間に形成されたものと考えられる。瓦は1点のみの出土で、三巴軒丸瓦III-2-b（976）が出土している。

瓦溜8

瓦溜8には、VI類橋状文軒平瓦が20点出土しており、中心飾りが、フォーク状になるもの13点と²⁶、扇形になるもの5点に大別され、楕円形になるものが2点含まれる。

九州の小倉では、佐藤浩司氏が²⁷、中心飾りがフォーク状に三つ又になる五子葉文を、唐草や葉文のモチーフは橋状文のそれに類似することから、橋状文の最古段階のもので18世紀前半の年代が与えられる、とされている。今次出土のものは唐草、子葉のモチーフや、花冠が三つ又になるなど、類似点が多く、それにあたるのではないだろうか。共伴する遺物などから今次出土のものは、廃棄年代については小倉とほぼ同じの18世紀前半と思われるが、前述した堀1（陶磁器や埋土の状況から、瓦溜8が形成される前に埋没すると考えられる）から、瓦溜8と同範のものが出土するので、製作年代は18世紀前半より前であると思われる。つまり、瓦溜8と堀1出土の瓦は同時期に存在した建物に葺かれた可能性が高い。中心飾りが、フォーク状になるものは以上のとおりであるが、扇形になるものも出土している。この2つは花冠には共通性は見出せないが、その脇の萼などは酷似し、全体としての雰囲気は似ている。したがって、この二者は同時期に製作されていると考える。そして、同一遺構内から検出されていること、いずれも二次被熱が認められることから、併存した建物に葺かれていた可能性も考えられる。

橋状文の他には、IV類三・五子葉文（896～903）があり、これは、前述したSD2出土の896を除き、ほぼ瓦溜8からのみ検出される（901はSX16出土であるが、同範品である902が瓦溜8である。また、897はX層出土であるが、X層には大火による焼土が含まれ瓦溜8との関連が看守できる）。他にVII類宝珠文（942・943）があり、これも瓦溜8のみで出土する。

また、軒丸瓦では、三巴のIII-1-d、III-2-c、III-2-dがあり、巴の巻く方向は異なるが、瓦当直径は近似値である。三巴の他には、直径12.6cmという他に比べてやや小ぶりの三ツ葉柏文軒丸瓦が9点（952～960）出土しており、それらは全て同範で、また丸瓦部が厚い（丸瓦部が残存し厚さが確認できるもの3点は全て3.2cm）という共通の特徴を持っている。なお、丸瓦についてはコピ

キAとコビキBの両方の技法でつくられた丸瓦が出土している。

陶磁器の年代観に加え、瓦溜8出土の橋状文が古いタイプであり、大半の瓦に二次被熱が確認されている事等から、第2節のごとく享保年間等の火災との関連が考えられる。

以上、I期の、瓦が出土した遺構について概観した。堀1からは瓦溜8と同範もしくは同文の瓦のみが出土しており、瓦溜8の瓦が、堀1を伴う建物に葺かれていた瓦であることを示している。また石列1では、その掘形から、堀1出土と同範の三ツ葉柏軒丸瓦が出土しており、堀1との関連がうかがえる。また、瓦溜8は堀1の上位に堆積しており、堀1埋没後に形成されたものと考えられる。堀1、石列1、瓦溜8は、同範関係にあり、堀1埋没後、石列1（第2節の通り石列1は被災しているようである）を伴う施設が大火で被災し、その廃棄土坑が瓦溜8であると思われる。

〔II期〕 II期から棧瓦が出現する。また、「皆山集」によると元禄十三年（1700年）から、安芸瓦が始まったとされる。また、この期にあたる享保の大火から、安芸の五郎右衛門が御瓦師になったようで、それが幕末まで続く²⁸。

瓦溜10

瓦溜10の陶磁器は、I期のものが中心であるが、II期の19世紀初頭～幕末に比定されるものが少数含まれる。瓦からこれをどう考えるかが問題である。まず、瓦溜10出土の瓦を概観すると、軒丸瓦ではⅢ-2-hがあり、この類はすべて瓦溜10の出土である。軒平瓦では瓦溜8とは意匠が異なる橋状文がある。他のII期の遺構には、棧を有するものが含まれるが、瓦溜10の瓦には棧を有するものはない。丸瓦・平瓦では堺の刻銘瓦が出土していることが特筆される。

では、瓦溜10出土瓦について詳述していく。瓦溜10は、前述した堺産瓦がまとまって出土する遺構であり、「堺大小路」65点、「罽」9点²⁹、「○」2点³⁰が出土している。「堺大小路」銘瓦が出土していることから、先述したとおり寛政二年（1790年）の『大坂瓦屋仲間記録』には瓦屋弥三左衛門の名はなく、この頃には生産は衰退しているか、終焉しているかと思われるので、寛政二年（1790年）以前には、「堺大小路」、「罽」、「○」の瓦は購入されていたと考えられる。「堺の瓦屋集団の活動時期」で先述したように、堺大小路で瓦を製作していた瓦屋弥三左衛門の活動時期は、現在堺で確認されている慶安（1651年前後）～元禄（1689年前後）より、下限をもう少し下げて考えられるという根拠を、I期の瓦溜8、II期の他の遺構の出土瓦と、瓦溜10出土瓦の比較から確かなものにしていきたい。

2の4）で先述したように、瓦溜8（瓦溜8から出土しているなら慶安～元禄という、堺で確認される瓦屋弥三左衛門の活動年代に一致してくるが、「堺大小路」銘瓦が瓦溜8では出土しない）は二次被熱が著しいが、瓦溜10の瓦は、瓦溜8ほど明らかに焼けているという感はなく、瓦溜10の瓦はI期の享保等の火災で焼け残ったものの再利用品ではなく、その後に購入、使用されたものであろう。

瓦溜10の橋状文の文様は、瓦溜8と文様は同じだが意匠に明確な差がある。瓦溜8の橋状文に比べ、瓦溜10の930・933・935などの花冠がクローバー形になる橋状文などは、広範囲で見られるタ

イプである。

瓦溜8と瓦溜10の瓦には、二次被熱の有無、文様の差異があり、瓦溜8と瓦溜10が同時期とは考えがたく、瓦溜8は大火以前、瓦溜10は大火後の瓦と考えられる。大火の直後に瓦が購入され、瓦溜10出土遺物の年代で最も時期の下る幕末ごろまで使われていても、瓦の使用期間の長さから理解することも可能ではないだろうか。以上のとおり、瓦溜10の上限は18世紀中頃～後半であると思われる。以上の点から、瓦溜10出土の「堺大小路」銘瓦を製作している瓦屋弥三左衛門も大火の頃までは生産活動をしていたと考える³¹。

次に下限についても考えてみたい。瓦溜10は橋状文軒平瓦や堺の刻印瓦が含まれる。また、他のⅡ期の遺構には棧瓦が出土するのに対し、瓦溜10は棧瓦が出土しない。さらに、他のⅡ期の遺構からは土佐の刻印銘瓦が多く含まれるのに対し、瓦溜10からの出土は極端に少なく2点のみである。このように、他のⅡ期の遺構から出土する瓦とは様相が異なる。そこで、大火後のⅡ期には入るが、そのなかでも古い段階の何らかの施設の存在を想定したいが、他節のごとく、陶磁器から見た場合、18世紀中葉の断絶がある。このような陶磁器との年代観との齟齬については慎重に検討したいが、やはり、橋状文軒平瓦・堺瓦の存在が、瓦溜10に固まって認められ、他のⅡ期の遺構より少し先行するように思われる。しかし今回の編年表では、Ⅱ期は享保などの大火後（18世紀中頃）～19世紀中頃という大きな枠で捉えており、本遺構もその中で位置付けておく。

埋桶1

埋桶1直上からⅥ類橋状文軒平瓦（921）（花冠三つ又）が出土しており、第2節のとおり埋桶1は、近世後期に位置づけられる。しかし、瓦溜8と共通する遺物が多く含まれ、埋没時に流入したことがうかがえ、この瓦も瓦溜8と同文のもので、それに含まれるだろう。

落込み1・2

陶磁器の年代観からは17世紀後半～19世紀前半に比定される。ここからは、Ⅲ類巴文軒平瓦（869・882）が出土している。今次出土の他の巴文軒平瓦に比べて巴頭が鉤形であり、古い様相がうかがえ、今次調査地では古いタイプの巴文軒平瓦の可能性はある。

SX13

文字資料の内容は藩や藩一族に関連する施設を想定させる。瓦は、軒平瓦Ⅱ類（三花文）（851）が出土している。現時点で、三花文は高知城の特徴的な瓦かと考えており、関連がうかがえる。他に刻銘瓦では1081・1082（読み方不明）が出土している。

SX16

陶磁器の年代観からは19世紀初頭～幕末に比定される。「アキ[㊦]」などの刻銘瓦数点と、Ⅲ類巴文軒平瓦（863・880・889）が出土しているが、落込み1・2に比べると文様のにも新しい要素がみられ、Ⅷ類薦文軒平瓦（945）、などが出土し、落込み1・2より新しい可能性がある。

〔Ⅲ期〕

瓦溜1～7・9

丸瓦の出土量が極端に少なく、軒棧瓦の出土量が多いので、Ⅲ期の裁判所は棧瓦葺きの施設であった可能性がある。多くの刻印瓦も出土している。

石組溝 1

明治29年竣工の裁判所の雨落ち溝で昭和期の埋没かとみられる。出土した軒瓦は1点のみである。Ⅲ類巴文軒平瓦（865）で棧が左肩についており、「王兼」の刻印がある。

以上の遺構と、特筆すべきことがなく文中では取り上げなかった遺構を含めて、簡単にまとめると、以下のようになる。

I期……SD 2、瓦溜 8、堀 1、石列 1、SX 2

Ⅱ期……瓦溜 10、SD 3、SX 7・10・13・16・17、落込み 1・2、SK1・2、井戸 1、埋桶 1、集中 4

Ⅲ期……瓦溜 1～7・9、石組溝 1

4) まとめ

以上、今次調査地出土の軒平瓦を中心に、年代の検討を行った。それを基に編年試案表を作成した（fig.106）。これらを概観し、現時点で推察できる軒平瓦と軒丸瓦のセット関係にも触れたい。セット関係は同一遺構内の出土比率から導いた。これをもって、一応のまとめとしたい。

I期は、橋状文の出土が群を抜いて多く、三・五子葉文も若干見られ、宝珠文も数点見られる。このうち三・五子葉文、宝珠文はI期でしか見られない。Ⅱ期は、文様の意匠を変えながら橋状文が続く、巴文、三花文、蔦文が出現する。Ⅲ期には中心飾りのバリエーションは減少し巴文に絞られる。

次に軒丸瓦とのセット関係であるが、I期は軒丸瓦Ⅲ-1-d（967～970）、Ⅲ-2-d（983・984）に、橋状文軒平瓦Ⅵ-1（904～922）、Ⅵ-2（923～929）がセットになるであろう。Ⅱ期については、瓦溜10以外のⅡ期の遺構からは、軒棧瓦も出てきており、セット関係が判然としない。しかし、瓦溜10では棧瓦はないので、Ⅱ期では瓦溜10でのみセット関係が考えられる。瓦溜10でのセット関係は、橋状文軒平瓦Ⅴ-3（930～935）、Ⅵ-4-a（936）、Ⅵ-4-c～e（939～941）と、軒丸瓦Ⅲ-2-h（990～997）であろう。Ⅲ期は先述したように、すべて棧瓦である。

4、おわりに

以上、今次調査地出土瓦を、堺産瓦が含まれるということに注目し、消費地から、堺の一部の瓦生産を概観するとともに、今次出土瓦の編年試案を提示した。

堺瓦は土佐では長宗我部期から使われており³²、今回の検討を通して、それが近世中期まで続く可能性がみえてきたのではないだろうか。

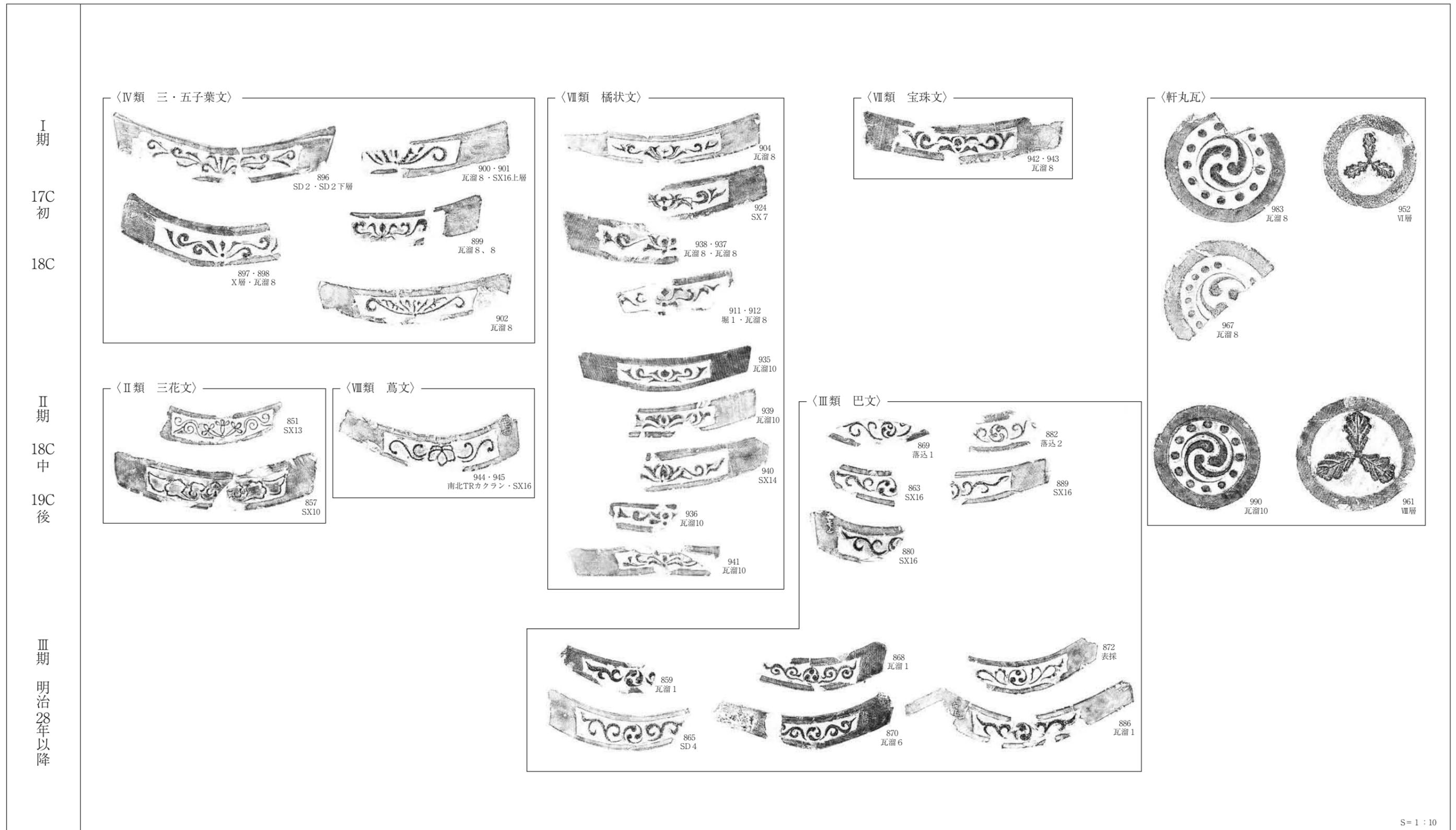
また、限定された資料の中からではあるが、その変遷やセット関係を追うことができた。しかし、三ノ丸・御台所屋敷跡で多く出土し、今次も13点出土している軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類（花文・三花文）のような高知城の特徴的な瓦かと思われるような瓦当文様もあり、今後調査が進めば高知城全体の瓦の実態にも迫れるだろう。

謝辞

末尾になりましたが、堺産瓦については、堺市立埋蔵文化財センターの嶋谷和彦氏に多大なるご協力をいただき、査読もしていただきました。また、瓦を実見させていただき、資料の収集にも便宜を図っていただきました。ここに記して謝意を表します。

註

- 1 柏本朝子「萩城及び城下町における瓦の諸様相（1）-堺瓦について」『萩市郷土博物館研究報告 第11号』萩市郷土博物館 2001
- 2 東京都、兵庫県、京都府、奈良県で堺産瓦が見られる事は、堺市立埋蔵文化財センターの嶋谷和彦氏にご教示いただいた。
- 3 長谷洋一「堺市博物館収蔵の刻印瓦」『堺市博物館館報 第19号』堺市博物館 2000
- 4 嶋谷和彦「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 - SKT755地点 - 」『堺市文化財調査概要報告 第86冊』堺市教育委員会 2000
- 5 小葉田淳・織田武雄監修『元禄二己巳歳 堺大絵図』前田書店出版部 1977
- 6 「堺大小路」「榎木作 弥三左門」がセットで押される鬼瓦と、「榎木作 弥三左門」のスタンプのみの平瓦、軒巴瓦、二ノ平瓦、丸瓦がある。『大阪府指定有形文化財（建造物）南宗寺仏殿修理工事報告書』財団法人文化財建造物保存技術協会編集 南宗寺発行 1993
- 7 鬼瓦の両側面に「堺大小路」「榎木作 弥三左門」をセットで押印。土井和幸「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 - SKT725地点・甲斐町東1丁 - 」『堺市文化財調査概要報告 第90冊』堺市教育委員会 2000 このほか現在嶋谷氏が整理中のSKT787地点で「榎木作 弥三左門」の刻印のみの平瓦が出土している。
- 8 白神典之・嶋谷和彦「平成6・7年度市内遺跡立会調査概要報告」『堺市文化財調査概要報告 第64冊 1997 第2章 第2節 百舌鳥古墳群周辺 百舌鳥赤畑遺跡の冠瓦と、嶋谷和彦「向泉寺跡発掘調査概要報告 - KTA 3地点・向井領三味墓地の調査 - 』『堺市文化財調査概要報告 第59冊』堺市教育委員会 1996の丸瓦に、押されている。
- 9 「堺嘉右衛門」銘が存在することは嶋谷氏にご教示いただいた。
- 10 嶋谷和彦「第4章 近世・堺北瓦町における瓦生産の展開」『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 - SKT755地点 - 』『堺市文化財調査概要報告 第86冊』堺市教育委員会 2000
- 11 前掲註3で、長谷氏は、堺の瓦師は複数の刻印を所有していたのではないかという事を言われている。しかし長谷氏の分析された資料は、いずれにも「瓦師名」が入る。したがって、「○」・「⊗」刻印の場合、長谷氏の「複数の刻印」の範疇に入るかは別の問題になるであろう。
- 12 前掲註5
- 13 前掲註10
- 14 下田源兵衛屋敷地の瓦生産終焉期の面からは、今次出土の軒平瓦Ⅱ類（本文図版番号857）に、文様の少し似ている軒平瓦が出土している。三単位のオシベ状のもの脇に雲形の唐草を配し、瓦当幅が高いのも似ている。しかし、堺のものは、三花文の茎の部分が線刻にはなっておらず、雲形の唐草も形は異なる。
- 15 嶋谷和彦「近世・堺北瓦町における瓦生産の展開」『堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告』『堺市文化財調査概要報告 第86冊』堺市教育委員会 2000
- 16 嶋谷和彦「中百舌鳥遺跡発掘調査報告書—堺市中百舌鳥町4丁 NAN15地点・筒井家屋敷跡内—」『堺市文化財調査報告書 第47集』堺市教育委員会 1989



拓影図の左下にある数字は本文図版番号と出土場所を示す

Fig.106 伝下屋敷出土瓦編年試案

- 17 續伸一郎「堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 - SKT153地点 - 」『堺市文化財調査報告 第51集』堺市教育委員会 1990年 丁寧に作られている数珠掛形鬼瓦2破片に篋書きされており、それぞれの断片からそのように読み取れる。
- 18 『大阪府指定有形文化財（建造物）南宗寺仏殿修理工事報告書』財団法人文化財建造物保存技術協会編集 南宗寺発行 1993
- 19 嶋谷和彦「近世・堺の瓦屋仲間と刻印瓦一住友銅吹所跡出土堺銘刻印瓦に寄せて一」『大阪市文化財協会研究紀要』2 1999年で、『大坂瓦屋仲間記録』という一連の史料を分析されており、その内の、寛政二年（1790年）の史料には、榎木弥三左衛門の名は出てこない。萩市郷土博物館の柏本朝子氏は、「萩城及び城下町における瓦の諸様相（1）- 堺瓦について」『萩市郷土博物館研究報告 第11号』萩市郷土博物館 2001年で「寛政十年（1798年）の『瓦方名前切替帳』によれば、「銘々大坂表江瓦商内仕候ハ、瓦毎に銘々の極印を押無印ニ 差遣し申間敷候」というきまりがあったこともわかる。これが『生産地名+瓦屋名』の刻印に相当することは疑いが無い」と記されている。
- 20 前掲註3で長谷氏は、長崎県にある、唐寺聖福寺の「境内左手にある経蔵の横の瓦積み土塀には小口面に「堺大小路」と印刻された平瓦も確認できた」と記されている。筆者はこれを実見し得ておらず、これが今次出土の「堺大小路」銘と同範になるかはわからない。しかし、管見では、「堺大小路」のみ印刻するのは、今次調査地と、ここのみである。
- 21 前掲註19
- 22 前掲註1
- 23 「㊦」はあるが、「堺大小路」のような町名まで入るものはない。
- 24 嶋谷和彦氏は、堺廻り四箇村の一つである中筋村の庄屋であった南家の当主が、当家に伝わる記録類を元に、当時の事件や身辺の出来事を日記調にまとめた文献史料である『老圃歴史』（森 杉夫「老圃歴史（一）～（五）」『堺研究』第9～13号 1975～1982 堺市立図書館）中に以下のような条文（「老圃歴史（三）」『堺研究』第11号 1979）があることを発見された。
- 『老圃歴史』元文4年（1739）条
- 「南流庵現住泰順新町より瓦町瓦屋弥三左衛門屋敷跡江所替願上候所、御聞届十二月十七日済、新町東口南川外割屋敷三角地也」
- この文献で、1739年には瓦屋弥三左衛門屋敷地は「屋敷跡」になっていることが注目される。1739年時点で、そこが瓦屋弥三左衛門の屋敷跡であったと認識される程度の過去のということだから、1739年にそう遠くない過去まで、瓦屋弥三左衛門は生産活動をしていたと思われ、瓦屋弥三左衛門が18世紀になっても瓦生産をしていたということの証明にもなる。
- 25 今回は時間的な制約もあり製作技法の違いには、あまり言及できていない。
- 26 瓦溜10で、堺の刻銘瓦が出土しており、橋状文は、関西方面で多い文様なので、これも堺からの搬入品かと考えたが、堺市立埋蔵文化財センターの近藤康司氏、嶋谷和彦氏（五十音順）のご尽力で、現時点では堺では、この文様が確認できない、とのご返答をいただいた。
- 27 佐藤浩司「小倉城下町・寺院の軒平瓦」『研究紀要13号』北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室 1999
- 28 『史跡高知城跡1—御台所屋敷跡発掘調査報告書—』高知県教育委員会 1994
- 29 字体が違うものが3種類あるがまとめてカウントしている。
- 30 円の直径が異なるものが2種類あるがまとめてカウントしている。
- 31 前掲註24
- 32 岡本健司「元親の城と瓦生産」『長宗我部元親のすべて』山本大編 新人物往来社 1989
- 33 『大阪府指定有形文化財（建造物）南宗寺仏殿修理工事報告書』財団法人文化財建造物保存技術協会編集 南宗寺発行 1993 の図をもとに、小葉田淳・織田武雄監修『元禄二己巳歳 堺大絵図』前田書店出版部 1977 の戸別位置を引用して一部加筆

第2節 高知城伝下屋敷跡の調査成果と文献史料

本節では、まず今次検出した遺構・遺物の概要をまとめ、次いで管見の文献との関連を検討する。陶磁器の年代観は大橋康二氏、文字資料の判読は高橋史朗氏による遺物観察表の内容を引用する。

1. 遺構と遺物

(1) 中世～近世初期

中世に位置付けられる遺構として、まずSD1があげられる。SD2は、前章の状況からその機能した時期が近世初頭頃に遡る可能性がある。これらの遺構の企画方位は符合していると同時に、近世以降に普遍的な方位とは異なっていることから、それに先立つ企画方位が存在した可能性が考えられる。

(2) 近世の様相

近世の状況を総括するが、一見して注目される堀1、三ッ葉柏紋軒丸瓦、「松平土佐守様」木簡については後述することとする。まず、遺物量は時期的に大きな偏りがみられ、近世後期から近代初期（以下後期）に比定されるものは、近世前期（以下前期）に比定されるものに比して20倍を超える量である⁽¹⁾。詳しくは後述するが、後期の土坑状遺構（SX）群や基本層序層は特に遺物密度が高く、それらより後出する遺構や堆積層にも同期の遺物が少なからず混入するのが常である。また後期の廃棄遺構とみられる遺構群では、有機物と遺物の集中層が累積する特徴を持つものが多い。前期に比定した遺構群は、遺物密度と埋土の状態の両面でこのような後期の様相と異なる傾向があり、特に堀1、SX1、SX5、SK1、SK2は廃棄行為を埋没の主因として認められない。さて、前期の遺構配置をみれば、堀1、石列1、瓦溜8はある共通の企画に拠るか、あるいはその影響を受けていると考えられる。石列1及び堀1を覆う層と瓦溜8の埋土や遺物の状態からは、両者が関連しているとみられ、同瓦溜が石列1に関連する建物の火災後の廃棄に伴うものと考えられる。堀1は瓦溜8と層位的上下関係を持ち、且つ埋土には焼土や2次被熱した遺物を含まないことから、想定される建物の被災以前に埋没していたことになる。SX2やSX3は、その埋没の過程あるいは埋没後から被災までの間に形成されたものとなる。石列1掘形にも焼土等を全く含まず、火災以前に構築されたものとみられる。堀1と石列1の各々の構築と廃絶については、精確な先後関係を確定できず、並存期間の有無も層位関係や遺物の年代観からは導き出せない。出土陶磁器の年代観には幅があり、上記のような層位関係と齟齬を生じていないという程度であるが、前節のごとく瓦の同范関係が認められることから考えれば、堀1、石列1、そして瓦溜8から想定される建物の存在時期が近接或いは重複しているものとみられる。ところで、SX1やSX5は既述のように廃棄遺構とは考えられず、遺構規模や急な立上がり角度には、堀1も含めての共通性が看取される。底面の標高は堀1東部が0.42m、SX1が0.30m、SX5が約0.7m以下(推定)を測る。破壊部分が大きく、不明な点が多いが、東西方向にこのような堀、掘込み或いは大溝状の遺構が連続していることになり、何らかの関連を持っている可能性もあろう。SX1は、東へ延びている可能性がある。SX6やSX9については、いずれも後期の遺物が出土しているものの、前期の遺物が比較的まとまっ

ていることが留意され、当該区に前期の遺物が残留する要因が存在したことや、SX9では遺構が切り合っていた可能性も考えられる状況であった。前期に属する出土遺物の内容を概観すれば、華南産とみられる色絵の大皿や、有田産の上手の磁器、壺、大型香炉、肥前産陶器水差し、京焼風陶器碗といった遺物が注意され、階層性の一端を示しているものとみられる⁽²⁾。

次に後期では、有機物と共に多量の遺物を含む落込みや土坑状遺構が増加し、基本層序 層も含めて、遺物量が激増する。土坑状遺構は調査区東部から南部で検出され、 層は北部を除く部分で認められた。遺構の配置をみると、落込み1と堀1、SX10とSX5、SX13とSX1等、前期の遺構と後期の遺構が重複している例がある。また落込み1、落込み2や近代初期に廃絶されたSD3の方位軸は、前期のそれと共通している。これらの諸相は、前期の堀1、SX5、SX1が所在した部分が、後期において落込みや土坑状遺構が形成されるような微地形的或いは敷地利用企画上の条件を持っていたこと、或いは遺構の方位企画が当該期まで存続していたこと等を示唆している可能性がある。このようにみれば、これら落込みや土坑状遺構群の出土遺物は、本来調査区外北側或いは西側に想定できる施設で使用されていた可能性が考えられる。土坑状遺構群の埋土をみると、SX6、9、10、13、16では有機物や遺物の集中層が複数確認され、複次の廃棄を示すとともに、掘り直しの可能性も留意される。SX10、11、13、15、16は、既述したような多量の遺物が出土した後期の典型的な遺構である。後期以降の堆積層のうち、水成堆積の様相が顕著な層序は 層と 層(落込み3埋土)であるが、このうち 層は 層の下位にある。SX6、7はさらにその下位にあることからSX10、15、16、17に先行するとみられるとともに、埋土も特徴的な状態を共有する点が認められた。SX6、7、8にも有機物集中層を有するものがあるが、いずれもSX10~16に比して遺物密度は低い。

(3) 出土遺物

まず注目される遺物のうち、SX2から出土した「松平土佐守様・・・」木簡については、慶長15年の記事として「松平ノ御称號・忠ノ御一字御拜領」を記す史料があり⁽³⁾、共伴陶磁器の年代観とも齟齬はない。山内氏の家紋である三ツ葉柏紋の軒丸瓦も複数出土しているが、瓦溜8や集中4の例などが示すように、所属時期が近世前期のものから後期のものまで存在するとみられる点も注目される。後期には遺物量が増加し、食器の他に調理具、火具、飼育具、膳、調度、刀剣鞘、遊戯具、喫煙具、

下駄、木簡等と種類も多様である。遺構出土遺物を中心に特徴的なものを挙げると、まずSX13では「御料理方 」、 「・・・御(錠カ)前役場」、「御くら」、「(賄カ)方」等の墨書、複数の木簡、羽子板、餌入れ、焼塩壺などが注目される。陶磁器・土器の出土密度の高さと、食器の多さを指摘できると共に、文字資料の内容は藩や山内氏に関連する施設を想定させる。SX15では、下駄と箸がいずれも今次最多数で特徴的である。下駄は、小型のものを含め様々な寸法と型式がある。箸は残存良好なもので36本を数え、折損品は更に多い。他には「海上安全」をはじめ各種墨書、木簡、草履札、刀剣の鞘、高級品を含む漆器、碁盤、羽子板、独楽、傘と、種類も豊富である。SX16では「南」墨書碗と不明墨書の紅猪口がある。同様の部位に墨書のある紅猪口は落込み2でも出土している。その他SX8の櫛形木製品や、集中4の魚籠形編物も特徴的な遺物である。

(4) 小結

まず遺構を中心に変遷をまとめると、SD2と異なる企画方位で、近世前期に堀1と石列1が構築される。17世紀後半から18世紀前半の中で堀1の埋没、北側に想定される建物の火災が想定でき、使用されていた瓦や複数の大甕をはじめとする廃棄物によって瓦溜8が形成される。基本層序層はこの火災に伴う焼土や遺物を含む。陶磁器の年代によれば、堀1の開削時期が17世紀前半頃、瓦溜8の形成時期は17世紀後半から18世紀前半に求めることができる。この被災後、遺物が激減し、活動の痕跡が途絶える。次に遺物が増加し始めるのは18世紀後半以降で、層位的にみて南部のSX6、SX7埋没後に落込み3が水成堆積によって短期間のうちに埋没するが、その底面には板材群や集中4が存在する。続いて時間的間隔を置かずそれらの北側で同種のSX群が形成され、遺物量も急増する。さらにSX群の埋没後も、落込み2等に有機物や遺物の埋没が続く。井戸1や埋桶もこの近世後期の中で構築されたものであるが、他遺構との先後関係は不明な点が多い。ただ、SX9～16が井戸1をとり巻く形で所在する状況である。井戸1は、枠の材質や加工が極めて上質で、墨書からも注意深く構築されていることが推察できる。次に、南部のSX17や西部のSD3が近代初期頃に廃絶された後、基礎遺構1即ち明治29年庁舎が構築される。

出土した木簡類については今回詳説できないが、既述のように公的な施設との関連を示唆するものに加えて、高知平野の東縁や西縁部から直接的に物資が収められる状況が、少なくとも近世後期の一定期間継続していることを認められる点が注意される。また、焼塩壺の出土点数が現在県下最多となることにも留意し、後に触れる。

2. 文献と絵図

近世の今次調査区(以下適宜「当地」と略)に関連する文献を管見より検討する⁽⁴⁾。なお、筆者に史料を評価・検討する力はなく、以下は各刊本による。まず、元禄11年の「御城下出火焼失覚」の「帯屋町筋」分の筆頭に、「御屋敷 御下屋敷」がある⁽⁵⁾。帯屋町筋は当地の南、即ち内堀の南外縁を東西に貫く通りで、ここでの「御屋敷」は諸史料や絵図より現県庁の地点に比定できる。本史料では、帯屋町筋に御屋敷とは別に「御下屋敷」が存在したことを知ることができる。この火災は、当地の西方にある北奉公人町より出火し、折からの強い西風⁽⁶⁾によって郭中及びその西側を中心とした広い範囲が被災している。被災後、当地付近ではおそらく避災帯としての機能も兼ねて拡幅されたであろう通りが、「弘小路」と呼ばれるようになっている⁽⁷⁾。同小路の名称は、「西弘小路」として近代までの諸史料にみられ、当地の南西隅で東西の「帯屋町通」に直交して北伸する街路である。寛永から万治年間の状態を記すといわれる侍町小割之帳によれば⁽⁸⁾、上記の帯屋町筋に相当するとみられる「御屋敷筋」の筆頭に「御屋敷 下やしき」の記載があり、記載順からみてやはり当地付近に比定できる。「寛文9年図」⁽⁹⁾では当地に相当の規模と格式を持つ屋敷が描かれているが、他の侍屋敷等にはその居住者や施設名が記されているのに対して、当地のみ書き込みが確認できない。なお同図では、当地と内堀を挟む城内側の両方から棧橋状の構造物が伸びており、城内側には櫓或いは門のような構造物も描かれている。さて皆山集には、「下屋敷 詒謀記事伝加賀爪甲斐守殿御預二成御屋敷御門の西今の廣小路杉垣の辺二御屋敷ありしと也此屋敷甲斐守殿居

住の為ニ立たるニあらず先年より御下屋敷と号し御末子様方御住被成ため也其時明_ニ居たる故甲斐守殿を御差置被成しと也其後小田切新右衛門殿と云御旗本衆も御預ニて此御下屋敷ニ御差置被成たると也元禄戊寅の大火事ニ消失し跡廣小路ニ成けると云。」や「寛文十一年亥四月三日伊達兵部宗勝御預リ五月御下屋敷仮ニ居追テ此地家屋建延宝七年十一月四日死去」⁽¹⁰⁾、「先年高知御下屋敷ト申八西大門ノ南堀端ニ有之ト云此所ハ公義御預人等モ被差置候由（仙石久通雜記）」⁽¹¹⁾の記述がある。加賀爪甲斐守の高知護送は延宝9年、死去は貞享2年である。

以上の記事が示す時期に後続する時期には、当地に関わって注目される文献が管見になく、次に記述が増加してくるのは幕末頃～明治期である。まず、「西堀端ニ御留杉と称し山内氏別亭梅ノ亭と称維新後明治(ママ)年 豊資君此ニ新ニ邸宅ヲ築キ居住せらる 后(ママ)年裁判所となる」此邸ニ住吉_ノ社あり安政二年十一月吾川郡甲殿村より勸請今八山内_ノ社の境内ニ移す」⁽¹²⁾との記述があり、「梅ノ亭」の存在時期は不明であるが、注目される記事である。因みに藩主の致仕は、2代藩主忠義の後、10代豊策の文化5年のそれまでなく⁽¹³⁾、12代豊資、15代豊信(容堂)、16代豊範と続く。豊資は文化6年より33年と、近世後期における突出した長期在位期間を有し、更に明治5年まで存命であり、当該期の藩政において隠然たる影響力を持ったと言われる。その他、当地付近に関する記述として、「住吉_ノ社 安政二年十一月十三日吾川郡甲殿村住吉_ノ社山之内豊資君ノ邸内へ勸請明治維新の後九反田開成館地中ニ移し・・・」や⁽¹⁴⁾、「住吉大明神勸請」の項で、「少將様ニも粉の此御神をいたく御信仰被遊今年安政二年立杉の御花壇の地ニ新ニ御社を建てさせられ神職ともを彼地ニ遣ハされ御勸請被遊御屋敷ニおいて御賑々敷御祭礼被遊 云々」、「下御屋敷ノ内御留杉へ 安政二年十一月九日 住吉宮少將公豊資公御勸請有公御夢想之儀有之趣を以御勸請と云 此神社ハ維新後雜喉場ノ下開成館中へ鎮座其後山内神社境内へ遷座ニ成」、「安政二乙卯年十一月十三日御留杉へ甲殿住吉宮御勸請」⁽¹⁵⁾とある。「文久3年」図では住吉宮と「薬園」⁽¹⁶⁾、明治6年複製の「高知城の図」⁽¹⁷⁾には住吉神社がそれぞれ当地に描かれている。因みに明治7年の高知公園十二景のうちの采香径に「薬園」の添え書きがあり⁽¹⁸⁾、弘化年間頃の史料では豊資が「痢薬ヲ諸士ニ賜フ」記事が度々みえる⁽¹⁹⁾。豊資に関しては、安政4年に「御櫻山」の諸「亭」に手を入れている記事や、「御茶室御建立」の記事、「明治二年・・・御庭御桜山へ狂言芝居ノ者ヲ御召御覧有追軽業師モ御覧有」等⁽²⁰⁾、幕末の緊縮財政及び近代移行期にあって諸「亭」の整備や、遊興の記録がみえる。「御桜山」は今次調査地の北側対岸の内堀内に想定でき⁽²¹⁾、間に堀を挟むが、豊資によって当該地区一帯が整備・使用されていることになる。その内容も、「別亭」、「御花壇」、「薬園」といった庭園を伴う施設を示唆する名称である。明治5年に豊資が没した後、「高知裁判所明治八年十二月始テ設置」の記事がある⁽²²⁾。同9年に「地誌編集係ニ付」作成された絵図には、諸史料のとおり明治期になって内堀内の屋敷地が病院になっている様子とともに、今次調査地に上級武家屋敷或いは役所風の格式を持った屋敷が描かれている⁽²³⁾。同裁判所の沿革については第1章の5のとおりで、その他の文献にも明治8年の「設置」時に庁舎が築造された記録はなく、その場合上記絵図の屋敷の本来の性格が重要となる。なお同図の屋敷では、南の通りに面した入口に板橋状のものが架けられており、時期幅はあるが、今次調査区で南部が落ち込む傾向と関連する可能性もあろう。また、「弘小路と成此小路の南端ニ・・・末松氏ノ前ノ溝ニカ、リタル石橋」の記述が

あり⁽²⁴⁾、「文久三年」図等では当地の南側に末松氏の屋敷がある⁽²⁵⁾。

以上の諸文献や絵図を総括すれば、当地付近には元禄以前より藩或いは藩主関連の施設が置かれるが、元禄11年には焼失する。幕末頃には、「山内氏別亭」の内容については不明確だが、元藩主によって様々な施設が営まれたことは首肯でき、明治期になると裁判所が置かれる。このように、当地付近に存在した施設についての記録は常に公的なものの存在を示し、絵図や屋敷地に関する史料でも当地に家臣等が配置されている例はみない。もっとも、列挙した記事に同時代史料といえるものが少ない点は、これらを批判的にみるべき根拠として十分である。また、「御留杉」等の厳密な範囲についても、筆者には明言できないという条件のもとでの検討であることを断る。

3. まとめ

その他の文献史料を付記するとともに、調査成果との関係について概略する。まず、既述のごとく北側に存在した建物の被災を示唆する瓦溜8と層であるが、出土遺物の年代観をみれば、これを元禄の大火に特定するには無理があり、享保十二年の大火も視野に入れることが必要である。同年二月朔日に高知城の北西側より出火し、大風にあおられて広がった同大火は、郭中東部以東を除く城下町中心部の殆どを焼き、さらに城内までも被災している。幕府への差出では、天守をはじめ城外で「役屋敷四ヶ所」、「侍屋敷二百一軒」、「町屋千百三十七軒」他多数が焼失、大手門、西ノ口大門、北ノ口大門等が焼け残っている⁽²⁶⁾。この後、当地に関連する記録が管見では殆ど存在しないが、出土遺物の消長もこの状況と合致する⁽²⁷⁾。18世紀後半以降には遺物の出土が再開するが、その量は近世前期を大きく凌駕していた。注目される遺物のうち、木簡には公的な施設の存在を示唆するものがあつた。SX15出土の「海上安全」木簡は住吉神社に関連するとみられ、共伴する陶磁器の年代観とも合致するのみならず、SX13等を同神社に先行するという「山内氏別亭」と関連させた場合、遺構の層位的関係や陶磁器の年代観とも齟齬がない。また、まとまった点数を数える焼塩壺も留意される。焼塩壺に関する他地域の諸例からは、これが階層性に規制される遺物であることが看取される。上級武家屋敷や庭園などでの出土例があり、先に挙げた当地に関する文献とも合致している⁽²⁸⁾。

さて皆山集では、山内豊信(容堂)の鮫洲謹慎時の記事に、「御錠前役相勤候人」や「御錠前場」、「扈從八一人休息所に扣居」といった記述があり⁽²⁹⁾、今次出土文字資料との関連から、当地に存在した施設の性格を推定する参考となろう。もちろん、このような記述も単に筆者の管見に入ったに過ぎないし、関連付けについては慎重であるべきことは言うまでもない。なお、今次出土の近世前期に属する遺物には、既述のように階層性を窺わせる遺物が含まれているのに比べ、後期にはそのような様相がみられない。次章の漆器類の分析においても、これと相反しない評価がなされている。当該期は土佐藩も財政が逼迫しており、天保年間を中心に「幕府ノ儉約令二基」いた儉約令も度々みえるが⁽³⁰⁾、このような遺物の様相にも、当時の経済状況との関連が考えられる。

以上に挙げた諸事象からみれば、冒頭に挙げた今次の木簡92や、複数時期を想定できる三ッ葉柏紋軒丸瓦⁽³¹⁾、堀1などの遺構の存在も無理なく理解することができるといえよう。

西暦	年号	今次調査地付近関連記事	主要遺構廃絶時期
17 世 紀	1603 慶長8	(高知城本丸・二の丸完成・山内一豊入城)	(SD2開削はこの前後か)
	1611 慶長16	(三の丸完成)	
	1671 寛文11	「・・・伊達兵部宗勝御預り五月御下屋敷仮二居追テ此地家屋建・・・」	堀1 SX2
	1698 元禄11	大火・「御下屋敷」	
18 世 紀	1727 享保12	大火	石列1 瓦溜8
	1808 文化5	豊策致仕	SX13
19 世 紀	1843 天保14	豊資致仕 「山内氏別亭梅ノ亭」・「立杉の御花壇の地」	SX15 SX17
	1855 安政2	住吉神社勧請	
	1863 文久3	「藁園」	
	1875 明治8	「高知裁判所・・・始テ設置」	

概念表であり、年代との関係は精確ではない。詳細は本文参照。

Tab. 6 伝下屋敷跡関連事項と検出遺構の年代観

註

- (1) コンテナケースでの分量である。前期の遺物は土器・陶磁器2箱、木製品2箱、後期は土器・陶磁器40箱、木製品50箱を数える(いずれも概数)。なお、近世・近代の瓦400箱も出土している。
- (2) 現在、土佐で華南産色絵大皿や京焼風陶器碗を認めるのは、五藤家屋敷跡である。尾戸窯跡では、五藤家屋敷跡と同じ「清水」銘の陶器碗の出土が知られる(丸山和雄「土佐の陶磁」有山閣出版 昭和48年)。今次出土の華南産色絵大皿と京焼風陶器碗は、五藤家屋敷跡出土のものと同様、意匠、細部形態、胎土、釉薬、色調の全てが酷似している。五藤家屋敷跡では、初期の伊万里や上手の大型器種、絵唐津も比較的目立ち、当該期の階層性を示す遺物として認識できる可能性がある(「五藤家屋敷跡」安芸市教育委員会 1987年。同市教委の門田由紀氏にお世話になった。)
- (3) 「忠義公」『南路誌 卷百十七』高知県立図書館 平成9年
- (4) 文献検索にあたっては、今次担当者の一人である大野佳代子の協力を得た。
- (5) 『南路誌 卷百十八』高知県立図書館 平成9年

- (6) 『皆山集6』高知県立図書館 昭和48年
- (7) 註4
- (8) 『皆山集9』高知県立図書館 昭和50年
- (9) 高知市民図書館。同図作成の事情について、大脇保彦氏は同年に「・・・四代藩主を襲封したと関係があるかも知れない」と述べている。
- (10) 以上「高知市沿革地図説」『皆山集9』
- (11) 『皆山集4』高知県立図書館 昭和51年
- (12) 『皆山集9』P175
- (13) 第3代の2ヶ月を除く。平尾道雄『土佐藩』吉川弘文館 1965年
- (14) 『皆山集9』P166
- (15) 『皆山集3』高知県立図書館 昭和51年 P690
- (16) 『皆山集9』巻頭
- (17) 高知県立図書館蔵
- (18) 『皆山集3』P696
- (19) 「第十二代豊資公紀」『山内家資料 歴代公紀文集 下巻』山内家資料刊行委員会 平成11年
- (20) 「第6章歴代藩主」『皆山集3』
- (21) 上記「高知城の図」他
- (22) 『皆山集9』P176
- (23) 『皆山集3』P694、697
- (24) 『皆山集3』P667
- (25) 『皆山集9』巻頭
- (26) 「第6章火災」『皆山集6』
- (27) 前節とはややくい違う点もあるが、瓦という遺物の特性に留意すべきであろう。
- (28) シンポジウム「焼塩壺の旅 - ものの始まり堺 - 」小谷城郷土館 2000年
- (29) 『皆山集3』P487
- (30) 註19
- (31) 市内等の他地点における三ッ葉柏紋軒丸瓦の出土も聞くが、考古学的な出土状況を明らかにした上での検討が必要である。

第3節 高知城伝下屋敷跡出土の古代の土器

今次は古代に属する遺構は検出されなかったが、遺物は前章のごとく出土した。その数は少ないが、資料の希薄な高知市街部の様相を窺えるものである。ここではこれら古代の土器について、土佐の土器編年における位置付けと、既知の資料との比較・検討を行う。属性や編年観及び用語については、特記しない限り註1、2に準拠し、以下それについての註記は適宜省略する。Tab.7は、資料群中で所属時期をある程度検討可能なものを対象に、器種・器形及び時期別に分別したものである。「期」については、各個体のみをもって1小期を特定することは難しい場合が多いことから、幅を持たせた部分がある。

まず837は、内外面を赤色塗彩しているが、胎土は灰白色で石英粒を含み、現在出土例が比較的まとまっている高知平野東部の赤彩土師器に設定されている胎土群の一つに合致する。肉眼観察では塗料の色調や質感も同群に酷似している⁽¹⁾。次に833は、脚を面取りした高杯の破片である。土佐における当該期の高杯は、-7期に例外的となって、これに続く期以降では確認例がなく、現状では高杯自体が期に下らない器形となっている⁽¹⁾。833は精選された胎土に石英や長石の細粒を含み、焼成もやや良好で、搬入品の可能性がある。但し、含有鉱物自体は在地土器と同様である。土佐では土師器高杯の出土比率は一般に低く、諸相からみて拠点の遺跡と促えられる遺跡から出土している^(2,3)。特にこのような脚を面取りしたものでは、搬入品の例も目立つ。次に832は、口縁部内面に沈線を持たず、摩耗が著しいがミガキを施していないとみられ、須恵器杯と焼成以外の相違がない。酸化炎焼成されているものの、橙色で口縁部外面に重ね焼による変色が見られる。このような諸属性は、期の主流をなす土師器とは異なり、-7期以降に顕在化してくるものである。一方、立上がり外面の段や外反する口縁部を特徴とする「D相」⁽¹⁾を呈さない点是非期的で、832は-7期に比定することができる。831は体部或いは口縁部を強く横ナデし、底部外縁が若干持ち上がる「C相」から、-7期から期初めに考えられる。口径より-7期に比定した。834は貧弱な高台が底部外縁に付き、-7期頃に比定される。焼成は軟質である。-1~2期については、器高が著しく低平化した土師質土器皿と、口縁部が外反した須恵器皿が非実測遺物中に各1点あり、下ノ坪遺跡P14、15や小籠遺跡SK130、136を示標資料とする本期に属する。841は口縁端部が上方へ発達した甕A2で、胎土も石英等の角礫を含んで焼き締る。甕A2は期に主流化する型式である⁽³⁾。次に、土器椀が2点認められ、844は大振りで畳付を凹状に処理する高台から-1期に比定できる。内外に火禿がみられ、外底のそれは十文字に交差するものとみられる。843はやや退化した高台から-2~3期に比定できる。以上の他に、古代に属するが時期比定困難な破片があり、器種が一定判別できるものとして須恵器食膳具5点、須恵器壺1点、須恵器甕19点、土師器甕4点がある。出土地点はTab.7のごとくで、1-5区及び0区を筆頭に、東部及び南部での偏在を指摘できるが、5~7区でも少数出土している。層位的には、南部に存在する層と、それ以下の層位に集中している。

上記のように、今次出土した古代の土器には期から期に比定できるものが存在し、中でも-7期から-2期には複数の遺物を比定することができた。これは都城の土器編年の平安期新

期	土師器・土師質土器					須 恵 器				土師器
	皿 A	杯 A	蓋	高杯脚	椀	皿 A	皿 B	杯 B	椀	甕
～ - 5			837							
～ - 7				833						
- 7		832				831		834		
- 1～2										841
- 3										
- 1									844	
- 2～3					843					

数字は図版 No。 は図示していない遺物の存在を示す。

Tab. 7 器種と編年観

から同 期中～新頃に並行するとみているが、土佐では同期頃に遺構・遺物の増加をみる例がいくつもあり、今次調査地もその一例に加えられる可能性がある。また、次章の緊急立会調査時に東播系須恵器鉢が出土しているが、高知城跡でも出土例がある⁽⁴⁾。これら中世以前の遺物量は決して多くはないが、今次調査や高知城跡の成果は、第 1 章のごとくデルタに浮かぶような景観を呈したであろう現高知城の丘陵及びその裾部の利用状況を示す。従来、現市街部については、河道や内海の広がりのみが強調された歴史観が市民一般の認識ともなっている高知市においては、注目すべき資料といえよう。次に土器様相についてみれば、まず、土師器甕はいずれも粗めの原体による体部外面の未調整縦ハケ痕と、口縁部から頸部内面の横ハケ痕と弱いナデ処理、及び石英をはじめとする角礫を多含する比較的硬質の胎土⁽⁵⁾といった特徴を備える甕Aに属する。この型式は、古代前半における土佐での広い分布と高知平野での量比的優越が想定されており、今次の資料もこれと齟齬のないものである。このように841は口縁部形態についても既往の類型で理解することができる⁽³⁾。次に、椀844は高台形態、内面のミガキ、外底で交差する縦位の火禰、硬質でない還元焰焼成といった属性を備えており、これも土佐における - 1 期の土器椀に関するこれまでの認識と一致するものである。以上のように、これまで当該期の資料が希薄であった高知平野中央部においても、既に想定した型式観を適用できる見通しとなった。なお、838は製作過程における上胴開口部と、上方から被せた粘土盤接合部の痕跡が明瞭で、いわゆる「三段構成」の接合部となっている⁽⁶⁾。

註

- (1) 『下ノ坪遺跡』野市町教育委員会 1998年。
- (2) 池澤俊幸「土佐からみた平安時代の土器」『中近世土器の基礎研究』日本中世土器研究会 2000年。
- (3) 池澤俊幸「四万十川下流域における古代の土器 - まとめと展望 - 」『具同中山遺跡群 県道中村下ノ加江線緊急地方道路整備事業に伴う発掘調査報告書』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年。
- (4) 『高知城跡』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年。

(5) 註 3 で設定した胎土 群に該当する。

(6) 古代の土器研究会第 6 回シンポジウム『須恵器の製作技法とその転換』 2001年。

第4章 付 編

1. 高知城伝下屋敷跡出土漆器資料の材質と製作技法

くらしき作陽大学 北野 信彦

1、はじめに

高知は、天正13年（1585）に藩主山内一豊が土佐へ入封して以降、江戸時代を通じて土佐高知藩山内家25万石の国元城郭を中心として栄えた地方城下町である。近年高知市内の発掘調査に伴い、江戸時代の高知城下町の人々の生活ぶりが直接的に理解される遺構や遺物が大量に検出されるようになってきた。このなかには漆器資料も多く含まれている。今回、高知県文化財団埋蔵文化財センターの御厚意により、高知城下屋敷跡から出土した漆器資料の材質・技法に関する文化財科学的な調査を行う機会を得た。本報では、この結果を報告するとともに、ここから派生する諸問題についても言及する。

2、出土漆器資料の調査

各種出土生活什器の内でも飲食器（椀・蓋・皿類）は、衣・食・住のなかにおいて「食」という我々の日常・非日常の生活の在り方と密接に関わる資料（物質文化財）である。それと即応するためか遺跡から出土する什器類の内、漆器・陶磁器ともに飲食器が占める割合が極めて高い。このような飲食器資料の材質や製作技法と、使用階層や使用状況との関連性が把握されれば、これらが出土した遺構・遺跡の性格、即ちそこで生活していた人々の暮らしぶりの一端がある程度推定されよう。ところが同じ飲食器である陶磁器資料に比較して漆器資料は、木胎・下地・漆塗膜面からなる脆弱な複合遺物であるため、検出・実測調査・保存や保管等の取り扱いに苦慮するケースが多い。加えて陶磁器資料における古窯跡に対応するような生産地遺跡も検出されにくいいため、これまで一部の資料の肉眼観察に留まる調査が多かった。しかしこのようなある面では取り扱いが厄介と考えられる漆器資料も、視点をかえてみると、木胎・塗り・加飾等、材質や製作技法に関する属性が多く、これらの品質は自然科学的手法を用いた調査で、より客観的にとらえ易い。このような漆器資料の材質・技法を調査することは、個々の資料の性格を正確に把握する上で有効な方法であり、これらが出土した遺構・遺跡の性格自体を考える上でも意味があるものと考えている（注1）。

本報では、これらの調査の一環として、漆器資料の形態、漆塗り面の状況を表面観察した後、(1) 用材選択、(2) 木取り方法、(3) 漆膜面の漆塗り構造、(4) 色漆の使用顔料、(5) 蒔絵粉材料、等の項目別にわけた文化財科学的な調査を行った。以下、その調査方法と調査結果を記す。

2.1 調査方法

2.1.1、用材選択（樹種同定）

樹種の同定作業は、出土木材の細胞組織の特徴を生物顕微鏡で観察し、その結果を新材と比較することでなされる。試料は、カミソリの刃を用いて遺物本体をできるだけ損傷しないように、破断面などオリジナルでない面から木口、柁目、板目の三方向の切片を作成した。切片はキシレン・サフラニンにより脱水および染色して検鏡プレパラートに仕上げた。

2.1.2、木取り方法

挽き物類である漆器の木取り方法の調査は、樹種同定の切片作成時に細胞組織の方向を生物顕微鏡で確認することで、同時に行なった。

2.1.3、漆膜面の塗り構造

まず肉眼で漆器資料の漆塗り表面の状態を観察した後、実体顕微鏡を用いた細部の観察を行なった。次に1mm×3mm程度の漆膜片を漆器資料から採取して合成樹脂（エポキシ系樹脂 / アラルダイトGY1251J.P.、ハードナーHY837）に包埋した後、断面を研磨し、漆膜の厚さ・塗り重ね構造・顔料粒子の大きさ・下地の状態等について金属顕微鏡による観察を行った。

2.1.4、色漆の使用顔料および蒔絵材料の定性分析

色漆に用いられた顔料および蒔絵材料である金属粉の無機物に関する定性分析には、先の漆膜片をカーボン台に取り付け、日立製作所S-415型の走査電子顕微鏡に堀場製作所EMAX-2000エネルギー分散型電子線分析装置（EPMA・電子線マイクロアナライザー）を連動させて用いた。分析設定時間は500秒とした。

2.1.5、分析結果の集計方法

個々の漆器資料からもっとも一般的な8つ（Aタイプ）もしくは9つ（Bタイプ）の材質や製作技法上の優劣ランクの項目を抽出し、それぞれの比率を総個体数の中で計算する。この結果をレーダーチャート方式で図化するものである。

（Aタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・ブナ材などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴を取り、それと相対する左側には、朱・サビ下地・ケヤキ材などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にもケヤキ・ブナ材のほぼ中間に位置すると考えられるトチノキ材の占有比率（%）をそれぞれ配置した。この配置で示されるレーダーチャートは、その重点が右に寄るほどランク的に廉価な資料が多いことを、左に寄るほど優品資料の占める割合が高いことを示す。

（Bタイプ集計方法）

レーダー中心軸・上の項目には一括出土漆器資料の加飾率（一括の総個体数の中で漆絵や家紋などの装飾を施した資料が占める割合）を取る。その右側にベンガラ・炭粉下地・スズ（Sn）粉・石黄（As₂S₃）粉などのいわゆる廉価で簡素な量産型漆器資料の材質および製作技法上の特徴をとり、それと相対する左側には、朱・サビ下地・金（Au）粉などの優品資料の特徴を示す項目をとる。さらに中心軸・下にランク的にはほぼ中間に位置すると考えられる銀（Ag）粉の占有比率（%）をそれぞれ配置した。

2.2 調査結果

本遺跡の出土漆器資料は、椀・蓋・皿型を中心とした挽き物類および塗箱側板や膳部底板等の板物類、さらには塗下駄や塗箸等の器物などいずれも日常で使用されて投棄された生活什器類である。

これらの帰属年代は、共伴国産陶磁器の編年観や「松平（山内）土佐守」や文化八年（1811）紀

年銘のある墨書木札などから、17世紀台の江戸時代前期頃と江戸時代後期～幕末期頃に大きく二時期に別れるものの、基本的には江戸時代各年代わたると比定されている。以下、出土漆器の材質・技法の項目別に調査結果を述べる(表1)。

2.2.1、用材選択

本漆器資料の内、挽き物類である椀・蓋・皿等の樹種は、ブナ科ブナ属12点、ブナ科クリ2点、ニレ科ケヤキ2点、トチノキ科トチノキ18点、モクレン科ホオノキ4点、カバノキ科1点、モクセイ科1点、サクラ亜属などのバラ科2点、カツラ科カツラ1点の広葉樹9種類が、板物類にはヒノキ科ヒノキ、スギ科スギ、マツ科マツの針葉樹3種類、その他塗箸にはタケ材が見出された。この内、挽き物類の用材の木材的組織、工作の難易、割れ狂い、色光沢、塗り等を考慮に入れて本漆器資料の用材の使用状況をみると、吟味された最優材であるケヤキ材と、加工や入手の容易さという大量生産の点からみて一般性が高いと考えられる適材のトチノキ・ブナ材の2つのグループに分かれたが、基本的にはブナやトチノキ等の後者の比率が高かった(注2)(写真1)。

2.2.2、木取り方法

本資料の内、挽き物類の木取り方法は、横木地と縦木地に大別され、その大半は板目取りもしくは柁目取りの横木地であった。挽き物類である近世出土漆器の木取り方法は、縦木地に比較して横木地を用いる例が大半であり、縦木地の場合も木芯を外した材を利用する例が一般的である(図1)。これは木材の割れ狂い、収縮等を考慮に入れて漆器自体の品質を重視したため、不都合な木取り方法が自然淘汰された結果と考えている。本漆器資料の木取り方法をそれぞれの樹種との関連性でみると、トチノキ材は横木地板目取りが、ブナ材は横木地柁目取りがそれぞれ優勢であった。一般にトチノキ材は、芯を中心にして割れ狂いの多い赤味(心材)が広がり、表皮に近い部分にシラタとよばれる白い部分(辺材)がある。シラタは、多く取れても四寸(約12cm)程度しか利用できないので、椀木地ではおのずと椀を伏せたような形で木地を取る板目取りの方法が適している。一方、ブナ材は芯に近いところまで利用が可能なので、木の狂いが少なく木地が多く取れる柁目取りの方法(ブンギリ)が適しているという口承資料がある(注3)。この点からも、本漆器資料の木胎製作の工程が、一貫してそれぞれ材の性質を考慮に入れた可能性が指摘される。

2.2.3、漆塗膜面の塗り構造

漆器表面の漆塗り技法は、大きく分けて無文様で地塗りのみの資料と、家紋等の漆絵文様を地外面に描く資料、さらには蒔絵等きわめて高度な漆工技法をもつ資料に分かれた。これらの漆膜面の塗り構造、特に各漆器の堅牢性を知る目安となる木胎と漆塗り層との間の下地層を定性分析してみると、ピ-クがほとんど見出だされない資料と、粘土鉱物もしくは珪藻土の構成要素に近いピ-クが認められる資料の2種類に分けられた。これらをさらに金属顕微鏡で観察することで、前者は炭粉を柿渋などに混ぜて用いる炭粉下地、後者は細かい粘土もしくは珪藻土を生漆に混ぜて用いるサビ下地(堅下地もしくは本下地ともいう)であると認識した(注4)。次に、地の漆塗り層は、いずれも単層の1層塗りから2～3層の多層塗りまで見出だされたが、簡素で一般的な日用漆器の塗り構造を持つ資料が中心であった(注5)。そして加飾は、いずれも地の上塗り層の上に描かれていた(図2)。なお本資料の中には、高度な蒔絵技法や塗直し補修が確認される等の優品資料も僅

かながら見出だされた（写真2）。

2.2.4、赤色系漆の性質

赤色系漆の使用顔料は、定性分析と顕微鏡観察の結果、それぞれベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3 ）朱（水銀朱 HgS ）の二種類の異なる赤色顔料を用いた赤色系漆であると理解した（図3）。ベンガラ・朱ともに赤色系顔料としての歴史は古い。しかし近世漆器の赤色系漆の使用顔料としては、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降には人造ベンガラの工業生産化により量産体制が確立するベンガラの方が廉価で一般的となる（注6）。本資料の場合、簡素で一般的な塗り構造を持つ資料にはベンガラを、堅牢性を重視したり蒔絵を加飾を施す優品資料には朱が見出されるものの、基本的にはベンガラを用いる事例が多かった。

2.2.5、蒔絵加飾材料の材質

表面観察において金粉（金箔）によるとみられる家紋や絵柄等の蒔絵加飾部分を定性分析した結果、Au（金）が認められる資料の他、Ag（銀）、As+S（石黄）のそれぞれ異なる材質が見出だされた（図3）。そして、顕微鏡観察においても、それぞれの蒔絵粉の粒度や粒型はそれぞれ異なっていた。

さて、江戸期の各種文献資料からは、漆器に蒔絵や梨子地等の加飾を施すこと自体、寛文年間以降しばしば発せられる奢侈禁止令によって各社会階層毎に厳しく制限されていたこと（注7）や、これら金・銀・錫等の材質別の蒔絵漆器に、明確な価格差が存在したこと（注8）等が、知られる。この点に関連して、本資料の内の蒔絵漆器資料の材質別使用比率の集計を行ったが、金粉自体を使用した資料は、資料No.497、実測66, 509のサビ下地を施した優品資料であり、炭粉下地に単層塗の基本的には一般的な塗り構造を有する資料には、代用金蒔絵材料である、銀・スズ・石黄粉が使用されていた。筆者のこれまでの出土蒔絵漆器の蒔絵材料の分析結果では、金（Au）自体を使用する資料は数%程度で少なく、大多数は銀・スズ・石黄等の代用金蒔絵材料であること、金粉以外の蒔絵粉の材質は、石黄 銀 スズへと年代別に使用状況が変化することが判明している。すなわち、金粉以外の蒔絵粉の材質では、帰属年代がやや古い17世紀前～中期頃の資料群では石黄粉が、17世紀後半の特に元禄年間以降の資料群では銀粉の比率が高くなる。そして江戸時代後期～幕末期にはスズ粉蒔絵が多く見出される。この点を考慮に入れて本資料を見てみると、金・銀・スズ・石黄ともに同じ程度の占有率で確認されており、本資料の帰属年代が、江戸時代全般に渡っていることが改めて確認された（図4）。

3、考察

以上、前章では項目別に各出土漆器資料の材質および製作技法の在り方をみた。その結果、本漆器資料は、木胎・漆塗り技法・使用顔料ともに簡素な素材からなる極めて一般的で廉価な日常什器類から、吟味された素材からなる堅牢で複雑な漆工技法を有する優品資料に至るまで、幾つかのランク別のグループに分類された。このような漆器資料のグループ毎の違いは、文化的背景を含むそれぞれの漆器資料の製作年代、これらを使用しさらには投棄した使用階層の社会的・経済的背景（生活様式）、地域性、什器類の使用目的や方法、さらには個々の漆器生産地の製作技術、等さまざまな条件が反映されたものであろう。

本報では、生産技術面からみた一括出土漆器資料における組成の傾向を把握するため、本漆器資

料ばかりでなく、比較資料として同じ四国の国元城下町における武家地関連遺跡である新蔵町一丁目遺跡・福島二丁目遺跡・旧動物園跡遺跡（いずれも阿波徳島城下町の武家地関連遺跡）、高松城下町武家地跡遺跡（讃岐高松城下町の武家地関連遺跡）、江戸表の土佐高知藩および阿波徳島藩邸跡の両屋敷境界に比定されている丸の内三丁目遺跡および讃岐高松藩邸に比定されている飯田町遺跡出土の一括漆器資料を纏め、一連のレーダーチャート方式による集計作業を行った。その結果、これらの基本的な材質・製作技法の組成の傾向はいずれも実用に即した生活什器類である飲食器類を中心としていることが理解された（図5）。これは、これら遺跡出土の漆器資料の性格自体が、非日常のハレの食事に供せられるような特別の什器類（伝世品として長期間大切に保管管理される場合が多い）とは異なり、普段の食生活で多用され、かつ割合簡単に廃棄されたであろう日常什器類が中心であることに由来しよう。報告者のこれまでも調査結果からは、江戸参府江戸表の藩邸跡や国元城下町の役所等の公的空間関連遺跡出土漆器資料の場合、一括性は高いものの極めて一般性の高い資料群が中心となる。その一方で国元城下町の武家地関連遺跡出土漆器資料の場合、全体的にやや優品の占有率が高い傾向が見出されている（注9）。この点を考慮に入れて本漆器資料の材質・技法の傾向を検討してみると、江戸表の藩邸同様に比較的一般性の高い資料が中心となっていた。しかしその一方で、（1）通常一般性の高い近世漆器（とりわけ挽き物類である椀・蓋類）の場合、地の上塗り漆には内赤外黒のものが多く、本資料には内外地黒の資料が比較的多いこと、（2）近世吉野塗（基本的には茶会席食器として使用する）や東北系の漆絵皿等のように使用や産地にやや多様性が見出される点、等幾つかの特徴も見出された。ただ今回の調査結果は、本資料を使用し投棄した屋敷拝領者自体の好み傾向や什器調達方法の特徴によるものなのか、単に出土資料の偏在性によるものなのかは、現時点では判明しない。今後は、さらに調査事例を充実して高知城下町関連遺跡出土漆器資料の全体的な傾向を把握すること、同時に陶磁器類をはじめとする他の共伴遺物や遺構の性格との相互関連性を総合的に比較・検討していくことが必要である。この一連の検討作業を行うことが、本資料の性格をさらに的確に理解する上で大切なことであろう。

（謝 辞）

本調査を行なうにあたり、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターの池澤俊幸・大野佳代子の両氏、および（財）香川県埋蔵文化財センター、（財）徳島県埋蔵文化財センター、徳島市教育委員会、徳島大学埋蔵文化財調査室、東京都教育文化財団東京都埋蔵文化財センター、東京都千代田区飯田町遺跡調査会など多くの諸機関や方々には資料調査の件で大変お世話になりました。厚く謝意を表します。

（注）

- （1）北野信彦（1993）「日常生活什器としての近世漆器椀の生産と消費」『食生活と民具』p.81-101、日本民具学会編 雄山閣出版
北野信彦（2000）「生産技術面からみた近世出土漆器の生産・流通・消費」『日本考古学 第9号』p.71-96、日本考古学協会、吉川弘文館、等を参照されたい。

- (2) 橋本(1979)の調査では、近世以降のろくろ挽き物である漆器類の用材には、早晚材の組織の差が少ない広葉樹の散孔材もしくは環孔材ではあるが韌性がある材を適材であるとしている。

橋本鉄男(1979)『ろくろ ものと人間の文化史31』法政大学出版局

北野信彦(2000)「近世出土漆器椀の用材に関する一考察」『考古学と自然科学 第38号』p.47-66 日本文化財科学会

- (3) 須藤(1982)の調査によると、近世以降の近江系(小椋谷)木地師による挽き物類の木取り方法の場合、横木地板目取りはトチノキ地帯に、同柁目取りはブナ地帯に定着し、その細かい技術は、個々の集団に受け継がれてきたとしている。

須藤護(1982)『日本人の生活と文化、暮らしの中の木器』日本観光文化研究所編 ぎょうせい

- (4) なお一部の資料については細かい粘土や珪藻土をにかわ等に混ぜて用いる泥下地(堅下地・本下地より堅牢性に欠ける)の可能性もある。しかし出土資料のにかわと生漆の明確な科学的識別が技術的に困難な現在、両者をまとめてサビ下地とした。

北野信彦(1993)「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点・ -文献史料からみた量産型漆に使用する混和剤を中心として-」『古文化財の科学 第38号』p.65-79、古文化財科学研究会

- (5) このような近世漆器の製作技法の在り方を示す民俗事例の1つに、新潟県糸魚川市大所の小椋丈助氏による実用に即した近世木地師、漆器椀の製作技法に関する口承資料がある。それによると[上品]布着せ補強(椀の欠け易い縁や糸じりに麻布を巻く)~サビ下地(砥の粉を生漆に混ぜたサビを二回塗布)~下塗り(生漆)~上塗り(生漆に赤色系顔料もしくは黒色系顔料を混ぜた赤色系漆もしくは黒漆)の工程をふみ、人一代は持つ堅牢なもの。[下品]炭粉下地(柳や松煙を柿渋に混ぜて用いるサビ下地の代用下地)~上塗り(生漆の使用量を節約するために偽漆である不純物を多く混入している粗悪な漆)。[中品]下品とほぼ同様の工程をふむが上塗りの漆を濃く塗布したりミガキを丁寧にしたりする。下品よりかなり持ちが良い。などとしており、各漆器ランク別の工程をよく示している。

文化庁文化財保護部編(1974)『木地師の習俗 民俗資料選集2』 国土地理協会

- (6) 江戸時代における朱とベンガラの価格表を検討してみると、江戸時代前期段階には両者海外輸入品が多いためか、相対価格差はほとんど見られない。しかし江戸時代後期頃の段階では、両者に約30倍ほどの相対価格差が見られ、とりわけ朱の高価さと入手困難さが指摘される。

北野信彦(2000)「朱・ベンガラ 項目」『日本民俗大辞典(下巻)』福田アジオ編、吉川弘文館

- (7) 江戸時代前期から徐々に定着化しつつあった雑道具類について、享保20年(1735)の尾張名古屋城下町の町衆に対する禁令には、「一、同諸道具、梨子地八勿論、蒔絵無用二可仕候、上之道具たりとも、黒塗二可仕候。(名古屋 叢書第三巻)」という記述がみられる。又、武家社会内部でも、万治3年(1660)の紀州徳川家(御家中祝言道具達)では、藩士のランクを1万石から200石までの8段階に分け、道具揃や仕様を細かく規定している。その上で漆器であ

る貝桶は2400石以下の者には調達が認められず、諸道具の蒔絵仕上げも同様に許されていない。(南紀徳川史 法令制度第四)

- (8) 寛延四年(1751)の『名古屋諸色直段集, 寛延四未年小買物諸色直段帳』には、漆器の休漆技法別の価格が記載されている。この史料では、布着せ蝋色塗(上品):常溜塗(中品):常拭漆塗(下品)の相対価格差は、約51:3.4:1と算定される。

また、伊勢菰野藩土方家菩提寺である見性寺の見性寺文書には、伊勢桑名の塗物商ぬし興に提出させた見積書があるが、それによると家紋加飾に使用された金・銀・錫粉蒔絵の相対価格比率は、約18:6:1と算定される。いずれの事例からも生産技術面(ここでは材質や製作技法)の違いにより、漆器には明確な価格差が存在したことが理解される。

北野信彦・肥塚隆保(2000)「近世出土蒔絵漆器の材質・技法に関する調査」『考古学と自然科学 第38号』p.67-92、日本文化財科学会

- (9) 北野信彦(1993)「近世武家社会における生活什器としての漆器資料」

『総合郷土研究所紀要38巻』p.115-134、愛知大学

北野信彦(1999)「出土漆器資料からみた近世初頭から前期頃の城下町居住者の一性格」

『総合郷土研究所紀要44巻』p.113-132、愛知大学

北野信彦(2000)「出土漆器資料からみた江戸市中における武家地関連遺跡の一性格」

『総合郷土研究所紀要45巻』p.75-96、愛知大学

北野信彦(2002)「出土漆器資料からみた国元城下町における武家地関連遺跡の一性格」

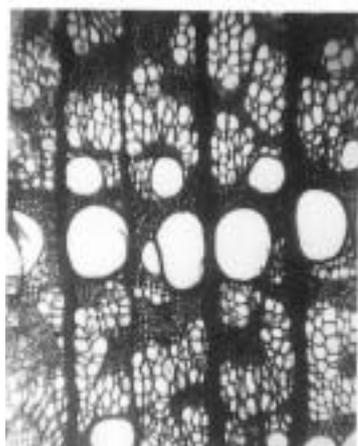
『総合郷土研究所紀要47巻』p.1-26、愛知大学

等を参照されたい。

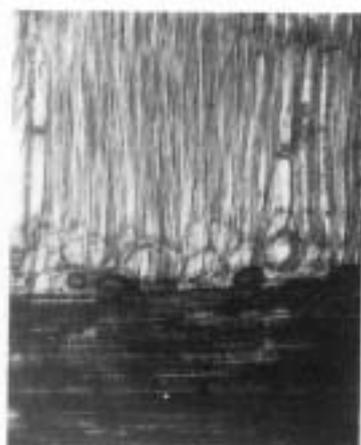
(参考文献)

- (1) 沢口吾一: “日本漆工の研究”(1966) 美術出版社
(2) 灰野昭郎: “漆工(近世編)日本の美術8 第231号”(1985) 至文堂
(3) 光芸出版社編: “うるし工芸辞典”(1978)

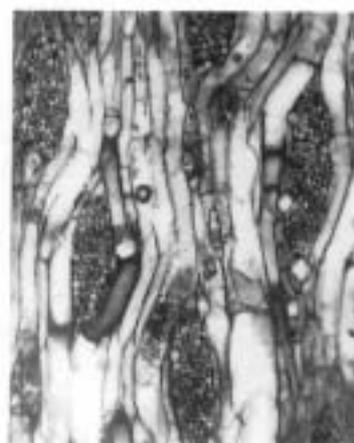
(写真1) にれ科ケヤキ



木口 (30×)

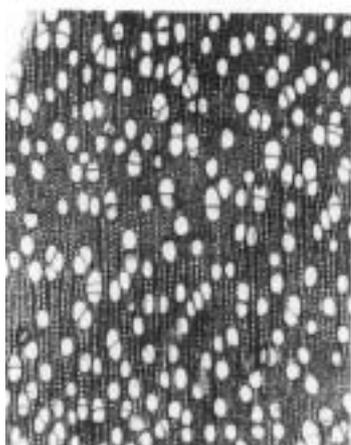


柁目 (100×)

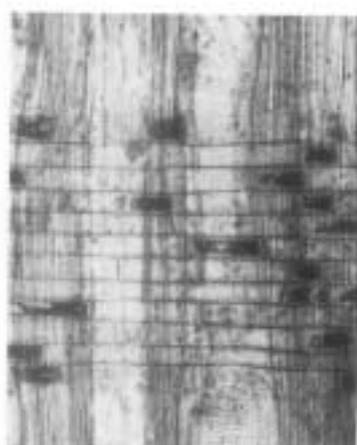


板目 (50×)

写真2) とちのき科トチノキ



木口 (30×)

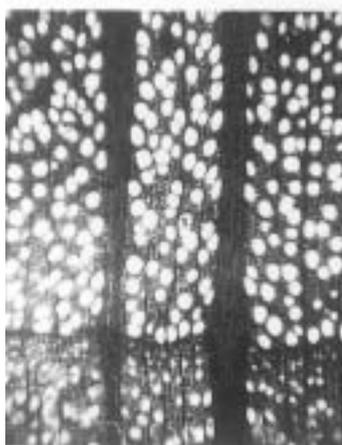


柁目 (100×)

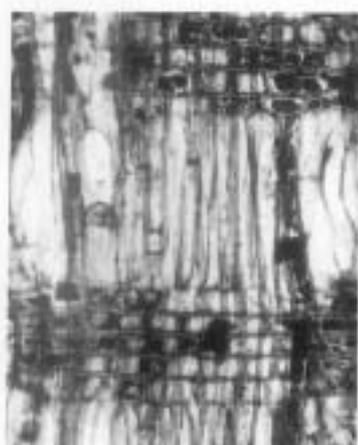


板目 (50×)

写真3) ふな科ブナ



木口 (30×)



柁目 (100×)



板目 (50×)

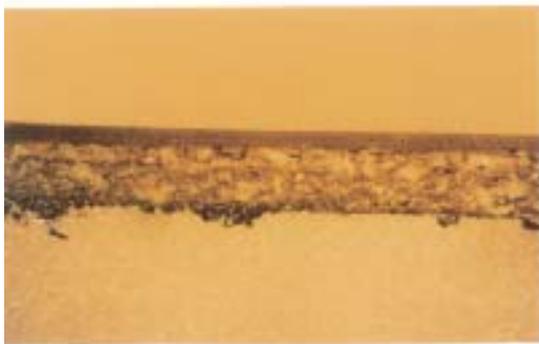
(写真1) 代表的な樹種の顕微鏡写真



赤色系漆 () (× 200)



赤色系漆 () (× 200)



黒色系漆 () (× 50)



加飾漆器 () (緑色漆 : 石黄 + 藍) (× 200)

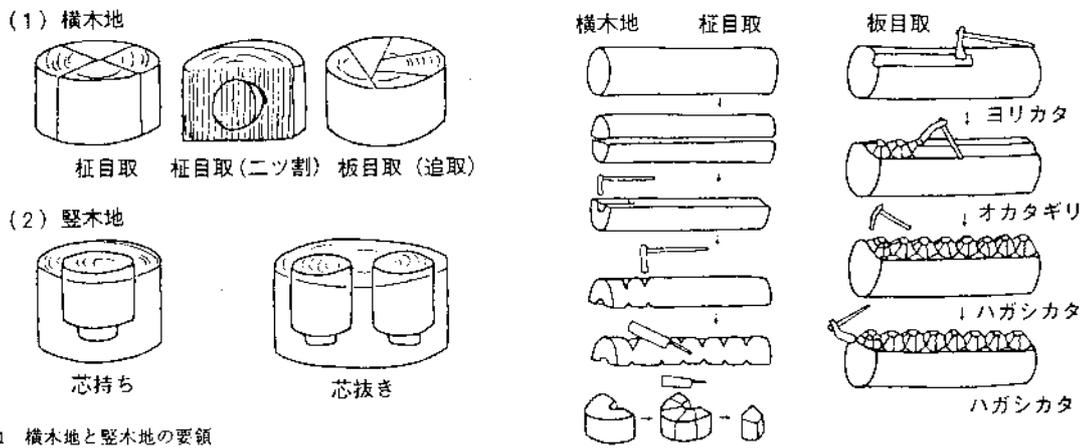


蒔絵加飾漆器 () (銀蒔絵) (× 100)



蒔絵加飾漆器 () (金蒔絵) (× 50)

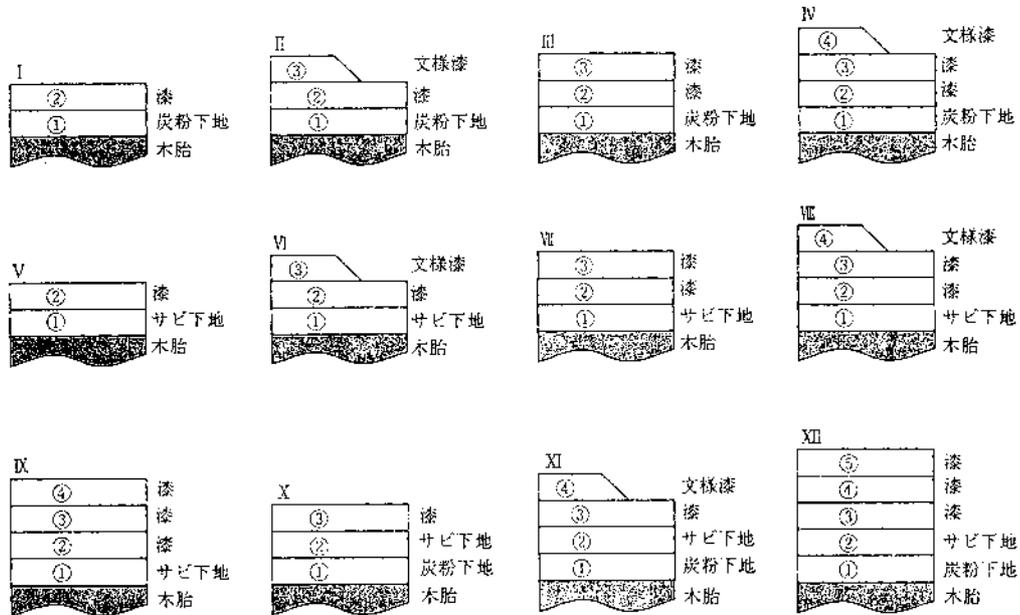
(写真 2) 漆器塗膜面の塗り構造 (顕微鏡写真)



1 横木地と竖木地の要領
(橋本鉄男『ろくろ もの 人間の文化史31』-1979-より原図引用)

2 近世会津木地師の木取りの方法
(須藤謙『日本人の生活と文化(木) 暮らしの中の木器』-1982-より原図引用)

(図1) 近世以降の漆器(挽き物類)の木取り方法

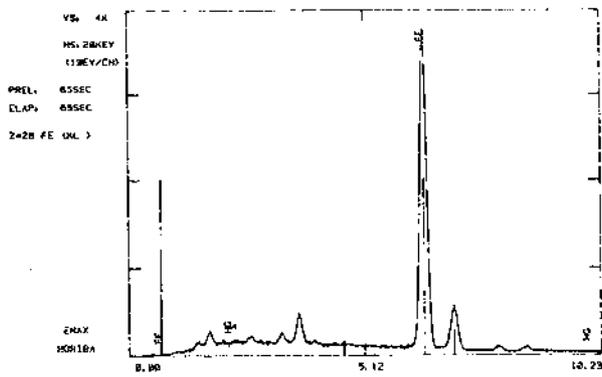


(図2) 漆塗り構造の分類

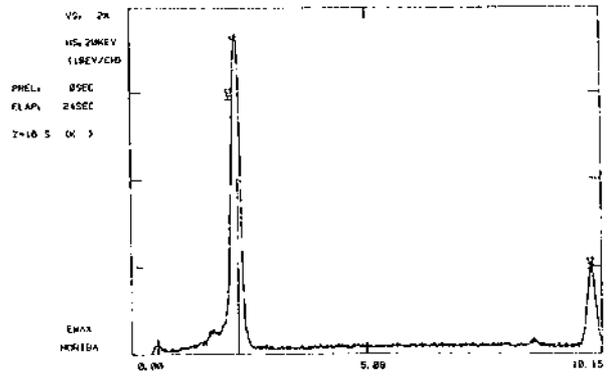
A 環 孔 材	a. ケヤキ系 ニレ、ケヤキ、シオジ、ハリ ギリ、クリ、ヤマグワなど	木目が明瞭に表れる。堅硬であるが韌性もあり、木皿など薄手の物に適する。
B 散 孔 材	b. サクラ、カエデ系 イタヤカエデその他のカエデ 類、ヤマザクラ、ウワミズザク ラ、ミズメなど	白木で美しい光沢があり、白木地物にも適している。割れ狂いが少なく、やや堅さはあるが加工は容易。下地が少量で足りるので、塗り物にもっとも適する。
	c. ブナ、トチノキ系 トチノキ、ブナ、ミズキ、カ ツラ、ホオノキなど	軟らかくて加工は容易であるが、乾燥が難しく狂いも多い。しかし、大量に入手できるので使用量は大である。
	d. エゴノキ系 エゴノキ、アオハダなど	白い軽軟で加工が容易である。仕上げは見た目によく、彩色もし易いので、玩具、小物等に向いている。とくにエゴノキは大材を得られないが、入手が容易であり、割れにくいので使用に適する。

(表2) ろくろ挽き物の用材分類一覧表

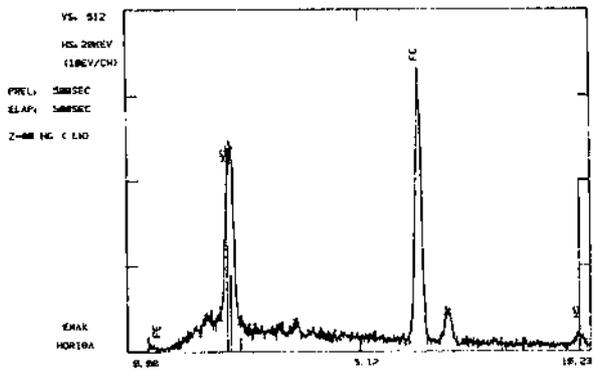
橋本鉄男『ろくろ もの 人間の文化史31』-1979-などを参考にして作成



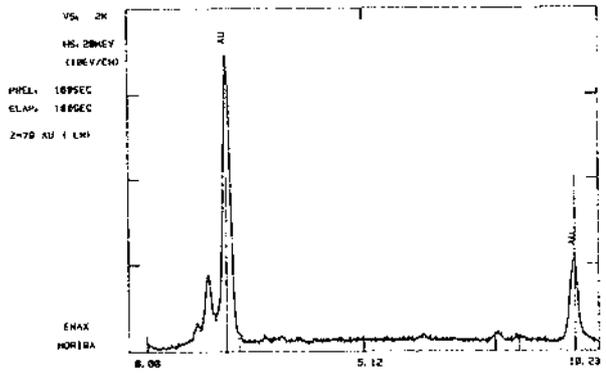
赤色系漆 ベニガラ (Fe₂O₃)



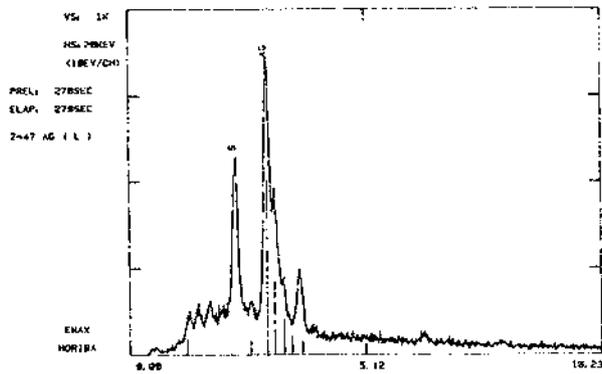
赤色系漆 朱 (HgS)



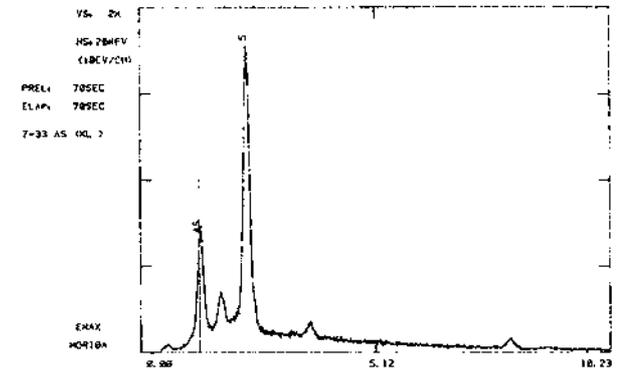
赤色系漆 朱+ベニガラ (HgS+Fe)



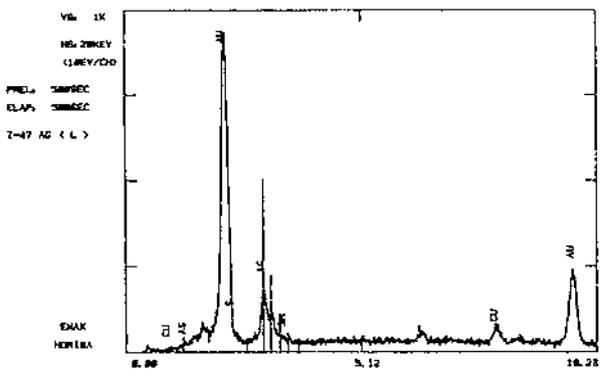
蒨絵加飾 (金彩) 金 (Au)



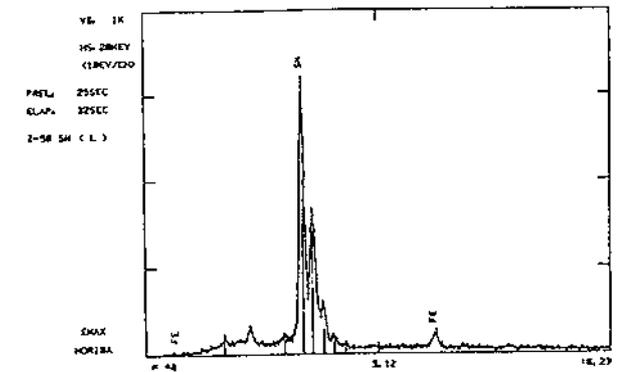
蒨絵加飾 (銀彩) 銀 (Ag)



蒨絵加飾 (金彩) 石黄 (As₂S₃)

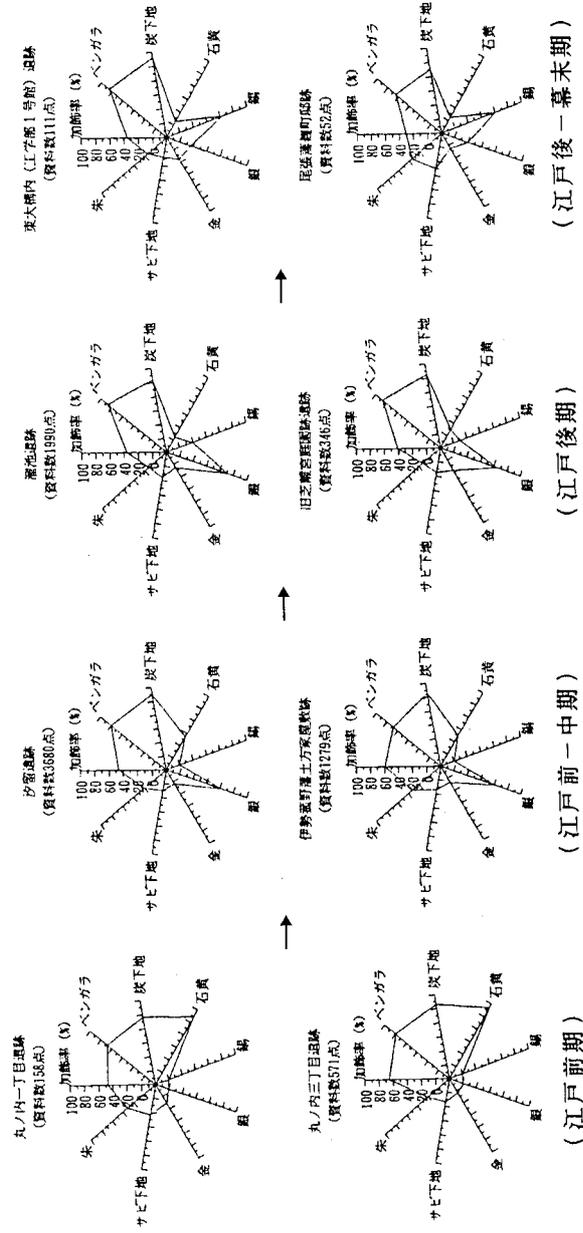


蒨絵加飾 (金彩) 金+銀 (Au+Ag)

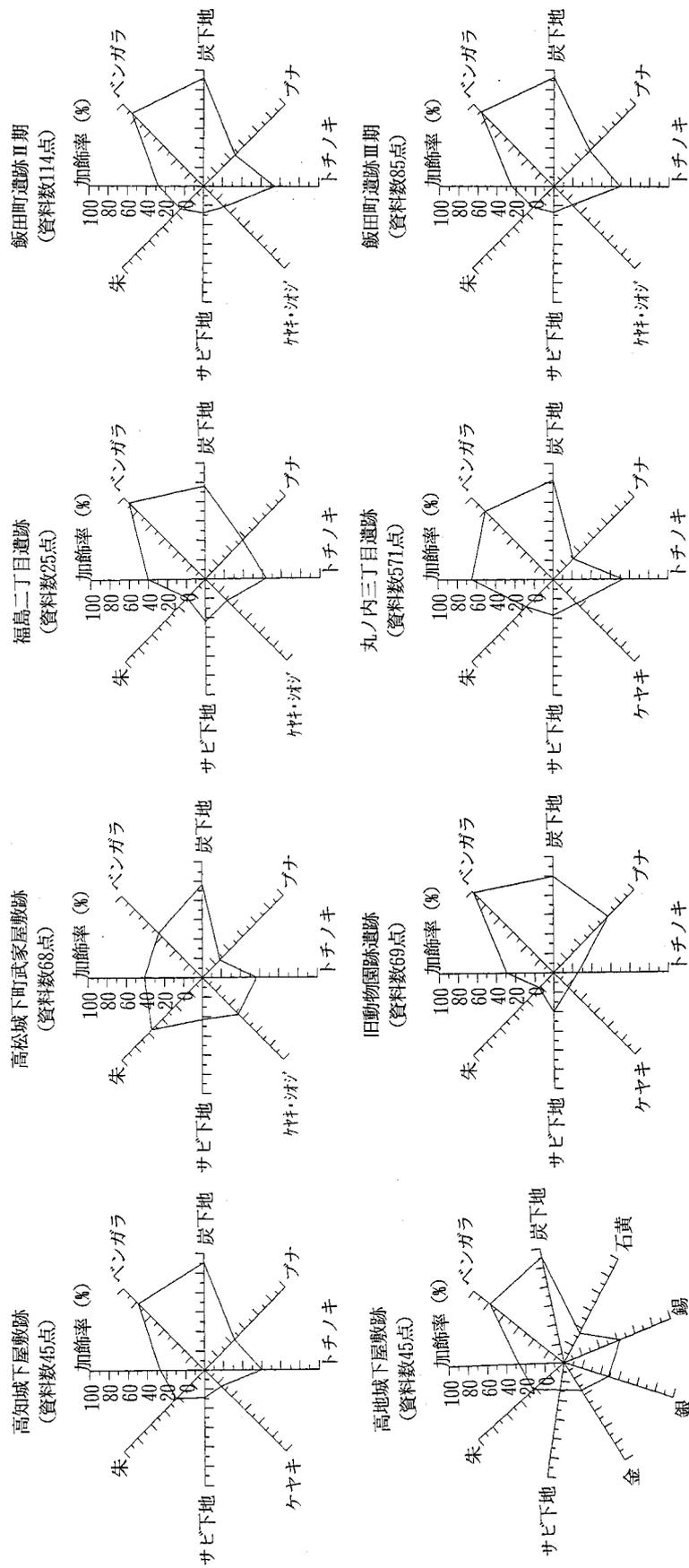


蒨絵加飾 (金彩) 錫 (Sn)

(図3) 電子線マイクロアナライザー (EPMA) の分析結果



(図4) 年代別の蒔絵粉材料の変遷(集計例)



(図5) 本資料を含む各遺跡出土漆器資料(挽き物類)の組成(集計例)

高知城伝下屋敷

図版 No.	No.	器 型	樹 種	木 取	表面塗り技法			漆塗構造		使 用 顔 料			備 考
					内	外	文 様	内	外	内	外	文 様	
80	1	椀	ブナ	A	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
484	2	椀	トチノキ	A	黒	黒							
387	3	椀	カツラ	A	黒	黒							
392	4	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外 - 絵 - 金			ベンガラ		SN	
388	5	椀	トチノキ	A	黒	黒							
386	6	椀	カバノキ科	B	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
491	7	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外 - 絵 - 金			ベンガラ		SN	
390	9	皿	ブナ	B	黒	黒	外 - 絵 - 赤・緑					ベンガラ・As+S	
490	10	椀	ブナ	B	黒	黒	外 - 絵 - 赤					朱	吉野塗
498	14	椀蓋	ホオノキ	A	赤	黒	外 - 絵 - 金			朱		Au	
482	15	椀	モクセイ科	B	黒	-			-	ベンガラ			
483	16	椀	トチノキ	A	黒	-							
391	22	皿	ブナ	B	黒	黒	外 - 絵 - 赤					ベンガラ	
480	61	椀	トチノキ	A	黒	緑					As+S/アイ		
485	62	椀	バラ科	A	黒	黒							
21	63	椀	トチノキ	A	赤	黒	外 - 絵 - 金			朱+ベンガラ		Ag	
	66	破片	ホオノキ	-	赤	黒	外 - 絵 - 金	+			朱	Au	
146	71	椀	ケヤキ	A	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
246	72	椀蓋	ブナ	B	赤	黒	外 - 絵 - 金			ベンガラ		Sn	
408	90	漆塗柄杓	クリ	A	黒	黒							
83	92	椀蓋	トチノキ	A	黒	黒	外 - 絵 - 赤・黄					ベンガラ・As+S	
82	93	椀蓋	トチノキ	A	黒	黒							
81	94	椀	ブナ	B	赤	黒				ベンガラ			
393	100.1	椀蓋	トチノキ	A	赤	黒	外 - 絵 - 金			ベンガラ		Ag	
393	100.2	椀蓋	ブナ	B	黒	黒	外 - 絵 - 赤					ベンガラ	
481	101	椀	ホオノキ	A	黒茶	黒				ベンガラウルミ			
486	102	椀	トチノキ	A	赤	黒				ベンガラ			
494	103	椀蓋	ホオノキ	A	黒	黒							
497	104	椀蓋	トチノキ	A	黒	黒							
496	105	椀蓋	サクラ亜属	-	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
492	106	椀蓋	トチノキ	A	黒	黒							
489	107	椀	ケヤキ	A	黒	黒							
488	108	椀	トチノキ	A	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
487	109	椀蓋	トチノキ	A	黒	黒							
541	111	漆塗円板	ヒノキ	B	黒	黒	外 - 円周 - 赤					ベンガラ	
124	113	椀	トチノキ	A	黒	黒							
388	114.1	椀	広散孔	A	赤	黒				ベンガラ			
388	114.2	椀	トチノキ	A	赤	黒				ベンガラ			
146	181.1	挽物破片	トチノキ	B	赤	赤				朱	朱		
	181.2	塗箸破片	タケ	-	赤	赤				朱	朱		
	A	挽物破片	ブナ	B	黒	黒							
	B	挽物破片	クリ	A	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		高台内 - 黒
	C	挽物破片	ブナ	B	赤	黒				ベンガラ			

図版 No.	No.	器 型	樹 種	木 取	表面塗り技法			漆塗構造		使 用 顔 料			備 考
					内	外	文 様	内	外	内	外	文 様	
	D	挽物破片	ブナ	-	赤	黒				ベンガラ			
	E	挽物破片	ブナ	A	赤	黒				ベンガラ			
	F	挽物破片	ブナ	-	黒	黒							口縁部 - 赤
253	8.1	鏡箱底板	針葉樹材	-	透	透				ベンガラ	ベンガラ		
252	8.2	板物	針葉樹材	-	透	透				ベンガラ	ベンガラ		
566	64	器物破片	針葉樹材	-	黒	黒							
433	65	塗鞘破片	膜面のみ	-	黒	黒							
401	68	膳部材	針葉樹材	-	黒	黒							
510	75	箱物側板	針葉樹材	-	赤	赤	外 - 絵 - 黒・金			朱	朱	Au	
	76.1	塗鞘破片	膜面のみ	-	黒	黒	外 - 波文様	+	+				
	76.2	塗鞘破片	膜面のみ	-	黒	黒							
	76.3	塗鞘破片	膜面のみ	-	黒	黒							
588	78	塗下駄		-	黒	黒							
539	84	膳部底板	針葉樹材	-	黒	黒							
538	85	膳部底板	針葉樹材	-	黒	黒							
587	123	塗下駄破片		-	黒	黒							
582	124	塗下駄破片		-	黒	黒							
574	172	箱物側板	針葉樹材	-	黒	黒							
555	174	板物破片	針葉樹材	-	透	透				ベンガラ	ベンガラ		
93	175	板物破片	針葉樹材	-	黒	黒							
561	176	箱物側板	針葉樹材	-	赤	黒				朱			
270	179	板物部材	針葉樹材	-	赤	黒				ベンガラ			
423	180	板物破片	針葉樹材	-	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
402	182	膳部破片	針葉樹材	-	黒	黒							
406	186	板物破片	針葉樹材	-	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
411	187	板物破片	針葉樹材	-	黒	黒							
	188	膳部底板	針葉樹材	-	黒	黒							
540	199	板物	針葉樹材	-	-	黒		-					
508	211	器物破片	広葉樹材	-	黒	黒							
	212.1	椀破片	広葉樹材	-	黒	黒							
509	212.2	器物破片	針葉樹材	-	黒	黒				ベンガラウルミ	ベンガラウルミ		
407	227	箱物側板	針葉樹材	-	赤	-		-		ベンガラ			
415	266	曲物底板	針葉樹材	-	黒	黒							
245	267	曲物側板	針葉樹材	-	-	黒		-					
	G	箱物側板	針葉樹材	-	赤	黒		+		朱			
	H	棒状破片	針葉樹材	-	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		
	I.1	板物破片	針葉樹材	-	黒	黒							
	I.2	板物破片	針葉樹材	-	黒	黒				ベンガラ			
	J	椀破片	広葉樹材	-	黒	黒							
	K	器物破片	針葉樹材	-	黒	黒							
	L	膳部破片	針葉樹材	-	赤	黒				ベンガラ			
	M.1	器物破片	針葉樹材	-	赤	赤				朱・ベンガラ	朱・ベンガラ		
	M.2	器物破片	針葉樹材	-	赤	赤				ベンガラ	ベンガラ		

2. 高知城伝下屋敷跡出土木製品の樹種同定調査結果

(株)吉田生物研究所 汐見 真

1. 試料

試料は高知県裁判所跡から出土した服飾具 5 点、容器 22 点、武具 1 点、遊戯具 2 点の合計 30 点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柁目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹 5 種、広葉樹 9 種）の表を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(遺物 No.46)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的ゆるやかで晩材部の幅は狭い。柁目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で 1 分野に 1 ~ 4 個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

2) マツ科ツガ属 (*Tsuga* sp.)

(遺物 No.57)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。柁目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はスギ型、ヒノキ型で 1 分野に 2 ~ 4 個ある。細胞壁には数珠状末端壁がある。上下両端には放射仮道管がある。板目では放射組織はすべて単列であった。ツガ属はツガ、コメツガがあり、本州、四国、九州に分布する。

3) マツ科マツ属 [二葉松類] (*Pinus* sp.)

(遺物 No.38)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柁目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で 1 ~ 15 細胞高のもの、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属 [二葉松類] はクロマツ、アカマツがあり、北海道南部、本州、四国、九州に分布する。

4) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(遺物 No.22、58)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柁目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で 1 分野に 1 ~ 3 個ある。

板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

5) ヒノキ科アスナロ属 (*Thujopsis* sp.)

(遺物No.41, 45, 48)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ(ヒバ、アテ)とヒノキアスナロ(ヒバ)があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

6) クルミ科サワグルミ属サワグルミ (*Pterocarya rhoifolia* Sieb. et Zucc.)

(遺物No.37(台))

散孔材である。木口では比較的大型の道管(~200 μ m)が単独ないし2、3個放射方向に複合して散在し、晩材部で径を減じる傾向にある。軸方向柔細胞は1細胞幅の接線状あるいは網状柔組織である。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。板目では放射組織は1~2細胞列、高さ~0.5mm以下からなる。サワグルミは北海道(南部)、本州、四国、九州(北部)に分布する。

7) カバノキ科ハンノキ属ヤシャブシ (*Alnus firma* Sieb. et Zucc.)

(遺物No.6)

散孔材である。木口では中庸の道管(~80 μ m)が2~5個放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は不顕著である。柾目では道管は階段穿孔と側壁に交互壁を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では放射組織は単列、高さ~600 μ mからなる。ヤシャブシは本州(南部太平洋側)、四国、九州に分布する。

8) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(遺物No.1, 3, 7, 8, 16, 40, 43, 56)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(~110 μ m)がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物(チロース)が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1~3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道(南部)、本州、四国、九州に分布する。

9) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物No.36)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で大体単独の大道管(~500 μ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圏部を形成している。孔圏外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が

単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり（ストランド）、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道（西南部）、本州、四国、九州に分布する。

10) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

(遺物No.37(歯))

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管（～270 μm）が1列で孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圏部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している（イニシアル柔組織）。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

11) カツラ科カツラ属カツラ (*Cercidiphyllum japonica* Sieb. et Zucc.)

(遺物No.33)

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管（～100 μm）がおおむね単独または2～3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有面積は大きい。放射組織は不顕著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物（チロース）がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ～900 μmからなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

12) モクレン科モクレン属 (*Magnolia* sp.)

(遺物No.44)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～110 μm）が単独ないし2～4個複合して多数分布する。軸方向柔組織は1～2層の幅で年輪界に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなる同性と平伏と直立細胞からなる異性がある。道管放射組織間壁孔は階段状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～700 μmとなっている。モクレン属は、モクレン、ホオノキ、コブシなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

13) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)

(遺物No.2, 4, 5, 34, 54, 55, 59)

散孔材である。木口ではやや小さい道管（～80 μm）が単独かあるいは2～4個放射方向に

接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている(上下縁辺の1～2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ～300μmとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

14) イイギリ科イイギリ属イイギリ (*Idesia plicarpa* Maxim.)

(遺物No.12)

散孔材である。木口ではきわめて小さい道管(～70μm)が単独ないし2～5個複合して多数分布する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。放射組織は平伏、方形、直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は大型の篩状である。板目では放射組織は1～3細胞列、高さ～1mmからなる。イイギリは本州、四国、九州に分布する。

参考文献

- 島地 謙・伊東隆夫「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版(1988)
- 島地 謙・伊東隆夫「図説木材組織」地球社(1982)
- 伊東隆夫「日本産広葉樹材の解剖学的記載 ～ 」京都大学木質科学研究所(1999)
- 北村四郎・村田 源「原色日本植物図鑑木本編 ・ 」保育社(1979)
- 深澤和三「樹体の解剖」海青社(1997)

使用顕微鏡

Nikon

MICROFLEX UFX-DX Type 115

高知伝下屋敷跡出土木製品樹種同定表

No.	品名	樹種
80	漆器椀	ブナ科ブナ属
484	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ
387	漆器椀	ブナ科ブナ属
392	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ
388	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ
386	漆器椀	カバノキ科ハンノキ属ヤシャブシ
390	漆器皿	ブナ科ブナ属
490	漆器椀	ブナ科ブナ属
498	漆器椀蓋	イイギリ科イイギリ属イイギリ
391	漆器皿	ブナ科ブナ属
435	羽子板	スギ科スギ属スギ
485	漆器椀	カツラ科カツラ属カツラ
21	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ
433	漆塗建具	ブナ科クリ属クリ
98	下駄(台)	クルミ科サワグルミ属サワグルミ
98	下駄(歯)	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
151	下駄	マツ科マツ属[二葉松類]
146	漆器椀	ニレ科ケヤキ属ケヤキ
246	漆器椀蓋	ブナ科ブナ属
394	曲物	ヒノキ科アスナロ属
510	漆器膳	ブナ科ブナ属
520	漆塗刀装具	モクレン科モクレン属
588	漆塗下駄	ヒノキ科アスナロ属
528	碁盤	マツ科モミ属
539	漆器膳	ヒノキ科アスナロ属
83	漆器椀蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ
82	漆器椀蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ
81	漆器椀	ブナ科ブナ属
101	下駄	マツ科ツガ属
269	下駄	スギ科スギ属スギ
486	漆器椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ

3. 平成14年度 立会調査

1 立会調査に至る経緯と経過

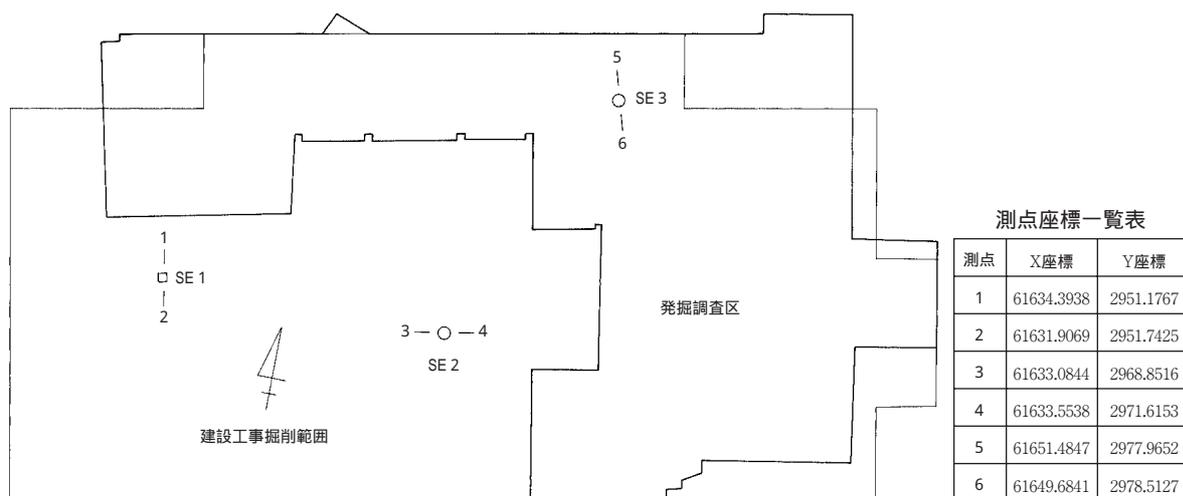
高知地家簡裁庁舎新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査として「伝下屋敷跡」の調査が、平成13年度に工事に先立ち実施され、近世、江戸時代の土佐藩主である山内氏の下屋敷跡と考えられる遺構、遺物が検出され、貴重な調査成果が上げられている。事前の発掘調査終了後、平成14年度から工事が開始された。工事が進められる中で、第1次掘削面において井戸と思われる遺構が発見されたとの連絡を5月17日に受け、即時現地確認を行ったところ、桶を井側に使用する井戸1基(SE2)と板材組み合わせによる打ち抜き井戸ではないかと考えられる遺構(SE1)であることが確認され、第2次掘削に着手する前に調査が必要と判断された。協議の結果、第2次掘削開始までに立会調査を行い、記録保存することとなった。立会調査は5月20日から22日に行い、SE1は完掘したが、SE2は約1.8mほど人力で掘り下げたが、下部は確認できず、さらに下方へと続いていることが明らかとなった。この結果を受けて再度協議を行い、SE2の下部については第2次掘削時に立会調査を行い、確認することとなり、6月4・5日に立会調査が行われた。

第2次の立会調査によりSE2の下方掘削を行った結果、第1次掘削面から約4mまで掘り下げたが、内部の竹筒はさらに下方に伸びており、最下部は確認できなかったが、地下水の湧水等により掘削不可能となり、終了した。なお、SE2の南部約4mの地点で弥生時代後期末の甕の出土も確認されている。

また、第2次立会調査中に掘削範囲の北部において、もう1基の桶を井側とする井戸(SE3)が発見されたので、SE3についても急遽調査を行い、6月5日に現地の立会調査を終了した。

2 遺構の位置と検出状況

今回の立会調査で検査された遺構は、すべて井戸及び井戸と考えられる遺構であり、西よりSE1～SE3の呼称により記載することとした。各遺構の検出面は、いずれも第1次掘削面であり、



第1図 遺構位置図 (S = 1/500)

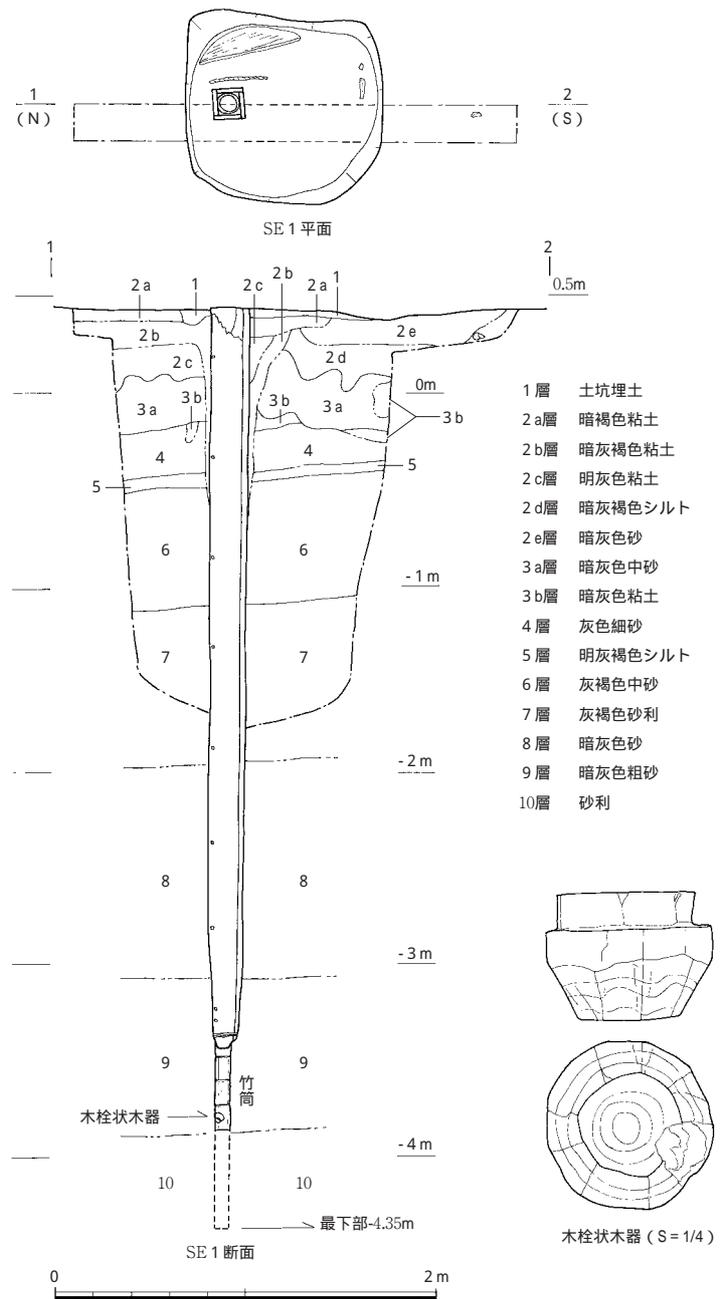
標高約0.5m前後において検出されている。昨年度の伝下屋敷跡発掘調査における調査区との関係から見れば、SE1・2の2基は調査区外であり、元裁判所の建物建築等により攪乱を受けている部分であり、調査対象外とした部分であった。また、SE3については昨年度の調査区内ではあるが、調査時にも北部はかなり攪乱されており、遺構の検出は非常に困難であった部分である。

各遺構の検出状況は第1次掘削面であり、ほぼ同様のレベルで検出されている。重機による掘削が行われているので、井側である桶の上部はすでに欠損していたが、残されていた部分の保存状況は良好であった。調査の方法としては、まず各遺構の平面プランを精査した後、半分に立ち割り、断面形及び土層の確認をし、写真、図面等により記録した。その後、残りの部分も掘削し、完掘状況を記録して調査を終了した。

3 遺構について

SE1

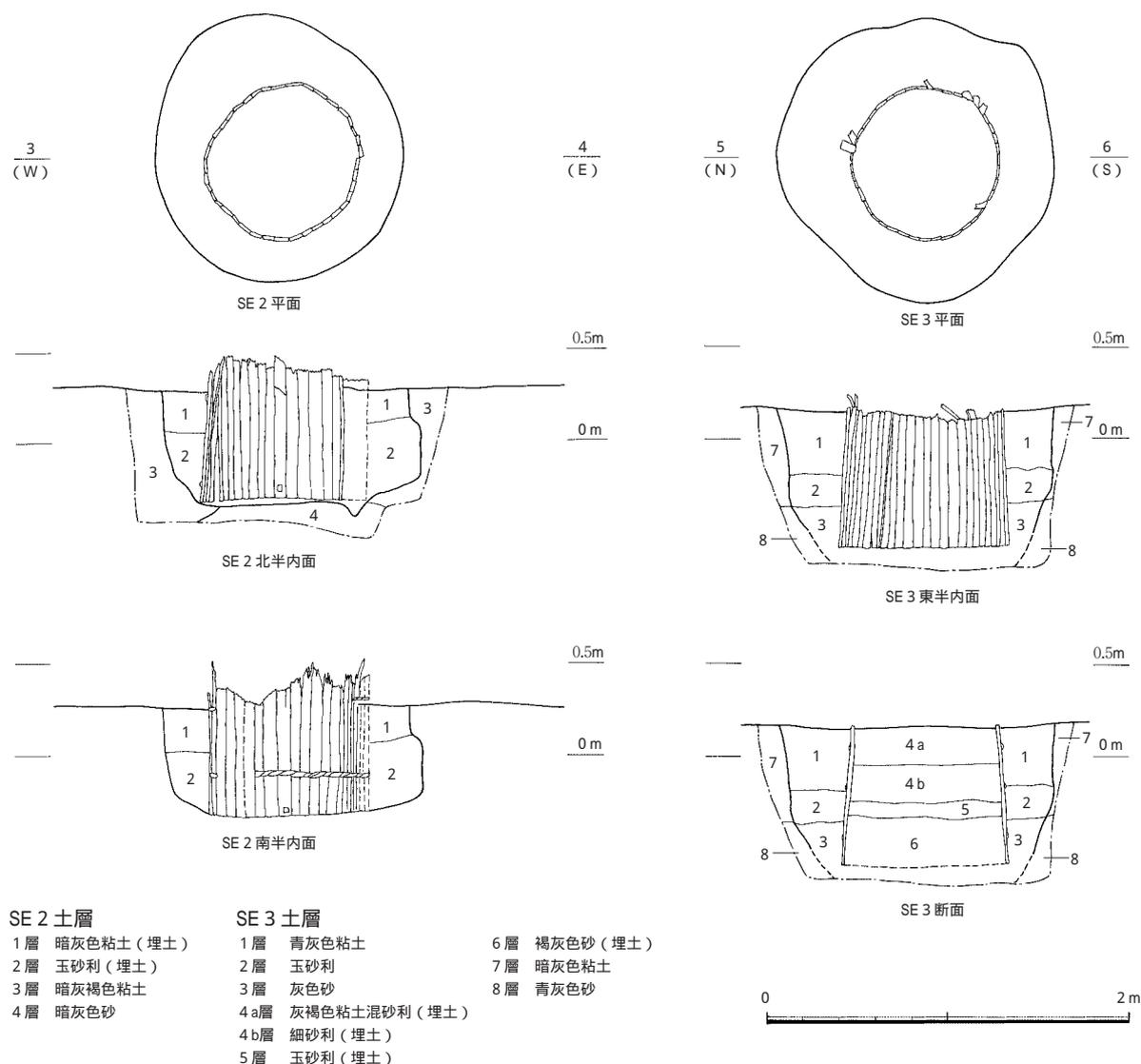
SE1は工事範囲の西部において確認された打ち抜き井戸と考えられる遺構である。検出状況では幅15cm、厚さ3cmの板材を付き合わせにより組んだ正方形の組み物（井側）の中に竹筒を入れた状況が見られた。周辺には不正方形のプランが確認され、井側は不正方形プランの北部に位置していた。南北方向の立ち割りの結果、不正方形プランは南北1m×東西0.9mで深さは3～5cmと非常に浅く、井側打ち込みに関わる掘り込みプランではないと考えられた。なお、不正方形プランの中からは、桶の底板片や筵縄、動物骨片、土器片等の出土が見られたが、周辺部においても粘土と砂層間にや



第2図 SE1

はり土器片等の出土が見られ、出土した土器片には中世と考えられるものも含まれており、近世遺構以前の流れ込みの遺物が混入しているものと考えられた。

井側の断面土層では、明瞭な掘り込みは見られず、井側に添って掘削面から約1.5mほど上層の粘土が巻き込まれており、方法の詳細は不明であるが打ち込みにより方形の井側を土中に入れ、内部に竹筒を挿入したものと考えられる。井側の全長は3.85mであり、杉正目の1枚板4枚で組まれている。形状は全体はほぼ変化はないが、下方部80cmほどがわずかに細くなっており、最下端部では幅10cmほどとなっている。井側の上端部は途中で割れた状況ではなく、切断面が小口として残されている。下端部はやや丸みを帯びるが先端を尖らせており、打ち込むための形状と考えられる。井側の板は左側片を釘により他の側板に止めており、釘の間隔は約50cmである。なお、下端部で10cm間隔で2本の釘止めが行われている。また、下端部の釘下には針金が2重に巻かれており、下端先端部の結束を強めている。接合に使用された釘は錆等によりかなり破損しているが、全長約5cm



第3図 SE 2・3

で釘頭は丸形と見られる洋釘と推定される。

井側の中には節を抜いた竹筒が入れられており、井側の下方にさらに延びており、内部からの測定の結果、約4.8mと考えられる。また、井側の下端部の下約15cmの位置から竹筒の直径と同径の木栓状のものが発見されている。先端部は平面を残すが、尖らしており、このような形状からすれば竹筒の先端に装着し、打ち込み掘削時に使用されたものではないかと考えられる。

SE1の打ち込まれた地点における土層堆積状況は、最上部に暗灰色の粘土層が見られ、下層には20～30cmの乱れたシルト層が存在している。それ以下の土層はすべて砂層であり、最下層部には砂利層が存在し、掘削時にも湧水が見られた。掘削工事による揚水がなければ湧水はかなり高いレベルであり、SE1は自噴の打ち込み井戸として充分機能していたものと考えられる。

SE1の時期については、検出レベルが他の遺構と同様であり、井戸と考えられたので、近世、伝下屋敷に伴うものと推定したが、調査の結果、井側の接合に使用された釘が規格的な丸釘である洋釘と思われ、井側の先端も針金で結束されていることから、出土遺物がないので確定はできないが、明治時代以降の近代における所産ではないかと考えられる。

SE2

SE2は掘削範囲のほぼ中央部、やや南よりの位置で検出されている。検出状況では、上部が掘削により削り取られていたが、桶を井側として使用している。高さ約70cmが残されており、井側の直径は約80cmである。精査の結果、井戸の掘方として短軸1.35m、長軸1.45mのプランが検出され、砂礫混じりの灰色粘土の埋土が判別された。次に東西方向に立ち割りをを行い、井側の断面及び掘方の埋土の確認を行った。井側は上部直径80cmに比して下端部では直径90cmとやや広く、桶の底を抜き、上下を逆さまにして設置したものと考えられる。井側の外面には上下端部近くに竹によるタガが2条存在しており、桶の転用であることが確認された。

井側に使用された桶は側板40枚であり、中央部でくさび状の竹片で接合を強化している。側板の幅は5～8cm、厚さ2cmほどであり、南北方向の相対する側板の下端部に方形の穴が見られ、桶として使われた時に穿孔されたものと考えられる。井戸内部の埋土は玉砂利であり、上部は粘土層が入れている。掘方の埋土は、上層部が暗灰褐色砂利混じり粘土であり、下層部は井側内部の玉砂利と同じく玉砂利が入れられており、地下水の浄化、流入のために玉砂利が入れているものと考えられる。なお井戸の底は砂層であり、周囲の土層と同様であった。

また、井戸内部及び掘方からの出土遺物はなかったが、桶の転用された井戸であり、井戸底面の高さから見ても、昨年度調査された遺構群と同様であり、近世、伝下屋敷跡に関する遺構の可能性が高いと考えられる。

SE3

SE3は掘削範囲の北部において検出された、SE2と同様の桶を転用した井戸である。上部はやはり掘削に伴い削り取られており、高さは約75cmが残され、直径は上部で85cmである。井戸の掘方は南北1.15m、東西1.2mとほぼ円形であり、瓦片や砂利を含む埋土が確認された。

平面プラン確認後、南北方向に立ち割りをを行い、井側の断面及び掘方の埋土確認を行った。井側は上部85cmに対し、下部では95cmと下部がやや広く、SE2より若干大きい桶を使用している。やは

り桶の底板を抜き、上下を逆さまとして使用されている。井側の外面には上・中・下部の3カ所に竹のタガが嵌められているが、SE2に比べ腐食が進んでおり、外面の粘土等を剥ぎ取ると同時にタガも剥落する状態であった。

井側に使用された桶の側板は46枚であり、やはりSE2と同様に中央部を竹のくさびにより接合していたが、これも腐食が進んでいた。側板の幅は5cm前後、厚さも約2cmであった。井戸内部には5cm前後の玉石が多量に詰められており、廃絶に際して埋められたものと見られる。また、掘方の埋土も上半部は暗灰色粘土であり、その下部30cm前後には井戸内部と同様の玉石が存在する。下半部は砂層であり、掘方以外の周辺土層と同様である。出土遺物は発見されなかったが、井戸の構造及び底面の高さもSE2とほぼ同様であることから、やはり近世の井戸と考えられ、伝下屋敷跡に関する遺構と考えられる。

4 まとめ

今回の立会調査で検出された遺構は、桶転用の井戸2基と打ち込み井戸と考えられる遺構1基であった。調査された桶転用の井戸2基(SE2・3)は大きさ、構造ともに類似しており、井戸底の高さも同様であることから同時期の遺構と考えられ、昨年度調査された近世の伝下屋敷跡の井戸とも共通性が見られることから、近世の井戸跡と判断される。また、打ち込み井戸とされるSE1については、当初、検出面が他の遺構と同じであり、近世の遺構と考えたが、調査の結果、使用される釘の形態や針金の使用等から見て、近代のものと判断された。

調査の結果、伝下屋敷跡に関する新たな遺構を確認することができ、近世における山内氏の資料として貴重な成果を得ることができた。

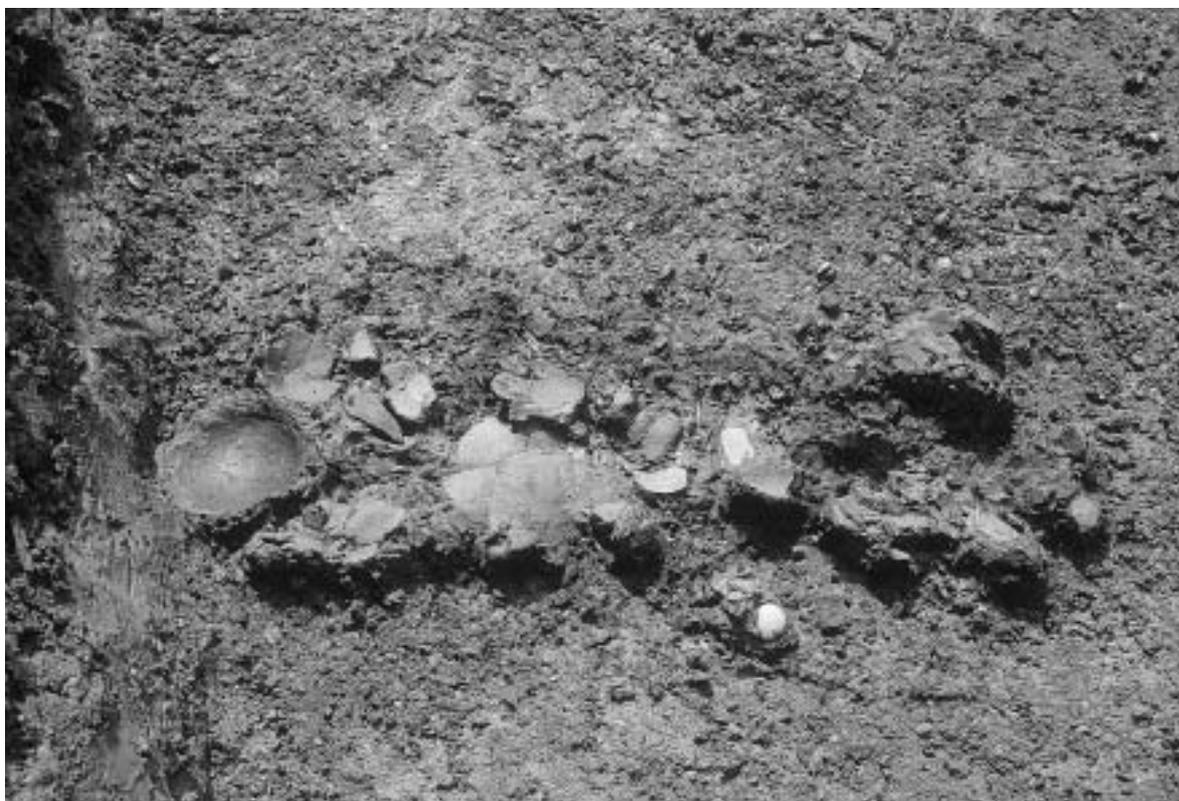
写真図版



調査前全景（南西より）



北壁セクション



SX18 (東より)



SD1 , SX1 東壁セクション



堀1セクション (G-G ライン)



堀1セクション (西より)



堀1 (南北堀・北壁セクション)



堀1 完掘状態 (北東より)



堀1（西より）



SD2 完掘状態（北より）



SD 2 北壁セクション



SD 2 南壁セクション



石列 1



石列 1 東端部



石列1 (A-A セクション)



SX2 木屑・遺物出土状況 (南より)



SX2 遺物出土状況



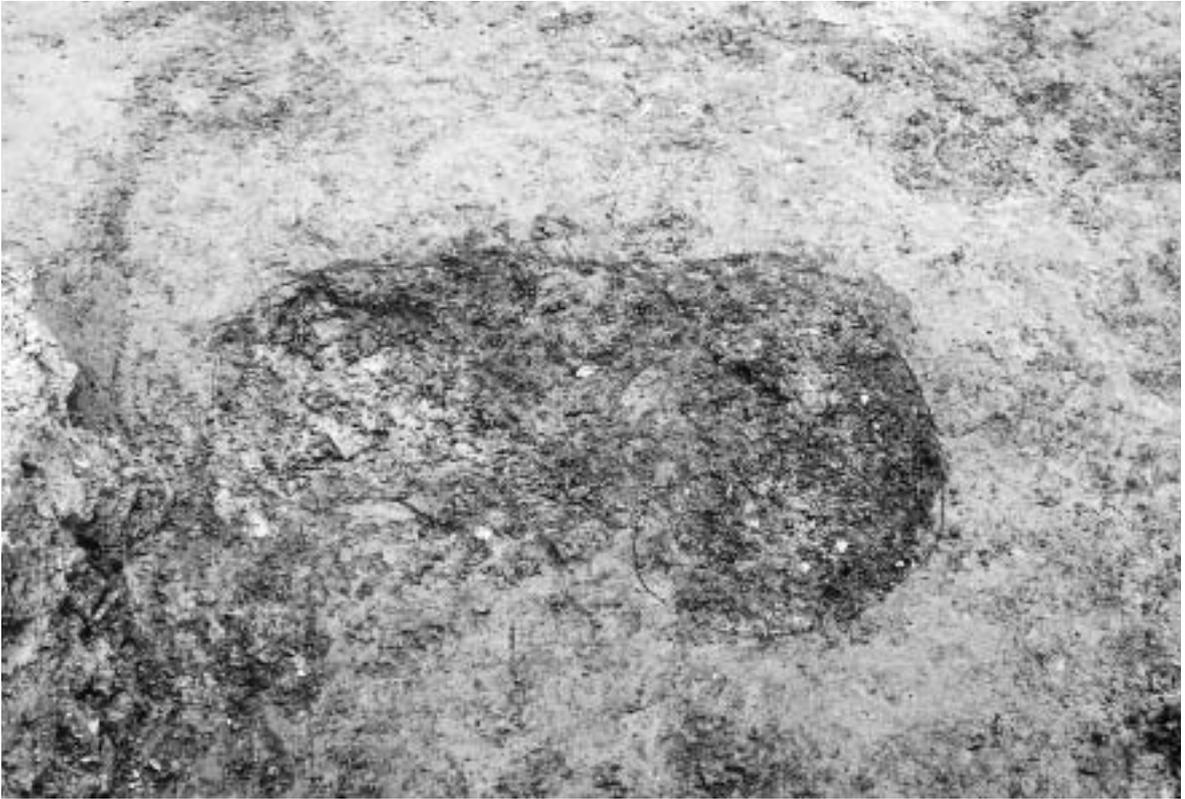
同 上



SX 2 漆器碗出土狀況



SX 2 底面遺物出土狀況



SX 4 検出状況 (南より)



SX 4 完掘状態



SK1 検出状況 (南より)



SX10, SK1 付近セクション (C-C ライン, 東より)



瓦溜 8 (南より)



F-F ライン瓦溜 8 セクション (西より)



瓦 溜 8



同 上



瓦溜 8 東部 三葉柏紋軒丸瓦出土状況



SX 6 完掘状態



SX7 遺物出土状況



SX7 完掘状態（北西より）



SX 8 遺物出土状況



SX 9 木屑検出状況



SX9 完掘状態 (北より)



SX9 南壁セクション



SX5・SX10セクション(C-Cライン)



SX10完掘状態(東より)



SX11遺物出土状況



SX13遺物出土状況及び東壁セクション



SX13遺物出土状況



434出土状況



-2 ~ 3区東壁セクション (A-A ライン・SX13付近)



-2 ~ 3区東壁セクション



SX15遺物出土状況（北より）



同 上（西より）



SX15木簡出土状況



520 , 521出土状況



SX15遺物出土状況



481 , 589出土状況



SX16, 落込み3 (手前) セクション (南西より)



1 ~ 2-5 区南壁セクション



SX17杭（南東より）



落込み1検出状態（北東より）



1-4区完掘状態（北より）



瓦溜10検出状態（北より）



瓦溜10セクション（東より）



井戸1掘形掘削状況（南より）



井戸 1 完掘状態（南より）



埋桶 1 検出状況（南より）



埋桶 1 埋土除去状態（北西より）



埋桶 2（南より）



埋桶 2 底紅皿出土状況



1-4 ~ 5区ピット群 (北より)



集中4 , SX17 (南より)



集中4 西部 (南より)



集中4 769, 瓦961, 977出土状況



基礎遺構1断面及び杭検出状況(2~3-1区・西より)



基礎遺構 1 側面 (2 ~ 3-1 区・北より)



基礎遺構 1 セクション (C-C ライン)



2-4区近世面完掘状況（南より）



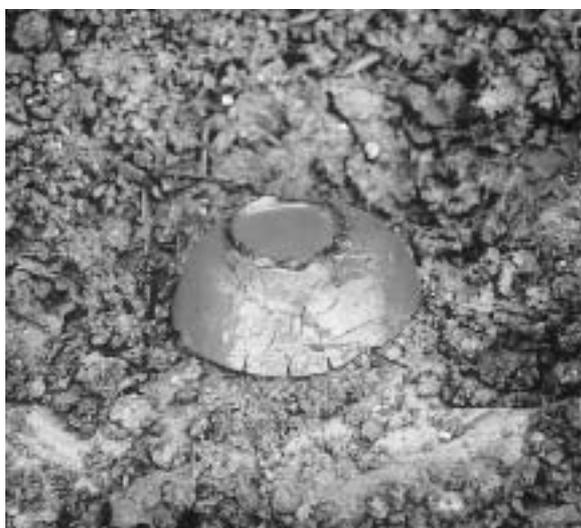
調査区南部完掘状況（北より）



SD 2



SX 9 184



SX13 386



SX15 525



集中 4



2-5区杭貫通状況



SD 1 完掘状況



SD 2 底遺物出土状態



SR 1 馬歯



SX 2 完掘状態 (南より)



4区下層ピット, 配石



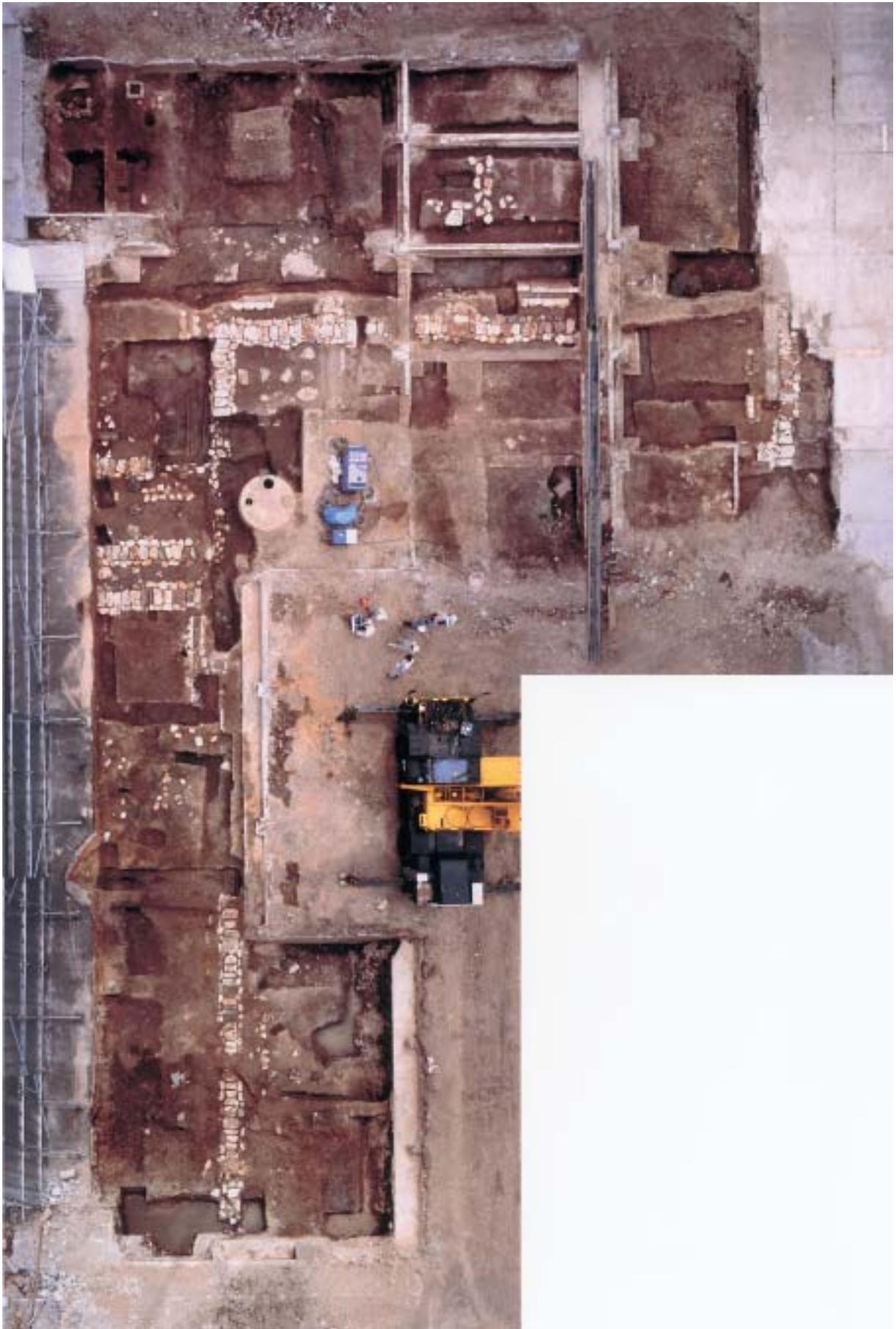
SX 15 完掘状態 (北より)



集中4 東部 (東より)



基礎遺構 1 杭



明治29年竣工庁舎基礎遺構全景

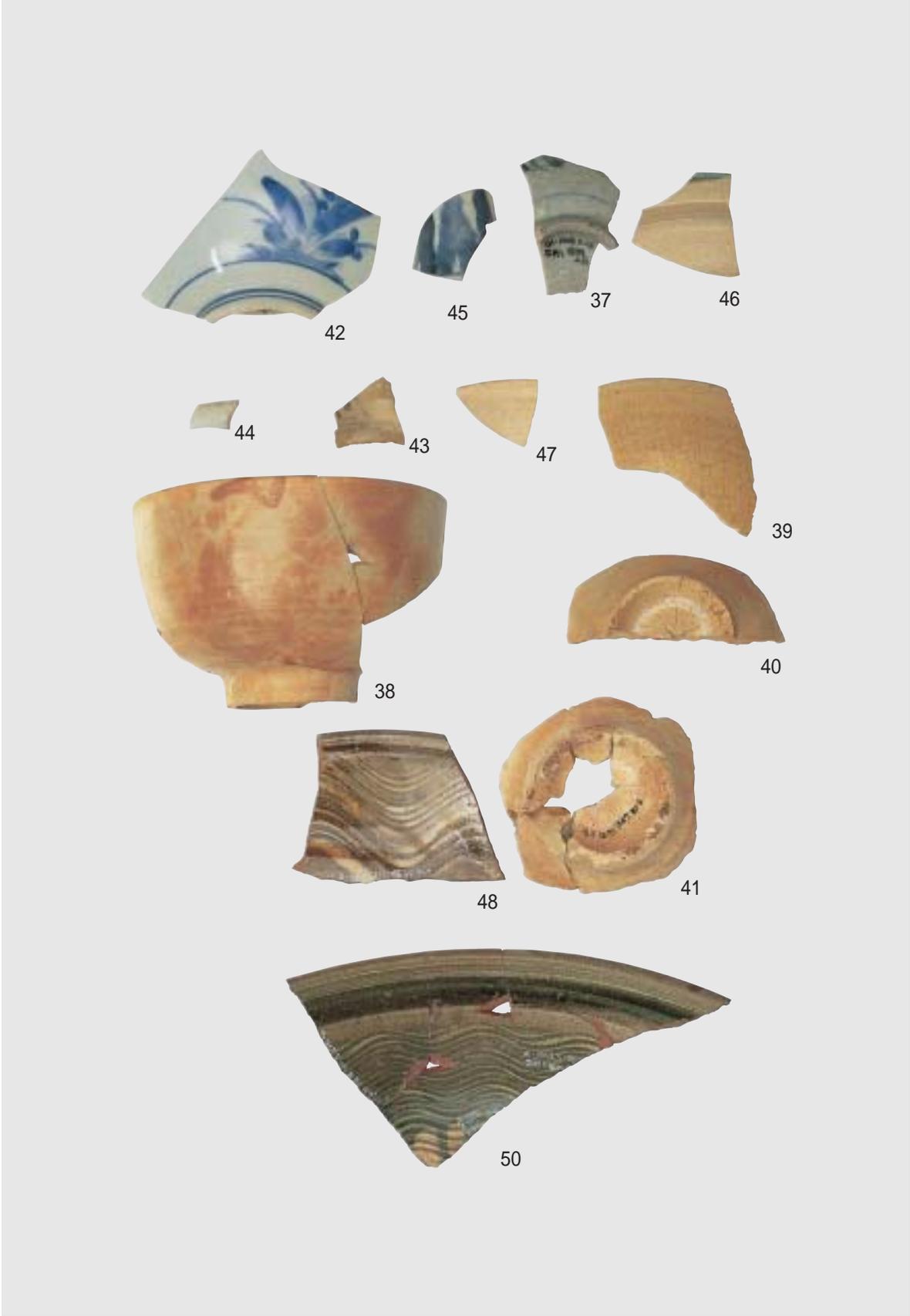




堀 1



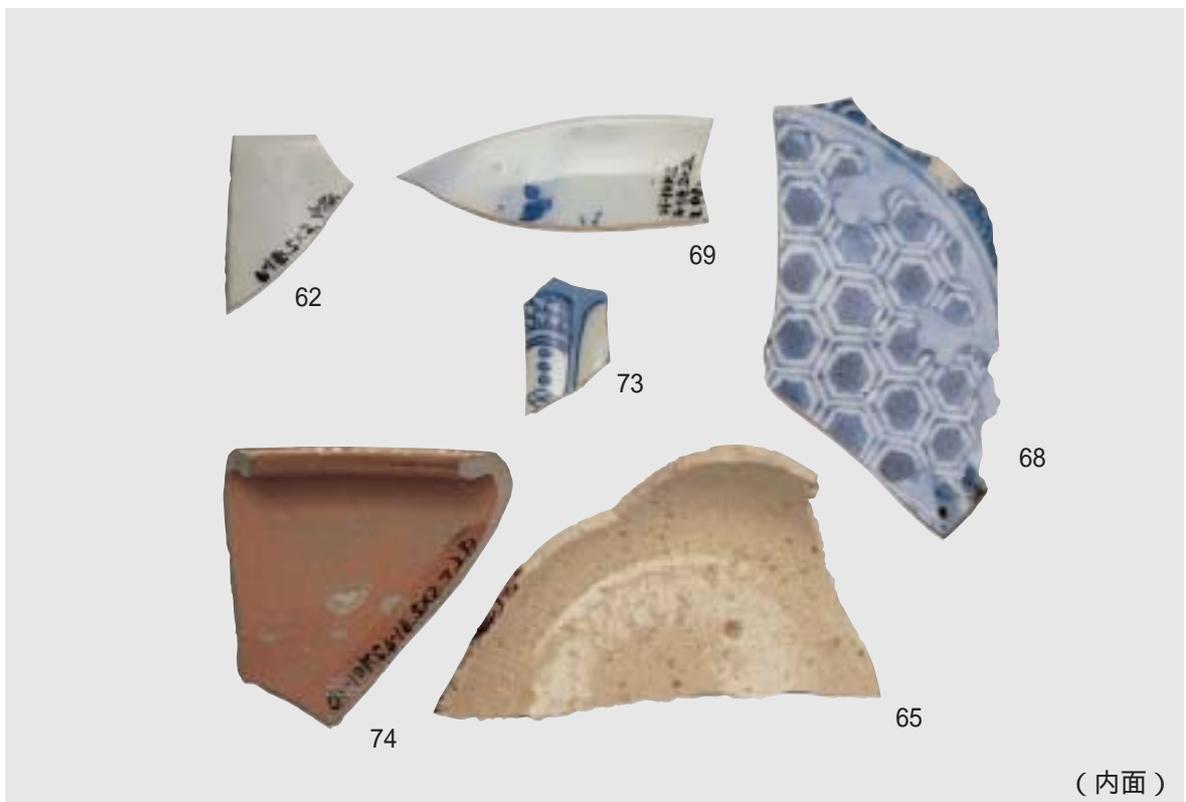
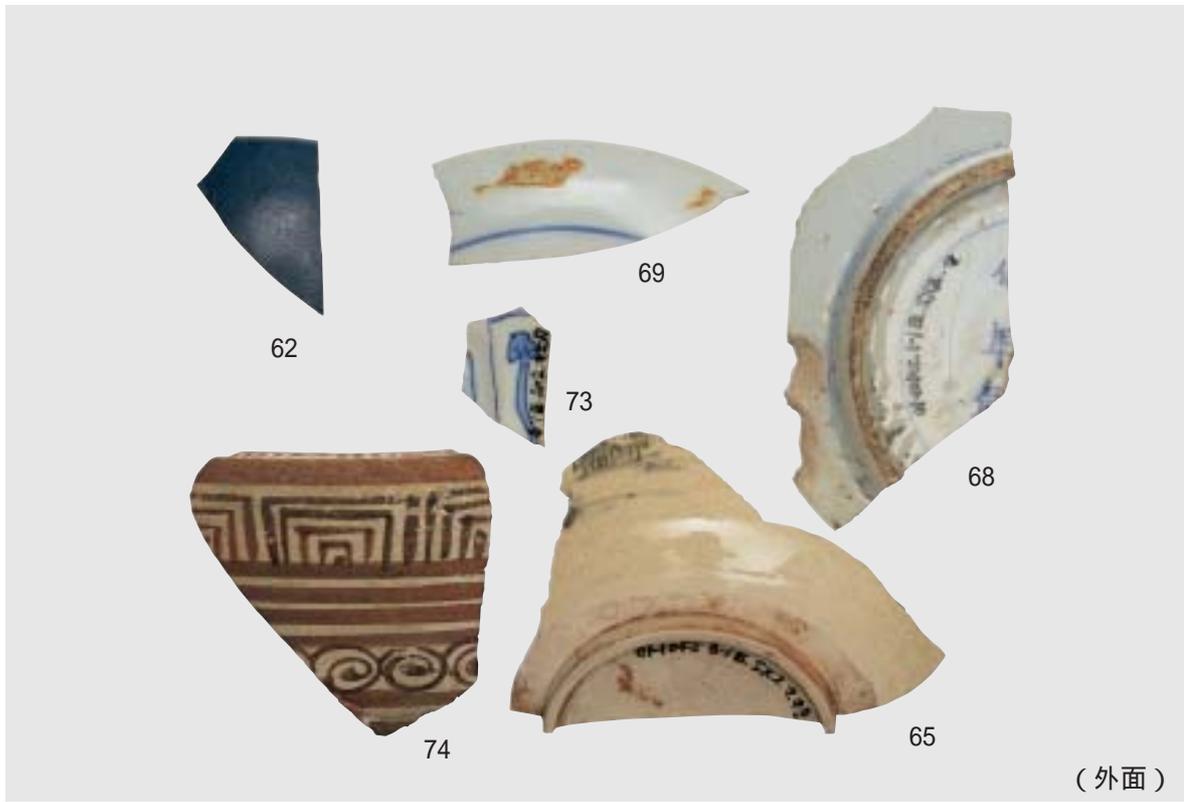
石 列 1



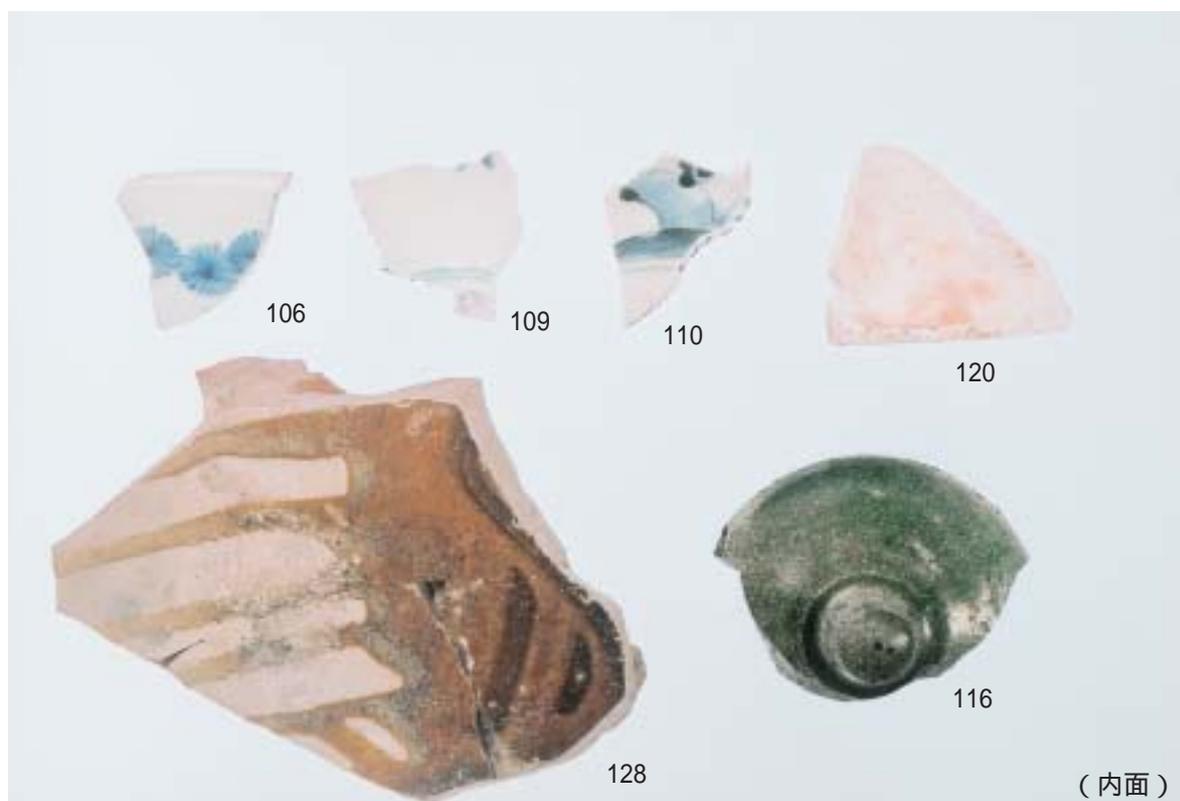
石 列 1



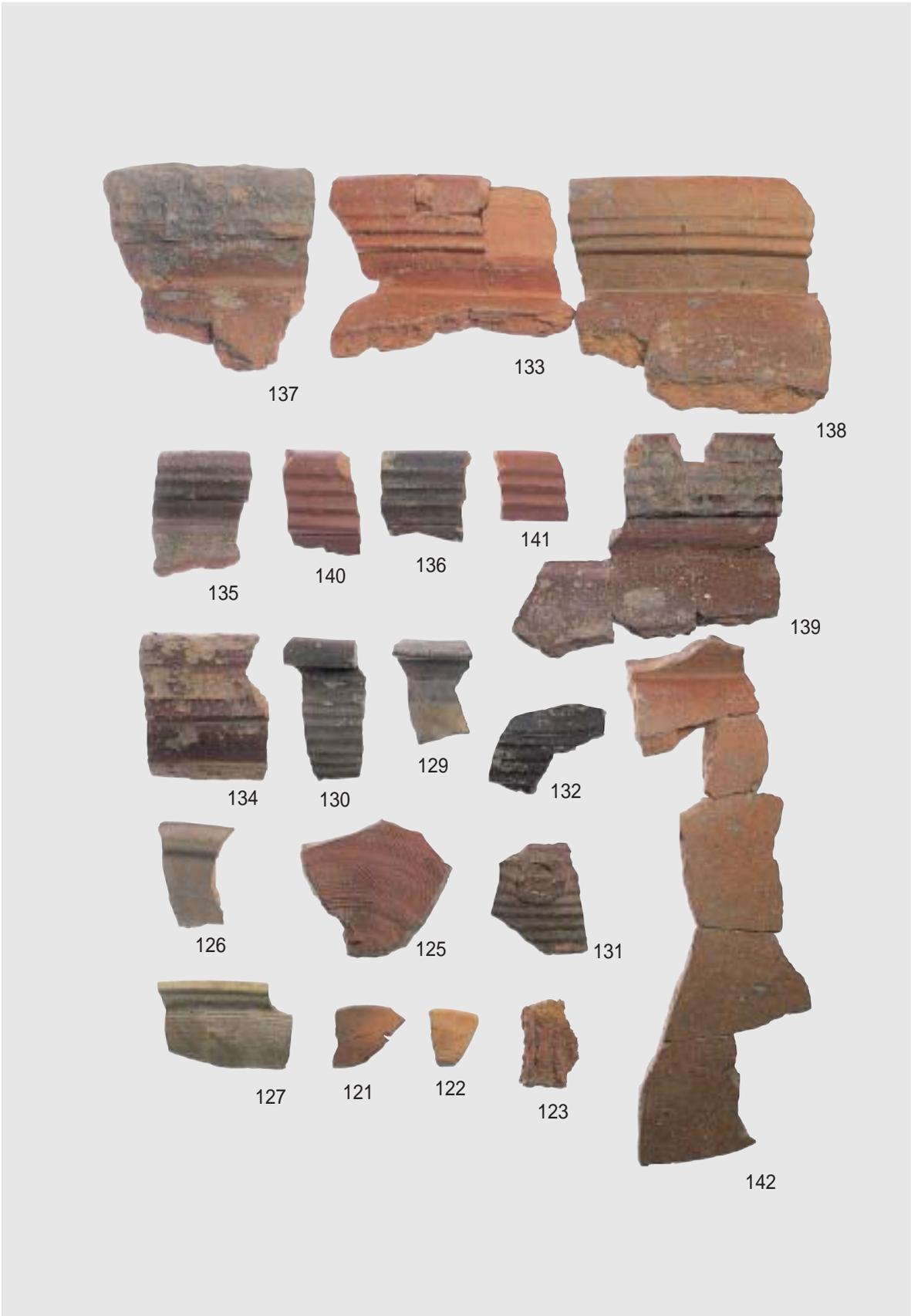




S X 2









S X 7



S X 8

P L50



99

S X 4



144

S D 3



152

S X 6



153

S X 6



154

S X 6



176

S X 9



177

S X 9



354

S X 13



S X 11



S K 2



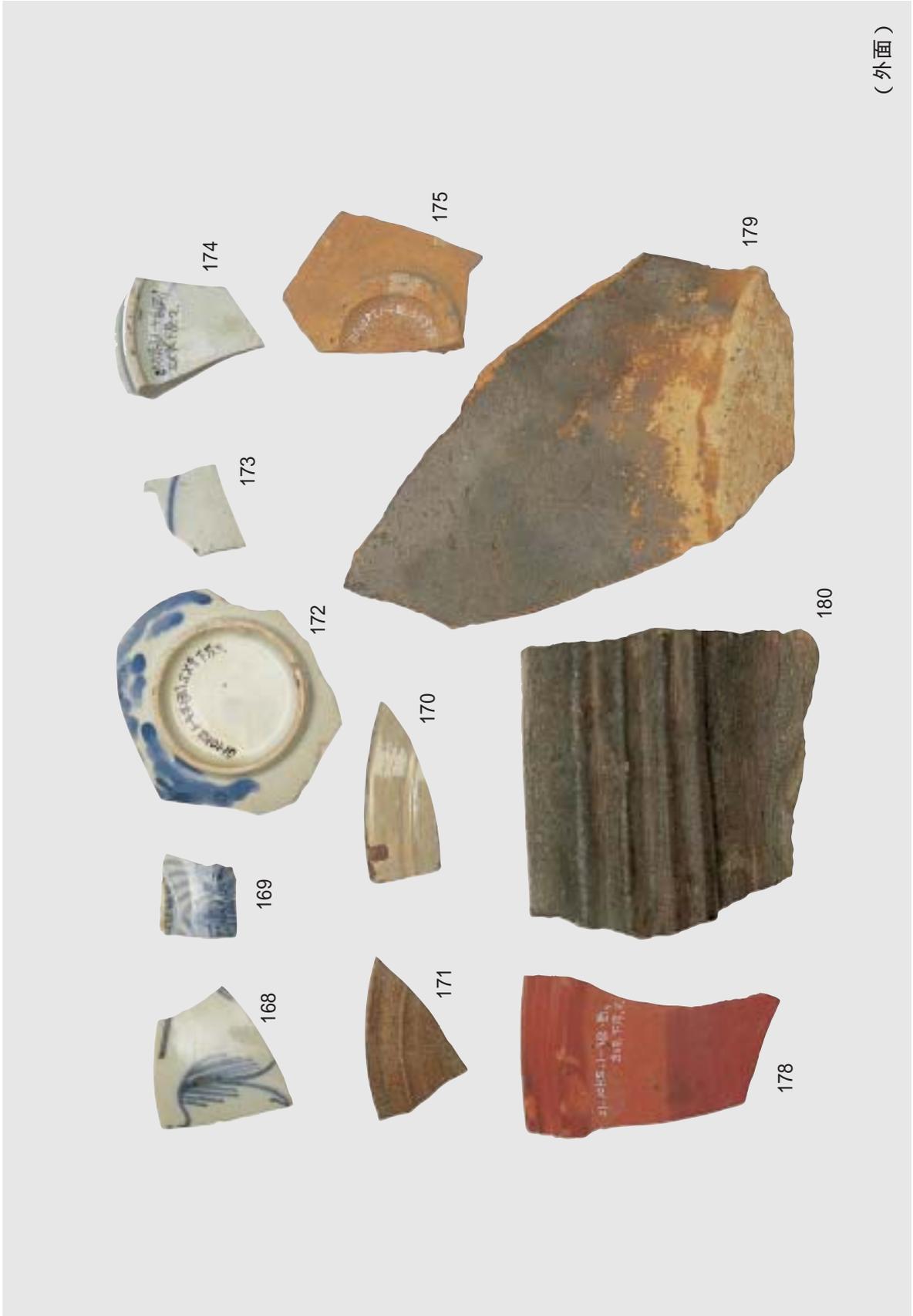
S X 2



S X 11



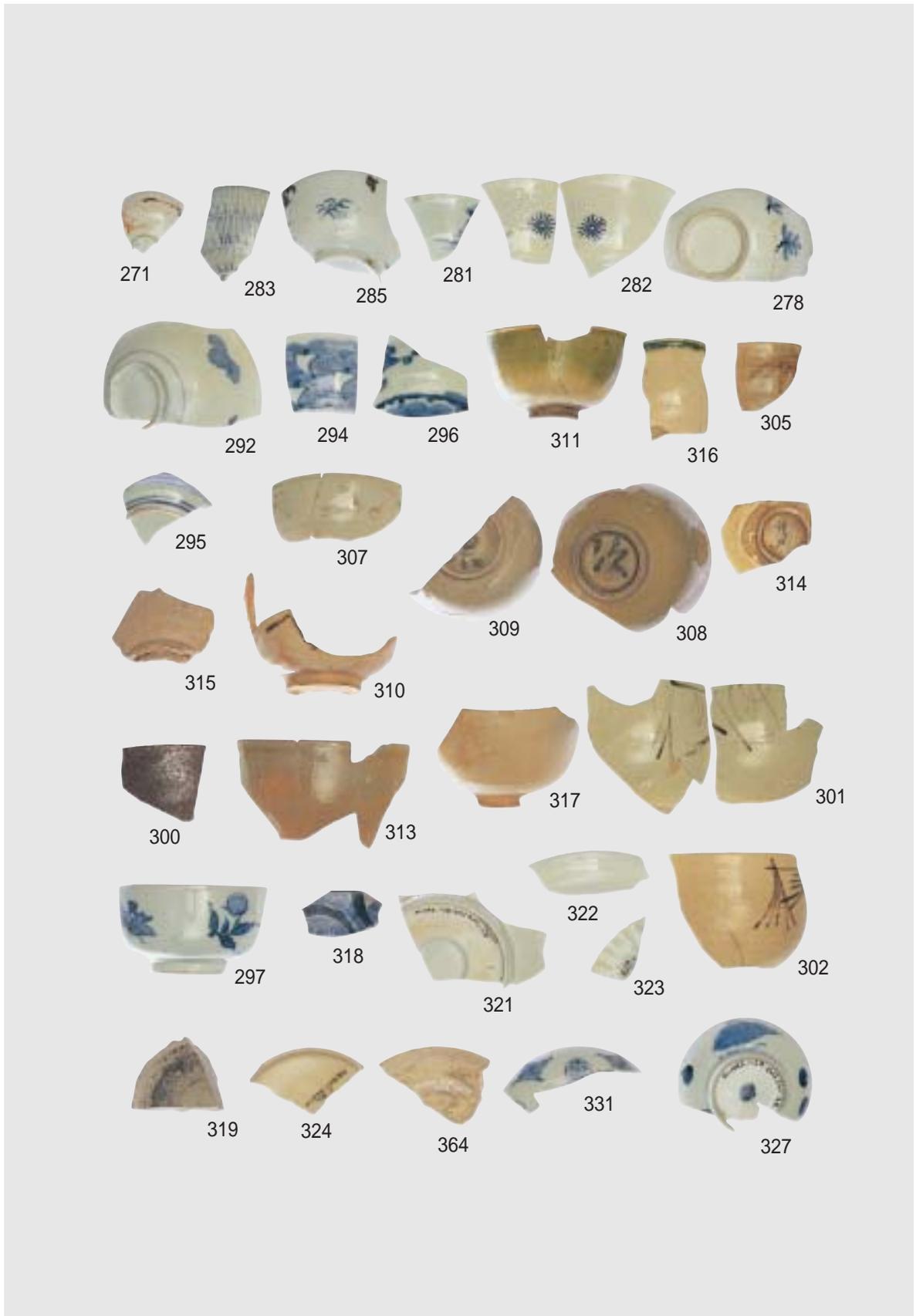
S X 17

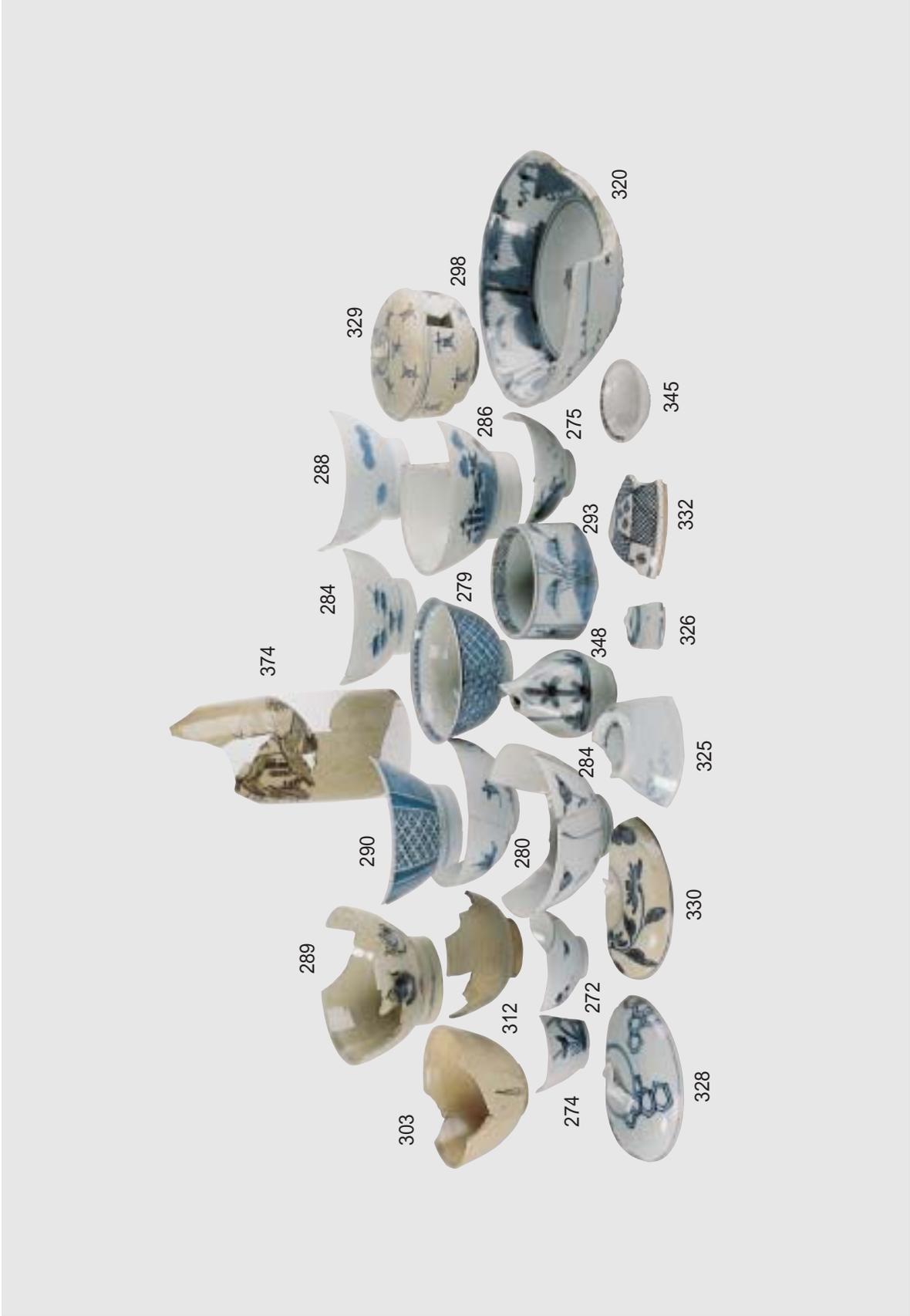


















276



352



273



351



277



299



304



306









東トレンチ





618

S X 16



623

S X 16



624

S X 16



627

S X 16



631

S X 16



633

S X 16



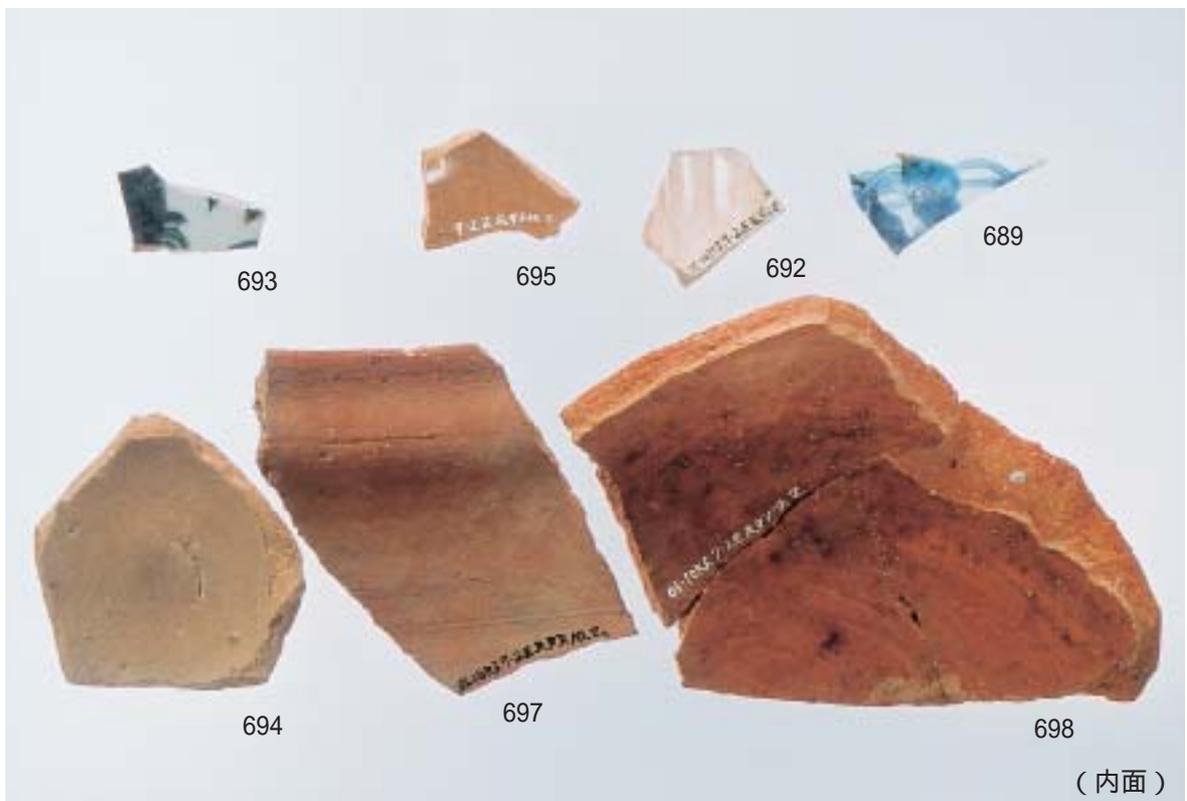
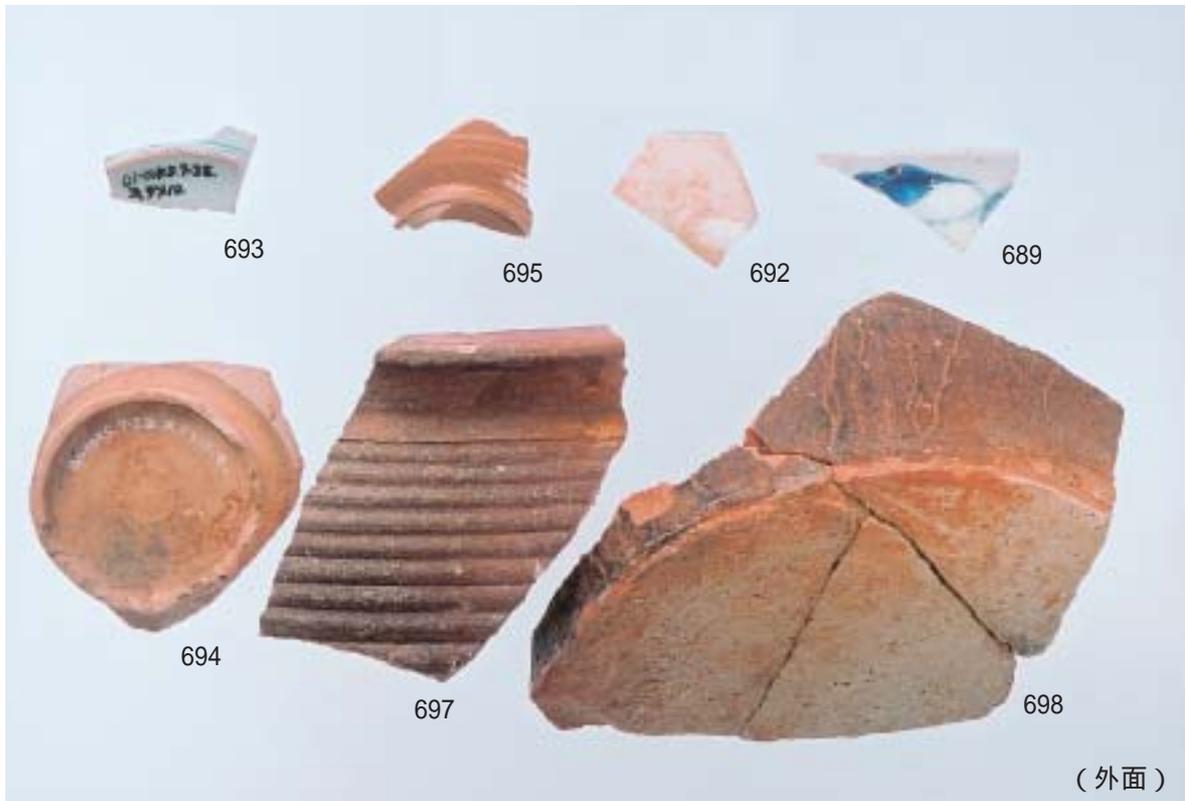
675

落込み2



690

瓦溜 10



瓦溜 10



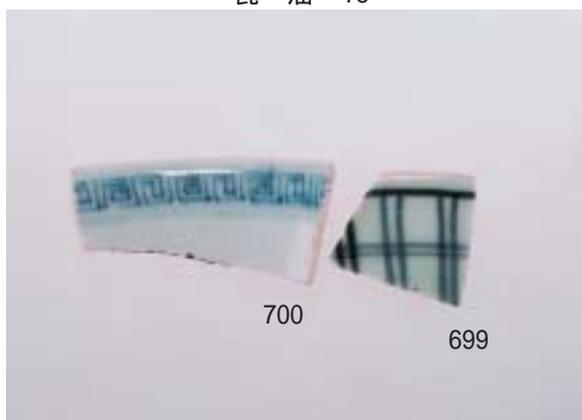
691

瓦溜 10



696

瓦溜 10



700

699

井戸 1



701

井戸 1



725(外面)

埋桶 1



725(内面)

埋桶 1



726

埋桶 1



143

Pit 13



Pit 13

732



767

集中 3



768(外面)

集中 3



768(内面)

集中 3



770

表 採



787

包 含 層



792

包 含 層



806

包 含 層



落込み 1



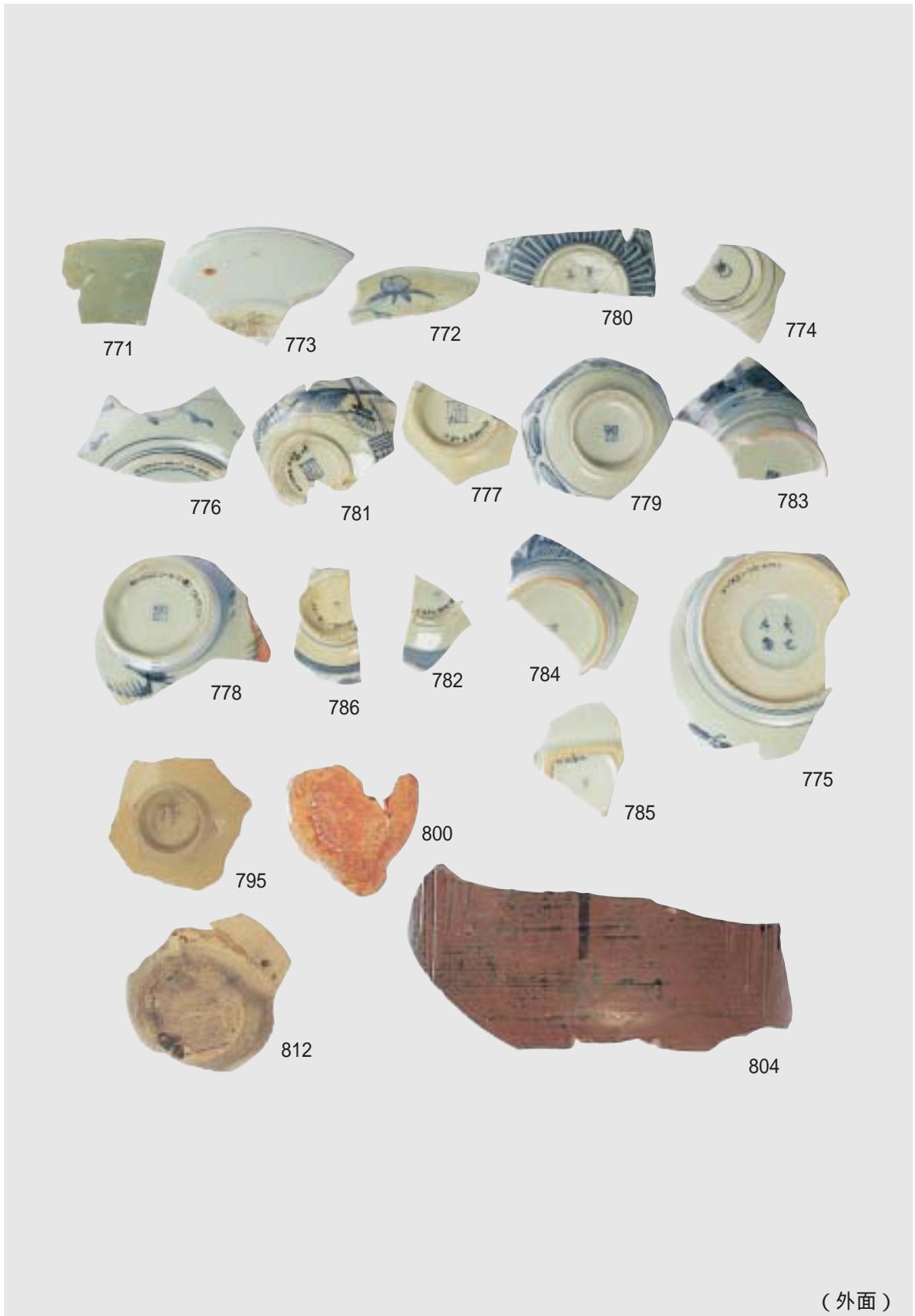
落込み2



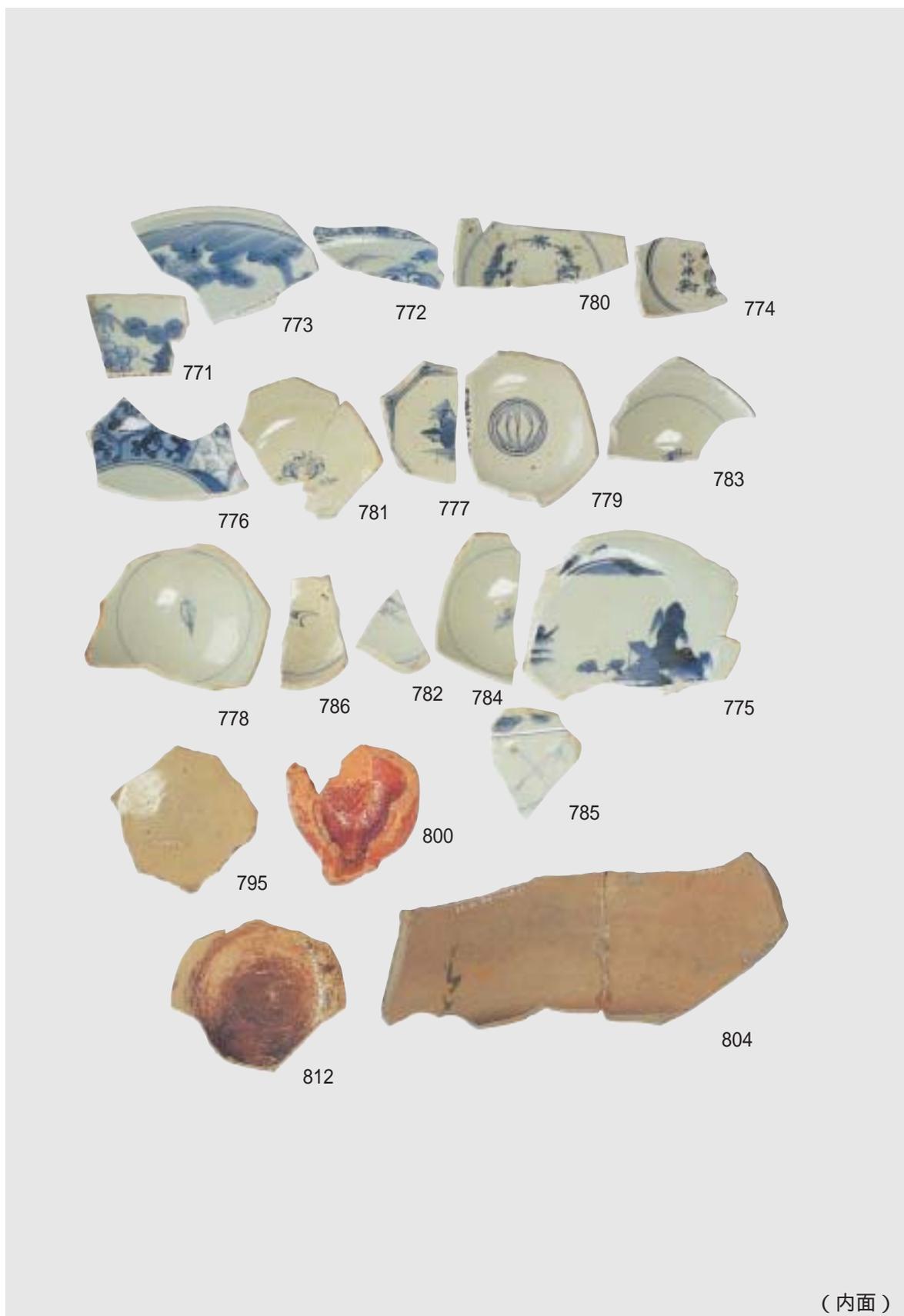




包 含 層



包含層



包含層



813

包含層



816

818

819

817

包含層



821(外面)

表 採



821(底面)

表 採



827

包含層



825

包含層



828(外面)

包含層



828(内面)

包含層



包含層



包含層



表 採



トレンチ

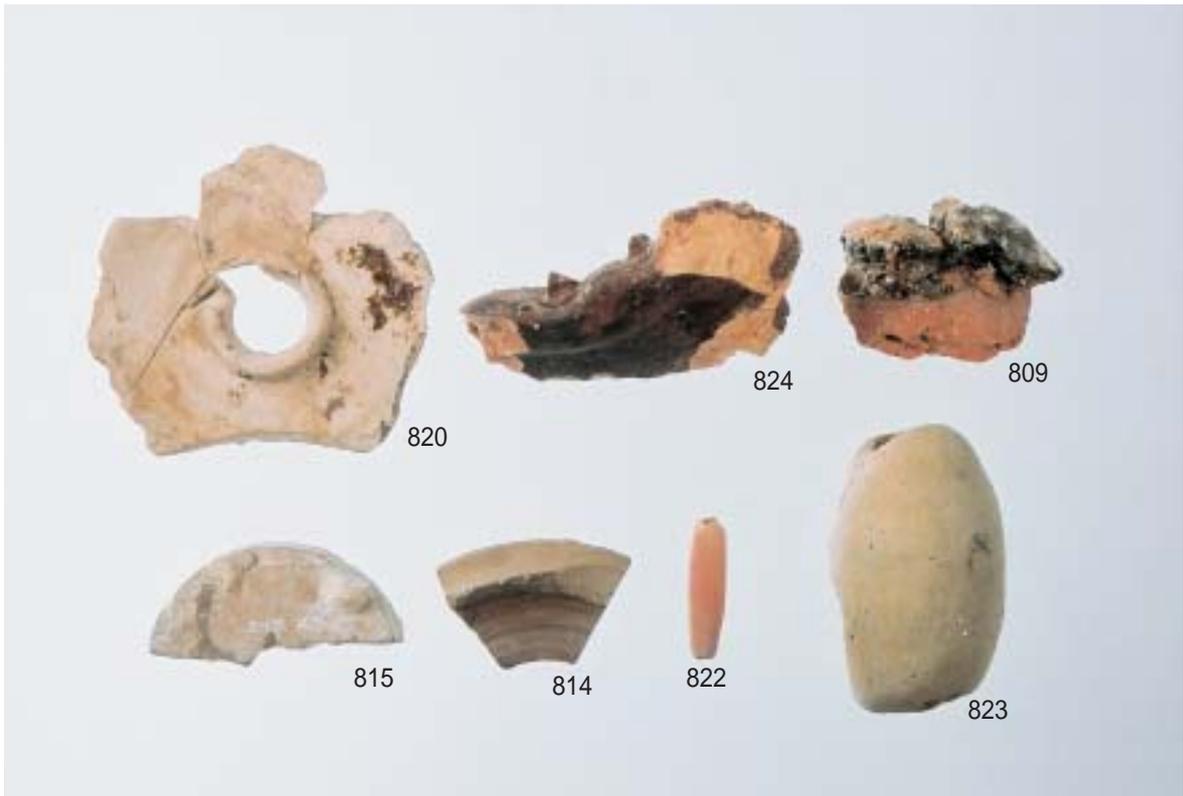


表 採



古代～中世に属する遺物



金屬製品



21

堀 1



80

S X 2



81

S X 2



83

S X 2



146

S D 3



246

S X 10



392

S X 13



393

S X 13



表

裏

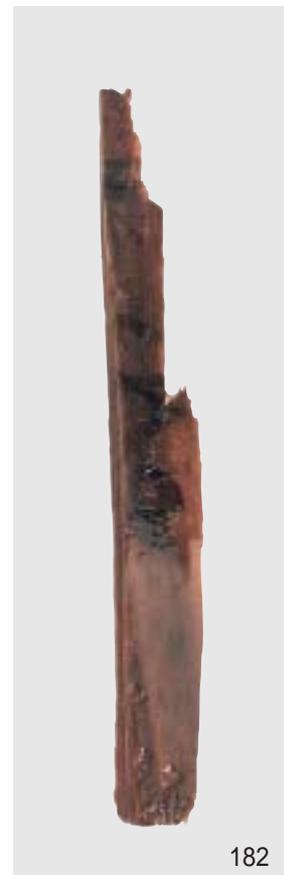
92

S X 2



181

S X 9



182

S X 9



167

S X 12



183

S X 9



253

S X 10



267

S X 11



390

S X 13



394

S X 13



436

S X 13



445

S X 13



488

S X 15



490

S X 15



491

S X 15



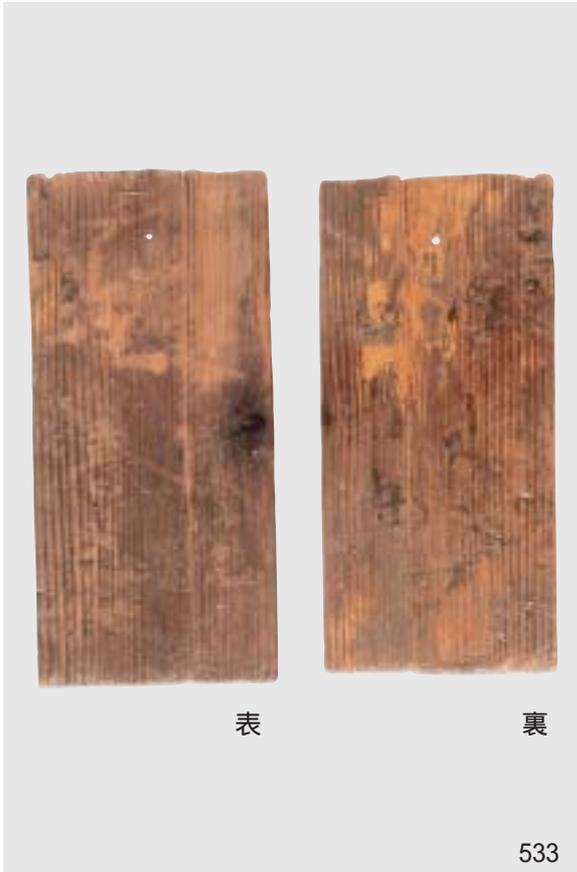
496

S X 15









S X 15



S X 15



S X 2



井戸 1











82

S X 2



96

S X 2



98

S X 2



101

S X 4



151

S D 3



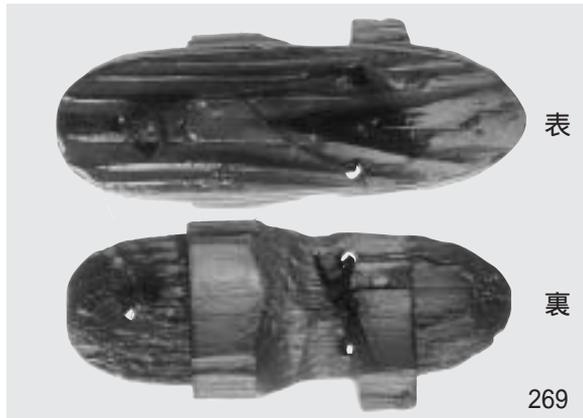
184

S X 9



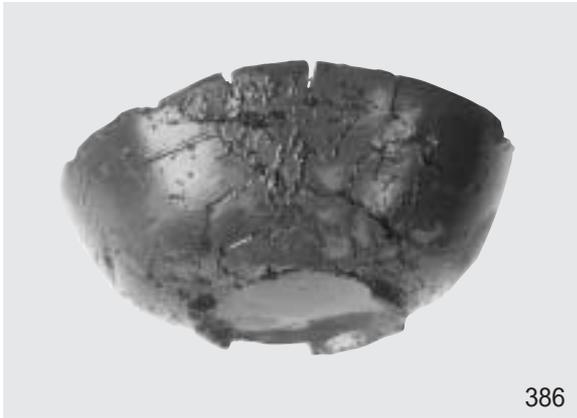
250

S X 10



269

S X 11



386

S X 13



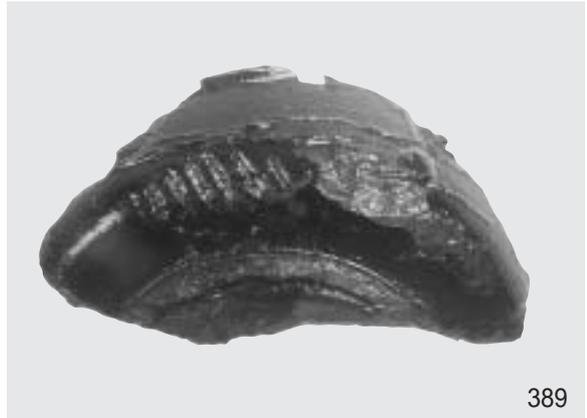
387

S X 13



388

S X 13



389

S X 13



401

S X 13



408

S X 13



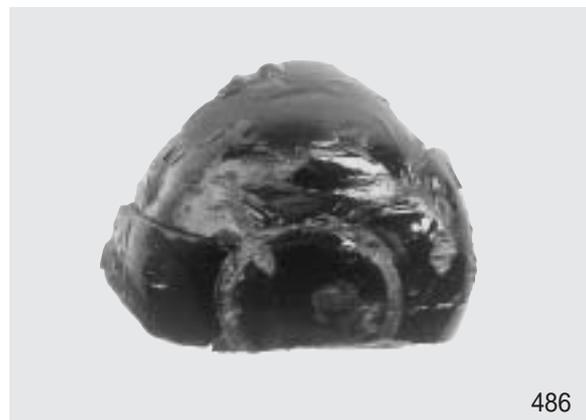
433

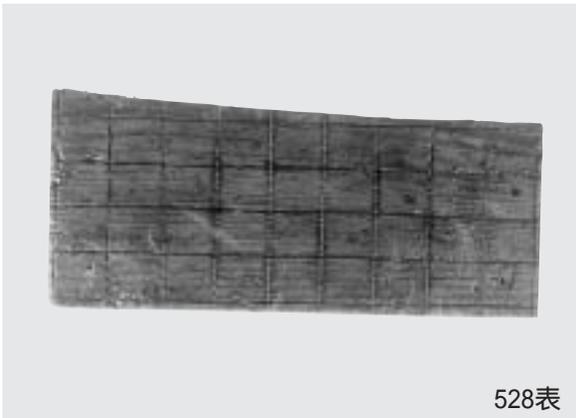
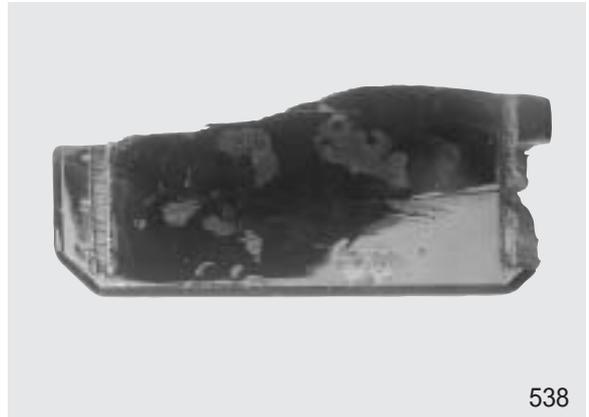
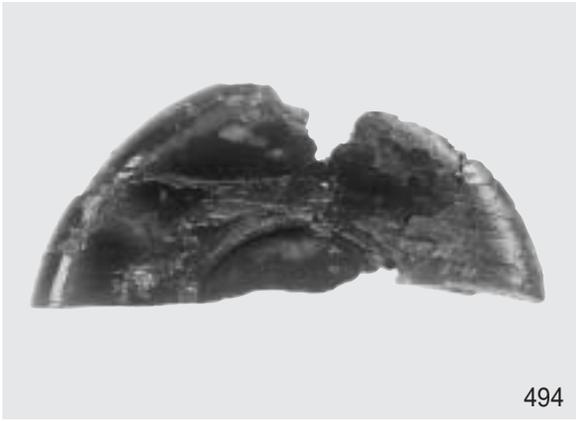
S X 13



91

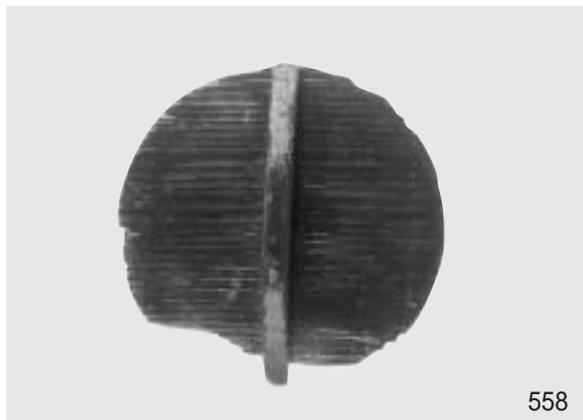
S X 2







556



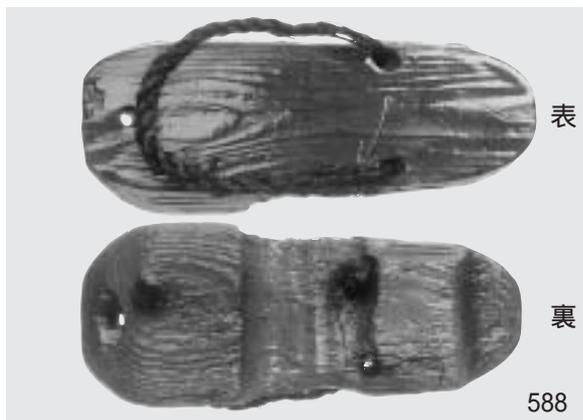
558



566



586



表

裏

588



表

裏

589



602

603

表



602

603

裏



軒丸瓦(1)



軒丸瓦 (2)



987



990



991



993



1000

軒丸瓦 (3)



軒平瓦 (1)



軒平瓦 (2)



軒平瓦 (3)



軒平瓦 (4)





SE 1 断面



SE 1 平面



SE 2 平面



SE 2 南半外面



SE 2 北半内面



SE 1 断面内部



SE 3 平面



SE 3 断面



SE 3 東半内面

立会調査

報告書抄録

ふりがな	こうちじょうでんしもやしきあと							
書名	高知城伝下屋敷跡							
副書名	高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第75集							
編著者名	池澤俊幸・大野佳代子・佐々木志穂・森田尚宏							
編集機関	(財)高知県文化財団 埋蔵文化財センター							
所在地	〒783-0006 高知県南国市篠原1437 - 1 TEL 088 - 864 - 0671							
発行年月日	2002年8月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうちじょうでん 高知城伝 しもやしきあと 下屋敷跡	こうちけん 高知県 こうちし 高知市 まるのうち 丸の内	39201	010167	33° 33 30	133° 32 00	2001年 4月2日) 7月20日	1,007	高知裁判所 新庁舎建設 に伴う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
高知城 伝下屋敷跡	城下町	古墳時代	土坑	土師器				
		古代	-	土師器・ 土師質土器・ 須恵器				
		中世	溝跡	白磁・ 土師質土器				
		近世	堀・土橋・埋桶 井戸跡・土坑 溝跡・瓦溜・石列 柱穴	近世陶磁器・ 土師質土器・ 瓦・木製品・ 金属製品		江戸前期の堀跡。 山内氏家紋瓦・「松 平土佐守」木簡出土。 多量の近世陶磁器・ 瓦・木簡・漆製品出 土。		
		近代	基礎遺構					

高知城伝下屋敷跡

2002年

編集 高知県文化財団埋蔵文化財センター

発行 高知県南国市篠原1437 - 1

電話 (088) 864 - 0671

印刷 (有)西村謄写堂